

## 方言談話資料（3）：青森・新潟・愛知

著者	国立国語研究所
ページ	1-392
発行年	1980-01
シリーズ	国立国語研究所資料集；10-3
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00002272">http://doi.org/10.15084/00002272</a>

# 方言談話資料 (3)

—青森・新潟・愛知—

国立国語研究所資料集 10-3

国立国語研究所

1980

方 言 談 話 資 料 ( 3 )

—青森・新潟・愛知—

国 立 国 語 研 究 所

## 刊 行 の こ と ば

国立国語研究所では、昭和49年度から51年度にかけて、「各地方言資料の収集および文字化のための研究」という題目の下に、全国各地で方言による談話を録音し、その文字化（標準語訳・注つき）を行った。この研究は、急速に失われつつある方言を現時点で録音・文字化し、国語研究の基本的資料とすることを目的としており、当研究所地方研究員の協力を得て実施された。

その成果は、機を得て、順次刊行する予定であり、昨年度までに、『方言談話資料(1)―山形・群馬・長野―』『方言談話資料(2)―奈良・高知・長崎―』を刊行した。本年度は、その第三集（本書）および第四集を刊行する。

本書に収めた録音・文字化資料は、もっぱら、松本宙（青森県担当地方研究員・宮城教育大学助教授）・佐々木隆次（同協力者・青森県立郷土館研究員）、剣持隼一郎（新潟県担当地方研究員・長岡工業高等専門学校講師）、山口幸洋（愛知県担当地方研究員）の四氏の尽力によるものである。また、話者もしくは司会者として、桜田鉄彌、棟方トミ、八木沢千代三郎（以上青森県）、高橋鹿之助、高橋清治、高橋孝宣、高橋チエノ、高橋初枝、高橋真、高橋マツノ、高橋ミサノ（以上新潟県）、武田初夫、武田ふさ、武田やすゑ、田辺正一、堤ふじよ（以上愛知県）の各氏の協力を得たほか、有志の助力があった。記して深く感謝の意を表する。

昭和55年1月

国立国語研究所長      林      大



## 方言談話資料作成のための担当者

国立国語研究所言語変化研究部長

飯 豊 毅 一

国立国語研究所言語変化研究部第一研究室

徳 川 宗 賢（現在、大阪大学教授） 佐 藤 亮 一（室長） 真 田 信 治（研究員）

沢 木 幹 栄（研究員） 白 沢 宏 枝（研究補助員）

国立国語研究所地方研究員（五十音順）

秋 山 正 次	愛宕 八郎康隆	五十嵐 三 郎	井 上 章	井 上 史 雄
今 石 元 久	岩 井 隆 盛	上 野 勇	遠 藤 潤 一	大 島 一 郎
大 橋 勝 男	岡 野 信 子	奥 村 三 雄	笥 大 城	加治工 真 市
加 藤 信 昭	加 藤 正 信	金 沢 直 人	川 本 栄一郎	神 部 宏 泰
剣 持 隼一郎	後 藤 和 彦	小松代 融 一	斎 藤 義七郎	迫 野 虔 徳
佐 藤 茂	佐 藤 虎 男	清 水 茂 夫	杉 山 正 世	田 尻 英 三
種 友 明	玉 井 節 子	近 石 泰 秋	土 居 重 俊	日 高 貢一郎
日 野 資 純	広 戸 惇	廣 濱 文 雄	北 条 忠 雄	本 堂 寛
馬 瀬 良 雄	松 本 宙	三 浦 芳 夫	虫 明 吉治郎	村 内 英 一
室 山 敏 昭	谷 開 石 雄	矢 作 春 樹	山 口 幸 洋	山 本 俊 治
和 田 實				

## 「方言談話資料」（3）編集担当者

飯 豊 毅 一   佐 藤 亮 一   真 田 信 治   沢 木 幹 栄   白 沢 宏 枝

## 収録・文字化担当者（協力者）

青森…松 本 宙（佐々木隆次） 新潟…剣 持 隼一郎 愛知…山 口 幸 洋

## 目 次

刊行のことば	3
まえがき	7
凡 例	10
I 青森県青森市大字牛館	
解説	13
1. 田打ちの頃	21
2. 縄 <sup>な</sup> 縄 <sup>な</sup> い	28
3. つらい農作業	35
4. 堆 <sup>にお</sup> と小作米	45
5. 牛館橋 <sup>うしなてばし</sup>	61
6. 川のさかなとり	82
7. お山(岩木山)の参詣	91
8. ボサマ	113
9. 青森空襲	119
II 新潟県柏崎市大字折居字餅粃	
解説	139
1. 昔の労働	163
2. 冬の仕事	197
3. 養 蚕	219
4. 雪の中の生活	242
5. 冬の楽しみ	279

### III 愛知県北設楽郡富山村中の甲

解説	303
1. 身辺雑事	311
2. うわさ話など	335
3. 盆唄のこと, 亡き夫のこと	366

## ま え が き

### 研究の経過

この研究は、昭和49年度から同51年度にかけて行った。

昭和49年度は準備期間とし、全国47都道府県で各種の実験的録音・文字化を行い、その結果に基づいて、次年度以降の計画を立案した。

50年度は、全国的視野のもとに重点地域を定め、23の府県から各1地点を選定して、老年層の男性と同女性との対話、もしくは、男女を含む老年層話者3人の会話を録音し、文字化することとした。

録音・文字化を実施した府県は次の通りである。

青森\*、岩手、宮城\*、山形、群馬、千葉、新潟、石川\*、福井、長野、静岡、愛知、京都、奈良、鳥取、島根、広島、愛媛、高知、長崎、宮崎、鹿児島\*、沖縄

51年度は収録地点を4地点減らし(\*印の県を割愛した)、19の府県について、原則として50年度と同一の地点で、(a)目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話、(b)老年層の男性と若年層の男性との対話、もしくは、両者を含む3人の話者の会話、(c)場面設定の会話、の3項目についての録音・文字化を行い、なお、このほかに収録可能な地域では、付録として、民話の収録・文字化も実施することとした。(c)については、「品物を借りる」「(旅行などに)誘う」「新築の祝いを述べる」「隣家の主人の所在をたずねる」「けんかをする」「道で知人に会う」「道で目上の知人に会う」「うわさ話をする」の八場面を、全地点共通の場面として設定した。

以上の録音・文字化資料は、すべて国立国語研究所で整理し、保管しているが、当研究所では、このうち、50・51両年度分について逐次刊行していく予定である。本書は、50年度に収録・文字化を行った老年層話者による談話資料のうち、「青森県青森市大字牛館」「新潟県柏崎市大字折居字餅根」「愛知県北設楽郡富山村中の甲」の3地点分についてのものである。

### 話者の条件

話者には次の条件の人を選ぶこととした。

#### 1. 老年層話者による談話(50年度)

その土地で生まれ育ち、よその土地に住んだことのない、あるいは、その期間が比較的短い人で、日常生活ではもっぱら方言を用い、また、録音機を前にしても方言色豊かなおしゃべりが可能な人。したがって、よその土地から嫁入り、婿入りした人は採らない。ただし、女性については、他に適当な人が得られないときには、近隣地から嫁入りした人でも、収録地点との間に大きな方言の違いが認められない場合は可とする。話者の年齢は、原則として収録時において60歳以上とし、やむをえないときは、55歳以上も可とする。発音その他の障害がなければ、高齢者で



も差し支えないが、話者相互の年齢が離れすぎるのは好ましくない。また、話者相互の地位・身分関係も、ほぼ対等であることを原則とする。

## 2. 目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話（51年度）

話者の年齢は上記1に準ずる。この項は、改まった表現や種々の敬語形式などを得ることをねらって設定したものであり、対話の具体的な人物像として、たとえば、旧地主階層の人物対旧小作階層の人物、僧侶対その壇家にあたる人物、その土地出身の教員（校長など）対その土地の一般的職業（農業・漁業など）に従事している人物などを候補として示したが、地域の事情もあると思われるので、この点は各地の担当者（地方研究員）に一任した。なお、目上にあたる人物として、在外期間の比較的長い人物を登場させなくてはならない場合もあると考えられるので、在外歴に厳しい条件はつけないことにした。

## 3. 老年層男性と若年層男性との談話（51年度）

老年層については原則として60歳以上、若年層については原則として20～30歳台とする。話者相互の地位・身分関係は、ほぼ対等であることが望ましい。職業は老若ともにその土地における一般的なものであること。在外歴については1に準ずる。

## 4. 場面設定の会話（51年度）

上記1に準ずる条件を備えた老年層の男女に、場面に応じて、種々の演技的対話をしてもらった。

## 5. 民話

特に条件はつけず、その土地で生まれ育った民話の語り手であれば可とした。

### 司会者

主たる話者のほかに、話の引き出し役としての司会者が同席することとした。司会者はこの研究の主旨を理解し、かつ、司会役としての能力を有する地元方言の話し手が望ましい。司会者の年齢・居住歴等に、特に条件はつけなかった。

### 録音量・文字化量

50年度・51年度ともに各約60分程度の録音量（51年度については、各項目平均20分、合計60分程度）について文字化を行うこととした。また、内容の豊かな文字化資料を得るために、文字化すべき録音量の数倍を録音し、その中から適切な部分（話がとぎれず、しかも発言が特定の話者にかたよっていないこと。話の流れ、話題の展開が自然であること、など）を選択して文字化することとした。

### 文字化原稿の作成・表記

1. 将来のオフセットによる複製印行に備えて、一定の様式の文字化用紙を作成し、担当地方研究員に配布した。
2. 文字化は原則として表音的カタカナ表記によることとした。これは、利用者の便宜、文字化作業の能率などを考慮してのことである。ただし、対象とする方言の性格によって、カナ表記

では特殊な字母を多数必要とし、かえって煩雑になると判断される場合は、国際音声字母による表記も可とした。なお、それぞれのカナで表わす具体的音声の範囲・内容については、各担当者が「解説」の中で説明することとした。

3. アクセント、文末イントネーションの記述の有無は、その表記法を含めて担当者の判断にまかせた。
4. 聴き取りが困難な箇所や、言いよどみ、言い重なり、言い直し、笑い声などについては、これらを一定の符号で表わすことにした（凡例参照）。

文字化には、標準語訳、および、場面、文脈、特徴的音声、方言形の意味・用法などについての注をつけることとした。なお、標準語訳はあくまでも内容理解のための手がかりの一つと考え、訳が問題となるような箇所については、できるだけ詳しい注をつけることを担当者に求めた。

#### **収録方言・表記・収録内容についての解説**

文字化原稿とは別に、収録方言・表記・収録内容についての解説を担当者に求めた。解説には、原則として次の事項を記すこととした。

##### **A. 収録地点とその方言について**

1. 地点名
2. 収録地点の概観（位置・交通・地勢・行政区画の変動・戸数・人口・主な産業など）
3. 収録した方言の特色
  - ①方言区画上の位置・隣接諸方言との関係
  - ②音声・音韻上の特色
  - ③文法上の特色

##### **B. 表記について**

それぞれの符号（カナ・音声符号）で表わす具体音声の範囲、特殊な表記についての説明など。

##### **C. 収録内容の概説**

1. タイトル
2. 録音年月日
3. 録音場所
4. 話し手の氏名・性・生年・職歴・役職歴・居住歴・言語的特徴など
5. 録音環境（同席者・話の進行状況・場の雰囲気など）

## 凡 例

1. 場面、文脈、特徴的音声、方言形の意味・用法などについての注は各章の末尾にまとめて記し、該当箇所を本文のそれぞれの位置に番号（かっこつき）で示した。
2. 発言や録音が不明瞭なため聴き取りが困難な箇所には~~~~~線をつけた。  
例 タエデ ハー 〈50ページ10段〉  
~~~~~
3. 最終的に聴き取り不能の箇所には~~~~~線のみを記した。
4. 言いよどみは、その末尾に-----線をつけた。
5. 複数の発言が重複した場合には、重複部分に\_\_\_\_\_線をつけた。  
例 A アマテ マタ ヤヅヨ。(Bアマテ マタダ)
6. 言いかけて、それを言いなおした場合には、言いかけた部分にxxxxxxxxxをつけた。  
例 カネ カネ トルアダエ。 〈53ページ11段〉  
xxxxx
7. 笑い声、咳ばらいなどは、（笑）、（咳）のように示した。
8. 同席者の短い発言や突然の訪問者のことばなどは文字化していない場合がある。その際や、録音テープを編集して談話内容の一部を削除した際には、該当箇所に\*の符号をつけた。

# I. 青森県青森市大字<sup>うしたて</sup>牛館

収録・文字化担当者 松 本 宙  
" 協力者 佐々木 隆 次



## A 収録地点とその方言について

### 1. 地点名

青森県青森市大字牛館 (収録場所 大字牛館字松枝33 桜田敏光氏宅)

### 2. 収録地点の概観

位置 青森市の中心部から南方に位置し、青森駅から約6km。

交通 青森駅から南方へバスで約20分、荒川十文字停留所下車。乗へ徒歩で15分。

地勢 青森平野のほぼ中央部にあり、北側は荒川が流れ、それを隔てて、大字「ハッ役」の家並み(ほとんど農家)が続いている。東西南側は田園がひらけている。

### 行政区画の変動

古記録では莚町時代から人が住み、専ら農業を営んできた。明治初期から行政区画上、東津軽郡横内村の一支村となったが、横内村は昭和30年に青森市に編入することとなり現在に及んでいる。

### 戸数・人口・産業

青森市の人口は、昭和53年9月30日現在で、男136,100人 女144,991人 計281,091人。世帯数86,888。

収録地の牛館の人口は、昭和53年9月現在で、約100人、世帯数22。この牛館は、米作りがほとんど、他に野菜等の生産がいくらかで出稼者は一人もいない。なお、一家の長たる父はほとんど勤め人であり、その妻が農業に従事している家庭が多い。

### 3. 収録した方言の特色

#### ① 方言区画上の位置、隣接語方言との関係

北奥方言区に属する。青森県は津軽方言地区と南部方言地区に西東に二大別する。この調査地点は津軽方言地区にある。津軽地区は四市五郡から成り、この青森市は江戸時代後期から港町として急速に発展し、いわば新興都市である。しかし、収録地「牛館」は海沿いに発展した青森市中心部から約6km離れた後背の地であり、記録では莚町時代から村殿のあった歴史の古い地である。現在、周辺が住宅地等造

成で開発されている中で、戸数の増減も少なく閑静な場所である。従ってことばも右左間には青森の左郷としてかなり左郷が保たれている。

青森市は陸奥湾沿岸に平内町（南津軽郡）を隔てて南部地区にそれほど遠くない位置にあるが、南部方言の影響はほとんどないと言ってよい。津軽方言地区は互いにほとんど差はないが、この地点は内陸部の弘前市や南津軽郡に比して一般に話調が早く乱暴な感じがある。

## ② 音韻上の特色

音韻一覽とそれに対応するカタカナを記す。

|                  |                 |                 |                 |                             |                 |                             |                             |                |                             |                             |                            |
|------------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------------------|-----------------|-----------------------------|-----------------------------|----------------|-----------------------------|-----------------------------|----------------------------|
| ア                | イ               | ウ               | エ               | エ <sub>ア</sub>              | オ               | ヤ                           | ユ                           | イ <sub>ア</sub> | ヨ                           | ワ                           | エ <sub>ア</sub>             |
| a                | i               | u               | e               | ε                           | o               | ja                          | jü                          | jε             | jō                          | wa                          | wε                         |
| カ                | キ               | ク               | ケ               | ケ <sub>ア</sub>              | コ               | キ <sub>ヤ</sub>              | キ <sub>ユ</sub>              |                | キ <sub>ヨ</sub>              | ク <sub>ワ</sub>              | ク <sub>エ<sub>ア</sub></sub> |
| ka               | ki              | ku              | ke              | kε                          | ko              | kja                         | kjü                         |                | kjō                         | kwa                         | kwe                        |
| ガ                | ギ               | グ               | ゲ               | ゲ <sub>ア</sub>              | ゴ               | ギ <sub>ヤ</sub>              | ギ <sub>ユ</sub>              |                | ギ <sub>ヨ</sub>              | グ <sub>ワ</sub>              | グ <sub>エ<sub>ア</sub></sub> |
| ga               | gi              | gu              | ge              | gε                          | go              | gja                         | gjü                         |                | gjō                         | gwa                         | gwe                        |
| ガ <sup>°</sup>   | ギ <sup>°</sup>  | グ <sup>°</sup>  | ゲ <sup>°</sup>  | ゲ <sub>ア</sub> <sup>°</sup> | ゴ <sup>°</sup>  | ギ <sub>ヤ</sub> <sup>°</sup> | ギ <sub>ユ</sub> <sup>°</sup> |                | ギ <sub>ヨ</sub> <sup>°</sup> | グ <sub>ワ</sub> <sup>°</sup> |                            |
| ga <sup>°</sup>  | gi <sup>°</sup> | gu <sup>°</sup> | ge <sup>°</sup> | gε <sup>°</sup>             | go <sup>°</sup> | gja <sup>°</sup>            | gjü <sup>°</sup>            |                | gjō <sup>°</sup>            | gwa <sup>°</sup>            |                            |
| サ                |                 | ス               | セ               | セ <sub>ア</sub>              | ソ               | シャ                          | シュ                          | シ <sub>エ</sub> | シ <sub>エ<sub>ア</sub></sub>  | シ <sub>ヨ</sub>              |                            |
| sa               |                 | sü              | se              | sε                          | so              | ʃa                          | ʃü                          | ʃe             | ʃε                          | ʃō                          |                            |
| ザ <sup>°</sup>   |                 |                 | ゼ               | ゼ <sub>ア</sub>              | ゾ               | ジャ                          | ジュ                          | ジ <sub>エ</sub> | ジ <sub>エ<sub>ア</sub></sub>  | ジ <sub>ヨ</sub>              |                            |
| za <sup>°</sup>  |                 |                 | ze              | zε                          | zo              | dʒa                         | dʒü                         | dʒe            | dʒε                         | dʒō                         |                            |
| タ                |                 |                 | テ               | テ <sub>ア</sub>              | ト               | チャ                          | チュ                          | チ <sub>エ</sub> | チ <sub>エ<sub>ア</sub></sub>  | チ <sub>ヨ</sub>              |                            |
| ta               |                 |                 | te              | tε                          | to              | tʃa                         | tʃü                         | tʃe            | tʃε                         | tʃō                         |                            |
| ダ <sup>°</sup>   |                 | ヅ               | デ               | デ <sub>ア</sub>              | ド               |                             |                             |                |                             |                             |                            |
| da <sup>°</sup>  |                 | dzü             | de              | dε                          | do              |                             |                             |                |                             |                             |                            |
| ツ <sub>フ</sub>   |                 | ツ               | ツ <sub>エ</sub>  | ツ <sub>エ<sub>ア</sub></sub>  | ツ <sub>オ</sub>  |                             |                             |                |                             |                             |                            |
| tsa <sub>f</sub> |                 | tsü             | tse             | tse                         | tso             |                             |                             |                |                             |                             |                            |
| ナ                | ヌ               | ネ               | ネ <sub>ア</sub>  | ノ                           | ニ <sub>ヤ</sub>  | ニ                           | ニ <sub>ユ</sub>              |                |                             | ニ <sub>ヨ</sub>              |                            |
| na               | nü              | ne              | nε              | no                          | ɲa              | ɲi                          | ɲü                          |                |                             | ɲō                          |                            |
| ハ                |                 | ヘ               | ヘ <sub>ア</sub>  | ホ                           | ヒ <sub>ヤ</sub>  |                             | ヒ <sub>ユ</sub>              |                |                             | ヒ <sub>ヨ</sub>              |                            |
| ha               |                 | he              | hε              | ho                          | ɸa              |                             | ɸü                          |                |                             | ɸō                          |                            |

|    |    |    |                |                |    |                |                |                |
|----|----|----|----------------|----------------|----|----------------|----------------|----------------|
|    |    | フ  | フ <sub>1</sub> | フ <sub>2</sub> |    | フ <sub>4</sub> |                |                |
|    |    | ɸü | ɸe             | ɸɛ             |    | ɸja            |                |                |
| パ  | ピ  | ポ  | ペ              | ポ <sub>2</sub> | ホ  | ヒ <sub>2</sub> | ヒ <sub>1</sub> | ヒ <sub>3</sub> |
| pa | pi | pü | pe             | pɛ             | po | pja            | pjü            | pjo            |
| バ  | ビ  | ブ  | ベ              | ベ <sub>2</sub> | ボ  | ビ <sub>2</sub> | ビ <sub>1</sub> | ビ <sub>3</sub> |
| ba | bi | bü | be             | bɛ             | bo | bja            | bjü            | bjo            |
| マ  | ミ  | ム  | メ              | メ <sub>2</sub> | モ  | ミ <sub>2</sub> | ミ <sub>1</sub> | ミ <sub>3</sub> |
| ma | mi | mü | me             | mɛ             | mo | mja            | mjü            | mjo            |
| ラ  | リ  | ル  | レ              | レ <sub>2</sub> | ロ  | リ <sub>2</sub> | リ <sub>1</sub> | リ <sub>3</sub> |
| ra | ri | rü | re             | rɛ             | ro | rja            | rjü            | rjo            |
| ン  | ツ  | ー  |                |                |    |                |                |                |
| N  | Q  | :  |                |                |    |                |                |                |

ア 「イ」と「エ」が混同する。あるいは「イ」は「エ」に吸収されやすい。例、「息」「駅」は [i'gi] か [eg'i] であり「犬」「杭」は [i'nü] [kü'i] か、[enü] [küe] である。そして、どちらかといえはいずれも後者を多く発音する。

イ) 連母音の「-アイ[-ai]」「-アエ[-ae]」「-オイ[-oi]」「-イエ[-ie]」「-ウエ[-ue]」は「-エア[-e]」になることがある。例、「暗い」は [küre], 「お前」は [ome], 「おもしろい」は [omosüre], 「消える」は [kerü], 「食え」は [ke]。

しかし、変化しないこともあり、また [e] になることもあり、かなり恣意的である。

ウ) 「シ」と「ス」は区別がない。例、「獅子」「寿司」「煤」は [süsü] であり、「腰」「越す」は [kosü] である。

エ) 「チ」と「ツ」は区別がない。さらに終中接尾の「チ」は有声化して「ヅ [dzü]」となることが多い。例、「乳」は [tsütsü], 「力」は [tsükara], 「内」「勝ち負け」は [üdzü] [kadzümage]。

オ) 「ジ」「ヂ」「ズ」「ヅ」は区別がない。例、「時代」「鼻血」「鈴」「団画」は [dzüdae] [həndzü] [sündzü] [dzüja]。

カ) 「セ」が「ヘ」にならやすい。例、「洗濯」「稼ぐ」は [hen dagü]

[kahejü]。

- キ) 「ヒ」は「ヘ」「フ」あるいは「ス」になることがある。例、「人」は[he to][chü to][sü to]。「火」は[he][sü]。「昼間」は[herüma][chürüma][sürüma]。
- ク) 語中語尾の「リ」「レ」は「エ」になることがある。例、「借りる」「流れる」は[ka e rü][na ga e rü]。
- ケ) 「ク、グ、グ」「フェ、フェア、ファ」は老年層(60歳以上)に多く残っていて使われる。例、「喧嘩」「馬鞍」「真桑」は[keN kwa][ma gwa][maga]。「減る」「笛」「百」は[che rü][pe][pja gü]。
- コ) 語中語尾のカ行子音、ク行子音は有声化(濁音化)する。例、「駅」「向く」は[egü][mü gü]。「歌」「音」は[ü da][o do]。
- カ) 語中語尾のカ行音、ク行音、ガ行音、バ行音は鼻濁音化する。同時に撥音便が生ずることにもなるが、完全な撥音ではなく標準語の半合ほどの長さになることが多い。例、「鍵」「窓」「水」「蛇」は[ka gi][ma do][mi dzü][he mbi]。
- シ) 濁音が清音化することもある。例、「わずか」「何時頃」は[wa tsüka][na tsükorö]。
- ス) 動詞終止形連体形の活用語尾「ウ」は「ル」になることが多い。例、「歌う」「買う」「狂う」は[ü darü][ka rü][kü rü rü]。
- セ) 形容詞終止形連体形の活用語尾「イ」は消滅することが多い。例、「苦しい」「恐しい」は[kü rü sü][o so ro sü]。
- ソ) 形容詞連用形の活用語尾「ク」は「フ」になることが多い。例、「無くて」「あもしろくて」は[na chü te][o mo sü ro chü te]。
- タ) 形容動詞連体形の活用語尾「サ」は「ダ」となる。例、「変な」「静かな」は[he N da][sü dzü ga da]。
- チ) 長音、撥音、促音は完全に発音せず、標準語に比して半合ほどの長さになることが多い。または、消滅することもある。従って聞き取りが非常にめんどうである。発音しない例、「放送局」は[ho so kjo gü]。「膝」は[kata]。

### ③ 文法上の特色



ア) 普通は主格、目的格の助詞を省略する。例、「エ又 エダ。(犬がいぬ)」  
「メス クタ。(飯を食った)」

しかし、強調したり、特に提示しなくてはなる事物等には「バ」「ゴト」「キャ」「ダキャ」「バダキャ」を使う。例、「ハエバ タダゲ(蠅を叩け)」  
「ワゴト ドスノヤ(吾をどうするのだ)」  
「ワキャ ネゲダ(吾は逃げた)」  
「マバダキャ フパエネ(馬を引っぱれない)」  
「オエサダキャ コネ(俺家には来ない)」

イ) 名詞に接尾辞(指小辞)の「コ」が付く。例、「猫コ」「傘コ」

ウ) 可能表現は「～するによい」、不可能表現は「～られない」の形式をとる。例「見ルニエ」「見ラエネ」

エ) 自発表現は「～サル」を使う。例、「書ガサル」

オ) 現在の存在・継続「てある・ている」は「テラ」を使い、過去、過去の存在・継続、過去完了「てあった・ていた・であった・でいた」は「テタ、デタ、テアッタ、デアッタ」を使う。例、「本 置エデラ」「餅 有ッテラ」「魚 エデタ」「雨 降ッテタ」「坊ツ人 アッテアッタ」

カ) 形容詞連用形、形容動詞連用形はそれぞれ「クテアッ(タ)、クテ(タ)」「デアッ(タ)、デ(タ)」を使う。例、「良クテアッ(タ)、大キクテ(タ)」「静ガデアッ(タ)、変デ(タ)」

キ) 場所・方向を示すのに「サ」を使う。例、「家サ居ル。山サ行グ」

ク) 理由表現「って、から」は「ハンデ、ハデ、ドゴデ」を使う。例、「働グハンデ儲ゲル、働グドゴデ儲ゲル」。

ケ) 仮定条件、確定条件は「バ」を使う。例、「良バ ソヘ。(良くなろうしろ)」  
「田ノ草取テエレバ ヘコキ キタゼァデ。(田の草を取っていると飛行機が来ぬそうだといって)」

コ) 逆接条件は「バテ、バタテ」を使う。例、「膝タバタテ後味悪リ」

サ) 推量は「ベ、ベー」、例、「エフテタバ。(良かったろう)」。  
また「エンタ」。例、「何処サモ無<sup>キ</sup>エンタ。(何処にも無いようだ)」

シ) 意志は「ベス、ベ、ベー」。例、「行グベス、行グベ(行こう)」

ス) 間投詞。実際には、副詞、接続詞、感動詞等のいずれかが判別不可能

のものが多く、「ことばを引き出すため、單なることばつなぎのため、  
思つぎのため」の役割を持っている。例、「マヅ、マンヅ、ソエゴン、  
ソステ、ステ、テ、コンド、コントア、ユンダ、ホラ、ホラー、ホロ、  
ホロー、ロー、ウン、ウーン、ウ、アー、アン、ハー、ナー等」

セ) 文末のことば。標準語よりも数が多く、さまざまなニュアンスがあり、  
適切な標準語訳をつけることができないほどである。例、「ホン  
ダエナ<sup>ー</sup>（そうだよなあ）。コナグナツタオナ<sup>ー</sup>（采なくなつたもの  
なあ）。ワダラエネセ<sup>ー</sup>（渡られないよ）。ネゲダア<sup>ダ</sup>、ネゲダヤ<sup>ダ</sup>、  
ネゲダア<sup>ヅ</sup>、ネゲダヤ<sup>ヅ</sup>（逃げたのだ）。ツクツタ<sup>ヅ</sup>（作ったのだ）。  
ケネヤ<sup>ー</sup>（くれないよ）。マネヅヨ<sup>ー</sup>（だめなんのだよ）。クタジヤ<sup>ー</sup>  
（食ふよ）。クタネ（食ふよ）。マネキヤ<sup>ー</sup>（だめだよね）等」

ソ) 敬語は親しい間柄では年齢に関係なくほとんど使わない。せいぜい  
改まらぬ気持ちの際に「～ネス、～ノ」を使う程度である。例、「ソン  
ダネス（そうですねえ）。ホンダエノ（そうですねえ）」これらは最  
高敬語であり、「ノ」より「ネス」が敬意は高い。

#### 4. その他

##### ① 地点選定理由

青森市は文字化担当者（佐々木隆次）の生育した地であり、文字化  
の際には困難が少ない。収録地点は文字化担当者の母の生地であり、  
条件に適した話者を求めやすかった。

##### ② 協力者の氏名及び協力内容

- ・ 桜田敏光 農業 51歳。文字化担当者の叔父にあたり、この家を実録場  
所とした。また、文字化、標準語訳を行う際に不明の箇所を判断して  
もらつた。
- ・ 村上 譲 青森県立青森中央高校教諭（国語科） 44歳。事前に録音  
技術の指導を受けた。また、文字化の際、微妙な発音箇所を判定して  
いるといふ。
- ・ 高山 治 青森県立青森南高校教諭（国語科） 51歳。文字化の際、  
微妙な発音箇所の判定及び一部清書を手伝っているといふ。

## B 表記について

長音、促音、撥音は標準語に比して半分程の長さで発音することが多い。ここではひとつひとつ表記はせず、標準語と同様の長さに聞き取った場合のみ文字化することにした。

あいづちは「アー、ウン、ウー、ウーン 等」にした。実際の音声は [a:, aN, a:N, i:, ü:, ü:N, o:, o:N, N 等] で他のカタカナ表記と紛らわしいため、ほとんど標準語に近い表記に統一したものである。

## C 収録内容の概略

全部、同一の日に同一の話者で収録したため、ここに一括して掲げ、各話題別には話者のみ記すことにする。

### 1. タイトル

- |             |       |           |
|-------------|-------|-----------|
| 1 田打ちの唄     | 2 縄緬い | 3 つらい農作業  |
| 4 堆と小作米     | 5 牛館橋 | 6 川のさかなとり |
| 7 五山(岩木山)参詣 | 8 ボサマ | 9 青森空襲    |

### 2. 録音年月日

昭和53年9月5日(火) 午後7時～午後3時40分

### 3. 録音場所

青森市大字牛館金松枝乃當地 桜田敏光氏宅

### 4. 話し手の氏名・性・生年・職歴・居住歴・言語的特徴

A 桜田鉄彌 男 明治36年12月1日生 農業(自営) この収録地点に生育し、まだ一度も他所に居住したことがない。ほんの少し耳が遠くなっらしく補聴器をつけているが、言語動作共に常人と何ら変りない。古いことば・発音を有している人はこの人が唯一である。例、[中]音。また、間投詞的使用として「それこそ(ソエゴソ)。こんど(コンド、コンドア、コンダ)。ほら(ホラ、ホラー、ホロー、ホロ、ロー)」がしきりに発せられる。話好きで話題が豊富である。

B 八木沢千代三郎 男 明治43年9月4日生 農業(自営)のかたわら地元郵便局に大正14年～昭和37年まで勤務(配達業務)昭和20年に約3か月間、横須賀市海兵団に勤務。この3か月間

以外は他所に居住したことはない。話し手のAほどではないが、「こんど、ほら」が発せられることも多い。話好きで話題豊富。  
C 棟方トミ 女 大正2年7月20日生 農業(自営) この地点から5km西方の「細越(現在は青森市内)」から嫁入りし、以後この地に居住。「へをなす」の言い方を再三再四使用するが、これは、一種の膿化表現法とも言うべきもので、前後のことは明確な表現をしていることが多い。話好きで話題豊富。

上記三人に共通している言語特徴として間投詞「はあ(ハー)」。あら(アラー、アラ、ラー)」が発せられることである。

(D 佐々木隆次(男)は司会役、録音係をつとめすが、タイトル3、8 におのおの一回だけ発言がある。)

#### 5. 録音環境

同席者一人。佐々木隆次(司会役、録音者、文字化担当者)

ほとんど自動車の通らない場所であり、家中に交雑もいず騒音の障害は何もなかった。

長老格の桜田鉄彌氏が話のきり出し役をつとめた。三人は気心の知れた者同士であり、なごやかな雰囲気の中で笑いなどしながら、予定していた話題の端とに滞ることなく自由に思いつくふん話した。



# 1. 田 打 ち の 頃

## 話し手

| (略号) | (氏名)    | (性) | (生 年)   |
|------|---------|-----|---------|
| A    | 桜田 鉄彌   | 男   | 明治36年生れ |
| B    | 八木沢千代三郎 | 男   | 明治43年生れ |
| C    | 棟方 トミ   | 女   | 大正2年生れ  |

A ムガスダバナー ソエゴッ サンガツデバハー (B ウン) タ  
昔ならなあ それこそ 三月といえはあ うん 田(巻)

ウヅ ウヅ スタオナー。 (B ウン) エマダバ ゴガツダノ  
打ち 打ち したものでなあ。 うん 今なら xxxxxxxxxxxx

ー (B ウンウン) ゴガツサ ハネ ウヅ タ ウダネバタテ  
xx (うんうん) 五月に はいらないうち 田(巻) 打たないけれど

ヤッパリ ムガス ホラ (B ウン) テデバリ ヤルドゴデ  
やっぱり 昔 ほら うん 手ではかり やるのて

(B ウン) ハヤグネバ マエネハンデハー サンガツ ユギ<sup>(1)</sup>  
うん 早く ないと だめだから はあ 三 月 雪(巻)

ケデハー (B ウン) ワンツカ カワゲバハー ノー ミンナ<sup>(2)</sup>  
消えてはあ うん わずか 乾くとはあ のう みんな

ハー (C ホンダネナー) サンボクッ デ ハー (C ウンウ  
はあ (そうぞ) なあ) 三本鉄で はあ うんう

ン) ウッテ。  
ん) 打って。

B アエ サンツコロネ エグンデ ネガー、アサノ。  
あれ 三時頃に 行くんで ないか、朝の。

A ウー サンツ。ハエ ヘトダキャヨー (B ウン) ハー ジュ  
うん 三時。早い 人は よう (うん) はあ ナ  
ニツ スギレバ (B ウンウン) ホー オギデ エグヤデー  
二時 過ぎると (うんうん) ほう 起きて 行くんだ  
ウン。  
うん。

B ウン メス カネデー。  
うん 飯<sup>(飯)</sup> 食わないで。

A メス カネデ。  
飯<sup>(飯)</sup> 食わないで。

B ウン ホスモツ モッテナ (笑)。  
うん 干し餅<sup>(餅)</sup> 持ってな

A ウー ン ホスモツ モッテ ホラー ウン ステハー ス ツツ  
うーん 干し餅<sup>(餅)</sup> 持って ほらあ うん としてはあ <sup>xxx</sup> エ<sup>(が)</sup>  
スミデラハンデ クツ ナンダ ワラグツトカ。  
凍<sup>xxx</sup>てるので 履<sup>xxx</sup> なんだ 藁 履<sup>xxx</sup>とか。

B フラグツ ハエデッタ モンダエナー。  
藁 履<sup>(3)</sup> はいていた もんたよなあ。

A ウー ツマゴ ハグトカ ステヨー。 ステハー クレドゴデ オ  
うん 爪 籠 履くとか してよう。 としてはあ 暗いので

ドゴダバヨー (B ウン) カッ ツカッ ツカッ ツ オド スバタ  
男 ならよう (うん) かっ ち かっ ち かっ ちという 背<sup>(背)</sup> するけれど

テ フト メァ ネヤダエナー。(B ウン) ンー。コンダ アガ  
人<sup>(人)</sup> 見えないうたよなあ。(うん) うん。今度 明

(4)  
ルグ ナレバヨー ハンヅメデ コンダ エヨー アッコノ フト  
るく なるとうよう 初めて 今度 やあ あそこの人

(5)  
ダネラー。ツンブ ハイナナナンテ (B ウンウン) ホラ ウ  
だよあうあ。ずいぶん 早いなあなんて (うんうん) ほら う

ー。

ん。

C エグ ツギハー ミンナハー オナゴンドダバ キナガヤグ (B  
行く 時はあ みんなはあ 女 達 なら 半人役

ウン) オドゴンドダバー フトリエグタ ツギハー (A  
うん 男 達 なら 一人役といった 時はあ B

ウン) ハンブガラ ウテマッテノー (笑) (A ウン)。  
うん (女の早い人は) 半分から 打ってしまつてう (うん)

B チョンド スヅンゾゴロニ メス クーエンタナー。 コツガラ メ  
ちょうど 七時頃に 飯(飯) 食うようだなあ。 こちらから

ス モテ エッテヨー。

飯(飯)持って 行ってよう。

A ウー コンダ エ エガラ ベント ウウ モッテ エッテナー  
うん 今度 <sup>xxx</sup> 家から 弁当(飯) 持って 行ってなあ

ウー。

うん。

B ベント モッテ エッテナ。 アノー スノリヅル スノリー ド  
弁当(飯)持って 行ってな。 あいう 布海苔汁 布海苔 ど

ロドロテ スノリナー。 (A ウーン) アエ ニデ オツユニ  
ろどろして 布海苔なあ。 (うん) あれ(飯)煮て あつやに

ステヨー ウン (A ウン) (笑) マー ススルンダナ マヅ  
してよう うん (うん) まあ すするんだな まず

ナー (笑)。 ステ コンダ ビンサ ツメデ ウン<sup>(10)</sup> テ スノ  
 なあ。そして 今度 瓶に 詰めて うん<sup>(10)</sup> として 布<sup>(10)</sup> 繰  
 リヅル カゲデ ホラ ウン ( A ウンウウン ホンダ ホンダ  
 若<sup>(10)</sup> 汁<sup>(10)</sup> かけて ほら うん うんうんうん そうだ そうだ  
 。 C ウン) ウン カポエデナ ウン。 オキ<sup>xxx</sup> オ トンヅ<sup>xx</sup>  
 うん) うん 急いで食<sup>(10)</sup>てな うん。 当時

ノ オキ タサ ハッテヨー ウン。  
 の 大きい田に 入<sup>(10)</sup>てよう うん。

A エヤ アノ マンダ ムガスア マンダ タ ウヅ ツギダンバ  
 やあ あり また 昔は また 田<sup>(10)</sup> 打<sup>(10)</sup>つ 時<sup>(10)</sup> なら  
 ニス アガテナー。  
 魚<sup>(10)</sup> 東<sup>(10)</sup> あが<sup>(10)</sup>てなあ。

B ニス アガテナー。  
 魚<sup>(10)</sup> 東<sup>(10)</sup> あが<sup>(10)</sup>てなあ。

A オモニ アラー ニスンバリハー。ニス ヤエデー ウーン。  
 主<sup>(10)</sup> に あうあ 魚<sup>(10)</sup> 東<sup>(10)</sup> ばかりはあ。魚<sup>(10)</sup> 東<sup>(10)</sup> 焼<sup>(10)</sup>いて うーん。

B ニスダバ アギデマルダゲ クタエンタナー。 ジェンコ アレ  
 魚<sup>(10)</sup> 東<sup>(10)</sup> なら 飽<sup>(10)</sup>きてしまうだけ 食<sup>(10)</sup>たよう<sup>(10)</sup>ななあ。 錢<sup>(10)</sup> こ<sup>(10)</sup> あれ  
 バヨー。  
 ばよう。

A ニスダバ クタモンダナー。 ニ<sup>xxx</sup>ー ニス アガテ ニス アガテ。  
 魚<sup>(10)</sup> 東<sup>(10)</sup> なら 食<sup>(10)</sup>たもん<sup>(10)</sup>ななあ。 魚<sup>(10)</sup> 東<sup>(10)</sup> あが<sup>(10)</sup>て 魚<sup>(10)</sup> 東<sup>(10)</sup> あが<sup>(10)</sup>て。

C ナー クツコロテ ヘレバ ウッテマッテ デ エサ モンドテ  
 なあ 九時頃と いうと 打<sup>(10)</sup>ってしま<sup>(10)</sup>って で 家に 戻<sup>(10)</sup>って  
 キター ノー ア ミンナステ コンダ ハー ( A ウーン)  
 来<sup>(10)</sup>て のう ああ みんなで 今度 はあ ( うーん)

ワゲモンド ワゲモンド<sup>(11)</sup> ドア アスブネ アルエテ (A ウンダ)  
 若い者達<sup>(は)</sup> 若い者達 と 遊びに 歩いて ( そうだ )  
 (笑)

A チュハンメアニハー ノー ウツテマッテ。  
 昼飯前にはあ うう 打ってしまって。

B タエデハー ジュンツ ジューエツツコロニ (A ウン) ナレ  
 たいはいはあ 十時 十一時頃に うん なる  
 バ ウツテマルンデ ネガナー。  
 と 打ってしまいうんて ないかあ。

A ハイア ヘトダバハー チュハンメアニ ジュンツコロニ (A ウ  
 早い 人 ならはあ 昼飯前に 十時頃に う  
 ン) ハー スマテマルジャー。  
 人 はあ しまっしょうよ。

B コエダハンデ アサマニ ハエグ エグンダオナー ウン。  
 これだから 朝 に 早く 行くんだもつなあ うん。

A ソエデ<sup>2</sup> コンダ ホラー チュハンニ ナッテカラ ヤスムヤヅ  
 それで 今度 ほらあ 昼飯に なってから 休むわ(か)  
 (B ウン) ソレ マンダ モースレア ワゲセア。  
 うん それ また おもしろい わけよ。

B アレア アサマカラ バゲマンデダラ トテモ トサエル モンデ  
 あれは 朝 から 晩まで なら とても 通される もんで  
 ネベオン。  
 ないだろう。

A アー トテモ (B ウン) カラダ アー カステマルジャ (   
 ああ とても うん からだ(か) ああ 壊してしまっしょうよ )

B ウン) ウン。  
うん) うん。

C エマ ヘバノ。  
今 そうするとねえ。

B スタハデ<sup>(12)</sup> バゲ ネデデ<sup>(13)</sup> ヤネノ ホゲ<sup>(12)</sup> カンジョ スイグレアノ  
そうだから 晩 寝ていて 屋根の 重木<sup>(12)</sup> 甚だ 走 するぐらいの  
ホラー (A 笑) アガリニ (A ウン) <sup>(14)</sup> デ ネルンダ<sup>(14)</sup>  
ほらあ 明るいうちに 寝るんだ

ッテナー (A ウー。 C ンダ) ハヤグヨー。  
と言ってなあ うん。 そうだ) 早くよう。

C ネネンデ ホゲ カンジョ エベステ ネルアダモノー (笑)。  
寝ないで 重木<sup>(12)</sup> 数 え ようと言って寝るのだもの。

B ヘバ ハルノ ホゲ<sup>(12)</sup> カンジョ ステバ マー ナンダガテナー  
そうすると 春の 重木<sup>(12)</sup> 甚だ 走 するといえば まあ なんだかと言ってなあ  
アガリネ ネデマテハー ロー ヨアゲ オギデ エグアダオン。  
明るいうちに 寝てしまつてはあ ほらあ 夜明け 起きて 行くのだもの。

A スタテ ロー アサマニ ハヤグ オギネバ マエネハンデヨー  
そうはいっても ほらあ 朝 に 早く 起きないと だめだからよ

(B ウンウン) スタハンデ ハー アガリネ ハ ネル  
うんうん) そうだから はあ 明るいうちに は 寝る

ワゲセア。

わけよ。

## 注記

- (1) 「サンガツ」の「ツ」はこの場合ほとんど発音されていない。
- (2) 数少ない、敬意を含む間投助詞で、相手にあいづちを求める意がある。
- (3) 葉製の雪ぐつ。
- (4) 感動詞。少しびつくりした時に使う。
- (5) 「フトダネラ」の「ネ」は多く使用される文末助詞の一つだが、適切な標準語が見当たらない。今仮りに「よ」を当てておくが、勿論、婉曲な調子や敬意はない。
- (6) 「オナゴンドダバ」の「ンド」は複数を表わす。語源は「ども」。他に「ダツ(達)」もあるが、少し改った言い方である。なお、「ンド」の「ン」がとれて「ド」を使うことも多い。
- (7) 日常会話では「キナギャグ」と言う。録音を意識して「キナガヤグ」と発音したらしい。「キナガ」は「半分」の意であり、「日本国語大辞典 小字部」は「寸半」の字を当てている。「キナガヤグ」は、注記(8)の「フトリエグ」の半人分の作業量をいう。
- (8) 「フトリャグ フトリヤグ ヘトリャグ ヘトリヤグ」とも言う。一反歩(300坪、10アール)の水田を耕やす、男の一日分の作業量をいう。また、「タ」は「～といった」の「といっ」を省略した表現。
- (9) 無意味の発音。
- (10) 接続詞「そして」をよく「ステ」と「ソ」を脱落していうが、更に「ス」までも発音しないことがある。発音しても軽いため録音できないこともある。
- (11) 「ドア」の「ア」は無意味の発音。ここの文意は「若い者達は若い者達同志で」である。
- (12) 昔、茅葺き屋根に使った丸太の垂木。天井板を張っていなかったのでもる見えであった。別に「ホゲ」と発音する。
- (13) 「する(連体形)」は時には[si]になることもあり、ここはその例。普通は「ス(su)」である。
- (14) 無意味の発音。

## 2. 縄 織 い

話し手

| (略号) | (氏 名)   | (性) | (生 年)   |
|------|---------|-----|---------|
| A    | 桜田 鉄彌   | 男   | 明治36年生れ |
| B    | 八木沢千代三郎 | 男   | 明治43年生れ |
| C    | 標方 トミ   | 女   | 大正2年生れ  |

A ヤ ハー ワゲモンドダバ チュハメアニ スマレバ (B ウン  
 ヤ はあ 若い者達なら 昼飯前に しやうと うん  
 ) コンダ ホロー ホガムラサ コンダ メラハンド ミニ エ  
 今度 ほらあ 地村へ 今度 「娘 達<sup>(1)</sup> 見に行  
 グナント。<sup>(2)</sup> (C 笑) ウー ホガノ ホラ ソエゴソ <sup>(3)</sup>ゴサデモ  
 くんなんて。 うん 他の ほら それこそ 合子沢でも  
 スンマツノデモヨー <sup>(4)</sup> (B ウン) <sup>(5)</sup>ヨゴウツデモ コンダー ウ  
 新町野でもよう うん 横内でも 今度 う  
 ー ムヅレ <sup>(6)</sup>キテ スレァ サンジャグ スメデヨー (C 笑)  
 ん 筒袖 着て 白い ミ 尺帯 締めてよう  
 オーハバノー。 コンダ メラハンドノ ドゴサ エッテ エグツ  
 大 中 の 。 今度 「娘 達<sup>(7)</sup> の 所へ <sup>xx xx xx</sup>行くといい  
 テ ハー アー ナンニモ ソロツテヨー ウーソ チュハ  
 って はあ ああ 何人か 揃ってよう うーん そら 昼飯  
 ンメアニ ハー オラー フト <sup>(8)</sup>フトリヤグ ウッテ メラハンド  
 前に はあ 「俺 <sup>xx xx</sup> 一人役 打って 娘 達



ミニ キターナンテ ハー ソステ アサグヤダエナー。

見に 来たあゝなんて はあ もして 歩 くつたよなあ。

B マー アノ アダリ<sup>(9)</sup> ドゴノ ダエソレ ナンヅニ オワタナンテ  
まあ あの あたり どの 誰 くれ<sup>(10)</sup> 何 時に 終つたなんて  
マーデ ハー ( A ウー ) ウン マヅ<sup>(10)</sup>  
まるで はあ うん うん はず

A ソエデモ マンダ ホガムラサ エゲバヨー ( B ウン ) マダ  
それでも また 他 村へ 行くしよう うん また  
ワゲモンド エグドゴデ<sup>(11)</sup> メラハ ンド マンダ カダマテ。 ( B  
若い 者 達<sup>(12)</sup> 行くので 娘 達<sup>(13)</sup> また かなまって。

ウン ) ウン アノ アダリ マダ ホラ ター ウツテマレバ オ  
うん うん あの あたり また ほら 田<sup>(14)</sup> 打つてしまうよ

ナゴ ンド ワゲア ホラ メラハ ンド アツバテ ( B ウン )  
女 達<sup>(15)</sup> 若い ほら 娘 同志<sup>(16)</sup> 集まって うん

ナワー ナツテラダエナー。 ( B ゴゴナー ) ウン ( B ウ  
縄<sup>(17)</sup> 綱<sup>(18)</sup> ってるのだよなあ。 午後なあ うん ( う

ン ) ハー ゴニンモ ログニンモ スヅニンモヨー ( C ホタ  
ん ) はあ 五人も 六人も ヒ人もよう ( また  
(12)

コナー 笑 ) ソロテ ズレ ホラ ホター。  
こなあ 揃って くれ ほら ほなあ。

(13) C ホタトリ コンダ ( A アー ) フロスギ カツタリ。 ホラー  
ほた取り<sup>(14)</sup> 今度 ああ 風呂敷<sup>(15)</sup> 買つたり ほらあ

( B ウン ) メア ンダリ<sup>(16)</sup> カツタリステ ( A ウン ) ナステ<sup>(17)</sup>  
うん 前 掛け<sup>(18)</sup> 買つたりして うん なして

エル ワゲセア ウン。

いる わけよ うん。

B ソユ ヅギ カヘンダ アダリ ミンナ ドゴノ フトモ オー<sup>xxxx</sup>  
 そうい 時 縁 いて あたり みんな どこ 人 も

オヤヅデ ネカギリ ミンナ ホツタデ<sup>(16)</sup> アッタオンナー。 (A  
 親父で ない限り みんな ほったで あったもっなあ。

ウン) ウン ヤスマネンデ ナワ ナッテナー (A ウン)  
 うん) うん 休まないで 縄<sup>(16)</sup> 綯ってなあ (うん)

ウン。

うん。

A ミンナ スタテ ナワデバリ<sup>(17)</sup> オモニ ホロー (B ウンウン)  
 みんな そういっても 縄ではかり 主に ほらあ うんうん

クーヤヅ。 (B ウン) エマノ ヨニ テマ トル ワゲデ<sup>(18)</sup>  
 食うった。 (うん) 今のように 手<sup>(18)</sup> 取る わけで

ネス ゲッキュ (B ウン) トルタテ ソー ドゴサモ メッ  
 ないし 月<sup>(19)</sup> 給<sup>(19)</sup> (うん) 取るといつても そう どこにも めっ

タニ ハル ドゴ ネアス エッカダ<sup>(20)</sup> ホラー タド ナワ ナッ  
 ねに 入る 所<sup>(20)</sup> ないし 専ら ほらあ 田と 縄<sup>(20)</sup> 綯って

テ。 (B ウン) ハー ウー。 ボンネモ ハー シュ<sup>(21)</sup> オモニ ナンダ  
 て。 (うん) はあ うん。 盆<sup>(21)</sup> にも はあ xxx 主に なんだ

ナー ショ ンガヅ クレバ ジェンコ ネアドゴデ ナワ ナッテ  
 なあ 正 月<sup>(22)</sup> 来ると 銭<sup>(22)</sup> こゝろ ないので 縄<sup>(22)</sup> 綯って

(B ウン) ショ ンガヅスベステ。 ウー。 ショガヅノ モノ  
 うん 正 月<sup>(22)</sup> しようと言って。 うん。 正月の 物<sup>(22)</sup>

カルネ (B ウン) ウー ナワ ナッテ ホラ。 (B ウン  
 買いに (うん) うん 縄<sup>(23)</sup> 綯って ほら。 (うん

) セバ コンダ ナワケアヅモノ マンダ ナッタ ナワ カル  
 すると 今度 縄<sup>(23)</sup> 買いという者 ねえ 綯った 縄<sup>(23)</sup> 買う

(24)  
 フト キター ホラー オ .....  
 人 来て ほらあ あ.....

B ショ ガツツゲ<sup>(25)</sup> オエデ エゲテナー。 (A ウー) ウー エヅ  
 正 月 遣い<sup>(他)</sup>置いて 行けと言ってなあ。 (うん) うん ー

エンダリ (A C 笑) ニエンダリ オエデ エゲテ カエデ  
 円 なり ニ円 なり 置いて 行けと 借りて

ホラ マエガリステ ステ スマヘネンデ ウン。  
 ほら 前 借りして えて 済ませないで うん。

A ソステ ナンダ タエデハー ムガスダバ ホロー ゴエンガ ジ  
 えて なんだ えてい はあ 昔 なら ほらあ 五円か ナ  
 ューエン アレバヨ (B ウン) ショーガツスニ エスタダエ  
 円 あればよ (うん) 正 月 しに 良かったのだよ  
 ナー。  
 なあ。

B エヤー ジューエン アンダバヨー。 (A アー) オラ オベ  
 いやあ ナ 円 あるならよう。 (ああ) 俺 覚え  
 デガラヨー ジューエン アンダバキヤ<sup>(26)</sup> タエスタ モンダ。  
 てからよう ナ 円 あるならば 大した もんだ。

A スタハンデ ホロー ナワケァガラ (B ウン) アー ゴエン  
 えうだから ほらあ 縄 買いかう (うん) ああ 五円

ダリ ジューエンダリ (B ウン) カエデヨー コエデ ショ  
 なり ナ 円 なり (うん) 借りてよう これで 正

ガツステー ナンダ マダ ナワ ナッテ スマスベーステ。(  
 月 して なんだ きた 縄<sup>(他)</sup> 縛って 済ませうと言って。(

B C ウン) ウー。 ソステ ハー オモネ ナワデバリヨ ナワ  
 うん) うん。 えて はあ 主に 縄で<sup>(他)</sup> ばかりよ 縄<sup>(他)</sup>

ナッテ コツゲア ヘン トタ モンダ。

縋って 小遣錢(27)を取った もんだ。

B ナワモナモ ナッテ ナッテ ナッテ フラ ナグ ナッテマッテ  
縄も何も 縋って 縋って 縋って 葉(28)もなく なってしまって

ナ。(A ウン) コンダ エガラ フラケア デハタリ ステラ  
な。(うん) 今度 家から 葉 買い 出 たり してあら

ー ウン ナワコ モテ フトマワリデモ ヤーハンデ ユツテ  
あ うん 縄(29)こね持って 一回りでも よいから 譲って

ケロツテ ウン。

くれって うん。

A ウツテ ニンジュ アツテ ナル フトダバヨー (B ウン)  
うんと 人数(30)あって 縋う 人 ならよう (うん)

ヅブンノ フラ タエナグ ステ (B ウン) カテ ナルヤダ  
自分の 葉(31) 足りなく して (うん) 買って 縋うのだ

エナー。

よなあ。

B モヅロン タサダキャー タエヘダンテアキャー ナモ ホントノ  
勿論 田には 堆肥(32)のようなものは 何も 本当の

スビバリ モテタエナー。

葉(33)がばかり 持って行ったよなあ。

A ウン スッカド ハー ナワネ ナッテマテヨ。(A B 笑)  
うん すっかり はあ 縄に 縋ってしまっよう。

## 注記

- (1) 1. 「田打ちの頃」の注記(6)参照。
- (2) 実際の音声は〔i:]と〔u:]の中間音に聞こえ、しまりのない感じである。うなずく際の音声は、この他に〔ɔ〕〔ɔ:]〔ɛ〕〔ɛ:]などが多い。これらのカタカナ表記は以下「ウ」「ウー」「ア」「アー」とする。
- (3) 地名、青森市大字「<sup>ごしや</sup>合子沢」。当地では昔から「ゴサ」という。収録地から約2km東方にある。
- (4) 地名、青森市大字「<sup>しんまち</sup>新町野」。収録地から、約1km東方にある。
- (5) 地名、青森市大字「<sup>よこうち</sup>横内」。収録地から、約3km東方にある。
- (6) 町などへ出かける際に着用したが、晴れ着ではない。普段着より少し程度の良い衣類。
- (7) 「ソラ」とも聞こえないわけではないようだ。
- (8) 1. 「田打ち々頃」の注記(8)参照。
- (9) 時間的な意の「頃」。
- (10) 聞き取り不可能。
- (11) 文脈上、3行後の「ナワー ナッテラダエナー」へつながる。
- (12) ホタコの「ホタ」は臨時収入の金銭。「ホッタ」と中間に促音が入ることもある。「コ」は指小辞といわれ、東北地方特有のもので、ほとんどの名詞に付く。
- (13) 「ホタをトル人」のことで臨時収入金を得る人。語源は、領主地をの目の届かない「壱(ハリ)掘(ホリ)して新しく開いた水田」の「隠し田」だろうという説がある。(鳴海助一著「津軽のことば」)
- (14) 忠実に漢字で書けば「前垂リ」か「前垂れ」。
- (15) 「～をする」の意で「～をなす」を使うのは、話者この口ぐせである。この場合、直前の「カッタリスト」の内容をそのまゝ受けている。
- (16) 注記(12)に同じ。
- (17) ナワデバリの「リ」は、この場合「舌先のふるえ音」であるが、これは当地の一般的ラ行音でなく、話者Aの偶然発した音である。
- (18) 「手間賃をもらってする仕事」の意。

- (19) 「就職する」の意。
- (20) 語源は「<sup>ガム</sup>一ガ」だろう。
- (21) 「盃蘭盆会」。
- (22) 「ショーガツス（正月す）」は「正月を祝う」の意。
- (23)(24) 「ナワケァヅモノ」と「ナワ カル フト」は同意。
- (25) 「正月に遣う費用」の意。
- (26) 「アンダバキヤ」の「キヤ」は、強く取り立てていう時に使う。語源不明。今後、考察を要する。
- (27) 「縄も何れ」と訳してあるが、「モナモ」は「詠嘆・驚愕」などの程度が大きい際に使う表現で「縄も まあ なんとまあ」とでも訳せばよいのだろうか。
- (28) 語源は「出張る」だろう。
- (29) 「一抱え」。
- (30) 「タエへ（<sup>タヒ</sup>堆肥）」は、最近、当地で使用するようになった語であり、昔は「コエ（肥）」と言った。
- (31) 「ナモ」以下は「持って行かないで」を補う。
- (32) 「スビ」を「藁くず」と訳したが、正しくは「稲の下葉」である。

### 3. つ ら い 農 作 業

話し手

| (略号) | (氏 名)   | (性) | (生 年)         |
|------|---------|-----|---------------|
| A    | 桜田 鉄彌   | 男   | 明治36年生れ       |
| B    | 八木沢千代三郎 | 男   | 明治43年生れ       |
| C    | 陳方 トミ   | 女   | 大正2年生れ        |
| D    | 佐々木隆次   | 男   | 昭和10年生れ (司会役) |

C ヤッパス タデモ ナンデモセア (B ウン) コエ ヘネアハ  
 やっぱり 田でも なんでもよ (うん) 肥(注) 入れない

ンデ (B ウンウン) タ カデステ マエネテ。 ツギ ハネ  
 から (うんうん) 田(注) 堅くて だめだて。 肥料(注) はいらない

ハンデ カデステ マネテ。 ウッテモ カデステヨー。 (B  
 から 堅くて だめだて。 打っても 堅くてよう。

ホンダエナー ウン) ウーン (B         ) ヘバ エマダバ  
 もうだまなあ うん) うーん (3) すると 今なら

タエ ホラ コエ ハルトゴデ (B ウン) ナンボデモ タ  
 堆(注) ほら 肥(注) はいるので (うん) いくらでも 田(注)

アエダスノー (A アー) ンー。 エマダキャ ドーグ エベ  
 あれだしのう ああ ンー。 今 は 道具(注) 良いだ

ァ。 ムガスダバー バッコダノー (B ウン) ハルダノッテ  
 ろう。 皆 なら 馬耕 だの (うん) はろう だのといって

ー。 (A ウン) (C 笑)  
 うん)

A テデバリデナー、( C ウーン ) ハル カゲル ヅギノ <sup>(18)</sup>ヘヅネ  
 手でばかりでなあ。( うん ) はろう(を) かける 時の つらい  
 / ヘヅナグ ネノテヨー。  
 の つらく ないのってよう。

B ヤーヤ ハル エヅバン。アレア ( A ウン ) ハラサ コデア  
 やあや はろう 一番 。 あれ ( うん ) 腹に こねえ  
 ッテマッタナー。  
 て しまったなあ。

A マネ フパラヘルヤヅー。 <sup>(9)</sup>( B ウン ) ソエサ オエノ タダキ  
 馬に 引っぱらせるやつ。( うん ) それに 俺家の 田は

ヤ カデハンデヨー ( B ウン ) ヅッパド オサネバ ( C  
 堅いから よう ( うん ) じゅうぶんは 押さないと )

笑) <sup>(10)</sup>ナゲラエデ マダエナー。 ゴロゴロゴロゴロテ コロゴル  
 捨てられて しょうがないなあ。 ごろごろ ごろごろと 転がる

べー。 マ ドンドド フッパルトゴデー オソエバ ハー ムッ  
 だろう。 馬(馬) どん どん 引っぱるって 遅いと はあ いっ

<sup>(11)</sup>タド ハー コエダアデー。 カラダ ハー ソラ ユツメデ。  
 も はあ これなのだ。 からな はあ らら めらめいて。

B アエ ハー ナンメモ ナー <sup>(12)</sup>ウン。 <sup>(13)</sup>フトリャグダラ フトリャグ  
 あれ はあ 何枚も なあ うん。 一人役 なら 一人役(を)

( A ウン ) カゲデ マワッテヨー。  
 ( うん ) かけて 回ってよう。

A ナンニャグモ カゲデ マルダジヤ。  
 何人役も かけて しょうのだ。

B ウン カゲデ マルダエナー。  
 うん かけて しょうのだよなあ。



C ハルデ ヤル ウヅダバ エヤ ( B ウン ) オラタヅンドダバ  
はろうで やる 家なら 良いや ( うん ) 俺達 なら

ー マコ ネドゴデ ( B ウン ) サンボカデ プタエデバリ。  
馬こめないって ( うん ) を本気で 太らいてばかり。

( B ウン )  
( うん )

A ウー マ ネ ヘトダバナー。  
うん 馬めない 人 ならなあ。

C ウーウン クダエデバリ ハー プタエデバリ タ ヤタ モンダ。  
うんうん 砕いてばかり はあ んないてばかり 田(を)やっ払 もんた。

A ヤタモンダエナー。  
やっ払もんたよなあ。

B ウー <sup>(14)</sup> サンバ。  
うん <sup>×××××</sup> 三 番

C ナンボガ スタハンデ<sup>(15)</sup> クルスンダガサ ワガラネア。  
どんなにか スから 苦 しんたか わからない。

B サンバウヅマデナー。  
三 番 打ちめでなあ。

C ウン サンバウヅマデ。 エツバンウヅステ コンダ ニンバウヅ  
うん 三 番 打ちめで。 一 番 打ちして 今度 ニ 番 打ち

ステ ( B ウン ) コノ コンダ クデアダ ドゴ カダマルハ  
して ( うん ) この 今度 砕いた 所(を) 固まるか

ンデ ( B ウー ) コンダ サンバウヅテ オゴステ ( A  
う ( うーん ) 今度 三 番 打ちいって 起こして

サンバウヅステナー ) ホエガラ タ カグアダモノ。  
三 番 打ちして なら それから 田(を) かくうたもの。

B ニバンウヅ エヅバン ヘヅネスタジヤ。

ニ 番 打ち<sup>(64)</sup> 一 番 つら<sup>(65)</sup>か<sup>(66)</sup>んよ。

C ニバンウヅ エヅバン ヘヅネ、 エーマダラ ヘバ ナンモ キ  
ニ 番 打ち<sup>(67)</sup> 一 番 つらい。 今 なら すると 何も 機

カエデバリ ヤル モンダドゴデー ナ。

機 では<sup>(68)</sup>か<sup>(69)</sup> ゅる もつ<sup>(70)</sup>な<sup>(71)</sup>ので<sup>(72)</sup> な。

A ソエガラ コンダ アノ アダリダ<sup>(73)</sup>ンバ ナンダエナー。  
それから 今度 あの あたり<sup>(74)</sup>なら<sup>(75)</sup> なん<sup>(76)</sup>な<sup>(77)</sup>よ<sup>(78)</sup>なあ。

ソエゴソ ジューサンガ ショーガッコ オワレバ ハー (B  
それ<sup>(79)</sup>に<sup>(80)</sup>え<sup>(81)</sup> ナ ミ<sup>(82)</sup>か<sup>(83)</sup> 小 学 校<sup>(84)</sup>と<sup>(85)</sup> 終<sup>(86)</sup>る<sup>(87)</sup>と<sup>(88)</sup> はあ

ウン) ホガサ (B ウン カロゴ ウン) タノマエデ サへ<sup>(89)</sup>  
うん 地<sup>(90)</sup>へ (うん 借<sup>(91)</sup>ろ<sup>(92)</sup> うん) 頼<sup>(93)</sup>まれて<sup>(94)</sup> さへ

トネナー。 (B カロゴ カロゴニ エダリナー) ウン ワン  
取り<sup>(95)</sup>に<sup>(96)</sup>なあ。 (借<sup>(97)</sup>ろ<sup>(98)</sup> 借<sup>(99)</sup>ろ<sup>(100)</sup>に<sup>(101)</sup> 行<sup>(102)</sup>た<sup>(103)</sup>ら<sup>(104)</sup>なあ) うん わ

(20) ツカダネ ハー (B ウー) ウ ショガッコ オワレバ ハー  
ず<sup>(105)</sup>かな<sup>(106)</sup>年<sup>(107)</sup>齡<sup>(108)</sup>で<sup>(109)</sup> はあ (うん) い<sup>(110)</sup>ん 小 学 校 終<sup>(111)</sup>る<sup>(112)</sup>と<sup>(113)</sup> はあ

(B ウー) サへ トネ ドゴダラ ドゴサ エゲーテ。ウー。  
うん) さへ 取<sup>(114)</sup>り<sup>(115)</sup>に<sup>(116)</sup> ど<sup>(117)</sup>こ<sup>(118)</sup>な<sup>(119)</sup>る<sup>(120)</sup> ど<sup>(121)</sup>こ<sup>(122)</sup>に<sup>(123)</sup> 行<sup>(124)</sup>け<sup>(125)</sup>と<sup>(126)</sup>。うん。

へバ ハー ホレ アサマネ ハヤグ クレアガラ オギデ シ<sup>(127)</sup>  
すると<sup>(128)</sup> はあ ほれ 朝<sup>(129)</sup> に 早<sup>(130)</sup>く 暗<sup>(131)</sup>い<sup>(132)</sup>ち<sup>(133)</sup>から 起<sup>(134)</sup>きて 小

ョカコ オワテガラ ハー ワンツカダ ヤヅヨー (B ウン)  
学 校 終<sup>(135)</sup>って<sup>(136)</sup>か<sup>(137)</sup>ら はあ わ<sup>(138)</sup>ず<sup>(139)</sup>かな 奴<sup>(140)</sup>ら<sup>(141)</sup>う (うん)

(22) (23) サへ トネ デハテ ウッテ ブスカエデナー。

さへ 取<sup>(142)</sup>り<sup>(143)</sup>に<sup>(144)</sup> 出<sup>(145)</sup>て うん<sup>(146)</sup>と 叱<sup>(147)</sup>ら<sup>(148)</sup>れて<sup>(149)</sup>な<sup>(150)</sup>あ。

B ブスカエデナー。テ ホガサ タノマエデ コゴサ (A ウー  
叱<sup>(151)</sup>ら<sup>(152)</sup>れて<sup>(153)</sup>な<sup>(154)</sup>あ。え<sup>(155)</sup>に<sup>(156)</sup> 地<sup>(157)</sup>に 頼<sup>(158)</sup>まれて<sup>(159)</sup> こ<sup>(160)</sup>こ<sup>(161)</sup>に (うん

笑) ワラハンド ネデラヤヅ ムリニ オゴサエデ ホラ (   
 子 ども 違(あ) 寝 てる の (あ) 無 理 に 起 こ さ れ て ほ ら

A ウン) トーガ ナンボノ ヅギナー。 (A ウン) ウン、  
うん) ナ歳 か なんぼの 時 なあ。 (うん) うん。

ステ アノー ハー ヤ マ ヤット クッテ アッタケ ンドモ  
もして あつう はあ いや まあ やっと 食って いな けれど

ヨー (A ウン) ウン オドナノ キモノ キヘヤダエナー。  
よう (うん) うん 大人 の 着 物 着 せる の ぢや ない なあ。

(A ウー 笑) スパサミドリステ ロー (C ンダ) ビン  
うん 裾 を 端 折 り し て ほら あ (うん) そう だ びん  
(28)

ト コー ミンツカグ ヤッテナー。 (B C ウン) ソエ コ  
と こう 短 か く や っ て ない なあ。 (うん) それ (あ) こ

ンダ ~~~~~ サガテ マルベ。 (A 笑) ヨゴエドゴデ ホラ。 ソエ  
んじ 下 が っ て し ま う だ ろ う。 汚 れ る の ぞ ほ ら。 それ

サ コー コゴノ ヅツチャ アノ コンダ アノ アラ カマ  
に こう こ の 爺 さ ん あ の 今 度 あ の あ あ 鎌 (あ)

モテ キテ (A 笑) ジョロット オドステ (A B 笑)  
持 っ て 来 て じ ょ ろ り と 落 し て

オドステ ケデヨー。 (A ウン) ステ アン ヅギ エヅニ  
落 し て く れ て よ う。 (うん) そ して あ の 時 一 日

ヅ ニヅッセンデ アッテ ロー。 ウン メス ニギリメス カ  
ニ ナ 銭 で あ っ た ほ ら あ。 うん 飯 握 り 飯 (あ) 食

ヘデ ニヅッセン (A アー ニヅッセン) ニヅッセン ケダ  
わ せ て ニ ナ 銭 (あ あ ニ ナ 銭) ニ ナ 銭 く れ た

ウン。

うん。

A ホンダ ホダ。 ( B ウン ) ムガスダオナー。 ( B ウーン  
 そうだ そうだ。 うん 昔 だ もの なあ。 うーん

) ムガスダアダラ ホダ。( B ウーン )  
 昔 であるなら そうだ。 うーん

(31)

C サヘトリダバ ハー エヅバン スギデ ネスタ。 オツケロ フ  
 さへ取りなら はあ 一番 好きで なめた。 押っつけろ 引

パレ オツケロ フパレテヤ ( A ウン ) コンダ スカエルドゴデ  
 っはれ 押っつけろ 引っはれと ( うん ) 今度 叱られるので

(32)

ヤ コンド ホノ トーリ エゲバ エタテヤ クルッテ マルドゴ  
 今度 その とあり 行くと 良いけれど 狂って しまうの

(33)

デ グルッグルッグルテ コンダ マ マワサヘデ マルキャー。  
 で ぐるっぐるっぐるッ 今度 馬(を) 回 させて しようといひだよね。

( B ウンダエナー ) エッカエニ フトツドゴ ナンカエモ  
 そうだよなあ 一回に 同じ所(を) 何回も

コンドア。(笑)

今度 .

(34)

A コンダ マンガ オス フト ナー ソ ソステ コンダ マンガ  
 今度 馬 蹴 押す 人(は) なあ \*\*\* もして 今度 曲

(35)

レバ コンダ サヘトリバ サンジャグモ ナゲー ブヅ ( B C  
 ると 今度 さへ取ッを 三 尺 も 長い 筈(を)

笑) モッテデ ヘナガ フタグアダエナー。 ナー フェタデ  
 持ッていて 背中 んんくのどよなあ。 お前(は) 下手で

ァステ ドンデ コノ ジャマーテ。 ウーン ( C 笑 ) ヘバ  
 どうだ この ざま といッて。 うーん すると

コンダ ダンダンネ ワンツカダ モンダベ、 ジューサंगा ジ  
 今度 なんなんれ わずかな もんだろウ ナ 三 歳か

ユースノ モンダベ <sup>(36)</sup>ヘンカサエルドゴデ コンダ ハー アダマ <sup>(37)</sup>  
 十四歳の 者 だろう なにかれるって 今度 はあ 頭

クルテ マッテ ハー。(C 笑) ステル ウヅニ ハー マ  
 廻って しまって はあ。 えている うちに はあ 馬

ー コンダ ホラ グルグルド ター フッテ マルアダエナー。  
 (B) 今度 ほう ぐるぐると 田 (B) 回って しまふのだよなあ。

(C 笑)(笑) <sup>(38)</sup>ンタ ツギモト<sup>タ</sup> モンダエナー。  
 とうとう 時 もある ものだよなあ。

D エヘデ マル ワゲダ。(A アー)  
 すねて しまふ わけた。(ああ)

B エヘデ マル。 ズンブ スカス アノ アダリ クロー スタジ  
 すねて しまふ。 ずいぶん しかし あの あたり 苦労 したよ  
アー。

A エ エネ カルタテ ナー ムタド ハー カマデバリ ホレ ウー  
<sup>xxx</sup> 稲刈るヒツでも なあ いっも はあ 鎌ではかり ほれ うん  
 ミンナ ハー カマデバリー ソエゴソ ニ <sup>(39)</sup>ジュモ <sup>(40)</sup>サンジュモ  
 みんな はあ 鎌ではかり それこそ ニ ナも ミ ナも  
 ツクデモ (B アーアー) カマ <sup>xx xx</sup> カマデバリ カッテナー。  
<sup>(41)</sup>作っても (ああああ) 鎌ではかり 刈ってなあ。

B <sup>(42)</sup>カマデバリ トッテナー。  
 鎌ではかり 取って。

A <sup>(43)</sup>ソエゴソ ノー <sup>xx</sup>エ エネ カル ツギダバ ハー ムッタド ナンニ  
 それこそ のう 稲刈る 時 なら はあ いっも 何日  
 ツモ (B ウン) エッカゲツモ カガタベナー。  
 も うん 一か月も かかるだろうなあ。

B ウィンダナー エッ カゲツモー (笑) オラ サエキンマデ エッ  
えうななあ ー か 月 も 俺 最 近 まで ー  
カゲツモ カガタドモ<sup>(44)</sup>タアテ。  
か 月 も かかゝんと思つたけれど。

## 注記

- (1) 「堆肥」のことを昔「コエ」といった。
- (2) 昔、「化学肥料」のことをいった。
- (3) 脚取り不可能。
- (4) 次の「ホウ コエ ハルドゴデ」の「コエ」の言いかけ。
- (5) 指示代名詞「アエ（あれ）」を使っているが、「アエダ」は「朝しやすい」の意。
- (6) 「プラウ」。牛馬などに牽引させ、土地を耕す農具。
- (7) 「ハロウ」。牛馬などに牽引させ、碎土などに使う農具。
- (8) 語源は「せつない」。
- (9) 「ヤヅ」は漢字を当てれば「奴」だが、前の発言者Bのこぼれの中にある「ハル」をさす。
- (10) 津軽金般に「捨てる」「置きざりにする」を「ナゲル（投げる）」という。
- (11) 指示代名詞「コエ（これ）」を使っているが、「コエダ」は直後の「カラダ〜エツメデ（いる）」（体が安定を欠いている）をさす。話者Aはその発言中、体をゆらせるしぐさをした。
- (12) 「メ（枚）」は田の区画単位。
- (13) 1. 「田打ちの頃」の注記(8)参照。
- (14) 次の話者Cの発言後の話者B「サンバウツマデナー」の言いかけ。
- (15) 「ガサ」は標準語の女性使用の婉曲な疑問終助詞「かしら」に相当するが、「ガサ」は婉曲なニュアンスはない。
- (16) 「ナンモ」は文末に「つらくない」を伴うべきなのに省略した。
- (17) 農家の専従人。主として男子。
- (18) 農耕牛馬の鼻をとるためにつける棒、鼻をとるのは子どもの役であった。そして牛馬にバツコ、ハル等の農具を引かせ大人がそれを操った。「サへ」の語源は馬の進む方向を定かにするための「ササへ（支え）棒」だろうか。
- (19) 語りの発音。普通は「エタリ」「エツタリ」
- (20) 「ワンツカダ（トス＝年齢）ネ」だが、普通（トス）は省略してま

わない。

(21) 「オギテ」の後に「一仕事した後、小學校へ登校し」を補う。

(22) 「デハテ」の前に「田へ」を補う。

(23) 「ブ」は強意の接頭辞。

(24) 「ホガサ タノマエデ (例えば) コゴ(の家)サ(頼まれて)」と補う。

(25) 「コゴ」はこの会話を収録している家康(櫻田敏光家)をさす。

(26) 「キヘルヤダエナー」が普通だが「ル」が聞こえない。

(27) 「スパサミドリス」は「尻挟み取りする」。

(28) 擬態語「ビント」は、腰のあたりの帯をきり、と締める様をいう。

「きりっと」と訳すのが適当か<sup>も</sup>知れないが、擬態語であるためそのままとした。

(29) 「コゴ」は注意(25)に同じ。なお「コゴノ ヅッチャ」は昨年死亡。

(30) 昔を思い出していう代名詞で「あれ」と訳すべきかも知れないが、方まのニュアンスを重んじた。

(31) 「サヘトリ」は「サへをとる人」。注記(48)参照。

(32) 「サヘトリ(が)クルッテマル」。「クルッテ」とは「頭が混乱して」「判断に迷って」の意。

(33) 「マ(を)アワサヘデ」。

(34) 農機具の一種。

(35) 当地は「ムツ(もち)」より「ブヅ」と発音することが多いようだ。

(36) 語源は「折檻」。

(37) 「サヘトリ(の)アダマ(が)」。

(38) 「ツギモデアッタ」と発音らしい。

(39)(40) 「二十人役」「三十人役」のこと。1. 「田打ちッ頃」注記(8)参照。

(41) 「(田を)ツクテモ」。

(42) 「(刈り)トッテ」。

(43) この場合「毎日」の意。

(44) 「〜ドモタ」は「ト<sup>お</sup>思ッタ」の約言。津軽は必ずこのように言う。



#### 4. 堆<sup>いお</sup> と 小 作 米

話し手

| (略号) | (氏 名)   | (性) | (生 年)   |
|------|---------|-----|---------|
| A    | 桜田 鉄 彌  | 男   | 明治36年生れ |
| B    | 八木沢千代三郎 | 男   | 明治48年生れ |
| C    | 棟方 トミ   | 女   | 大正2年生れ  |

C ムガスダバ スタテヨ<sup>(1)</sup>ー (B アー<sup>ン</sup>) エネ カッテ マッテ  
昔 なら もれもれはずよ ああうん 稲 刈<sup>て</sup>て しま<sup>て</sup>

ホステッテ ヘレバ (B ウン) エサ モッテ キテ<sup>ー</sup> (A  
乾してと いうと うん 使<sup>は</sup>家<sup>に</sup> 持<sup>っ</sup>て 来<sup>て</sup>

ウン) ニオ ツンデダベア。 (B ウン) ワンジャニ オッキ  
うん) 堆 積<sup>ん</sup>でな<sup>ら</sup>う。 (うん) わざと 大<sup>き</sup>い

ニオ ツガ<sup>(3)</sup>ネバ マネスタ モンダモノ<sup>ー</sup>。  
堆 積<sup>み</sup>ないと なめな<sup>ん</sup> もん<sup>な</sup>も<sup>う</sup>。

A ホンダー。  
えうた。

B センコギ<sup>(4)</sup>デ コエデナー。  
せんこぎ<sup>で</sup> こいてな<sup>あ</sup>。

A マッコサー ツケデナー。 (B ウン) ムシマロツツ ツケデ<sup>(5)</sup>ー  
馬<sup>こ</sup>に つけてな<sup>あ</sup>。 (うん) 六 束<sup>ず</sup>つ つけて

ステ コンダ エサ モッテ キテ<sup>ー</sup> デッタダ オニヨネ<sup>ー</sup>  
えい 今<sup>度</sup> 家<sup>に</sup> 持<sup>っ</sup>て 来<sup>て</sup> 巨<sup>大</sup>な 大<sup>堆</sup>に

ウー。ジュ<sup>(6)</sup>ニャグ ツグレバー オキ ニヨ フタツ ツグレアニ  
うん。 十人役 作れば 大きい 堆 ニッぐらいに  
ツンデナー。

續んでなあ。

B アー ツンデナー。 (A ウーン) ソレガ ホマレダ<sup>ン</sup>ダ<sup>ン</sup>ハン  
ああ 續んでなあ。 (うん) それが 養れな<sup>ン</sup>ズから

デナー。 (A ウーン) ウン エサタツテ ツガネ ウヅ マネ  
なあ。 (うん) うん 家にはいえ 續みない うち なめ

ンダ (A ウン) マネンダ。 エマダバ ノゴステ オゲバ  
なのだ (うん) なめなのだ。 今なら 残して 置く

(A ウンダ) マネンダケドモ モド ドンデモ コー ソド  
(うん) そうだ なめなのだけれども 元 どうでも こう 外(を)

コー カンザルツテガサナー。

こう 飾るっていえばよいかなあ。

A ウー オエデ ソロー コノ クレアノー ソエゴソ オキ ニオ  
うん 俺家で そらあ ンガ ぐらいの それこそ 大きい 堆(を)

ツンデ<sup>ツ</sup>エ<sup>ン</sup>タ。 (B ウン) ウー メヘルネ ホロー。  
續んでというよな。 (うん) うん 見せるに ほらあ。

B ウン ワラモ タステ ツンダリ ステ ラー。(笑) オキグ  
うん 葉も 足して 續んズ<sup>ク</sup> して ああ。 大きく

メヘルニ コンダ コエデ マッタ ワラー ハー。  
見せるに 今度 こいて しまふ 葉 はあ。

A ンー ニヨ オキグ メヘルニナー。  
んー 堆(を) 大きく 見せるに なあ

B ニオ オキグ メヘルニ ホラー。 ニオ ミンデ ヨメ ケダ  
堆 大きく 見せるに ほらあ。 堆(を) 見て 嫁(を) くれ

ト ンヅダネ ホラー。(C 笑)

当時だよ ほらあ。

A ウンダ ヨメ モラウデバ (B ウン) オエデ オニヨ ナン  
えいん 嫁 もういえば いん 俺家て 大堆 なん

ボ ツンダトガ (B ウン) ミッツ ツンダトガ ヨッツ ツ  
ほ 積んだとか いん ミッ 積んだとか 四つ 積

ンダトガ ホラー。

んだとか ほらあ。

B ヨグ ミニ キテナー。(A ウーウン 笑) ニオ ミニ ハ  
よく 見に 来てなあ。 いん いん 堆(8) 見に は

ー (A ウン) ウーウン カグマギ<sup>(7)</sup> ショッテ ハー。フタリ<sup>(8)</sup>  
あ いん いーん 角 巻(8) 背負って はあ。ニ人

ソッテ ハー。ダエヅ ソノー ドゴデ ケルテ<sup>(9)</sup> へ ナンタガ<sup>(10)</sup>  
背負って はあ。第一 その どこで くれると<sup>xxx</sup> なんとか

テ ヘレバ ニヨ ナンボ<sup>(11)</sup> アル。(B C 笑)

と 言えば 堆(8) なんぼ ある

A オッキ ニヨ オニヨ アッコデ ナンボ ツンデアナーテナー。  
大きい 堆(8) 大堆 あそこて なんぼ 積んであるなあと言ってなあ。

オッソロスグ オッキ ニヨー (B アー) ミッツモ ツン  
恐 しく 大きい 堆 ああ ミッ も 積ん

デヤーテ (C ウン) アコダバ<sup>(12)</sup> キット クラス エガビョン  
でようとして いん あそこなら ミッ 暮らしめいいだろう

テ。

いって。

B マンヅ ソレー エツバンデタエナー。(A アー) ニオ ツ  
ミッ それ(8) 一番で ああ<sup>xxx</sup> 堆

(13) (14)

ミ ツンデ ニオノ オキグ メ ヘル  
 積んで 堆の 大きく 見せる

A エ エモナモ ハー エモ ミルバタテヨー (B ウン) エノ  
 家も何れ はあ 家も 見るけれどよう (うん) 家の

ツキニ コンダ ハー ソー オニヨ ホロー。 (B ウン) ア  
 次に 今度 はあ そう 大堆(る) ほらあ。 (うん) あ

ツコデ ター ツクテ ドノ クレア ツクテ オニヨ ミレバ  
 んこで 田(る) 作って どの くらい 作って 大堆(る) 見ると

エヨー アエ タエスタ モンデ アレア。 (C 笑) ウー ア  
 やあ あれ たいした もつた あれは。 (うん) あ

コダバ カマド エーイア。 アコダバ クデモ エーナーテ ホ  
 んこなら 暮らし(る) 良いよ。 あんこなら くれても 良いなあと そ

タ ハナス ス (笑) スタリ スー。  
 んな 話(る) しなり して。

B マー エマダバナー ター ツクテモ ヨメ ケネイア ホラー  
 まあ 今ならなあ 田(る) 作っても 嫁(る) くれないう ほらあ

(A ウン) ウン。  
 うん うん。

A. ウン エマダバ オキ ニヨー ツム ワゲダバ ダモ ヨメ ケ  
 うん 今なら 大きい 堆(る) 積む わけなら 誰も 嫁(る) くれ

ネヤ。 (B 笑) クー ミルッテ (笑)。 ソノ コロ ナン  
 ないよ。 (若(る) 見るといって。 その 頃 なん

ダ ソノ ニヨー コンダー フユサ ナレバ コンダ ユギ ア  
 だ その 堆(る) 今度 冬に なると 今度 雪

ル アルウツ コガネデ フユニネバリ コグ コグアダエナー。  
 あるうち こかないで 冬にばかり こくのだよなあ。

B フユ コグアダエナー。(A シン) トストリノ<sup>(17)</sup> アダリ コエダ  
 冬 こくのむよなあ。(ん) 年取りの あたり こいだ  
 リ ステンデ ホラー。  
 リ してるんだ ほらあ。

A ショ ンガヅマデ (B シン) スコス ナンダ ンダバ<sup>(18)</sup>ー ハー シ  
 正月まで (ん) 少し なんだのなほ はあ

ョ カヅモ ナンモ (B ウン) ハー コス ツギモ アレァア  
 正月も なにも (ん) はあ 越す 時もあるヨ

ダ。

だ。

B ハンブガラ ヨー トラエデ マッテナー (A ウン) ウンウ  
 半分から 余(ゆ) 取られて しまつてなあ (ん) うんう

ン タデ<sup>(19)</sup>マス。  
 ン

C ホタヨー オエノ エ ンドダキャー ラー マッコ ネンデ アノ<sup>(20)</sup>  
 えうだよう 俺家の 家 などは あうあ 馬(うま) こ(か) なくて あう

タ ツクッタ モンダトゴデセァ (B ウン) コンダ アノ  
 田(で) 作(し) る もんだから よ (ん) 今度 あう

ー エサ ソッテ キテダベァ。(B ウン) マッコデ クバ  
 家に 背負(か) っ て 来(き) て しろ(う)。(ん) 馬(うま) こ(か) で 遅

<sup>(21)</sup>ラアデ ネァヤー ヘナガサバリ アゲデ ソッテ キテダベァ。  
 ぶ(う) で なくてよ 背(か) 中(ちゅう) に ば(か) り 上(あ) げて 背(か) 負(か) っ て 来(き) て しろ(う)。

(A ウン) ホヤステ エサ キテ ヘンコギデ コエデダ  
 (ん) そうして 家に 来(き) て セン(さん) こ(か) ギ(ぎ) で こい(こ) だ(だ) ろ

ベァ。<sup>(22)</sup> (A ウン) ソヤステ コンダ ドンデァステ フトリェ  
 う。(ん) そうして 今度 どう(どう) しろ(う) 一人

ア グガラテレバ<sup>(23)</sup> サンビョーガ ( B ウン ) ナンボオガ アゲ  
筈 からというて ミ 儀 か ( うん ) いくらしか あげ

ネキャー。 ( A ウン ) ソエデ ニヒョー タデマス<sup>(24)</sup> トラエ  
ないよね。 ( うん ) それで ミ 儀 小作米<sup>(25)</sup> 取られ

ルアデー ホラー。<sup>(25)</sup> ダンナサ オサメネバ マネアデー。 コン  
ろのど ほらあ。 旦那に 納めないと だめなのだ。 今

ダ タ ツクテデ カッテ カネバ マネ ヤツヤ。 ウン タ  
度 田<sup>(26)</sup> 作っていて 買って 食べないと だめなのだよ。 うん 田<sup>(26)</sup>

ヨゲ ツクテ ネ モンダモノ ( A ウン ) ジギ ヘネアタド  
多く 作って ない もんだもの ( うん ) 化学肥料<sup>(27)</sup> 入れないと

ゴデ ホラー。

ら ほらあ。

A ウンダ タエデー ホンデタダネ。 ( C ウン ) ウン ター  
そうぞ んいてい んうであつたのだ。 ( うん ) うん 田<sup>(28)</sup>

ハー オゲ ツクテモヨー オゲ ツクレバ ツクタエネ タデマ  
ほあ 多く 作ってもよう 多く 作れば 作ったように 小作米

ス オゲ トラエベエ。 ( C ウン ) ヘバ ホロー ケッキ  
<sup>(29)</sup> 多く 取られるだろう。 ( うん ) すると ほらあ 結局

ヨ グ フトツダエナ。 タエデ<sup>(26)</sup> ハー。  
同じだよな。 んいてい ほらあ。

B ダエエジ ショガヅ トス ト ツギ オラタヅドア クー コメ  
第一 正月<sup>(30)</sup> 年<sup>(31)</sup> 取る時 俺達<sup>(32)</sup> 食う 米<sup>(33)</sup>

ネンダオン。(笑) ( C ウンダ ) ショーカヅー ター ツク  
ないのだもつ。 ( うん ) 正月<sup>(34)</sup> 田<sup>(35)</sup> 作

テーデ ミツメダ モンダデバナ ホラ。

ていて みじめな もんではないか ほら。

A スタテ タデマス サンジョーモ トラエル モンダモノ。

それ以外は 小作米を 三 俵 も 取られる もんだもの。

C トラエデサ コンダ (A アー) ネアドゴデ ダンナサ ネガ  
取られてき 今度 (ああ) ないので 旦那に 願い

ネ エグベア。 (A B アー) ウアーエ ソヘバ コンダ マ  
に 行くだらう。 (ああ) あーい そうすると 今度 町

ツノ キンバダガ (B ウン) クスリヤサ エゲバ (A B  
の 木 場 の (うん) 薬 屋 に 行くと (ああ

ウン) ネガネ エゲバ アノ カッチャニカッテ ニラメラエデ  
願いに 行くと ああ 母 さん に いらめられて

ヨー (笑)。

よい。

B スカテ ヨゴサダエナー。

叱って よこすんだよなあ。

C ウー スカラエデ キラ (30) キルスタデバ モドテ。 (31) ワダキヤ カ  
うん 叱られて <sup>xxxx</sup>来るんが あたではふか 戻って。 吾は ー  
ダテヨー。(笑)

結について行ってよ。

A ホダ ホダ。

うん うん。

B ネガネ エグテナ。 (A ウン) コドス ヨノナガ (32) エグネハ  
願いに 行くといいな。 (うん) 今年 世の中 よくないの

ンデ ウー ツヌスア (33) ネガネ エグテ ホラ。 (C ウン)  
で うん 地主に 願いに 行くといい ほら。 (うん)

ナンニンモ ソロテー ウー ヘバ スカエデ クルンダネ ホラ。  
何 人 も 揃って うん すると 叱られて 来るんだよ ほら。

A ウー。サギニナ ソエゴン サギダツ フト サギニ ナテ ホラ  
うん。 先<sup>(1)</sup>に な ん<sup>(2)</sup>れこ<sup>(3)</sup> 先 立ッ 人<sup>(4)</sup>の 先<sup>(5)</sup>に なッて ほら

ヘ<sup>xxx</sup> ヘワガダ ヘトリ アッテ ハー (B アー) ミンナバ  
世話方<sup>(1)</sup> 一人 あッて はあ ( ああ ) みんなを

ヘテ<sup>(2)</sup> エグ ワゲセア。 デ カエデ ハー モギ<sup>xxx</sup> モギ<sup>(34)</sup> エッピ  
連れて 行く わけよ。 ん<sup>(3)</sup>で 借りて はあ 親 一 儀

ョーサ アギ リスト ステ ソラ モギ マダ エットー リス  
に 秋 利子と して ん<sup>(3)</sup> 親 母<sup>(4)</sup> 一 斗<sup>(5)</sup> 利子

ツグアダエナー。 (B ウン) アー スタハデ カス フト  
つく<sup>(1)</sup> ん<sup>(2)</sup> だよなあ。 ( うん ) ああ ん<sup>(3)</sup>から 貸<sup>(4)</sup>す 人<sup>(5)</sup>

ー モゲ アルトゴデ スタハデー ツッパド<sup>(3)</sup>ー マンダ テカダ  
儲け<sup>(1)</sup> ある ヲで ん<sup>(3)</sup>から しっかりと 母<sup>(4)</sup> 手形<sup>(5)</sup>

カグ ワゲダー アー。 ジェン<sup>xxxx</sup> ジェンコノ<sup>xxxx</sup>ー ジェンコ カ  
喜<sup>(1)</sup>く わけな<sup>(2)</sup> ああ。 銭<sup>(3)</sup> こ 借

エダド フトツデヨ。 テカダ ハー アー ナンボ ナンボ カエ  
りな<sup>(1)</sup>と 同じでよ。 手形<sup>(2)</sup> はあ ああ なんぼ なんぼ 借<sup>(3)</sup>り

デ アギ エッピョーニ ツギ エットダラ エットノ リスダツ  
て 秋 一 儀 に 付さ 一 斗<sup>(1)</sup> な<sup>(2)</sup> 一 斗<sup>(3)</sup> の 利子<sup>(4)</sup> だ<sup>(5)</sup> いう

テカ<sup>xxxx</sup>ミ テカ<sup>xxxx</sup> テカダ カグ ワゲダエナー。  
手形<sup>(1)</sup> 喜<sup>(2)</sup>く わけな<sup>(3)</sup> だよなあ。

B ジョー<sup>xxxx</sup> ジョー ジョーノ モミ モテ コエテ ラー。 (A 笑)  
上 上 上 の 親<sup>(1)</sup> 持ッて 来い<sup>(2)</sup> といッて あらあ。

エー ジョー ジョーノ モミ。 マンツ エマガラ ミレバ コーリ  
良い 上 上 ヲ 親<sup>(1)</sup>。 母<sup>(2)</sup> 今<sup>(3)</sup> から 見ると 高利

ガスダケンダ モンダエナー。

貸<sup>(1)</sup> の ような もん<sup>(2)</sup> だよなあ。



A    ン    マ    ホンダエナー    アー。  
人    あ    そいぞよなあ    ああ。

B    デ<sup>(36)</sup>    ムロ    ムロト<sup>(37)</sup>    アダリサ    エゲバー    ソエサ    コンダ    ツキ<sup>xxxx</sup>    ツ  
それ<sup>xxxx</sup>    室    藤    あそりに    行くと    それに    今度    布。

キ<sup>o</sup>    ツケデ    ヨゴスダツケナー    (    A    ウン )    ウン。    アノー  
切れ<sup>(b)</sup>つけて    よこすつズ<sup>xxxx</sup>なあ    うん    うん。    あつう

ボロキレ    ホラ。    ホエデ    モモスキ    コヘダリ    ナンタリ    スタ  
ぼろ切れ    ほら。    それで    股    引<sup>(c)</sup>    こしらえたり    うろしたり    しな

コー    カダマタ    モノ    ホラ。    (    c    笑 )    ソエ    ナンボテ    ソ  
こう    国    物    ほら。    それ<sup>(c)</sup>    なんぼと    そ

エ    ツケネバ    カサネ    ワゲセア    ウー。  
れ<sup>(c)</sup>    つけないと    貸さない    わけよ    うん。

A    アエ    スタテ    ホロー    モメンヤデ    アマテ<sup>xxxx</sup>    アマテ    マタ    ヤツ  
あれは    だって    ほらあ    木綿屋で    余って    しまふ    やッ

ヨ。    (    B    アマテ    マタダ<sup>xxxx</sup> )    コダ    ソレ    コンダ    ホロー    フ  
よ    余って    しまふんだ    今度    それ    今度    ほらあ    百

ィ    ク    ショーノ    ヘト    ント    ヘツ    ネ    ァ    ト    ゴ    デ<sup>(38)</sup>    ムリニ    ソレ    ツケ  
女生    の    人    達    っらい    9    で    無理に    それ<sup>(c)</sup>    つけ

デ    コンダ    ソレ    タダ    オ<sup>xx</sup>    ツケデ    (    B    笑 )    オゴヘバ    エタテ  
て    今度    それ<sup>(c)</sup>    なんだ    つけて    よこすと    長いけれど

ソ    ソノ    ボド<sup>xxx</sup>    キレガラ    コンダ    カネ<sup>xxx</sup>    カネ    トル    ア    ダ    エ。    マ    ン  
その    ぼろ切れから    今度    金<sup>(c)</sup>    取るのだよ。    ま

ダ    オ    ラ    タ    ヅ    ガ    ラ。    アー    ホ    ント    ノ    エ    コー<sup>xxxx</sup>    コー    リ    ガ    ス    ミ  
な    俺    達    から。    ああ    ほんとう    高    利    貸    見

ル    エ    ン    テ    タ    モ    ン    ダ    ネ    ナー    エ    マ    ダ    バ    ナー。  
な    よ    う    で    あ    る    も    ん    ぞ    よ    な    あ    今    な    ら    な    あ。

B スタハデ ホラ ヒャクショーモ アノ トンブダバー アー。  
もうだから ほら 百 年生 も あつ 当時なら ああ。

A ヅンブ クルスンダ モンダ。 スタハデ ゴカツ アカレバ<sup>(40)</sup>  
ずいぶん 苦 しんだ もんだ。 もうだから 五月<sup>(40)</sup> あがると

タエデー ハー クー ヤヅ ナグ ナッテナー。 (B タエデー)  
えいてい はあ 食う やつ なく なってなあ。 (えいてい)

ソエダハデ ホラー。 <間><sup>(41)</sup>  
それだから ほらあ。

ンダ ソエゴン ダンダン クー ヤヅ ナグ ナルドゴデナ、 (えい)  
えい えいこえ だんだん 食う やつ<sup>(40)</sup> なく なるのでな。

B ウン) ゴカツ アカレバ ハー クー ヤヅ ネアンデヨー。  
うん 五月 あがると はあ 食う やつ ないんでよう。

(B ウン) ウー ゴカツ アカ<sup>xxxx</sup> アカタ トギ モ フタリ<sup>(42)</sup>  
うん うん 五月 あがった 時 も 降った

ハー チョト マダ フタ ブンア ハルサ ナレバ ハー ユ  
はあ ちょっと まだ 降る 分 春に なる と はあ 雪

ギ ケデモ ク ヤヅ ナグ ナルアダエナー。  
<sup>(40)</sup> 消えても 食う やつ<sup>(40)</sup> なく なるのだよなあ。

B ステ ラー コエデ マレバ スグ トネ キテナー。 (A ウー  
えい ああ こいで しょうと すぐ 取りに 来てなあ。 (うん

) マワッテ ハー ウー (A ンダナ) ステガラ マサー  
回って はあ うん (えいだな) えいしてから 馬に

(A ウー) ウー ニヒョー ヅンヅ ツケデー ウー モテ モ  
うん うん ニ儀 ずっ っけて うん 持って 鞍

<sup>(43)</sup>  
ミナー (A ウン) モテ エタテナー。 (A ウン) ウン。  
(え)なあ (うん) 持って 行ったなあ。 (うん) うん。

リスト ホラ ソノ ツキ<sup>(44)</sup> ツキクサテタエナー ムロツノ<sup>(45)</sup> タバ  
 判子と ほら なの<sup>xxxx</sup> つぎくさといふよなあ 室津の 東  
 デョー。(C ツキクサ) ツキクサテ ソノ アデモ<sup>(46)</sup> ミナ ホ  
 でよう。( つぎくさ) つぎくさといふ なの 価も みな ほ  
 ラ ハラター。(A インデァナー) ウン ジョージョーノ モミ  
 ら 振って。( そうななあ) うん 上 上 の 穀  
 テ ホラ。(C 笑 ジョージョー)   
 といふ ほら。( 上 上 )

A (笑) ジョージョーノ モキデタエ エー モキデナー。  
 上 上 の 穀であんな 良い 穀でなあ。

B ジョージョーノ モキ。 エー モミナー。ウエノ ウエノ モキダ  
 上 上 の 穀。良い 穀なあ。上 の 上 の 穀な  
 ンダベナー。  
 んだらうなあ。

A コンダ ホロー マー ネバ コンダ アノ ダエハヅグルマサ<sup>(47)</sup>  
 今度 ほらあ 馬<sup>馬</sup> ないよ 今度 あう 大ハ車に  
 ツケデナー。(B ツケデナー) ガラガラガラガラテ アレ フ  
 つけてなあ。( つけてなあ) がらがらがらと あれゆき

ッパテ アサガダエ ホラ ウン。エマノ エーニ テメァデ<sup>xx</sup> エ  
 っはって 歩くのむよ ほら うん。今ッ ように 自分で

<sup>(48)</sup>  
 バ エマダバ クルマデ アサガタテ ウン マー モトダバ リ<sup>xx</sup>  
 今なら 車で 歩くけれど うん まあ えなら リ

アカーモ ネァ アノー フトー フグ ダエハ<sup>(49)</sup> アノ クルマサ  
 あかーも ない あう 人<sup>人</sup> 引く<sup>xxxxxx</sup> 大ハ あう 車に

ツケデ マツマ<sup>マ</sup>ンデ<sup>マ</sup> (B ウン) フパテ アサガネバ マエン  
 つけて 町 まで ( うん) 引はって 歩かないと なめ

ダエナー。

どうなあ。

B ソノ クルマダアテ コノ ヘンダキャ ナガネ ネフテ アタエ  
もの 車 どうなんて 今の 辺 は なかにや なかつたようぞ。  
(50) (51) (52)  
ン、ホラー ヤジャグノ アノー ヤマデンサ エゲバナー。(A  
ほらあ ハー役の あつう 山 伝へ 行くてなあ。

ウン) オーヤゲデ ネバ。(A オーヤゲデ ネバ ネンデナー  
うん 金持で ないて。 金持で ないて なくてなあ

) ウン スルメァ カエレバ ジューゴセン (A ウン) ウ  
うん 昼前 借りると 十 五 銭 うん う

ーン バゲマデ カエレバ サンツッセン。(C ウーン) ソン  
ーん 晩まで 借りると 三 十 銭。(うーん) えう

ダ スグ アギ ネアンダジャ マダ ホラ (A 笑。 C ホ  
ど すぐ 空の ないんぞよ ぞろ ほら そ

(53) (54)  
ンダネナー) クルマノ ツギツギド ホラ。  
いどうなあ 車の 次 次 と ほら。

A ミンナネ ネーハンデ ホラ。  
みんなに ないのぞ ほら。

B ウー ミンナネ ネーハンデ ホラー。  
うん みんなに ないのぞ ほらあ。

A オーヤゲネバリ アッテ ホラ。  
金持にはかり あって ほら。

B オーヤゲネバリ アッテ ホラ。  
金持にはかり あって ほら。

A アー ツセァ フトンド ミンナ ユンダ (C 笑) カエ カ  
ああ 小さい 人達 (16) みんな 今度 借  
××××

エネ エグトゴデ。(笑)

ウに 行くので。

B トナリムラサ カエネ エグダエナー (A ウン) アノー ハ  
隣り村に 借りに 行くのよなあ (うん) あっう 橋。

ス ネー カラメ <sup>(56)</sup> フパデ (A ウー) ホラ ウン。  
ない 石川原 引はって (うん) ほら うん。

## 注記

- (1) 「スタテ」は、3. つらい農作業(直前の話)の最後の話者Bの「オラ サイキンマデ(稲刈りは)エツカグツモ カガタドモタアテ」を受けている。本来「スタテ」は逆接の接続詞だが、この場合、本文標準語款のように肯定的な意にすぎない。
- (2) いなむう。別に「ニヨ」ともいう。
- (3) 当地は「積む」をほとんど everybody が「ツグ」という。
- (4) 農具の一つで稲扱き機(器)である。別に「ヘンコギ」ともいう。
- (5) 「マロ」は「束」のこと。六束で馬一頭分の荷となる。馬の背の左右に五束ずつつける。
- (6) 一人役は一反歩(300坪、10アール)の水田を耕やす。男の一日分の作業量。
- (7) 昭和20年代まで、冬季節女性用のいた毛布製の防寒具。横六尺縦五尺程の長方形で縁に房がつき適度に折り合わせて着用する。頭からすっぽり被ることも多く、胸のあたりで左右両端をピンで止める。
- (8) 積んでいる堆を見るのは晩秋か初冬である。夫婦二人がその頃の悪天候を予想して遠方から角巻を背負い、自分の娘の嫁ぎ先が祝福か否かを偵察に来るのである。角巻の他に傘も背負って来たものだという。
- (9) 「(嫁を)ケルテ」
- (10) 次の「(ナンダガテ)ヘレバ」の言いかけ。
- (11) 「嫁をケル」というお家の親が嫁入り予定の家のニヨを見に来て、ナンボ アルかなどと教える」と解する。
- (12) 「アコダバ」の「バ」はほとんど脚にえない。「ラ」と発音しなれども知れない。
- (13)(14) 「ニオノ」の「ノ」は意味上無用な発音と思われるが、(14)の部分で脚を取り不可能のため無用と断定できない。
- (15) 当然「ステ」とあるべきだが(5頁:)に脚にえる。
- (16) 「フユニネ」の「ニネ」はいずれも、時を表わす補助詞だが、どちらか一つ不要である。なお「ニ」は改定した場面に多い使用という。
- (17) 大晦日の「年越し」のこと。

- (18) 「スコス ナンダ ンダバー」は「しまゝとすると」と意訳した方がわかりやすいだろうか。
- (19) 明瞭に聞こえない。「タデマス」は注記(24) 参照。
- (20) 「ホヲヨー」の「タ」は「ダ」と有声化すべきだが、軽く発音したため清音になった。
- (21) 終止形「クバル」は「配る」である。
- (22) 「ドンデァステ」の「ステ」は右語の接続助詞「して」を終助所に使用したもので、余韻余情を作る。今は推量で訳しておく。
- (23) 「テレバ」は「～ テ ヘレバ」の約言。
- (24) 語源二説を掲げる。①斗代、斗代米、年貢、年貢米、小作料。江戸時代の頃からお上に金や米などを納付することを「たてる」といって、小作米を地主に納める、その際、納税高に若干の余分を加えることになっていゝその余分、つまり「おまけ」が「立て増し」である。(鳴海助一「津軽のこゑば」) ②小作料、タデマダス(献て遣す)にちとづくものか。(松本明「弘前語彙」)
- (25) 地主。
- (26) 「タエデ ハー」と聞こえるが不確実。
- (27)(28) 「ダンナ」は青森市中心部で薬屋を営んでいゝ南藤忠一であり、収録した家や一部の話者の事象筋に当る。
- (29) 「～ニカッテ」は後に受け身の語法を伴うが、ないてい不利な悪い事態の内容がくる。語源不明。
- (30) 当地では「キル」を主に使うようである。
- (31) 「モドテ キルスタデバ」と逆転するとわかりやすい。
- (32) 収獲。
- (33) 「ヅヌスサ」の「サ」[sɔ]の「[ɔ]」が脱落。よくあつゝる変化。
- (34) 当地では老年層は一般に「モヤ」と発音する。個人差はあるが、少し改まるや「モミ」だともいう。
- (35) 擬態語であり、そのまゝ訳語とすべきだが、意が通じないため「し、かりと」と訳す。あるいは「さちんと」でもいい。
- (36) 「室藤」という家名。正しくは室津藤也。青森市中心部に住んでい

た地主。

(37) 場所。

(38) 語源は「せつない」

(39) 無意味の発音。

(40) 「ゴカツ」は「田植」, 「アカル」は「終わる」の意。

(41) かなりの間をおいて再び話が続く。

(42) 聞き取りにくい部分である。前後の文脈は意味を把握しがない。

(43) 「モミ モテナー」と逆にするとわかりやすい。

(44) 「布切れそのもの。着物の破れなどを縫うのに使う布切れ」のこと。

(45) 流記(46)参照。

(46) 語源は「売て」か。

(47) 当時は大八車は使用せず、もっと小型の手車だったという。三人の話し手の感じがいろいろ。

(48) 次の「エマダバ」の中間の「マダ」を脱落させて発音した。

(49) 次の「アノ クルマサ」の「クルマ」へつながる。あるいは大八車でなく別の車だったかも知れないという意識がこのような言いように表れているかも知れない。

(50) 「アタエンタ」の最後の「タ」が聞き取り不可能。

(51) 地名。青森市大字「ハッ袋」。当地では昔から「ヤジャグ」という。当地のすぐ北を流れている川(荒川)を隔てた所にある。川に懸っている牛館橋と渡るとその「ハッ袋」である。200m程しか離れていない。

(52) 屋号。正しくは山田伝蔵。

(53) 「ホンダベナー(そうだろうなあ)」とも聞こえないわけではない。

(54) 「クルマノ ツギツギド(借りるこども)」と解す。あるいは「ノ」は不要の発音とすると「クルマ ツギツギド(カエルンダエナー 借りるんだなあ)」とでも言うことになっただろうか。

(55) この場合「オーヤゲ」の反対語で、「金持でない」の意。

(56) 水のない石の川原。



5. 牛 飼 橋

話し手

(略号) (氏 名) (性) (生 年)  
 A 桜田 鉄彌 男 明治36年生れ  
 B 八木沢千代三郎 男 明治44年生れ  
 C 棟方 トミ 女 大正2年生れ

A オラホーデナー (1) オラー ソエゴソ ワゲー ツギダバ ハス ネ  
 俺 方 でなあ 俺 それこそ 若い 時 なら 橋 (め) な  
 ンデ ムッタド カワバリ コエデ (2) アリテ ツンブ クー ミン  
 くて いっも 川 ばかり こいで 歩いて ずいぶん 苦 (き) み

ダジャナー。

ええなあ。

B ナンボ ボンオドリ オドテ モドテ キテモ アノ カワデ ハ  
 いくら 盆 踊り 踊って 戻って 来ても あの 川で は  
 (3) ー ケツ タグレバ ハー (B C 笑) (笑) カラダ ハー  
 あ 裾 (そ) たくり上げると はあ からだ はあ

スッカリ ステ マテナー。 (B C 笑) ウー。

しっかり して しまてなあ うん。

A ナニスベア カニスベア ハス ネアドゴデ (B ウン) カワ  
 何 しよう かね しよう 橋 ないって うん 川 (め)  
 コカネバ (B ウン) ホラ マエネヤダベア。 ウー スタハ  
 こかないと うん ほら だめなのだろう。 うん そうだ

ンデ<sup>(4)</sup> タンゲノ ホガムラデワヨー ウスタデ<sup>(5)</sup> ハス ネッハンデ  
から たいいの 地 村 ではよう 牛 鎧<sup>(12)</sup> 櫛<sup>(13)</sup> ないから

ウスタデサ ヨメ ケラエネナーテ ヘッ モンダエナー。(笑)  
牛 鎧<sup>(12)</sup> に 嫁<sup>(14)</sup> くれられないなあと言った もんだよなあ。

B ワノ アネッ スタハンデ オーノサテ エッ<sup>(16)</sup> タヤ<sup>(17)</sup> ヨメニ ナル  
吾の 姉<sup>(18)</sup> そうなから 大 野に 行つたけれど 嫁<sup>(19)</sup> になる

ツギ ( A アー ) マー カミ ユテタヤナー ( A アー )  
時 ( ああ ) 年あ 髪<sup>(20)</sup> 結ってはいけれどなあ ( ああ )

ケツ タクテ ヨメ ケツ タクテ アサグタテ タンダデ<sup>(21)</sup> ネデ  
裾<sup>(22)</sup> たくり上げて 嫁<sup>(23)</sup> 裾<sup>(24)</sup> たくり上げて 歩 くといつても だごとして ないでは

バナナ。( C ウー ホントニナー ウー ) ムゲサ ワダルネ  
ないかなあ。( うん ほんとうになあ うん ) 向いに 渡るに

ヨー。 ウー オヤツ コネダ スンダバタテ ( C ウー )  
よう。 うん 親父<sup>(25)</sup> ニッ間 死んだけれど ( うーん )

エンマデモ ホラー ( A ウー ) ケ ケツ タクテ アノー  
今 でも ほらあ ( うん ) <sup>×××</sup> 裾<sup>(26)</sup> たくり上げて あつう

オメダガラ<sup>(27)</sup> ヨメ モラテ キターテヨー。( C アー。 A  
お前の家から 嫁<sup>(28)</sup> もらって 来た といつてよう。( ああ。 )

ンー ) ウー アーユー ズダエモ ホラナー ウー。  
んー ) うーん ああいう 時代も ほらなあ うん。

C ウッテ ミツ キレバ ドンデ<sup>(29)</sup> アッタベア。 ホエデモ コエデ  
うんと 水<sup>(30)</sup> 来れば どうで あつたらう。 それでも こいで

アリテ。

歩いて。

B ワダラエネセア。 コガエネセア。

渡られないよ。 こがれないよ。

A ミンヅ クレア<sup>(10)</sup> コガエネー。 ( A コ ウー )  
 水 来れば こがれない。 うん

B ヘバ ツリバス<sup>(11)</sup> ワダテヨー ( A スエドーバス<sup>(12)</sup> アラー ) ス  
 すると 吊り橋<sup>(13)</sup> 渡ってよう 水 道橋 あらあ

エドーバス ワダテナ コスタ アラー ウン。  
 水道橋<sup>(14)</sup> 渡ってな こういふ あらあ うん。

C ウン ヨノ<sup>(15)</sup> コノキン エダ カガッタ ドゴ。  
 うん<sup>xx xx</sup> これくらい 板<sup>(16)</sup> 懸った 所

A エッ シャ グバリカ ネアー ハバコナー<sup>(17)</sup>。  
 一 尺 はかりしか ない 巾 こなあ

B コノ ハス ワダテー ウン ( A ソステ ハー ナー ) ナン  
 この 橋 渡って うん ( そして はあ なあ ) なん

タテ ショユ エツゴー カネ エグタテ ツーット オーマリ  
 といつても 醤油 一合 買いに 行くといつても ずうっと 大回り

ステ ( A ウー ) ウー。 ヤ ヤ ヤジャグサ エグネヨー。  
 して ( うん ) うん<sup>xxx xxx</sup> ハッ役に 行くのによ。

( C メヘ ネアドゴデノー ウン ) メヘ ネアドゴデ ホラー  
 店<sup>(18)</sup> ないので ラう うん 店<sup>(19)</sup> ないので ほらあ

ウーン。

うん。

A オラホーネ メヘヤ ネアドゴデ ホラー コンダ ドドンド サ  
 俺 方に 店屋<sup>(20)</sup> ないので ほらあ 今度 又達<sup>(21)</sup> 酒

ゲ ノムデバヨー ヤジャグサ ナンタカタ コダ ワラハント  
<sup>(22)</sup> 飲むと言えはよう ハッ役に どうしても 今度 子どお達<sup>(23)</sup>

ヘバ ロー ギールビン ミンタ P アノフレノ<sup>(24)</sup> ビンコサ  
 すると ほら ギール瓶 みたいな<sup>xxx</sup> あれくらいの 瓶これ

ニンゴーガ サンゴー。 ( B ウン ) ムガスダハンデ ニンゴー  
ニ合か ミ合。 ( うん ) 昔 ねから ミ合

ガ サンゴーバツツ ハー サゲー メアバゲー カネ エガアダ  
か ミ合ばかりだ はあ 酒 (セ) 毎 晩 買いに行くだ。

エナー。

よなあ。

B ワダラ エツゴーヨリ ヨゲ カタ ゴト ネァ ンタジャー。 (   
吾なら 一合より よけい 買った こと なかったようだ。

A 笑) ショユデモ エツゴー ナー。

醤油でも 一合 なあ。

A オラダツダバヨー タエデー ニンゴーバツツヨー ウー エマニ  
俺 達 ならよう たいい ミ合ばかりだよう うん タカに

コンダ ホラ ノマハンデ。 エマノ ヨネ ダモ エッショダ  
今度 ほら 飲むから。 今の ように 誰も 一升だ

ナンター。 ショガツガ ボンダバナー ( B ウン ) エッショ  
なんて。 正月か 盆 ならなあ ( うん ) 一升

オグアタテ ダーモ エッショツ サゲダキャ カエネアダネ。  
置くけれど 誰も 一升という 酒 は 買えないのだ。

B ウン スタテ スポービンコ モツテ ショ ショーユ カニ エ  
うん えいはいでも 四合瓶 (セ) 持って 醤油 (セ) 買いに行

ゲバ エツゴー カウアダタテ スポービン モテ エゲバ ネ  
くと 一合 買うのだけれど 四合瓶 (セ) 持って 行くとお前  
(ウ)

ァサ ダー キテ エデアテ ハー ショユ カネ エゲバ ハー  
お前に 誰 (カ) 来て いるのかと言って はあ 醤油 (セ) 買いに行くと はあ

ナンモ ショユダナンテ クタ クタ ゴト ネァンタナー。 (   
何も 醤油 だなんて 食料 こと ない ようななあ。 (

A ウー ) ボンガ ショーガツデ ネバ ショユ カネ ツギダ  
うん 盒か 正月でないと 醤油(油)買わない 時だ

べ ホラー。

うう ほらあ。

C トーフダナンテ ホンダ<sup>(19)</sup>キャー。  
豆腐だなんて そうだよ ね。

B ウンウン ショーユ ショーユ。  
うんうん 醤油 醤油。

C ナニガ ア ツギデ ネバナ。 (A アー)  
何か ある 時で ないとなあ (ああ)

B エツゴーノ ショーユ ホラ ビン モテ エゲバ ネァサ ダー  
ー 合の 醤油(油) ほら 瓶(油) 持って 行くと お前(油) 誰(油)

アノー ソエゴン オギャグサマ キテランヅエンタ (A ア  
あのう それこそ お客 様(油) 来ているんだというよな (あ

ー ) アンベデ<sup>(20)</sup> ホラ キグンダエナ。 エマダバ ダーモ ショ  
あ ぐあいて ほら 劇(油)くのなよな。 今 なに 誰(油)も 醬

ユ エツゴードアナンテ カウ フトダキャ ネァア<sup>(21)</sup> ミンナ エッ  
油(油) ー 合だなんて 買う 人 は ないけれど みんな ー

ショ ニショ エバ フトタルダナンテ マー フトハゴナー ウ  
升 = 升 良ければ ー 樽だなんて まあ ー 瓶(油)なあ う

ー カッテ オグアナンタ モンダバテ ホラー。

ん 買って 置くよな めの(油)けれど ほらあ。

A ウー エー エットモ カッテ エマダバ オガダバテ。 ソエ  
うん ~~xxxx~~ ー 斗(油)も 買って 今 なに 置くけれど。 それ

デ コンダ<sup>(22)</sup> ~~xxxx~~ マリ アンマリー ムツタド カー クワバリ コ  
で 今度 ~~xxxx~~ あんまり いつ(油)も ~~xxxx~~ 川(油)ばかり こ

エデ アサグドゴデ ダー ンモ ステ コゴサ オラホーノ コゴ  
いで 歩くので 誰 も とい こに 俺 方 の こに

サ ハス カゲデ ケル フト ネア ベガテナー。 ( B ウンウ  
に 橋(木) 懸けて くれる 人(木) ないんらうかといてなあ。 うんう

ンウン) ソエゴソ ハー コゴサ ハス カゲデ ケル フト  
んうん) それこそ はあ こに 橋(木) 懸けて くれる 人

アレバ カミサマネ マ マツテモ エー マツテモ エーナーと  
あれば 神 様 には <sup>xxx</sup> 祭っても 良い 祭っても 良いなん

テ ヘッ タヤダエナー。

て 言っ たのだよなあ。

C ソヘバセア コノ フユサ ナ アキサ ナレバ コンド コノ  
そうすると、この <sup>xxxxxx</sup> 冬に <sup>xx</sup> な 秋に なると 今度 この

カリバスツ モノ カゲダアダベオナー ウー。

振り 橋(木) もつ 懸けたのだらうなあ うん。

B カゲダアデ。 アギ。  
懸けたのだ。 秋。

A カリバス ウー。  
振り 橋 うん。

B ブラブラブラブラテナー。  
ぶらぶらぶらぶらとなあ。

C <sup>(23)</sup>  
フエダバ コエデ アサガエネハンデア。  
冬 なら こいで 歩かれないから。

B コエンデ アサガエネハンデア ロー、 ( C ウン) マー フパ  
こいで 歩かれないから ほらあ。 ( うん) 馬(木) 引っぱ

テ アリテモヨー ( C ウン) ソリダキヤ フパテ アルグン  
て 歩いてもよう ( うん) 橋(木) は 引っぱて 歩くの

ダキヤ アブナフテ、 (A ウン) アノー ソエゴン スモゲ  
なら 危くて。 (うん) あつう それこそ 下肥

ア アゲデナー (A ウン) ツケデ キレバヨー アブネテ  
上げてなあ (うん) つけて 来ればよう 危いといつて

ヨー エノグ モンダトゴデ ユラユラテ ホラ (C ウン)  
こゝ 動く もんだから ぐらぐらと ほら (うん)

ウン。 アエサ マー ツケデ クル モンダベ。 (C ウン)  
うん。 あれに 馬(を) つけて 来る もんだろ。 (うん)

ヤット ソエゴン キタ モンダジャー。  
やっせ それこそ 来る もんだよなあ。

A ソエサ コンダ ソエデー エル ウツネ オラホガラ コンダ  
それに 今度 それで いる うちに 俺方から 今度

ホラー サグラ ンダトスローツ フト コンダ ソンチョーネ ナ  
ほらあ 桜 田 俊 郎 といふ 人(が) 今度 村 長 に な

ツタエナー、 (B ウン) ソエデ コンドア ホロー ソノ  
ったよなあ。 (うん) それで 今度 ほらあ その

フト ソエデ マエネテ。 ワ ソンチョー ステラハンデ ソン  
人(が) それで だめだと言って。 吾(が) 村 長 (を) しているから 村

チョー スタハンデ ワ ソンチョー ステ エラ ウツネ コゴ  
長 (を) しちから 吾(が) 村 長 (を) して いる うちに こゝ

サ ハス カゲデ ケラテナ (B ウン) アー。 ソエデ コ  
に 橋(を) 懸けて くれると言ってな (うん) ああ。 それで 今

ンダ ホロー オラホガラ ソンチョー デダハンデ コンダ ハ  
度 ほらあ 俺方から 村 長 (が) 出なから 今度 初

ンツメデ ハス カガタダエナー。 (B ウン)  
めて 橋(を) 懸ったんだよなあ。 (うん)

C ウン ヘバ ホロー ソノ ツギダネ。 ( B ウン ) ワ ヘバ  
うん すると ほうあ なの 時だよ。 ( うん ) 吾<sup>(24)</sup>すると

アノー ヨメニ ナッテ キタ ツギヨー。 ( A B ウン ) ショ  
あう 嫁に なって 来た 時う。 ( うん ) 照

一ワゴネンニ ヨメネ ナッテ キタキヤー ( A B ウン ) ウ  
和五年に 嫁に なって 来たよねえ ( うん ) う

一。 ジューガツノ ジューハツニヅニ キタ ワゲセア。 ( A  
ん。 十 月 の 十 八 日 に 来た わけさ (

ホデタベノー ) ホノ ツギ コンダ ホロー コノ カリバス  
うであんううう ) なの 時 今度 ほうあ この 坂の 橋

( B ウン ) ソノ ツギ ユギ ハヤジ フタ トスデア ( A B  
うん ) なの 時 雪 早く 降る 年で (

ウン ) ジューガツノ ジューハツニヅニ コンダ アノー バ  
うん ) 十 月 の 十 八 日 に 今度 あう 馬

ソリデ ホラー ( B ウン ) マッコサ ナステ スッテ キタ  
橋で ほうあ ( うん ) 馬 みに なして 乗って 来た

ワゲヨー。 ( A B ウンウン ) デ マンダ ユギ ジューハ  
わけよう。 ( うんうん ) えれで 来た 雪 十 八

ヅノ ス ユギ ケアデア エマノ カノ ケームショノ ドゴサ  
の 日 雪<sup>(25)</sup> 消えて 今の <sup>xxxx</sup>あの 刑務所の 所に

キタキヤ コンダ ユギ ネンデヨー ソリ カツテナー ( B  
来たら 今度 雪<sup>(26)</sup> なくてよう 橋<sup>(26)</sup> 担いでなあ (

ウンウンウン ) ウー。 ソステ コンダ ヤット マッコ フバ  
うんうんうん ) うん。 として 今度 やっと 馬 みに 引<sup>(26)</sup>は

テ コンダ コノ ハス ワダタツヤー。 ( A ウー ) カリ  
て 今度 この 橋<sup>(26)</sup> 渡ったのだよ。 ( うーん ) 坂の



バスー。 (B ウンウン) エマ ハヅレサ コンダ ンニヤ<sup>(27)</sup>  
橋。 うんうん 今 はずれに 今度 いやあ

<sup>(28)</sup> オワテ <sup>(29)</sup> マルタキヤー モスコステ トックラガッテ マル ドゴ  
終って しようといふ時 もう少しで ひっくり返って しよう ところ

スタダエナー (B 笑) ウー。 ナ ヨメ トックラカステ  
したんだよなあ うん。 お前<sup>(30)</sup> 嫁<sup>(31)</sup> ひっくり返して

マル ドゴ スタテ (笑) ウー。 デ ホノ ズギ カリバ  
しよう ところ したと云って うん。 それで その 時 飯<sup>(32)</sup> 橋

ス ワダッテヨー。 (A ウー)  
渡ってよ。 うん

3 ホンデタエナー。 ナンボモ マダ フルグ ネンデナー ソリ  
もうであつたよなあ。 いくらも まだ 広 く なくてなあ 橋<sup>(33)</sup>

アサゲバ ナンボモ マー。  
歩くと いくらも なあ。

ロクシャグー ロクシャグ アー ロクシャグガ (B ウン)  
六 尺 六 尺 ああ 六 尺 か うん

ナナシャグ プレアスカ ネフテタナー。 (C ウン) クギ<sup>(34)</sup> ヨ  
七 尺 ぐらいしか なかつたなあ。 うん くぎ<sup>(35)</sup>

ゴサ ウテ ロー。 ステ コンダ ナガラ<sup>(36)</sup> スタサ。 ナガラ  
横に 打つて ほうあ。 として 今度 丸太<sup>(37)</sup> 下に。 丸太<sup>(38)</sup>

スーデタガー。 (B ウン ナガラ ウン) ステ コンダ コ  
数いてゐるか。 うん 丸太 うん として 今度

モー (B ウン) ソラデ コモー クンデ (B ワラ モラ  
蕨 うん 葉で 蕨<sup>(39)</sup> 組んで 葉<sup>(40)</sup> もらう

テ アヘテナー ウーン) ソレサ コンダ ジャーリ  
て 歩いてなあ うーん それに 今度 砂 利



ウン ) ウン ステ コンダ ハー ムラノ フト ミンナ カ  
うん ) うん として 今度 はあ 村の 人 みんな 借

エデヨー ( B ウン ) コメ アゲデ ( C ウン ) ソエ マ  
リてよ ( うん ) 米<sup>(16)</sup> 上げて ( うん ) それ よ

ンダ エサ モッテ キテヨ ( C ウン ) コンダ ドース。コ  
ち 家<sup>(17)</sup> に 持って 来てよ ( うん ) 今度 どうする。今

ンダ タデマス ダンナサ モテ エガエネベー。 ( C ウン )  
度 小作米 旦那に 持って 行かれないだろう。 ( うん )

ソエデ コンダ<sup>(37)</sup> オニヤサ ホラー ミンナ<sup>(38)</sup> モスロ スエデ ステ ホ  
それで 今度 お庭に ほらあ みんな 筵<sup>(39)</sup> 敷いて として 乾

スタ ツギモ アテ ホロー。 ( B C ウン )  
した 時<sup>(40)</sup> も あつた ほらあ。 ( うん )

C ヘバ ホラー コノ ハス コンダ ナスタ<sup>(39)</sup> ツギ ( A ウン )  
すると ほらあ この 橋<sup>(41)</sup> 今度 なした 時 ( うん )

ウスタテバス カゲダ ツギ ヘバ ショーワナナネンノ アギ  
牛 館 橋 懸けた 時 すると 昭和 七年の 秋

コンダ コノ ( A ウン ) ウスタテバス ( B ウンウン )  
今度 この ( うん ) 牛 館 橋 ( うん うん )

カゲダ ワゲセア。 ( B ウン エマノ マエナー。 A ホン  
懸けた わけよ。 ( うん 今度の 前 なあ。 そう

デタエナー ) マエノ ハス ( A ウンウン ) ウン。 ホノ  
であつたなあ ) 前の 橋 ( うん うん ) うん それ

ツギ コンダ アギ コンダ アノー ホラ ヨゴウヅノ<sup>(40)</sup> スカナ  
時 今度 秋 今度 あつた ほら 横 内の 鹿 内

エツ フトガ マンツ コノ ハス ウゲモッテ<sup>(41)</sup> ( A ウー ウ  
という 人が やす 今の 橋 受け持て ( うん そう

ンダ) ソエサ コンダ オナゴ ンドモ (B ウン) カダワグ  
石) それに 今度 女 達も (うん) 形 粹

ナサネバ<sup>(42)</sup> マエネハンテア (A B ウン) フキコ スガステモ  
なさねば 太<sup>め</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>から (うん) 釘<sup>こ</sup> 抜<sup>か</sup>して<sup>必</sup>

エヤーハデッテ (B ウン) フタリ コンダ オナゴ ンドバ  
良いので ヒ<sup>ま</sup>って (うん) 二人 今度 女 達を

マヅ<sup>(43)</sup> テマ トニ<sup>(44)</sup> ナステ ソエサ コンダ オラ キタ ワゲ  
まず 手<sup>間</sup>取<sup>り</sup>に<sup>(45)</sup> なして それに 今度 俺 来<sup>な</sup> わけ

セア。 フタリ。 (B ウン) ヤナド フタリー。 (B ウ  
よ。 二人。 (うん) ヤナヒ 二人。 (う

ン) ホノ ツギノ ツダエノ オナゴ ンドノ テマドリ<sup>(46)</sup> ツ モノ  
ん) その 時の 時代の 女 達<sup>の</sup> 手<sup>間</sup>取<sup>り</sup><sup>(47)</sup> かい<sup>い</sup> もの

ネステ アッタハンテア (B ウン) ニャ コンドア ホノ  
な か った<sup>り</sup> っで (うん) いやあ 今度 その

スカテ<sup>(48)</sup> ヲ フト スカテ スカテ スカテ (笑) サギダ<sup>(49)</sup> ヲ  
鹿 貞<sup>い</sup> かい<sup>い</sup> 人 叱<sup>つ</sup>て 叱<sup>つ</sup>て 叱<sup>つ</sup>て 先 立<sup>ち</sup>を

(A B ウン) オナゴノ テマドリ (A ウンウン) ツカ  
(うん) 女 の 手<sup>間</sup>取<sup>り</sup><sup>(50)</sup> (うんうん) 使

ル モンダ<sup>(51)</sup> ナテア。 ニャ ウッテ ホノ ツカタ フト スカエダ  
う も<sup>て</sup>ない<sup>い</sup>と<sup>ま</sup>って。 いや うんと その 使<sup>つ</sup>た 人<sup>(52)</sup> 叱<sup>ら</sup>れた

ダ。 オエノ アラー。<sup>(53)</sup>  
や。 俺 家<sup>の</sup> あ<sup>ら</sup>あ。

B アノ ツギ<sup>(54)</sup> ホラー ニンブ ホラ エヅエンデテア ホラー。  
あの 時 ほ<sup>ら</sup>あ 人 夫 ほ<sup>ら</sup> 一 回<sup>で</sup>あ<sup>ら</sup>あ ほ<sup>ら</sup>あ。

ハツツッ センガラ エヅエン。 (A ンダビオン) フトリメア  
ハナ 銭<sup>か</sup>ら 一 円。 (うんうん) 一人 前

ノ ニンブデ。

ウ 人 夫で。

C ヘバ コンド ホエサ オエノ モガスダバー ア アニ アニテ  
すると 今度 それに 俺家の 昔 なら<sup>xx</sup> 兄 兄と

ヘタハンデナー ( A ウーン。 B ウンウン ) オエノ ア  
言ふから なあ ( うーん うんうん ) 俺家ッ 兄

ニンド コンダ キテタドゴデ<sup>(52)</sup> サギダ<sup>(52)</sup>ッテタドゴテ<sup>(52)</sup> オラバ ヘデ  
違<sup>(51)</sup> 今度 来ていたつて 先 立っているつて 俺を 連れて

キタ ワゲヨー。 ( A B ウー ) ソエデ コンダ キテ ウ  
来ふ わけよう。 ( うん ) それで 今度 来て う

ッテ スカタテヨー。 ( A ウーン ) ホエカラ オラ ナンニ  
んと 叱<sup>(51)</sup>つてよう。 ( うーん ) それから 俺<sup>(51)</sup> 何日

ツモ コンダ<sup>(53)</sup> コゴサ キネスタバタテ<sup>(53)</sup>。 エンマ ヘバ オナゴ  
も 今度 こゝに 来なかつたけれど。 今 すると 女

ンドバリノ テマドリ ヨゲダッキヤ。 シ スタハデ ソノ ヅ  
違<sup>(51)</sup>ばかりの 手<sup>(51)</sup>間<sup>(51)</sup>取り<sup>(51)</sup> よけいふよね。 ん そいふから その 時

ギ オナゴンド ツカタツ<sup>(54)</sup> ハツメデ アッタド。

女 違<sup>(51)</sup> 使<sup>(51)</sup>つたの 初めて あつたという。

A ウーン ホンデタベナー。

うーん そうであつたらうなあ。

B ンダベナー。

えうたらうなあ。

A ツヅエノ<sup>(55)</sup> トクサスツ フト マンダナー コーヅ ( C ウーン  
筒井<sup>(55)</sup>の 徳 若<sup>(55)</sup>とい 人 生ふなあ エ 哥 ( うーん  
うーん )

ゲンバノ ウー ヤグメデー。  
理 場<sup>(55)</sup>の うん 役 目<sup>(55)</sup>で。

C ウンダ ( A ウー ) ウッテ トフサスバ スカタド。 オナゴ  
そうえ うん うんこ 億 差 も 叱つたという。 女

ンドバ ツカサテ スカタテ。 ウーシ ヨーワナナネンノ  
達も 便つたこ 叱つたという。 うーん 眼 和 セ 年ッ

トス カゲダンダネ ホラー。

年 懸けえんたよ 何らあ。

A ウンウン <sup>(56)</sup> ホダエン ホンデタナー。 ( B ウン ホデタナー  
うんうん xxxxxxx そうであんなあ。 うん そうであんなあ

ウンウン ) ンステ カゲダモ エバタテ ムガスダハ ンデ ナ  
うんうん ) として 懸けえも 良いけれど 昔 なつて な

ンボー ナンボバリ アッタベ。 ニゲ ニゲンダキャ ネジャナ  
んぼ なんぼばかり あつたろう。 <sup>xxxx</sup> ニ 間 は ないよな

ー。

あ。

B ハスガー ウンウン アノ ムガスノー ウンウンウンウン。  
橋か うんうん あの 昔 の うんうんうんうん。

A ウー ハスノ アラー モドノ ムガスノ ハスヨー キュー キ  
うん 橋の あらあ 元の 昔の 橋よう <sup>xxxxxx</sup> ん

ューシャグバススカ ネフテタベナー。 ( B ウン ) ニゲン  
尺 ばかりしか なかつた ろうなあ。 うん ニ 間

ダキャ ネフタナー。 ( B ウン )  
は なかつたなあ うん

C ネステ アッタ。  
な かつた。

B エヤ ヅドシャ キレバダ<sup>(57)</sup>キャ ヅット ネパテ マネバ。 タダ  
いや 自動車 来れば ずっと くらついて しまわないと。 なだ

アリテ エガエネデア。

歩いて 行かれないや。

A キューシャグバリスカ ネフタバ ウン。 コンダ ミヅ クレバ  
九 尺 ばかりしか なかろう うん。 今度 水<sup>(60)</sup> 来ると

ナー アノ ハスノ ウエ (B ウン) ミヅ コスヤダエナー。  
なあ あの 橋の 上<sup>(58)</sup> うん 水<sup>(60)</sup> 越すのやなあ。

モドノ ハス アレア<sup>(58)</sup> ヘヤ<sup>(59)</sup> コノ ヘンモナモ ミヅ クレバ  
元々 橋 あれえ とうするに 今 辺 もなにも 水 来ると

ナー ソックド ハー ウミド フトヅ<sup>(60)</sup> (B ウン) (C ホ  
なあ そくくえ はあ 海と 同じ。 うん) (C ホ  
そう

ダエナー ウン) ミヅ クレバ エギ<sup>(61)</sup> ワガエニネ<sup>(62)</sup> コノ ヘン  
だよなあ うん 水<sup>(60)</sup> 来ると 若 稲<sup>(62)</sup> (つち) 今 辺

ノ カワノ ハダノ エニネ ミンナ ナガエデ<sup>(63)</sup> (B ナガエデ  
の 川の 端の 稲<sup>(60)</sup> みんな 流れて 流れて

ナー ウン) ウーシ モガスノ ナガスギ<sup>(63)</sup> ナガエデ クルナー。  
なあ うん) うーん 昔の 流し木<sup>(60)</sup> 流れて 来るというなあ。

B ウン リンゴ ナガエデ クルナー。 (A ウン リンゴ 笑)  
うん りんご<sup>(60)</sup> 流れて 来るというなあ。 うん りんご

ツリバスニ エデ リンゴ トンダエナー。 (C 笑) ハス。  
吊る 橋に いて りんご<sup>(60)</sup> 取るんやなあ。 橋

(笑)

A アノ スエドーバスタテ ズンブ ムガス<sup>(64)</sup> ウウ<sup>(64)</sup> タガフタエナー。  
あの 水道 橋<sup>(60)</sup> ずいぶん 昔 高かったやなあ。

(B タガフタエナー) アノ ハス ハー ツグダゲ<sup>(65)</sup> クルア  
(高かったやなあ) あの 橋 はあ ひたる<sup>(65)</sup> け 来るの

ダエナー。

だよなあ。

B リンゴ ア アミデ スグル ワゲセア ロー ウン。  
りんご<sup>xxx</sup>(を) 点<sup>xxx</sup>間で すくう わけよ ほらあ うん。

A ソエデ コンダ ホロー。  
それで 今度 ほらあ。

C ナンタテ マー アノ ハス カガタテ エーステナー<sup>(66)</sup> ウー。  
なんといわって まあ あの 橋<sup>(66)</sup>懸<sup>(66)</sup>つな<sup>(66)</sup>といって 良くて なあ うん。

A ウー ソエデモ マンダ エー ハス カガタテ ウー。(笑)  
うん それでよ また 良<sup>(66)</sup>い 橋<sup>(66)</sup>懸<sup>(66)</sup>つな<sup>(66)</sup>といって うん。

B ウン (笑) アエッカラ コンダ ヨメ モラウニモ ケルニモ  
うん あれから 今度 嫁<sup>(67)</sup>面<sup>(67)</sup>もらう<sup>(67)</sup>に<sup>(67)</sup>も くれる<sup>(67)</sup>に<sup>(67)</sup>も  
ハ<sup>xx</sup> ハゲデナー。(笑)  
さばけてなあ。

A エー アンベスターテ (B ウン) (笑) ウー ソエデ コン  
良<sup>(67)</sup>い あんばい<sup>(67)</sup>し<sup>(67)</sup>な<sup>(67)</sup>とい<sup>(67)</sup>って (うん) うん それで 今  
ダ ホラ サグラダヅ フト ソンチョー ステ コンダ キネン  
度 ほら 桜 田<sup>(67)</sup>とい<sup>(67)</sup>う<sup>(67)</sup> 人<sup>(67)</sup>村<sup>(67)</sup>長<sup>(67)</sup>して 今度 記念  
へ ホラ ホートブヘテ ハー キネンヘン タデダ ワゲダ ア  
碑<sup>(67)</sup> ほら 報<sup>(67)</sup>徳<sup>(67)</sup>碑<sup>(67)</sup>とい<sup>(67)</sup>って<sup>(67)</sup> はあ 記念<sup>(67)</sup>碑<sup>(67)</sup>建て<sup>(67)</sup>な<sup>(67)</sup> わけ<sup>(67)</sup>な<sup>(67)</sup> あ  
ー。  
あ。

B ホダエナー。 アノ フトダキャ ソンチョー サネバダキャ マ  
えいだよなあ、 あの 人 が 村<sup>(67)</sup>長<sup>(67)</sup>し<sup>(67)</sup>ない<sup>(67)</sup>ならば<sup>(67)</sup> ま  
ンダ マダ マンダ マダダキャ コーユー ハスダキャ タダネ  
な また また また こういう 橋 は 建<sup>(67)</sup>ない<sup>(67)</sup>



ンテア。

んだ。

A ウン タダネナ。

うん 建えないな。

C <sup>(68)</sup> カガネ カガネ。(笑)

懸からない 懸からない。

## 注記

- (1) 「俺方の村でなあ」の意。
- (2) 終止形は「コグ」。「川をコグ」とは「川にサササ足を踏み入れてわたり歩く」ことである。昭和7年まで橋がなかった。
- (3) 「ケツ」は「尻」をいうが、着物の場合には「裾」をいう。別に「ケッツ」とも発音する。
- (4) 「大概」だが、「ないてい」と読む。
- (5) 収録地の名。
- (6) 「テ」は「といて」の意に解されるが、むしろ無意味の発音。
- (7) 文脈上、遂接の助詞で解する。この類の「也」はよく使われる。
- (8) 「自分の家」を「オエ(俺家)」「オエ(俺家)ノエ(家)」。
- 対して「相手の家」を「オメダ」「オメダノエ」という。次に語源説をあげる。「オメダ お前エんの家。アチタ ソチタ コチタ 『タ』は場所を表わす接尾語」(松本明「松前語彙」)。「な『地』 ほかのところ、よそ、他所。あな『地、異』 例、物類称呼 外《もと》の事を西国にてあなと云。俚言集覽 備後あなりの在辺にて外をあなと云。」(日本国語大辞典)
- (9) 話者Cは嫁入り前の、牛館の標子は詳しくわからないため疑問の助動詞「べー」を使った。Cは牛館より約5km西方の細越(現在青森市)の生れである。
- (10) 「クレバ」の「バ」[ba]の「b」の脱落。
- (11)(12) 同一の橋。水道管を吊り橋状に渡しているため、人々はどういうで呼ぶ。現在、以前よりも主流に同じ場所に懸っている。
- (13) 「キン」は副助詞「きり」だが「くらい」と読むのが適當。「コノ」等の連体詞に付属して使われることも多い。話者Cは手まねで板の巾の狭さを示した。次の話者Aがその巾を説明している。
- (14) 一尺程度の巾だと言っているが、実際には12cm程度でその板がずくと向う岸まで渡していたという。
- (15) 地名、青森市大字「ハッ<sup>バ</sup><sup>バ</sup><sup>バ</sup>」。昔から「ヤジャブ」という。収録地から川(荒川)を隔てて200m程離れた最も近接している地である。

音、橋が懸っていなかっただけ水道橋(吊り橋)も渡って醤油等を買  
いに行くにはかなり遠回りして行ったことになると話している。直線  
距離を行くならば「川をコグ」ことになる。

(66) 「コ」は指小辞。又、「縄綱い」注記(2)参照。

(67) 「ナ(汝)エ(家)〔nəe〕」が〔nɛ〕となった。

(68) 「エデァ」は基本的には「エダ(いる)」である。標準語的扱い方を  
するなら過去だが、実際は現在を表わす。誰かが家に「来た」という  
行動を完了してそこに存在していると説明しておく。この文は簡略に  
すると「ダー(誰)エダ(いる)」の構文であるため訳は「誰」という  
疑問代名詞に応じて「いるのか」と訳す。

(69) 「キャー」「キャ」が文末に使われる場合の訳はむずかしい。「～  
よぬ」を当てておくが、方言は婉曲・敬意は含んでいない。語源不明。

(20) 「安配」

(21) 「ネァヤ」の「ヤ〔ja〕」の〔j〕の脱落。注記(1)参照。

(22) 次の「アンマリー」の「ンマリー」の言いかけ。「ア」が脱落した。

(23) 「(川を)コエデ」

(24) 次の「ヌッテ」と同意。「～をなす」を使うのは話者との口ぐせ。

(25) 「あの」の意で「カノ」を使うことはないため誤りの発音。あるい  
は次の「ケームショ」の「ケ〔ke〕」の〔k〕音を意識して発せられた  
と解釈すればよい。

(26) 「担ぐ」は「カッグ」の他に「カヅグ」とも発音する。

(27) 当地特有の表現で、たいへんな事態の際に使う感動詞。

(28) 「渡りオワテ」

(29) 「キャー」「キャ」が文中に使われる場合の扱い方もまだむずかし  
い。文末に使うのと併せて今後の研究すべき課題である。

(30) 木の杭状のもの。釘でない。

(31) 当地の人は簡明に「丸木のこしら」と解答したのでそのまゝ訳にし  
たが、「全体が細長い木で、直径がそれほど大きくも小さくもない製  
材しない木」参考として「細長い木。ナカカラ(長軒)の意か」(  
松本明「弘前読書」)

- (32) 代名詞「あれ」に相当し、遠い過去のことをさし示す。
- (33) 語源は形容詞「うたてし」
- (34) 「懦弱」だろうか。「ダンゲャグ」駈々をこねること。懦弱にもとづく」(松本明「弘前語彙」)
- (35) 「(馬を)アマステ」
- (36) 驚きの表現。
- (37) 屋敷内の家の前のやや広い通路のあたり。「オ」の尊敬接頭語がついているが、敬意は失せ、語中に固定している。
- (38) 「(お庭)全体」の意。
- (39) 後の「(ウスタデバス)カゲダ」と同意。注記(24)参照。
- (40) 地名、青森市大字「<sup>よこ</sup>内」<sup>うち</sup>。収録地から、約5km東方にある。
- (41) 「ハス(の工事を)ウゲモッテ」
- (42) 「～をなす」の表現は話者Cの口ぐせ。この場合「作る」の意。
- (43) 「テマ(を)ト(リ)ニ」。「手間を取る」とは「手間賃を取る。日雇として働きに行く」の意。
- (44) 「雇って」の意。注(24)(39)(42)参照。
- (45) 当時、話者Cの隣人であった同郷配の女性。
- (46) 「テマドリ」は「日雇人夫」のこと。
- (47) 本名「鹿内貞作」。話者Cは「スカテージフト スカテスカテ」の同音によるおもしろさをねらって話している。
- (48) この場合「監督者」の意。「スカテー氏」をさす。
- (49) この「ナ」は今後考察を要することはだが、反語的に歎きなくけはいけない。
- (50) 話の内容は5行後の同じ話者Cの「オエノ アニンド……」へつながる。「アラー」の意については注記(32)参照。
- (51) 「人夫賃」のこと。
- (52) 「スカテー氏より上役だ、なっで」の意。
- (53) 「牛館」をさす。
- (54) 「ヅ」は「ヤヅ」(漢字を当てると「奴」)の「ヤ」の脱落。
- (55) 地名、青森市大字「<sup>う</sup>内」<sup>うち</sup>。収録地からは約5km北方。現在、青

森市中心部から森並みが連続して、昔の農家の面影は失せた。

(56) 「ホダエント(そのようだ)」と言おうとしたらしい。

(57) 「ダキヤ」は「強意」を表わすが訳しようがない。注記(49)(49)同様今後考察を要することばである。

(58) 注記(32)参照。

(59) 「ヘバ〔heba〕」→〔heɐ〕→〔heja〕。

(60) 「ひとつ」

(61) 無意味の発音。

(62) 当地では「若稲」と熟語にすることは珍しい。しかし、あくうるともいう。

(63) 山で伐採した大さい丸太を川の上流から流して運ぶことからこの名がついた。これを乾かし、割って冬の薪にする。上等の薪である。

(64) 無意味の発音。

(65) 「(川の水が流れて)フルアダエナー」

(66) 「ナー」は〔Na:]に聞こえる。

(67) 「ハゲル」(基本形)は「はける=捌ける」

(68) 「(橋は)カガネ」

# 6. 川 の さ か な と り

## 話し手

| (略号) | (氏 名)   | (性) | (生 年)   |
|------|---------|-----|---------|
| A    | 桜田 鉄彌   | 男   | 明治36年生れ |
| B    | 八木沢千代三郎 | 男   | 明治43年生れ |
| C    | 棟方 トミ   | 女   | 大正2年生れ  |

- A モドダバー アツ ツギ アツグ ナレバー カフネ マスガウ  
元 なら 暑い 時 暑く なると 川に 鱒から
- ( B マス ウン ) ナニガラ サガナ エデ エデデナ ラー ワ  
鱒 うん 何から 魚(が) いて いてな。 あらあ 子  
ラハ ンド ミズ アンブル。 オドナド マス トルー ー。  
ども達(は) 水 浴びる。 大人達(は) 鱒 捕る うん
- B ヤー コドスダエ ネ ヌグエツギ ヌゲァ ワゲダラ ナンボモ  
やあ 今年のように 暑い時 暑い わけなら いくらでも  
トネ エフタデァ。 マス バガイ ナッタテ バガイ ナルッテナ  
捕りに 良かったよ。 鱒(が) ばかに なたというて ばかに なたというてなあ。  
ー。( A C 笑 ) アノ トンヅ バガ ツケデナー マス マスー  
あの 当時 ばか(を) つけて なあ ×××× 鱒  
(2)  
バガイ ナルテ ( C ウー ) ウー トニカク ハー ブラブラ  
ばかに なたというて ( うん ) うん とにかく はあ ぶらぶらと  
テ カラダ キガネグ ナッタ マルダオナー。 ワラハ ンド デモ  
体(が) さかなく なって しまうのだものなあ。 子ども達でも

トニ エグナッテ マルダネー。( A アンマリ アツドゴデ )  
 掃りに 良くなって しまうのだよ。 あんまり 暑いので

アツドゴデ ( A ウン ) テデ リョーホーデ ラー ドット  
 暑いので うん 手で 両方で あらあ どっと

(3) ナケレバ ナー コー オガサ ナケデ ヨゴスタリ ステヨー。  
 投げると なあ こう 陸に 投げて よこしたり してよう。

A マス エデー マス エデー。( B ウー ) エヤ マスバリデ  
 鱈(が) いて 鱈(が) いて。 うん いや 鱈ばかりで

ネヤー ソエゴソ ヤット ハルサ ナレバ オーケ ナー。( B  
 なくて それこそ 早く 春に なると うぐい なあ。

ウン オケ ) ウー ン オケ エデ ドンダノヤラ ( B フトアミ  
 うん うぐい ) うーん うぐい(が) いて どうなのだ"という ( - 網

ウツンダバナ ) ウン マスヨリ チョト ワンツカ ツチャケ  
 打つならなあ うん 鱈より ちょっと わずか 小さい

モンダバタテ ウン ハル ヤット ヨケ<sub>xxx</sub> オケ エデ コンダ  
 もんだ けれど うん 春 早く うぐい(が) いて こんど

ゴガツ タウエ スマレバ コンダー ヌググ ナラハ ンデ マス  
 五月(に) 田植(が) 済むと こんど 暑く なるから 鱈(が)

エデ ラー ( B マスデ ホロー ) ナー。  
 いて あらあ 鱈で ほらあ なあ

C ゴガツノ エァ ツメネ アー カ ンツカ トテ ウー ( B ウー )  
 五月の 植えじまいに ああ かじか(を) 掃って うん ( うん )

カヘルテ ナー カ ンツカ トネ ミンナ エッラデ ナスラレー。  
 食べせるとして なあ かじか(を) 掃りに みんな 行っていて なにしてあー。

B ウン チュハン ケバ ハー タ ンゲ ハー ウー ン ネドリ ンド  
 うん 昼飯(を) 食うと はあ かなり はあ うーん 苗採りの人(は)

ナー ウー アー アノー タ カグヅア ンデ ヌゲデナー。 (C  
 なあ うん ああ あいう 田 (セ) かくというので 抜けてなあ。

ウー ヌゲデー ) ウー ソステ コンダ コー オステロー。ウ  
 うん 抜けて ) うん として こんど こう 押して ほう。う

ー マグラ コヘデ。ヤナギ キタゲテナー。 (A カンツカト  
 ン 枕 (セ) ニしえて。 柳 (セ) 切てなあ。 (8)  
 (8)

リテナー ) アエデ カンツカトリテ ホラー バンゲノ オワリ  
 リと言ってなあ ) あれで かじか捕りといって ほうあ 晩の 終りに

サ ソエ コンダ ツグ ワゲダー。ウー ハダギ スタリナー。  
 それ こんど っく めけた。 うん はたき (セ) したりなあ。

(A アー ) カンツカ ドゴデモ ヤッタ モンダエナー ウー。  
 ああ ) かじか (セ) どこでも やった もんだよ なあ うん。

A ウー ナンスロ フルマサ ナレバヨー ムガスダバ カワ ソツ  
 うん なにしる 昼間に なかばよう 昔なら 川 (セ) そっち

マ マガル コチャ マガル スタドゴデー マガリカ ンド ミン  
 ハ 曲る こっちへ 曲る しなので 曲り角 (セ) みんな

ナ フンツデ (B ウー ウン ウン ) ヘー タダネンダエナ  
 な 淵で ( うん うん うん ) 背 (セ) 立たないのたよ なあ。

ー。ヘバー ソゴネ ホラー フケア ドゴデ マスーデモ ナン  
 すると そこに ほうあ 深い ので 鱒 でも なん

デモ エードゴデ ソノ マガリカ ンドノ フンツネ ドゴモ カ  
 でも いる りで その 曲り 角の 淵に どこも か

スコモ ミンナ ハー マストリ ホレ フルマヤミス ヤスミネ  
 しにも みんな はあ 鱒 捕り ほれ 昼間 休みに

コンダ ホレー ホロー オラダツ コンダ ナー ハー (B  
 こんど ほれ ほうあ 俺達 こんど なあ はあ



ウー ) コンダ フルマヤ スミダ ハ ンテ マス トネ エグベスーテ  
うん ) こんど 昼間 休みだから 鱈(を) 捕りに 行こう といって

コンダ フラハ ンド フラハ ンドド マ ンダ アツドゴテ ミ ンヅ  
また 子ども達 (は) 子ども達 用あ (で) また 暑いので 水 (を)

アブネ エテヨー フラハ ンドモ オドナモ コンダ マンジャテ  
浴びに 行ってよう 子どもも 大人も こんど まがって

(B ウン) ヤー ウット オラホノ カミガラ コツマデ ハ  
(うん) やあ いっぱい 俺の方 上から こっちまで は

(13)  
ー カワ ソックド ハー フトダラケ。  
あ 川 全部 はあ 人だらけ。

B マストリナー (A ウン マス マス トルテ) ウン クグッ  
鱈 捕り なあ (うん 鱈(を) 捕る といって) うん もぐ

テ アラー (A ウン) ウン テ テガギテナー (A ウン)  
て あらあ (うん) うん 手 鉤 といって なあ (うん)

テデ コー ヤッテ クグッテ ギュット カゲルダエナー。  
手で こう やって もぐって きゅっと 引、かけるんだよねあ

A カギコ モツテナー クグッテ エテー アノー ガラス ハ ハ  
鉤(を) 持って なあ もぐって 行って あの ガラス 箱

(14)  
ゴサ ガラス (B ウン メガネ) ツダ ヤヅ クグッテテ  
に ガラス (うん 眼鏡) ついた やつ(を) 持って 行って

コー フンヅサ ハッテ エテ ソステ ツグ ヤヅ ハラサ コー カ  
こう 淵に はいって 行って せして 突く やつ(を) 腹に こう 懸  
ゲデナー ステ ハー ホロー フンヅガラ コンダ アガテ キテ ウン。  
けて なあ そして はあ ほらあ 淵から こんど あがって きて うん。

(15)  
C ナー ホレホ ンド エデタタテ エマ ホラ ナンモ エナグ ナ  
なあ それほど いてあったけれど 今 ほら 何も いなくなっ

ッテ マタエナー。(A ウン)  
 しまったよなあ。(うん)

B ラー アユナー。(C ウン) アギ コンダ サゲダヘ ウン。  
 あああ 鮎(あゆ)なあ。(うん) 秋(あき) こんど 鮎(あゆ)だ"ろう うん。

サゲモ マンダ ショーカヅ <sup>(16)</sup>モヅ トストリノスノ <sup>(17)</sup>サゲ トタ  
 鮎(あゆ)も また 正月(しょうげつ) 年(とし)越(こ)えの日の 鮎(あゆ)も 捕(と)った

エナー。コゴデナー。カワサ ミヅ アブヘニ <sup>(18)</sup>エテ ホラー ウ  
 よなあ。 こんでなあ。 川(かわ)に 水(みづ)を 浴(あ)びせに 行(い)って ほら う

ン。  
 ん。

A サゲモ <sup>xxx</sup>アエ アエモ マンダナー。(B エデター) アエ エ  
 鮎(あゆ)も 鮎(あゆ)も またなあ。(いたなあ) 鮎(あゆ)も い

デ アエ エデ ナモカモ ハー カワ コケバー アエサ アカ  
 て 鮎(あゆ)も いて 何もかも はあ 川(かわ)を こんど 鮎(あゆ)に あがっ

テ アサグアデァナー (B ウン ウン) ウン。  
 て 歩くのた"よなあ (うん うん) うん。

C ホントニヨー がニ エデ がニ エデセァー。(B ウン)  
 ほんとによう 蟹(かに)も いて 蟹(かに)も いてよ。(うん)

ホントニ アメ フレバヨ (B ウン) オラダツ タッコアミッ  
 ほんとに 雨(あめ) 降(ふ)るとよ (うん) 俺(おれ)達(たち) たも 網(あみ)って

テ アノ マス ツケデ <sup>(19)</sup>ラー。(B ウー ホンダ ホンダ) アエ  
 あの 鱈(たら)を(を) つけろ あらあ。(うん そうだ" そうだ" あれ

デ コッタ オッキ がニ ンニヤ サンビギモ ススギモ ハッ  
 で こんな 大きい 蟹(かに) いや 三(さん)匹(びつ)も 四(よっ)匹(びつ)も はい、

テ キテサ。 ソステ エサ モッテ キテ コンダ ナヘバ <sup>(20)</sup>コ  
 て きてさ。 として 家に 持(も)って 来(き)て こんど なせは" 子(こ)

ー ハッ テ 。

(6) はいって 。

B イワスノ ( C ウン ) アダマ ( C ウン ウン ) ツケテナ  
魚の ( うん ) 頭 (を) ( うん うん ) つけてなあ

ー コ コ コーユー マルイノ スメァモ ゴメァモ ジュメァ  
xx xx こういう 丸いの 四枚も 五枚も +枚

モナー ( C ウン ) (21) トゴロドゴロサ オエデヨ ツカン  
もなあ ( うん ) 断々に 置いてよ 時間(め)

キレバ コー アゲンダバ ヤー (22) ドンダガーテ。  
来ると こう 揚げるとなら やあ どうだろうかと

C ( ヤー ) オエノ ワラハ ンド ンドダケア ( B ウー ) モスロ  
( やあ ) 俺家の 子ども達は ( うん ) おもしろ

カッテ コンダ ハステッテ ツケルアダエナー。ソヘバ マンダ  
かって こんど 走って 行っ つけようたよなあ。そうすると まだ

ナンボデモ ツデ キルアツ ウン。

いくらでも ついて くるのだ うん。

B アノ がニ エマ ドゴサ エッタ モンダガサ ハー ナー。ア  
あの 蟹(は) 今 どこに 行った ものかしら はあ なあ。あ

レホド エダモノナー。

れほど いたものなあ。

C ホンダキャ ミテステモ エネア。  
そうたよね 見たくても いない。

A チョ ンド アレア ツギダバ ( B ウン (23) エマ コエカラ ) エ  
ちょうと あれは 時期なら ( うん 今 これから )

ネガリー ( B コエカラダネ ウン コエカラダネ ) コエカラ  
船刈り ( これからだよ うん これからだよ ) これから

ダネナー。ソーヘバ ヲヨンド カニ コエデヨー (B ウン) ア  
だよなあ。うん すると ちょうび 蟹(あ) 肥えてよう (うん) あ

ー カニノ コーラノ ミソ メァテ アラ ナー (B 7 7  
あ 蟹の 甲羅の みそ うまいって あらあ なあ (xx

マカニッ テナー アーアー) (笑) ナカニモ メカニ メァフ  
熊蟹ってなあ ああ ああ なかにも 雌蟹(あ) うまかつ

タエナー。

たよなあ。

B メァフター ウン。  
うまかつた うん

C (24) メァカニノ コー ハッテナー コーステ ナヘバ タナ コー  
雌蟹の 子(あ) はいって な こうして なせば いやもう 子

ハッテナー。

はいって

A (26) ミンナ ハー ナモカモ ハー ツット カミガラ ガニ ツル  
みんな はあ 何もかも はあ ずっと 上から 蟹(あ) 釣る

フトァ (B エギアッテナー) エギアッテ マッテナ。  
人は (行き会ってなあ) 行き会って しまってた。

B マツガッテ トナリノ アヅ アゲダ オエノ アツ アケネッテ。  
まちがって 隣の やつ(あ) あげた 俺の やつ(あ) あげないという。

(笑)

C ケンカ ステナー (笑) アー。  
喧嘩 してなあ ああ

## 注記

- (1)(2) [nī] の [n] の脱落。そして [i] は [e] と発音が混同することもしばしばである。あるいは [i] は [e] に吸収されてしまうことが多い。
- (3) 「(オガサ) ナゲレバ」。「オガ」は後文に出るが、この場合「岸辺」の意。
- (4) 「ヤ」は感動・終助詞。「オゲ」がたぐさんいることに対する感嘆。
- (5) 「～なす」「～をなす」の言い方は話者Cの口ぐせ。この場合「捕って」の意。
- (6) 「マグラ」は柳の枝を束ねたもので即製の漁具。
- (7) 前行の「コー オステロ～」から以後の文脈を整理すると「ヤナギ(の枝を)キタゲテ マグラ コヘデ コー(川の中を)オステ(行く)」の意。
- (8) 「晩の、仕事が終わった食事に」の意。
- (9) 魚料理の一つ「たなさ」。酢をかけ大根おろしをつけて酒の肴にしたり、すり身にしてかまぼこのように煮て食う。
- (10) 「カニツカ(のハダギは)」
- (11) 文脈上、5行後の「フルマヤスミ」へかかる。
- (12) 「オラホノ(村の)」
- (13) 「そっくりそのまゝ全部」
- (14) 「箱眼鏡」のこと。底にいる魚を見て捕る漁具。
- (15) 「エデタ」は標準語にない過去完了の表現法。
- (16) 「ヅ」は聞き取りが困難。「正月持つ(正月に使うため蓄えておく)」の意か。それとも「モヅ」は不要のことばが不明。
- (17) 「トストリノス(のご馳走に使う)サゲ」の意。
- (18) 「(馬を)カワサ ミヅ アブヘニ(連れて)エテ」の意。
- (19) 「マス(を餌に)ツケデ」
- (20) この場合「煮て甲羅をとると」とか「食うと」の意。注記5参照。
- (21) 聞き取り不可能。
- (22) このあと「どうだろうかと思ってみるとすごい大漁だ」という内容

のことは省略している。

(23) 「これからが蟹を捕る時期だ」の意。収録日が9月5日であり、9月下旬になると稲刈期に入る。その頃が蟹を捕る時期である。

(24) 「メアガニノ(腹の中に)コ」

(25) 「蟹の甲羅をとると」の意。注釈(5)参照。

(26) 「カミ」は「川の上流」のこと。

7. 島 山 ( 岩 木 山 ) 参 詣

話し手

(略号) (氏 名) (性) (生 年)  
 A 桜田 鉄彌 男 明治36年生れ  
 B 八木沢千代三郎 男 明治43年生れ  
 C 棟方 トミ 女 大正2年生れ

B ウー マー コナイダノ オヤマサンケーテ エマ サベタ トー  
 うん まあ この間ウ お山参詣 といつて(1) 今 シャベ、た とあり

リ ウー ソー ナンデ ンテ ナフテ アツタケ ンドモー マー  
 うん そう なんだ といつて なか、た けれども まあ

ムガスサ クラベレバ" ナンダ"ナー オヤマサンケモ ウー ダン  
 昔に 比べると なんだ"なあ お山参詣も うん だん

ダンダンダン ア カ ンヅモ スグナグ ナツタスナー アノ (   
 たん だん だん あ 数も 少なく なたし なあ あ

(3)  
 A ウー ン ) ブブブ サイギサイギ バタラバタラヨー ( A  
 うーん ) x x x x x 祭祀 祭祀 ばたら ばたらよう

(4) (5)  
 ウー ン ) ムガスワ ビツ ツドダモツ タケドモ エマダバー ( A  
 うーん ) 昔 は 村人みんなだと思つたけれども 今なら

ウー ウン ) サッパリ コー ダンダンダンダン コー サカッ  
 うん うん ) さっぱり こう だんだんだんだん こう さがっ

(6)  
 テ キタデ" ネァガー。 ウー。  
 て 来たか? なりかなあ。 うん。

A *~~~~~* コネンダモ エッテモ エフテタベナー。  
この間も 行っても 良かっただろうなあ。

B ウー エー エー エーテバ エーンタ モンダバタテヨー。ム  
うん *xxxx* *xxxx* 良いといえば 良いような もんだけれどよう。昔

ガスサ クラベレバヨー ムガスサ クラベレバ コツガラ コー  
に 比べるとよう 昔に 比べると こっちから こう

ウー カラダ キヨメデ エッテ オナゴンド アノ ハエラエ  
うん 体を 清めて 行って 女達(ガ) ああ はいられ

ネァンタ (A  $\frac{\text{アー ム}}{\text{ああ *xxxx*}}$ )  $\frac{\text{アー ユー ツダエガラ}}{\text{ああいう 時代に}}$  クラベレバ  
ないような

ヨー。  
よう。

A ウー ムガスダバナー ソエゴソ マ オモネ ワゲァ フトバリ  
うん 昔ならなあ それこそ ま 主に 若い 人ばかり

ウー コーリ トテ マー ムラノ オミヤサ ナ (B ウン  
うん 垢離(を) として まあ 村の お宮に な うん

) エッシューカンモ チョンド エッシューカンドナ (C エッ  
ー 週間(ク) モ ちょうど ー 週間(ク) だな ー

シュカンドタ  $\frac{\text{~~~~~}}{\text{週間(ク) だった}}$  ) コーリ トッテ ホロー。  
週間(ク) だった 垢離(を) として ほらあ。

B カラダ キヨメネ トマッテナー。  
体 清めに 泊ってなあ。

A アー トマッテ アー トマッテ ハー ハー ナー  $\frac{\text{エ}}{\text{xx}}$   $\frac{\text{ソ}}{\text{xx}}$   
ああ 泊って ああ 泊って はあ はあ なあ

$\frac{\text{ソ}}{\text{xx}}$  エグネァ ゴト ハー サエネァ ワゲダ。  
良くない こと はあ されない わけだ。



B (笑) ウン エグネ ゴト。

うん 良くない こと。

A ヘバ <sup>(8)</sup>ハヅ<sup>(9)</sup>ネカテ エグネァ ゴト ステ エグバ ウー トカメラエデ <sup>xxxx</sup>ゲデ<sup>x</sup>  
すると ハに 良くない こと し て 行くと うん とがめられ?

<sup>(10)</sup>  
ゲデスーテ ( B ウン ) ウー ヤマサ ノボエネァ テナー。  
懈怠するとして ( うん ) うん 山に 登れないといって なあ。

( B ウン ) スタハデ ハー フゲモノ ハー エグネァ ゴト  
( うん ) そうだから はあ 若い者 <sup>(11)</sup> はあ 良くない こと

<sup>(11)</sup>  
サネァ エッ ショ ケンメァ ホラー ( B ウン ) アノー ミ  
しないで - 所 懸命 ほらあ ( うん ) あう

<sup>(12)</sup>  
ンナ カワ ソバネ アルグドゴネ ( B ウン ) ウー オミヤ  
みんな <sup>(12)</sup>川 <sup>(12)</sup>そばに ある 所には ( うん ) うん お客 <sup>(12)</sup>

<sup>(13)</sup>  
アルハ ンデ、  
あるから。

B ヨル エサ ニゲデ キタリ スタ ヘトダラ ゼッ タエ マエン  
夜 家に 逃げて 来たり した 人なら 絶対 だめ  
ダナー。

だなあ。

A マイネ。 ( B ウン ) コンダヨー アサマネ ハー クレァネ  
だめだ。 ( うん ) こんどよう 朝に はあ 暗いうちに

オギデ ( B ウン ) コーリ トルアダエナー。 ( B アー  
起きて ( うん ) 垢離 <sup>(14)</sup> とるのだよなあ。 ( ああ

<sup>(14)</sup>  
サ ンブエ ツギダエナー ( ウン ) ヤー ゴサノ ウン ゴサノ  
寒い 時だよなあ ( うん ) やあ 合子沢の うん 合子沢の

アノ カワノ ミ サ ミ ンツ ( B ウー シャコイ ミヅ )  
あの 川の 水 <sup>(15)</sup> ( うん 冷たい 水 )

サッ コエ ンダベ。エヤ シャッ コエノ サッ コグ ネァ ノッ テ ヨー  
冷たいんだらう。 いや 冷たいの 冷たく ないのってよう

( B ウン ) ソステ ホロー コーリ トッテ。  
うん) として ほうあ 垢離(を) とって。

C ホンダヤー オラノ エネ エデ ツセァ ツギダバヨー ( B ウ  
そうだよ 俺の 家に いて 小さい 時 ならよう ( う

ン) オエノ エー チョ ンド オミヤノ ソバダアツ。 ( A  
ん) 俺の 家 ちょうど お宮の 側 なのだ。 (

アーン B ウン) スタドゴデセァー コンダ アノー サンケ  
ああ うん) そうたからよう こんど あう 参詣

トド ヨル ( A アーア B ウン) テーゴ タダエデァ コリ  
人達(が) 夜 ( ああ うん) 太鼓(を) 叩いて 垢離

トニ エグニ サーイギ<sup>(15)</sup> サーイギテ サイギ ヨンデヨー (   
(6) ヒリに 行く(に) 祭祀 祭祀といって 祭祀 読んでよう (

A アーア B ウン) ソステ コンダ カワサ コーリ トニ  
ああ うん) として こんど 川に 垢離(を) ヒリに

エグアツ キゲバセナ ( A B ウン) ナンボ フラハ ンドナガ  
行く (を) 聞く(と) よな ( うん) いくら 子ども(が) ながら

ラデモ レァ ( B ウン) ナミダ デルエ ンテ アッタテ  
にでも ああえ ( うん) 涙(が) 出る(よう)で あったよ

( A ウーン ) ウーン。  
うん) うん。

B コヤ カゲデ トマテルンダエナー。  
小屋(を) かけて 泊まってるんだよなあ

A ウー オミヤ ( C オミヤデ) ネァ ドゴダバ。  
うん お宮(が) ( お宮) ない 所(を) なら。

C オミヤノ ネァ ドゴダバ。 ( B ウンウンウン ) ホンダバテ  
 お客の ない 所なら。 ( うんうんうん ) そうだけれど  
 (16)

オラホーダバ オミヤ アッテタハ ンデ ( A アー ) コンダ  
 俺の方なら お客(か) あったから ( ああ ) こんど

ハヤス ( B ウンウン ) ハヤスタ ホラ ハヤスネ エデヨー  
 林 ( うんうん ) 林という ほら 林に いてよう

テァゴ タダエデナー。

太鼓 叩いてなあ。

B ヤジャグノ フト ンド コ コゴノ カラ (18) カラメデ ソエゴソナ  
 ハッ役の 人達 (体) x x x x x x 石川原で それこそなあ

ニ。

A コゴノ スタネ エデナー ヤジャグダバ ラー。  
 ここの 下に いてなあ ハッ役なら ああ。

B ウー ヤタエナー オナゴ ンド オナゴ ンドテバ マー ナンダケ  
 うん やったよなあ 女達 女達といえは まあ なんだ

ドモ ゼンゼン コノモノ モッテ キタリ ( A アーアーア  
 けれども 全然、 この 物(を) 持って 来たり ( あああああ

ー ) ナニ モッテ キタリ スノ ウゲツゲネァ ツ ワゲデネァ  
 なに 持って 来たり するの 受け付けられないという わけではないか

ガ ヨラエネァ ンダツケナー。 ( A ウンダ )  
 寄られないんだという話だなあ。 ( そうだ )

C スタラセァ ズット コー ナワ ハッテ マッテヨー ( B ウ  
 だってさ ずっと こう 縄(わ) 張って しまつてよう (

ンウン ) ゼッタエ ハー オナゴ ンドダケア ( A アー )  
 うん ) 絶対 はあ 女達は ( ああ )

コッ チャ ハッ テ エガエネヤダモノ。

こっちへ はいって 行かれないのだもの。

A ソゴサ コー ナワ ハッ テ ゴフェ ツケデナー ステ ハー  
そこへ こう 縄(を) 張って 御幣(を) 付けてなあ そして はあ

エツデモ ホロー コリ トネ エグ ツギ テァゴ タデァデ  
いつでも ほらあ 垢離(を) とりに 行く 時 太鼓(を) 叩いて

ハー ( B ウン ) ウー サーイギ サーイギテ ハー ( C  
はあ ( うん ) うん 祭祀 祭祀といって はあ

ウン ) ヨンデ ソラ ( B ウン ) コーリ トネ テァゴ タ  
うん ) 読んで そら ( うん ) 垢離(を) とりに 太鼓(を)

デァデ ( B C ウンウン ) ウー ステ エグ ワゲセー ウー。  
叩いて ( うんうん ) うん そして 行く かけよ うん

(20)

B ステ ムラマワリダエナ ( A ウン ) ムラメァ ムラメァテ。(  
そして 村回りだよね ( うん ) 村めえ 村めえといって。

C ウー ) ウー ( A ウー ) ムラマワリ。アノー エーセン  
うん ) うん ( うん ) 村回り 。 あいう ー 銭

グラド ニセングラ モッ テナー。

だうと ニ銭だう(を) 持ってなあ。

C ジェンコ ミガエデヨー。( B ウー ングベ ) コッ チャ スレ  
銭ニ(を) 磨いてよう。( うん そうだう ) こっちに 白い

(21)

ア アレ キヘデナー ( B ステナー ジェンコ コゴサ ヘデ  
あれ(を) 着せてなあ (そしてなあ 銭こ(を) ここに 入れて

(22)

A アノー ) サンジャグ スメラヘデ スレァ ヤヅ ハヅマ  
あいう ( ミ尺帯(を) 締めらせて 白い やつ 鉢巻き

ギ サヘデ ー。

(を) させて。

B アレー カンドカンドデ コー ジェンコ マグエンター。 (A  
あれえ 門 門 で こう 金こ (を) まようたなあ。  
ンダ" ) カンドカンドデ ウー。  
もうた" 門 門 で うん

A ナニ ナニセヨー アノー スレァ ヤヅ キテ ハヅマギ ステ  
xxx なにせよう あの 白い やつ (を) 着て 鉢巻き (を) してな  
ナー (C 咳は"らい) システ コゴサー クレァ アノ ヤヅ  
あ (そして ここに 黒い あの やつ  
ー ハラオ ンビダガ ナニ スツテ コゴサ サンケヘン ヘデ  
腹帯か 何 (を) 縫って ここに 参詣金 (を) 入れて  
(C ツブンノナー テオ ハガヘデ) ヤー アレ ヘンダグ"  
自分の なあ 手覆い (を) はかせて やあ あれ (は) 衣装 (を)  
ミ ンダ" バリデモヨー。 (B ホンダエナー) ウー ステ ミン  
見た はかりでもよう。 (とうた"よなあ) うん として みんな  
ナ ワゲモノ ナンジューニンモヨ ニジュニンモ サンジュニン  
若い者 何十人もよ ニ十人も ミ十人も  
モ アー ソツコツ ミンナガラ エグハ ンデ" ゴ ンジューニンモ  
うん そちこち みんなから 行くから 五十人も  
ログジューニンモ (26) アエステ ゴフエー モツテ (C アンマ  
六十人も あれして 御幣 (を) 持って (あんま  
(27) リ オキ ゴヘ モツテナー) ムラ マワテ アサゲバ ホント  
り 大きい 御幣 (を) 持ってなあ) 村 (を) 回って 歩くと ほんと  
ネナー マーマー。 (28)  
になあ まあまあ。

B ウー エー エサモ コー アレ ハッテナ ソゴノ エサナー。  
うん xxx 家にも こう あれ (を) 張ってな そこの 家になあ。

(30)

C トスナバナー トスナ .

年 縄をなあ 年 縄 .

B ンダ トスナ ハッテナー .

そうだ 年 縄 (を) 張ってなあ .

A エグ ホレ ソノ ワケモノ サンケト エグ エダバ ハー ソ  
行く ほれ その 若い者 (が) 参詣人 (として) 行く 家なら はあ

(31)

エゴソ ジューニグヅサ サオサ コンダ ホラー トスナ ハッ  
それこそ 門口に 竿に こんど ほら 年 縄 張って

(32)

テ ゴフェ ツケデー アー へバ ハー ( B うん )  
御幣 (を) つけて ああ すると はあ うん

ノー ドゴノ フト キテモ ハー コッカラ ソロー エワキ  
う どうの 人 (が) 来ても はあ ここから そうあ 岩木山に

サンサ サンケニ エグ フト ワケモノ アルナー ウン .

参詣に 行く 人 (として) 若い者 (が) あるなあ うん .

C フタリ アレバ フタツ トスナ ハッテナー . ( B ウンウン )  
二人 いると ニつ 年 縄 (を) 張ってなあ . ( うん うん )

アラ コゴデ フタリ エグナツ コト ワガルアダ (笑) (   
あら ここで 二人 行くなあという こと (が) わかるのだ )

A ウーん ) ウン .  
うーん ) うん .

(33)

A ハ アラー ヤット エタ ゴト ネンデ ハヅメネ エゲバー  
x x あらあ や、と 行った こと なくて 初めて 行くと

(34)

(35)

( し ハヅマエリ ) アゲ ハヅマエリ ンダ アゲ ゴフェ コ コ  
初詣り x x x 初詣り (の) 赤い 御幣 (を)

ンダ マンジェデナー アー .

こんど 洗ってなあ ああ .

C ツケテ マ ン ジ ュ テ<sup>(36)</sup> コゴカラ ハツマエリ エグアデァ ホロー  
 つけて 混ぜて ここから 初詣り (か) 行くのだよ ほらあ  
 (笑)。

A アー コゴノ オドゴ<sup>ン</sup>ド ホロー エマ ハツメダナ アゲァ コー ゴ<sup>×××</sup>  
 ああ この 男達 (は) ほらあ 今 初めだな 赤い

フェコ アノ キタケタ ヤツ コー サケルドゴテ スレァ ヤ  
 御幣 (で) あろ 切った やつ (を) こう 下げるので 白い

ツバリ サケデレバ オー コゴデ ナンクァ エモ ハー エッテ  
 やつばかり 下けてると ああ ここで 何回も はあ 行って

ルアダベナー。 ( B ウン ) アゲ ヤツ サケデレバー ロー  
 いるのだらうなあ。 ( うん ) 赤い やつ (を) 下けて いると ほらあ

コゴノ ワゲモンコ エマ ハツメデ エグアダナテ ( B C 笑  
 この 若い者 (か) 今 初めて 行くのだな といって

) ソステ ワガル ワゲダ。ドゴカラ キテモ ミレバ。ステ  
 もして わかる わけた。どこから 来ても 見ると。もして

エッペ マー ソエゴソ マー ロー ムラマリスー ツギダバ  
 いっぱい まあ それこそ まあ ほらあ 村回りする 時なら

(37)  
 オラホス ツブ<sup>ン</sup>ノ ムラバリデ ネァネナ ナンクァ ツモ カケ<sup>×××××</sup>  
 俺方 自分の 村ばかりで ないよなあ 何月も かけて

デ アセァテ。 ( C 咳ばらい )  
 歩いて。

B エヤ オヤ オヤグマギノ フトー ソエゴソ ( A ウン ) オ<sup>×××</sup>  
 いや 親戚の 人 それこそ ( うん )

ヤグマギタテ エッタテバ ワラハ<sup>××</sup>ンド<sup>××</sup>ド<sup>××</sup>ンダバ ソエゴソ カ  
 親戚 といっても 行ったという 子供たち なら それこそ

シドニ マヅデデナー ( A ウン ) ヤー エノ フトモ マン  
門ロに 待っていてなあ ( うん ) やあ 家の 人も また

ダ ホロー ドコノ ダエターテ ワラハント キテネベガーツガ  
ほらあ どのの 誰だといって 子ども達 (か) 来ていないだろうか (思っ?)

ソノ ソノ フト マ ンダ パット ジェンコ ケデ エグダエ  
xxx その 人 (は) また ほっと 銭こ くれて 行くのだよ

ナー。

なあ。

C ジェンコ ケルドゴデナー ( B ダエタリ カ ンダサ ジェンコ  
銭こ (を) くれるのでなあ 誰なり 彼なりに 銭こ

ケル ンデ ネンダエラー ) ミンナ デハテ ヤラゲデ ジェン  
くれるので ないのだよあうあ みんな 出て 奪い合って 銭こ

コ モラネ デハラダベア。 ウン ジェンコ ツッパド オヤグ  
(を) もらいに 出るだろう。 うん 銭こ (を) いっぱい 親戚

(40)  
マギ ヨゲダ フトダバ ジェンコ ツパド ワラハントデモ モ  
(か) 多い 人なら 銭こ (を) いっぱい 子ども達でも

ラルキャ。 ホレ モスレァテナー (笑)。

もうよね。 それ(か) おもしろいといてなあ。

B カドサナー マヅデデ。

門になあ 待っていて。

(41)

A ソエデ ロー アル ソエゴソ ドゴムラサ エテモ オミヤ ア  
それで ほらあ あり それこそ どこ 村に 行っても お宮 (か)

レバ ソゴサ カナラソヅ ソラ オミヤサ ホロ ミンナステ エグ  
あると そこに 必ず そら お宮に ほら みんなして 行く

フト ンド サンケス ワケダ。 アー コンササマサ エゲバ コ  
人 (は) 参詣する わけだ。 ああ 庚申様に 行くよ



ンスサマサ ( B ウン ) エグエネナー。  
 鹿申様に うん 行くように なあ。

C ソゴサ エッテ ジェンコ フララダエ ロー。 ( B ジェンコ  
 そこに 行って 銭こ(を) 拾うのだよ ほらあ。 ( 銭こ(を)

フララダエナー ) オミヤノ ナカサ サンケ サネデ コンダ  
 拾うのだよなあ お宮の 中に 参詣 しないで こんど

チョンド トリヤドゴノ ホゴ マワテ トッラ エグドゴデ (   
 ちょうど 鳥居所の そこ(を) 回って 通って 行くので

A ウン ) ホゴサ コンダ ナゲ マグキヤー。 ヘバ ミンナ  
 うん ) そこに こんど 投げ<sup>(42)</sup> まくよね。 すると みんな

ワラハント ヤラゲデ コンダ (笑)。

子ども達(が) 奮い合っ て こんど。

B コーモリ サガサニ スタリステ ラー。 ( B 笑 ) ワラハン  
 こうもり傘(を) 逆さに したリして あらあ。 ( 子ども達。

ド。

A ウー コーモリ コステ サガサニ スース ワラハントモ アッ  
 うん こうもり傘(を) こうして 逆さに いいいる 子ども達も

タエナー。 サガステ ロー。 コーモリダバ ロー グット  
 あったよなあ。 賢しくて ほらあ。 こうもり傘なら ほらあ ぐ、と

ナゲレバ ハー ハエリヤスベー。 ( A B C 笑 ) ウン ソタ ワ  
 投げると はあ はいりやすいだろう。 うん とうい

ラハントモナー アテ。コンド マダ アラー タムラサ マワテ  
 子ども達もなあ あって。 こんど また あらあ 他村に 回って

エゲバ ソラー オエノ オヤグマギノ ウスタデダラ ウスタデ  
 行くと とうあ 俺家の 親戚の 牛館なら 牛館の

ノ ダレソレァ アノ エグヅテ エマ オラホサ クルゼテ ヘ  
誰 それ (母) あつ 行くという 今 俺方に 来るよって 言

レバ マツデテ ( B 笑 ) アー コンダ サンケヘン ア ケ  
えは 待っていて うん こんど 参詣 銭 (金) うん くれ  
(43)

ル ワゲセ ア。 コエデ マ サンケ アー ステ コエジャ ー  
る わけよ うん、 これで ま 参詣 うん して 来いよという  
テ うん。  
うん。

B トニカグ アノ アダリ サンケニ エグテバ ソノ カマド ハ  
とにかく あつ あたり 参詣に 行くという その 家庭 (母) はあ

ー タンケ コー ナー ジェン スタグ サネバ マネフタスヨ  
かなり こう なあ 銭 (金) 支度 しないと だめだったでしょう。

ー。 ( A ウー ) サンケヘンタチナー エマド ツガテ エッ  
うん 参詣 銭 といったってなあ 今と 違つて 一銭

セン ニセンタテ タエスタ モンデタダオナー。 ( C ウン  
ニ 銭 といつても 大した もんで あつたんだもん なあ。 うん

タエスタ モンデタ ) ナンボ カガルテ ラー ウン タエスタ  
大した もんで あつた ) なんぼ かがるという ああ うん 大した

(44)

ソエサ カマドノ ナンデアタデア ウン。  
それに 家庭の なんでも あつたんだ うん。

A ヘン ハンダグ ホラ ノー スレア ヤヅ キテ ハヅ スレア  
××× 衣 装 (つち) ほら のう 白い やつ (を) 着て ××× 白い

ハヅマギステ コゴサ コンダ アノ クロエ キャハン アレ  
鉢 巻 して こにに こんど あの 黒い 服 料 あれは

ア マグヤデ ナグ タダ コー ヤラヅ ハエデ テ ワラヅ  
巻、うで ちく ちく こう やるや、 (を) はいて とい けらじ

ハエデ ( C ハエデナー ) ナー。 アーステ ナンダ エマ  
はいて ( はいてなあ ) なあ ああして 何だ 今

カンガエレバ ヨー アノ ヘンダグナー ムガス アーヤテ マ  
考えると よう ああ 衣装(は)なあ 昔 ああやって

ガナテ エタ ヘンタグ エマサ ナレバ ナンモ アーユー カ  
まかなって 行った 衣装(は) 今に なると なにも ああいう

ダツ ナグ ナツタス。 ( B アー ) ホントネ ケアッテ オ  
形(か) なく なったし。 ( ああ ) ほんとに 却って

ユワキサン ナンダ オヤマサ サンケニ エグネダバ ムカスノ  
お岩木さん(はあ) 何だ お山に 参詣に 行くのなら 昔の方

ホー エーフタ ナー。

(あ) 良かった なあ。

(45)

B エーフタ アッタ。 ソステ カエリ バッタラ ヤッテ クルテ  
良くて あった。 そして 帰(か)り(い) ほったら やって 来るという

テーシャバサ コンダ ムラジュー ムゲアネ ( A 笑 ) エ  
停車場に こんど 村中 迎えに

グアダエナー。 ウー ソステ コンダ テーシャバメァガラ テ  
行くのだよなあ。 うん そして こんど 停車場前(まえ)から

ーゴ タデァデ ( 笑 ) ( A ウン ) エマ オモエバナー。  
太鼓(は) 叩いて ( うん ) 今 思えばなあ。

( A ゴフェー タデデ アノー ) バッタラ バッタラ バッタラバ  
( 御幣(ごへい) ) 立てて ああう ほったら ほったら ほったら

ウタラ バッタラテ オドテ クル ワゲダ ホロー ウン。  
ほったら ほったらと 歸(か)って 来る わけた ほらあ うん

A ヤマ カゲダテ ナー。

山 かけたという なあ。

C ヤマ カゲル ツギ スタハンデ ワー アノー カダテテヤ アノー  
山 かける 時 だから 吾(わ) あのう ついて行って あのう

オミヤノ メーサ アノ メヘヤ テハベア。(B ウー) アノ  
お宮の 前に あの 店屋(が) 出る(だ)う。 (うん) あの

メヘヤノ ナガサ コンダ テント カゲダ ドゴサ コンダ  
店屋の 中に こんど テント(を) かけた 所(を)に こんど

フトリ エッサ アカテタス (B ウン) ワ コンダ ワラス  
一人 上に 上がっていたし (うん) 吾(わ) こんど 幼児

ヘデ エテ トマタ ワゲセア。(A/B ウン) ステ コンダ  
連れて 行って 泊(た)また ぬけよ。(うん) として こんど

ホラ ホツチャ コンダ ネデーヤツヨ。(B ウン) ネデデ  
ほら こんにに こんど 寝(ね)ているのよ。(うん) 寝(ね)ていて

コーヤステ オドガテ テンジョ ミダヤツヨー。(B ウン  
こうやって 目覚めて 天井(を) 見たのよう。(うん

) ヤ ジャックド コノ エッパパラノ ホス ジャックド カ  
いや ずらりと この 上(うへ)ぼらの 星(ほ) ずらりと

ダマツテ ホス アラアツ。(A ウン B アーアー) ヤー  
固(か)まて 星(ほ) がある(あ)のだ。(うん ああああ) やあ

ヤ ナーテ アコネバリ ホス カダマテル モンダベガステテ。  
やあ どうして あとこには(は)かり 星(ほ) 固(か)まってる もんだ(う)うかと思(おも)って。

(A ウン) スタキャ ムガスタバ ハヤグ エグドゴデ タエ  
(うん) したら 昔(むかし)なら 早く 行く(い)ので 松明

マツ (B ウンウン A ウンウン ウーウン オユワキサ  
(うん うん うん うん うーん うーん お岩木(いわき)さんの

ンノ) タエマツ アガステ コノ オユワキサンノ エッパパラ  
松明(を) 明(あ)して この お岩木(いわき)さんの 上(うへ)ぼら(を)

コー アリテラアツ ホスネ メァダ ワゲ。 オモエデニ ナ  
 こう 歩いているの (か) 星に 見えた わけ。 思い出に

ル アレ ( B ウー ) ウン。  
 はる あれ ( うん ) うん

B エマ アレカラ ミレバヨー ( A ウン ) エマノ ホー ツッ  
 今 あれから 見るとよう ( うん ) 今の 方 ずっと

ト コー ウー サ ( A シャ サビスエナ ) サビスエナ。  
 こう うん ( x x x x さびしいな ) さびしいようだ。

C エマ ステモヨー オナゴンド ( A アーアーアー ) アガル  
 今 それでもよう 女達 ( B ああ ああ ああ ) 上がる

ヨノナガダ モノ。ナンモノー (笑)。  
 世の中だ モノ。 何ものう。

A コンダ ヤマ カゲデ クレバ ホロー ン コンダ ナンダナー  
 こんど 山 かけて くと ほろ うん こんど なんだ なあ

ミンナ コンダ<sup>(47)</sup> メンコ カテー アレア ( B オゴス カテ  
 みんな こんど お面(を) 買って あれは (おこし(を) 買って

) カプテア。  
 被って。

C エー ヤマ カゲダジャ。 ツダツヤマ カゲダジャ テヤ  
 「良い 山 かげだじゃあ。 一日 山 かげだじゃあ」といって。

A エー ヤマー ( C 笑 ) カゲダー。 コアー ツダツヤマ カ  
 「良い 山あ ( x x x x かげだあ。 一日 山

ゲダジャ テナー。 ( C バタラ バタラ テノー ) バタラ バタラ  
 かげだじゃあ」といってなあ。 ( はたら はたら といふなあ ) 「はたら はたら

バタラヨーテヨー ミンナ ハー ナンジュー ニンモステ ステ  
 はたらよう」といって よう みんな はあ 何十人 もして として

ホロー オリデ キテァ ステ ハー ヘロサギマデ アノ ヅ  
 ほらあ 下りて 来て として ほあ 弘前 まで ああ

ギダバ アヘテタバァ ナー。 ( C アヘテバリダ ウン ) ヘバ  
 時なら 歩いていたらう なあ。 ( 歩いてばかりだ うん ) すると

エギマ ンデ エゲババー アラー コンダ ムラノ フト コンダ  
 駄まで 行くと あああ こんど 村の 人(は) こんど

マ ンダ ヨー アー ジェァンゴノ オラホノ サンクト モド  
 また よう ああ 田舎の 俺方の 参詣人(が) 戻

ルヅヲ ミンナ ワゲァ エ エガネ フト ンド ( C 笑 ) ワ  
 うという みんな 若い <sup>xxx</sup> 行かない 人達

ゲモノ ガラナー ( B ミンナ ムゲァ ニ エグダエナー ) トシ  
 若い者からなあ ( みんな 迎えに 行くのだよなあ ) 年

ヨリ ガラヨー コンダ テァゴ モテテ コンダ テシャバネ マ  
 寄りからよう こんど 太鼓(を) 持て行て こんど 停車場に

ヅデル ワゲセァ。 エー ヘバ コンダ オリデフレバ ラ ナ  
 待っている わけよ。 ああ すると こんど 下りて来ると あああ

ー コンダ マダ ソノ フト。  
 なあ こんど また その 人

C マダ ハスゴ バダウ バダラター アー ( 笑 )。  
 また 踏 段(を) ぼたら ぼたらというて ああ

B バダラ バダラテナー。 ウー コレマデ キタダエ。 ホロー、 ( C  
 ぼたら ぼたらというてなあ。 うん これまで 来たのだよ。 ほらあ。 ( 笑 )  
フレバ ハー。  
 来ると ほあ。

A コンダ アオモリノ ホロー ソエゴン テシャバガラ コンド  
 こんど 青森の ほらあ それこそ 停車場から こんど

マダ ベヅニ マシダ ハー ケンキ ツテ ミンナ メンコ カ  
 また 別に また はあ 元気 について みんな お面 (色)

(50)  
 アテ ユンダ ハー マヅー アー エー ヤマ カゲダジャ－  
 被って こんど はあ 町 (色) ああ 悪い 山 かけた"じゃあ

ツ－ダ"ツヤマー カゲダジャ－テ (C 笑) ラ テァゴ" タデ  
 一日 山 あ かけた"じゃあ" といって ああ 太鼓 (色) 叩

アデ" フェ フェ ツ アノ－ ラ フェ ツケテ" テ ハー エ  
 いて ×××× ×××× ××× あいう ああ 笛 (色) つけて とい はあ 実

マデ" ハー クルアダエナー。

まひ はあ 来るのた"よ なあ。

(51)  
 C テ" キルアダモノナー。  
 て" 来るのた" もの なあ。

B エサ キテモ マダ フトスゴ"ダ"タエナー。  
 家に 来ても また ー仕事 た"た"よ なあ。

C エサ キタタテ コント" ムラ マシダ" マワツテ アルグ"ア"ダ"エ  
 家に 来たといつも こんど 村 (色) また 回って 歩くのた"よ"なあ  
ナー アー。  
 ああ。

A ニギヤガ"テ" ニギヤガ"デ"ナー。  
 にぎやかで にぎやかで" なあ。

B テ スエガ" フトキリサ オゴス (A ウン) メンコ (C  
 とい 西瓜 ー切れに おこし (うん) お面 (色) (

(52)  
 ツケテ"ノ－ A アー) ソカラ アエ エヌノフェ"テ" ネアス  
 つけてのう ああ) くれから ああは、どくだみで" ないし

(53)  
 ナンダ"キャ (C センフリ) センフリ"ダ"ガー (A ミヤケニ  
 なんた"た、け (せんぶり) せんぶり い 工産に

ナー ) ミヤケニ ニケッ アツヨー アエ ツケテ ハー コー  
 なあ ) 土産に 若い やつよう あれ つけて はあ こう

マワス ワゲダー。

回す めけたあ。

A カナラツ ( C ウンダ ) エサ エサ フレバナー ミヤケ マ  
 必ず ( そうた ) 家には 来るとなあ 土産 (他)

ワステ。

回すといって。

B テ タエスタ エマダバ ツユーダバタテ ホラ タエスタ カネ  
 じゃあ 大した 今なら 自由だけやと ほう 大した 金め

カカタダデバ。

かかったのだあ。

C カカタ ウン。  
 かかった うん。

A ウン ダエエツ ハー エワキサシノ メンコダバ ハー ナンタ  
 うん 第一 はあ 岩木山の お面 なら はあ どうしても

カタダナ。ミヤケニ ツケテ。

だなあ。土産に つけて。

B ナンタカタ ツグアダ。

どうしても つくのた。

C メンコド センフリダバ ナンタカタ オゴスド。

お面と センブリなら どうしても おこしと。

B テ スエガ ホラ フトキリ ( C 笑 ) ( 笑 ) 。

じゃあ 西瓜 ほう - 切れ。

A ソ ソエデ コンダ ホロー コンダ ミンナ モドテマレバ ツ  
 じゃあ こんど ほうあ こんど みんな 戻ってしまうと



(54)

ギノス コンダ アンゴワガレダテ ホレ ミンナ コンダ マダ  
 次の日 こんど 解散の宴会だ といって ほれ みんな こんど また

ツギノス アツバテ ソラ ノミクエステナー ( B ウン C  
 次の日 集まって そう 飲み食いしてなあ うん

ウンダ ) ウン。  
 そうだ ) うん。

C マヅ ニギヤガデター。  
 ます にぎやかであつた。

B エッテモ エガネフテモナー ( A ウン A ミンナ ) ウン  
 行つても 行かなくてもなあ うん みんな うん

スタハ ンデ アノ アダリ ソエゴソ ハー ナンデアタネ ウー  
 だから あり あたり ちいこそ はあ なんてあつたよ うん

ヒンボモノ ヨグ テァギカテ タ ウッテ ( C 笑 ) マタ  
 貧乏者 (お) よく 大儀から 田(を)売って した

ヅ アッテタテバ。ナンモ ヤエネス ホラ。 ( A ヤット E  
 という着(が)あつたということだよ。 なにも やれないし ほら。 ) ヤット

グテ ヘレバ ヤット ヤルアダモノ ) ヤット ヤルダバァ。 E  
 行くと 言うし やつと やるのた"もの ) やつと やるのた"よう。

(55)

ガネ フトモ スタ ハター ハネバ マエベー ホラー ウー  
 行かない 人も だから はんたいと だめだ"よう ほらあ うん

ナン ナンサデモヨー。 ウー ズンブ テァギカチタ モンダ<sup>ー</sup>  
 はんにはでもよう。 うん すいぶん 大儀がうていた もんだ"あ

ウン。

うん。

## 注記

- (1) 本山参詣は別に「ヤマカゲ」とも言う。旧8月1日に新藤別に岩本山へ集団登拝して、平穩無事と豊作を祈願する行事。
- (2) 「エマ サベタ」とは、この歌が始まる前に歌者Bが2日前(9月3日《旧》=旧8月1日)に岩本山へマインバスで最近流行の観光旅行ふうに参加してきただ(頂上登拝しない)が、取り立てて言う程のことはなかった旨話し合っていたことをさす。
- (3) あとの「バタラバタラ」の「バ[ba]」の「B」の言いかけ。
- (4) 「ビツツド」は擬態語であり、「びっしりと」に当るだろう。標準語訳は意訳にした。
- (5) 「ビツツドダ(ト、オ)モッタ」
- (6) 「(本山参詣に対する熱の入れ方が)サガッテ」
- (7) 聞き取り不可能。
- (8) 岩本山頂の奥岩に祭っている御神体「八大金剛童子」をさす。「ハツ」は頭文字の「ハ」。
- (9) 「～ネ(ニ)カテ」は後に受け身の語法を伴うが、なっているのは不利な悪い事態の内容がくる。語源不明。
- (10) 「落伍する」の意で使う。別に「ゲテ」は「下等」の漢字読みもある。
- (11) 「サネヤ」は[sa ne ja] - [sa ne a] - [sa ne]。「ヤ」は間投助詞。
- (12) 「グ」は無意味の発音。
- (13) このあとに、「兄こで垢離をとるのだ」の意の内容を省略している。
- (14) 地名、青森市大字「谷子沢」<sup>にやしざわ</sup>。当地では昔から「ゴサ」という。又銚子地から約2km東方にある。
- (15) 「サイキサイキ」は唱えごとの最初の文句である。次に金文を掲げる「祭儀祭儀 同行斎儀 本山に初田饗 金剛堂さ 一一名号拝 南無帰命頂礼」
- (16) 「オウホー(の村)ダバ」
- (17) 地名、青森市大字「ハッ役」<sup>はつえき</sup>。当地では昔から「ヤジャグ」と呼ぶ。当地のすぐ北を流れている川(荒川)を隔てた所にある。約200m北側。
- (18) 「水のない石の川原」

- (19) 収録場「桜田家」のすぐ下が荒川のカラメで、ハッ役部役の人はここで太鼓を叩いたりなどしんという意である。
- (20) 何人ずつの組んで近郷各村の神社を回ってお参りする事。省略して「ムラメア」というが、これは「村参り」か。
- (21) 「スレァ アレ」とはお山参詣用服装の「白装束」のこと。
- (22) 東北地方特有の指小辞「コ」である。
- (23) 「スレァ ヤヅ」はすぐあとの「ハヅマギ」をさす。「白い鉢巻き」。
- (24) 「洗濯しなきれいな衣装」から一般的に「衣装」のこと。
- (25) 「ミンナ(っ家庭)ガラ」
- (26) 指示代名詞の「あれ」だが、この場合「アエステ」は「集って」。
- (27) 一般的使い方ではないが、「あんまりにカ」の意で使っている。
- (28) このあとに「にぎやかでびっくりにしたもつだ」という内容がくる。
- (29) 「トスナ」のこと。
- (30) 「としな 『年縄、としなわ』で村のお宴に奉納する『しめなわ』のこと。」(鳴海助一「津軽のこゝろ」)
- (31) 語源不明。「序の口」か。
- (32) 脚き取り不可能。
- (33) 「ようやくの思ひで」の意であとの「ハヅメネ エゲバーへ」へかかる。
- (34) 「エンタ」は無用り発音。あるいは前に「アゲ」と言いかけがあるため、「アゲエ ンタ(赤いような)」と言いたか、というのが、ここでついでにしまつたのかも知れない。
- (35) 「コ」は指小辞の接尾語。
- (36) このあと「と言ふもんだ。」という内容が省略。
- (37) 「コ」は指小辞の接尾語。
- (38) 「オラホヅ」の「ヅ」が無声化となつたもの。
- (39) 「オヤシマギタテ」以下の文脈は省略がらく難解である。内容は「親戚Aが村回りに出ている」と、親戚Bの家族が噂に聞くとBの子らは自分門下には立って参つていて、また、子らの親B達も何村の親戚Aがやつて来ると子らに知らせたりする。一方また、村回りにやつて

来たAは親戚Bの子うがこの辺に私を待ちこがれて来ていないだろう  
かと思って、もし、いるとすぐぱっとBの子に銭をくれて行くのだ。」

(40) 「よけいな」

(41) あとの「オミヤ アレバ～」の「アレ」の言いかけ。

(42) 「賽銭をまく」が普通の表現だが、時には「投げるようにしてまく」  
ため「投げる」と言うこともある。その言いかけである。

(43) 「ケル」は「くれてやる」

(44) 「経済負担がたいへんだっん」という意で使っている。

(45) 和山参詣の帰途の踊りの様子そのものを言い、また、歌の文句にも  
そのことばを取り入れている。

(46) 標準語では「ずうりと」に当るようだが、「いっぱいだが数を数え  
られるように整然とある様」を言う。

(47) 菓子の一つ。

(48) 無意味の発音。

(49) 漢字は「梯子」だが、青森駅構内の跨線橋の階段のこと。

(50) 「青森市の町中を」

(51) 削り取り不可能。

(52)(53) 共に薬草で当時の貴重な家庭薬品(漢方薬)であった。(52)は「ど  
くだみ」のことで毒消し用に、(53)は「せんぶり」のことで腹薬用。

(54) 「アングワカレ」は「網子別 漁期が終ること。方言 別れの会合、  
送別の宴」( 日本国語大辞典 小学館)

(55) 「スタ ハター」は「スタハダー」の不完全な言い方であり、また  
「ハネバ」の言いかけにもなって混乱した発音。

# 8. ボ サ マ

話し手

| (略号) | (氏 名)   | (性) | (生 年)   |
|------|---------|-----|---------|
| A    | 桜田 鉄彌   | 男   | 明治36年生れ |
| B    | 八木沢千代三郎 | 男   | 明治39年生れ |
| C    | 棟方 トミ   | 女   | 大正2年生れ  |
| D    | 佐々木隆次   | 男   | 昭和10年生れ |

A ムガスナー ボサマツ<sup>(1)</sup> モノ アッテ<sup>(2)</sup> (B ウン) ヨグ ボ  
昔 なあ ほさまとい 者<sup>(3)</sup> あって (うん) よく ほ  
サマ キル キル スタ モンダエナー。  
さき<sup>(4)</sup> 来 来 しな もんたよなあ。

B ホンダエナー ウー フラス オボタリ<sup>(5)</sup> ステ アノ ツエゴト<sup>(6)</sup>  
えうたよなあ うん 幼児<sup>(7)</sup> おぶたり して あつ 杖を  
コー モッテナー ウー。ムスメアンタ フト マナグ<sup>(8)</sup> メァネ<sup>(9)</sup>  
こう 持ってなあ うん。 娘 のような 人<sup>(10)</sup> 目<sup>(11)</sup> 見え<sup>(12)</sup>  
ネァ。 タンゲ<sup>(13)</sup> キマテンダエナー。 (A B C 笑) ヨグ マ  
ない。 たいがい 決まってるんだよなあ。 よく り  
ー アーステ アヘテ<sup>(14)</sup> フグロ<sup>(15)</sup> アノー フロスギサ<sup>(16)</sup> オンブロ  
あ ああして 歩いて <sup>^^^</sup>笑<sup>^^^</sup> あつ <sup>^^^</sup>風呂敷<sup>^^^</sup>に <sup>^^^</sup>大風呂<sup>^^^</sup>  
スギサナー (A ウン =モツ<sup>(17)</sup> =モツコ ソッテ ウン。  
敷になあ (うん 荷物<sup>(18)</sup> 荷物<sup>(19)</sup>に<sup>(20)</sup> 背負って うん。  
A ウン マナグ メァネドゴデノ<sup>(21)</sup>ー アッパネ コントア ツエ モ  
うん 目<sup>(22)</sup> 見え ないのてうう 妻に 今度 杖<sup>(23)</sup>持

ダヘデー (B ウン) ウー アッパネー。コンドア スタンタ  
なせて うん うん 妻に。今度 そのような

アッパバ サキダデァデ ズブンデ ハー ソノ トーリ アハ  
妻を 先立てて 自分で はあ その とおり 歩い

アテ。

て。

B アヘテナー。

歩いてなあ。

C ナンダガ ツヅエノ<sup>(7)</sup> ボーダツガサテ<sup>(8)</sup>。  
なんたか 筒井の ほうなとか いて。

B ウーン ウ ツヅエノ ボーダ。アーア アッテ アッタ<sup>(9)</sup> ウー。  
うーん うん 筒井の ほうな。あああ い な うん。

(A ツヅエテ<sup>(10)</sup> ヘッテ エダタエナー) アエダキャ タンゲ  
筒井と 言って いふなあ あれは かなり

トスイ<sup>(11)</sup> ナッテナー。

年に なってなあ。

C ステ アッパド フタリ ソロツテ キテヨア (B ウー ソロ  
そして 妻と 二人 揃って 来よう) うん 揃

テナー) アッパバ スカタリ<sup>(12)</sup> プタエダリ ステー。  
ってなあ 妻を 叱つたり 叩いたり して。

B ウン オエサ<sup>(13)</sup> ダ ツギ<sup>(14)</sup> ア アノ フト トマッテヨー (   
うん 俺家に だ 時 あつ 人 泊つてよう )

A C ウーン) アッパバ ツエデ<sup>(15)</sup> フタエダアツ<sup>(16)</sup> ワ オベデアツ<sup>(17)</sup>。  
うーん 妻を 杖で 叩いたの(18) 吾(19) 覚えてるやな。

(A 笑) プタエダアツナー。 (A アー) エンツ コフ  
ふっ叩いたやななあ。 ああ 意地っ張り

テ ホー ウン。

で はうあ うん。

C ウダ<sup>(16)</sup>ネ ワツカ エグナダ エグバ アパバ プアカダ。(笑)  
歌に わずか 良くなく いくと 妻を 叩くんだ。

A アーアー トマレバ ロー コンダ ロー ボサマ トマタハ<sup>(17)</sup>ンデ  
ああああ 泣きると ほうあ 今度 ほうあ ぼさま<sup>(18)</sup> 泣いたって

アー コンニャ ウダ キグ<sup>(17)</sup>ネ エグベスッテ (B ウンウン  
ああ 今夜 歌<sup>(18)</sup>に 聞きに 行こうと うんうん

) ウン コンダ ミンナ アツバツタンタエ ステノー。  
うん 今度 みんな 集まったようであまり してっう。

B ヨグ キタ モンダジャナー。アーユ ボサマ エマ ハー ナグ  
よく 来た もんだよ なあ。ああいう ぼさま<sup>(18)</sup> 今 はあ なく  
ナッテ マツタエ ホロー。  
なって しまったよ ほうあ。

A エマダバ ボサマヅ モノ メッ<sup>xxx</sup>タ エヤ メッ<sup>xxx</sup>タネモナモ コナ  
今なら ぼさま<sup>(18)</sup> 者<sup>(18)</sup> いや めったにも何も 来な  
グ ナツタオナー。  
く なったも<sup>(18)</sup>なあ。

B ゼンゼ。コ コグ<sup>(18)</sup>ホーダジャー エマノ ボサマダバヨー。  
全然。 <sup>xxx</sup> 国 家 だよう 今や ぼさま<sup>(18)</sup> ならよう。

A ウー ンダ。マ<sup>(19)</sup>ンダ ムガスダバ ロー ヨゴウヅ<sup>(20)</sup> = マ<sup>(20)</sup>ンダ ヘ  
うん なんだ。 ねえ 昔 なら ほうあ 横 内 に 来た 寺  
<sup>(21)</sup>  
ンノヅー ウー。  
え とう うん。

B ワ ソノ ヘンノ ワガラネンダバタテ ウン オエノ ヌ<sup>(22)</sup>ノ ハ  
<sup>(22)</sup> 寺 え<sup>(22)</sup> わがらなん<sup>(22)</sup>でけれど うん 俺家の こ

ハオヤ<sup>23)</sup>ンド ( A ウン オヤ ) ホンケサ ヨグ トマルー ナ  
 母親達<sup>(母)</sup> ( うん 知るか ) 本家に よく 泊まる 何  
 ンニヅ ト マタテナー。  
 H 泊まる<sup>24)</sup>といふなあ。

A オラ サット オベデラバタテヨ。

俺<sup>(母)</sup> うちらと 覚えてるわけだよ。

B トンカブ ショーヅギダ<sup>(24)</sup>ンダツキヤ。 ( A ウン ) ショーヅギデ  
 とにかく 正 直 なんを<sup>(24)</sup>という話をよね。 ( うん ) 正 直 で

ショーヅギデ ( C ウン ) ウン。  
 正 直 で ( うん ) うん。



## 注記

- (1) 漢字は「坊様」と書き、「ボサマ」と発音する。主に盲目の男の人で、妻に引かれて三味線を弾き附けして歩いた人という。妻が歌を教った。また、場所によっては、鍼・按摩をした盲人や早口ニとば掛懸等娛樂を与えてくれた人をもいった。特に津軽の農村地帯がその本場であった。
- (2) 「いる」が「ある」に統一されてしまうことがある。この場合、主語のボサマという過去の人の名称を遺物のように把握して「アル」を用いた。
- (3) 「ゴト」は名詞。代名詞に付いて目的格を強める働きをする。本来は「事」であろう。歌は仮りに「を」を当てておく。
- (4) 「<sup>ボ</sup>サマ」の音化。
- (5) 漢字は「大概」。
- (6) 「ノー」は「<sup>ノ</sup>」と「<sup>ノ</sup>」に由来する。
- (7) 地名、青森市大字「<sup>ノ</sup>」。収録地の牛館から約5km東北方。現在は青森市中心部から象並みが連続して昔の農家の面影は失せた。
- (8) 「坊様」の「坊」をとり「ボー」といったのだろう。論記(1)参照。
- (9) 「アッテアッタ」は過去完了に相当する表現であり、標準語の單純な完了ないしは過去を表わすものとは異なる。(此島正年著「青森県の方言」)
- (10) 「エダタ」は「エデアッタ」の約言である。論記(1)参照。
- (11) 「<sup>ni</sup>」の「<sup>n</sup>」の脱落。
- (12) 「叩く」は「フタグ」「ポタグ」「ブタグ」または「フタラグ」「ポタラグ」「ブタラグ」といろいろの言い方があるが、「ポ」は「フ」よりも、「ブ」は「ポ」よりも強意であるという関係にある。
- (13) 無意味の発音。
- (14)(15) 「アヅ」は「ヤヅ(ja dzu) (奴)」の「<sup>j</sup>」の脱落。(14)の共に強い断定を示す表現に転用されている。正確に訳すなら「叩いたのだということに吾覚えているのだ」
- (16) 文脈が乱れている。「ウダネ」の「ネ」は文脈上、不要の表現。あ

るいは「ネ」を生かすとするならばその後も「エグネ ドコ アレバ  
( 良くないところがあれば )」と直さなければいけない。

(17) 当地では連体形に「～に行く」が付く。

(18) ここ数年来、全国的に有名になつた青森県東津軽郡平内町出身の青  
月の津軽三味線弾き、高橋竹山氏を想定して国宝級だといっている。

(19) 「昔の話をするなら」の意。

(20) 地名、青森市大字「横内」。収録地から東北<sup>約</sup>4km。

(21) 「雪<sup>せん</sup>之助<sup>のすけ</sup>」とかつて明治期のボサマの一人。

(22) このあたり、文脈が少し乱れている。「コノ」は不要の発音。「俺  
の母親達は雪之が本家によく泊ったと言っていた」という内容。

(23) ごく普通に使う肯定の表現。話者より年長者のAは話記(22)の内容  
を知っていたのである。

(24) 当地では本来「ツ[dzɯ̥] (～という)」が無声化したカツである。

## 9. 青森空襲

話し手

| (略号) | (氏名)    | (性) | (生年)    |
|------|---------|-----|---------|
| A    | 桜田 鉄彌   | 男   | 明治36年生れ |
| B    | 八木沢千代三郎 | 男   | 明治43年生れ |
| C    | 榎本 トミ   | 女   | 大正2年生れ  |

A アノ クーシュー トーヅ<sup>(1)(2)</sup>アバ (B ウン) ホントネ オコナフ  
 あの 空襲 当時ならば ( うん )ほんとうに あっかなく  
 テ オコナフテナー。 (B ウン) ウーナン ナンガ ビーニジュ  
 て あっかなくてなあ。 ( うん ) うーん 何か B 29<sup>(3)</sup>  
<sup>(3)</sup> <sup>(4)</sup> <sup>(5)</sup>  
 ーク トナー グングダゲー トシデ キテ スルマネ スゴド  
 いやもう ぐんぐん音がする程 飛んで 来て 昼間に 仕事<sup>(6)</sup>  
 ステレバナッ (B ウン) <sup>(6)</sup> アメリカノ スコキ キタ キタテ  
 しているとなあ ( うん ) アメリカの 飛行機<sup>(7)</sup> 来な 来<sup>(8)</sup>て  
 ヤ ナンモカモ オコナガテ ヘゲサ ハテ カグレダリ ステ  
 やあ どうにもどうにも あっかながって 堰に はいつ 隠れたり して  
 ヨ (B ウーウー) ウー。  
 っ ( うん うん うん )

C ンダ オラキャ アノー ラー タノクサ<sup>(9)</sup> トテ (B ウン)  
 もうだ 俺は あつう あらあ 田の草<sup>(10)</sup> 取って ( うん )  
 ステ エレバヨ (A ウン) コンダ ヘコキ キタゼアテ ヘ  
 れて いるとよ ( うん ) 今度 飛行機<sup>(11)</sup> 来<sup>(12)</sup>てもうだと言

レバ アノー タノクサ ト ツギ ステ ラ ノー キー コー  
いと あっう 田ッ草<sup>(七)</sup> 取る 時 として あああ っう 木<sup>(八)</sup> ニ

ヤナギ マフッテ ( A B ウー ) ホレサ コンダ クサ コ  
柳<sup>(九)</sup> めくして ( いん ) んれに 今度 草<sup>(十)</sup> ニ

ー カブヘデ ( B ウン ) ソステ ヘナガサ ショッテ<sup>(八)</sup> ソス  
い 被せて ( いん ) んして 背中に 背負って もし

テ ホラ アダマサ ツット カブテテ<sup>(八)</sup> タノクサ カマス ワゲ  
て ほら 頭に ずっと 被っていて 田ッ草<sup>(九)</sup> 揺り回す わけ

ヨ。 ( A ウーン ) アオエハ ンデ メネ<sup>(八)</sup> ハ ンデ ( A ウウ  
よ。 ( うーん ) 青いので 見えないので ( いんう

ーン ) ウー。ソステ コンド エサ ワラハ ンド ノゴステ オ  
ーん ) いん。そして 今度 家に 子ども達<sup>(九)</sup> 残して 置

グドゴテ<sup>(八)</sup> コレア ヘコキ キタアゼ<sup>(八)</sup> テ ヘレバ ホレ カブナ  
くので ニクヤ 飛行機<sup>(九)</sup> 来るといふと 言ふと んれ<sup>(十)</sup> 被りな

ガラ ( A ウン。 B ウンウン ) エサ ハケデ エグ ワゲ  
から ( いん。 いんいん ) 家に 走って 行く わけ

セ<sup>(八)</sup> ナ。 マー ンツ オコネ<sup>(八)</sup> メネ アタ モンダ ウン。  
よな。 まず ああ 知らない 目に あつた もんだ いん。

A オラダバ ハー ヘゲ アレバ ハー ( C 笑 ) ヘゲサ ハッ  
俺なら はあ 堰<sup>(九)</sup> あると はあ 堰に 入っ

テ マルアダエ。 ( B ウンウン ) ウン ヘバ ハー メネ メ  
て しめうろたふ。 ( いんいん ) いん すると はあ <sup>xx xx</sup> 見

ネベツ ワゲデヨー アー。

えないだろうかい わけだよ ああ。

C ウー ナンダッテ ( A ヘゲサ カグエデ ) オラエサ ワラハ  
いん なんといても 堰に 隠れて 俺 家に 子ども

ンド ノゴステ オグモンダドゴデ。 ホラ エサノー ウーン。

達を 残して 置くもんだから、 ほら 来たのう いーん、

A エ… カダ ハー キレバ ハー オド ヘバ ハー アー キタ  
雪う はあ 来ると はあ 音(か) すると はあ ああ 来た

キタ キタアテ ハー (B ウン) キノ カゲデモ ドゴデモ  
来た 来たあといふ はあ うん 来ッ 陰でめ どこでめ

ハー カゲエデ マルヤヅ、 (B ウン) ウン。ナンボ カグ  
はあ 隠れて しまふん。 うん うん。 いくう 隠

エダタテ ナンモカモ ドースモ ナンネヤダバタテ (B C ウ  
れんといつても どうもこうも どうしようも ならないのだから う

ン) ウン。ソエカラ コンド アレ ナンダガ クーシューノ  
ん) うん。それから 今度 あれ 何か 空襲ッ

バゲ アレ スヅガヅノ ニジュースヅ (C ニンジュ スヅニヅ  
晩 あれ(は) セ 月ウ = ナ <sup>xx</sup>ヒ <sup>xx</sup> ( = ナ ヒ 日

ノ ウン バンダオナ ウン ソダ<sup>(9)</sup> スヅニヅダナ。コンダ コ  
の うん 晩(は)かな うん れ(は) <sup>(9)</sup> ヒ 日 だな。今度 今

ンニヤ アノ クーシュー クルゼーテ (B ウン) ウー ミ  
夜 あッ 空襲(か) 来るういッ ( うん ) うん み

ンナ ホラ アノー ナンダ ウエノ ホーガラヨー オグミノ ホー  
んな ほら あッう なんだ エッ オから 来エッ 方

ガラ ミンナ ツーツ クルドゴデヨー (B ウン) ウー エ  
から みんな 通知(か) 来るうでッ ( うん ) うん い

ヅダラ エツノ バゲ ワルグ ヘバ クルハンデッテ ミンナ  
つなら いッッ 晩 悪く すると 来るからといつて みんな

キー ツケローテ、 (B ウン) ウーン コンダ アノー バゲ  
気(は) つけろといふ、 ( うん ) うーん 今度 あッう 晩

オロー　ハー　エノ　フトンド　ミンナ　コンニャ　クーシュー  
ほろめ　はあ　家ウ　人達<sup>(1)</sup>　みんな　今夜　空襲<sup>(2)</sup>

フルゼアテ　ウ。マー　クーシュッテ　クーシュッテ　ヘ　ドッ  
来るらしいって　ん。まあ　空襲って　空襲って　ふん　どう

夕　モンダエヅヘノテ　ウン　ヘナガラ　コンダ　ミス　クテ　バ  
しん　もうなのだい　なんて　うん　言いながら　今度　飯<sup>(3)</sup>　食って　晩

グ　ミス　クッテガラヨー　（Ｂ　ウン）　ワニツカ　タツタケヨ  
飯<sup>(4)</sup>　食って　から　よ　（　　うん　）　わ　ずか　なんぞ　よ

ー　（Ｂ　ウン）　コンダ　オド　ステナ　（Ｂ　ウン）　ウン  
（　　うん　）　今度　音<sup>(5)</sup>　して　な　（　　うん　）　うん

ゴンゴ　ゴンゴテヤ　クルノ　コネノテヨ。　（Ｂ　ウン）　ヤー  
ごうごう　ごうごうとよ　来るウ　来ないってよ。　（　　うん　）　やあ

コンダ　エツバン　サギネ　コヅノ　ツヅミノ　ホサ　（Ｂ　ウン）  
今度　一　番　先に　このウ　堤　の　方に　（　　うん　）

）　ウン　ミョーケンノ　ホサ　オツダジャ。　（Ｂ　ウン）　オラ  
うん　あ　見　の　方に　落ちたよ。　（　　うん　）　俺

マングヨー　チョ　ンド　ソバネ　メデ　（Ｂ　ウン）　アコ　ッ  
まふ　よ　　ちやんと　　それは近くに　見えて　（　　うん　）　あ　　吊

リバスサ　オツダガドモテヨ　（Ｂ　ウン）　ステ　エダヤダエナ  
り　橋に　落ちたかと思つてよ　（　　うん　）　ん　　いふ　んだ　よ　な

（　　ウン　）　ウン。　ステ　アドカラ　キダキヤ　ホロ　夕  
（　　うん　）　うん　、　ん　　あ　　とか　　崩れた　　（　　うん　）　ほら

タギジャサ　オツダザエ　ロー　（Ｂ　ウン）　ウン。　コンダ  
滝　に　落ちた　とい　は　あ　（　　うん　）　うん。　今度

ソエガラ　ハー　ビツツド　ハー　エヤ　クルノ　コネノテ　エゲ  
た　れ　から　　はあ　　び　　し　　と　　はあ　　い　　せ　　来る　　来　　ない　　って　　行く

バ　フル　（　Ｂ　ウン　）　ソゴサ　エゲバ　フル　ステ　（　Ｂ　う  
と　来る　　うん　　んこに　行くと　来る　して　　う

ンウンウン　）　ウー。  
んうんうん　）　うん。

<sup>(17)</sup>  
ホタ。オラキャ　ボーケーゴ　コヘデ　ユンダ　アノ　ボーケー  
うだ。俺は　防　空　壕<sup>(18)</sup>　こしらえて　今度　あの　防　空

ゴ　サ　フラハントバ　ヘデセア　（　Ｂ　ウン　）　ソステ　コンド  
壕　に　子ども達を　連れてよ　　うん　　んして　今度

ナゲバ　キケルテナー　（　Ａ　ウンダ　）　ナゲバ　ヘコキ　トン  
泣くと　聞こえるといふなら　　んうだ　　泣くと　飛行機　飛ん

デル　ヤツサ　キケルハント　フラハント　ナガヘレバ　マネッテ  
でいる　奴に　聞こえるから　　子ども達<sup>(19)</sup>　泣かせると　だめだといふ

ボーケーゴサ　オエデ　モノ　カゲテア　ソステ　ホラ　コンド  
防　空　壕　に　置いて　物<sup>(20)</sup>　掛けて　んして　ほら　今度

アノー　タダ　コノ　キモノデアキャ　マネハントデテ　コンダ　ワ  
ありう　んだ　んう　着　物　では　だめだ<sup>(21)</sup>からといふ　今度　吾

アノー　フトン　トネ　コンド　キタ　ワゲセア。　（　Ｂ　ウン　）  
ありう　布は　取りに　今度　来る　わうよ。　　うん　　

スト　モトダラ　ストメテ　アッテ。　（　Ｂ　ウーウンウン　）　ス  
\*\*\*\*　元　43　部　といふ　あつて。　　うんうんうん　　ス

<sup>(22)</sup>  
トメガ　ホラ。ソステ　フトン　トネ　キタ　ツギ　ナンモ　オツ  
部　こ　ほら。んして　布<sup>(23)</sup>　取りに　来る　時　何ら　着

デ　ネヤダバテア　フトン　モッテ　キター　デハル　キナタキ  
て　いたはいだ<sup>(24)</sup>われど　布<sup>(25)</sup>　取りに　持って　来て　出る　気になつた

ユンダ　ハー　コノ　マツサ　（　Ｂ　ウン　）　オツダアツ。アノ  
今度　はあ　んう　町　に　　うん　　着うんだ<sup>(26)</sup>。あり

エマノ ショーエダン。(A B ウン) ドーン ドーントデ  
今ッ 煙 夷 弾。(うん) どん どんと

<sup>(22)</sup>ヘレバ <sup>(23)</sup>ンニャ オツダ コノ ハリ キモノノ ウラ ハリコデ  
するつで いや 落ちん ンノ 針 着物ッ 裏 針こで

モ ミンナ マルエニ アガルグ ナテ マルダエナー。(A B  
も みんな 見えるように 明るく なって しまふよなあ。(

ウン) ヤー ホノ フトン カプタ ママ コノ ボークーゴ  
うん) やあ その 布団(4) 被ッた まま シッ 防 空 壕

サ ハステ エガエネヤダジャ。(B ウン) フトン ガッパド  
へ 走ッて 行かぬないつだよ。(うん) 布団(4) がッパと

ストメノ ドゴデ カプテ コヤステ ホノ オツラ ヤツ ズ  
節 の 所で 被ッて こッヤッて その 落ちる やつ(4) 見

ンデラツ モノヤ アノー キレーナデ エマサ ナレバヨ (A  
ていうふう ものよ あつて きれいで 今に なるとよ (

ハンナビド フトツダエナー) ナニ キレンジ カニ キレン  
花 火と 同じだよなあ) 何(4) きれいな かに(4) きれい

ダテヤ (A B ウン) ウン オコネモ オコネ。(笑)  
だて(4) (うん) うん おかぬいも おかぬい。

A キレンジモ キレンジナ オコナブ キレンジョー。(B ウン)  
きれいだも きれいだ おかなく きれいでよう。(うん)

ウン。 オエダダキャ ホロー コツノ オエノ ボークーコワ  
うん。 俺家では ほらあ ここの 俺家の 防 空 壕に

ハッテ エダバタテヨ (B ウン) チョンド ハー ホソゴエ  
入ッて いえけれど(4) (うん) ち(4)ど はあ 細 越 <sup>(24)</sup>

ノ ホーガラ コツチャ コー オツデ オエノ エサ コー チョンド  
の 方から こちへ こう 落ちて 俺 の 家に こう ちょうビ <sup>(25)</sup>



オヅルエネ ナ ナルアエナ。(B ウン) ソエデ コンドア  
落ちるいへ なるいへな。(うん) それで 今度

フメダノ<sup>(26)</sup> ボーローゴワ (B ウン) ハロー ネゲデヤツ。  
久米田の 跡 空 壕に (うん) ほいあ 逃げんやう。

アー テ コンダ ミンナ ネゲデ ワ コンダ ミンナネヨー  
ああ ねえ 今度 みんな 逃げて 吾め 今度 みんなねよう

ミンナ カダマテー ネゲレバ (B ウン) カダマテ スンデ  
「みんな 固まっ て 逃げられな」 (うん) 固まっ て 死んで

マレバ (B ウン) アド テアッテ マラハンデ (B ウ  
しやえいば (うん) あと 絶えて しやうから (う

ン。(C 笑) ウー ミンナ ホレー ツラバッテ ソエゴン  
ん。(うん) みんな それ 散らばって それこそ

ツラバッテ ネゲロット (B ウン) アンマリ カダマナーツ  
散らばって 逃げろ」といふ (うん) 「あんまり 固まるな」

テ (B ウン) ウン テ ワ コンダ サベタキヤ オエノ  
いって (うん) うん ねえ 吾め 今度 しやべんなら 俺家ッ

ババヨ<sup>(27)</sup> ダーエステ。<sup>(28)</sup> スヌアダラ ミンナ スヌビステ (C 笑  
婆よ 「誰がそんな。死ぬのな。 みんな 死のう」といふ

) フトゲアリニ ミンナ スネバ エドナテ (B 笑) エヤ  
「一回に みんな 死ぬと いいではないか」といふ 「いい

スンデ ネア モンダテ ワ ハルアツガ ダエガ カレガ エワ  
いって ない もんだ」と 吾め 言うのさ 「誰か 彼か 家に

エギデ (B ウン) アド タデネバ マエネ モンダハンデ  
生きて (うん) あと 立てないと 死ぬな もんだから

(B ウン) スタハンデ ワ シヤブルヤツヨート。(B  
うん) とうとうから 吾 しやべりやう」と。

ウン) オナゴンドヅ モノヨ (し 笑) スヌヤダラ エッシ  
うん 女 達 とい もつゝ 「ふぬうな」 一緒

ヨ = ミンナ スネバ エーッテ。(笑) ソステ コンダ トロ  
に みんな 死ぬば 良いって もして 今度 ばら

ー キ×ア <sup>(30)</sup> アエデ。

あ 腹 (あ) 立てこ。

B オコネハンデ フトリコダバ ナンダオナー。ウー バラバラド  
おっかないから 一人 なら なんておんなあ。うん ばらばらと

ネゲタグ ネオナ。(A ウーン) ミンナヤ フトノ アド カ  
逃げなく なおんな。(うん) みんなも 人々 後 つ

ダテ アヘテ ウー。

いて 歩いて うん。

C オエデモ スタンデ ダンモ エッショネ エネアンデヨー オエ  
俺家でも せうだから 誰も 一緒に いないでよい 俺家

ノ エマノ トッチャ <sup>(31)</sup> カギノ キサ ノボテア (B ウン)  
の 今ッ 父さん(あ) 梯の 末に 登って (うん)

オエノ オド モゴノ ヤナギサ ノボテア (A ウーン) ソ  
俺家の 亭主(あ) 何うの 那 に 登って (うん) そ

ステ オラタヅ コドモンド ホラ ボークーゴサ ハッテ (B  
して 俺 達 子ども達(あ) ほら 階 登 壇に 入って)

ウン) <sup>(32)</sup> テンデバラニ クラステ エデタ モンダ。ソノ バ  
うん てんでばらばらに 落ちて いた もんだ。その 晩

ゲ。(B ウン) ウン。ミンナ スンデ マレバ ソエゴソ コ  
。 (うん) うん。「みんな 死んで しまふと それこそ 国

マッテ マルテ (B ウン) ダエガ カエガ ノゴネバ マエ  
って しめいって (うん) 「誰か 彼か 残らないと だめ

ネテ ホラ。

だといって (ほ)。

A ンダベア, ( B ウンダエナ。 C ウン ) フモ ソノ ホロー  
えうだろ, ( えうだよな。 うん ) ちやうど ほらあ

(32)  
デ<sup>xx</sup> デン ヤッタバテヨ - ( B ウン ) ウン ナンモカモ  
手 ヤッたけれどよう ( うん ) うん どうもこいも

キメア アド キメア ヤエダリ ウダデフタエナー ( B ウン  
x x x x あと 腹 (41) 立てたり ひどかわるよなあ ( うん

) ウン。  
うん。

C ナー ホントネ アノ バゲダラ ( A ウン ) マヅ ヤゲデ  
なあ ほんとうに あつ 晩 なう ( うん ) なす 焼けて

マテ ツギノ ヘ コンダ ドンダガタキヤ ミンナ マヅ ヤゲ  
しめて 次の 日 今度 どうかというも みんな なす 焼けて

デ マテ - マヅデ ミンナ スンデダテ コンダ ウー ( A  
て しめて 町で みんな 死んでいるといふ 今度 うん (

ウー) ソカエ ステ ナス ヘトンド コツツァ エテ ミン  
うーん) 疎開 して なす 人達 (44) こっちへ 行って 見

デモ コツデモ アエダテ - (45)

ても こっちでも あれだといふ。

B ミンナ オヤブマギ アルンダスナー ( C ウー) ウン。  
みんな (46) 親類 (47) あるんだよなあ ( うーん ) うん。

C コンダ ヤゲネ ヘトンドダバヨ - ミンナ コンド エサ ミン  
今度 焼けない 人達 ならよう みんな 今度 交へ みんな

ナ モドテ キテア ( B ウー) ウン。  
な 戻って 来て ( うーん ) うん。

A ミンナ ナー アノ バゲー マヅガラヨー ネゲデ フル フト  
みんな なあ あの 晩 町からより 逃げて 来る 人

( B C ウン ) ミン フトン カプタリ ( B ウン ) タン  
うん みんな 布団 (他) 被るん 丹

ジェン カプタリ ステ ( B ウン ) エヤー ドンダカダモテ  
前 (他) 被るん して ( うん ) いやあ どうだかと思つて

アノ スエドーノ ハスノ アツツァ エタキャ ( B ウン )  
あの 氷 道の 橋の あちへ 行つた ( うん )

クルノ コネノテ ミンナ モノ カプテ クルアダエナ。 (   
来るの 来ないのと みんな 物 (他) 被つて 来るのだよな。 (

B C ウン )  
うん

C エツオー ソカエステ キテ コンダ アノ バゲ ミンナ モト  
ー 応 疎開して 来て 今度 あの 晩 みんな 戻

タダオノ ナー ( A ウー ) ウー コンド キネア コンダ  
それだけなあ ( うーん ) うん 今度 来ない 今度

アエダツテ ヘテ ソカエステ キテデ モトテツテ ( B ウ  
あれだと 言つて 疎開して 来ていて 戻つて行く ( う

ン ) モドッタ バゲ コンダ コ ナタダハデ ホラー ( B  
ん ) 戻つた 晩 今度 こうなるから ほらあ (

ウン ) ウン。  
うん ) うん。

B オエデ アノ ヅギ ベゴ タデデタ ヅギダエナー。 ( C ウン  
俺家で あの 時 牛 (他) 飼つていた 時 なんだなあ。 ( うん

) ベゴサ クルマ ツケデー ( A ウー ) ウー アノ ロ  
牛乳 車 (他) つかて ( うーん ) うん あの あ

アー ヅサマ ソカエス ドグ<sup>o</sup> トネ エッタ ヅキセア (A  
あ 爺様 疎闊する 道與<sup>(38)</sup> 取りに 行、た 時

ウン) チョ<sup>nd</sup> マツサ レンラクセン。<sup>(39)</sup> (A ウーン) ソ  
うん) ちやうど 町に 連、船 船。 うん) え

ンヅギ<sup>(40)</sup> オーノマデ エッタ キャ ホロー (C ウン) ソー  
の時 大野まで 行、た、 ほらあ うん) え

キタダエナー。 (A ウン) アエデ ベコタ<sup>o</sup> モンダ<sup>o</sup>ゴデ ヤ(笑) ドー  
栗たのだよなあ。 うん) 相手 牛な ものなので やあ どう

スツ ゴトモ ナンネゼ。(B ウー) ベゴ コンダ<sup>o</sup> ケ<sup>o</sup>ンドサ タ  
するというこも ならないという。 うん) 牛 こんど 街道に 立

デデ コンダ (笑) (C ソー ンダネナー。 A ウーン) ウー ソエ  
てて こんど んー そうだよなあ。 うん) うん それ

デモ エッテ ホラ オワッテガラ ツケデ キタヅバテヨー ウ  
でも 行って ほら 終ってから つけて 来たというけれどよう う

ン ベゴ フパテ。 ウン。 アノ トンヅ ナンダエナー カンヅマ  
ん 牛<sup>(41)</sup> 引はって。 うん。 あの時 なんだよなあ 鍛冶町

ヅト<sup>(41)</sup> ダエグマヅト<sup>(42)</sup> ソエカラ テラマツ<sup>(42)</sup> (A C ウン) ノ  
と 大工町と それから 寺町 うん) の

フトンド コツツァ キタンダエナー。 (A ウーウーン。 C  
人達<sup>(43)</sup> こっちへ 来たんだよなあ。 うん うーん。

ウン) ステ オエデ クチョー ステラドゴデ ロー フト  
うん) とし 俺家で 区長<sup>(44)</sup> していたので ほらあ 人<sup>(45)</sup>

ワゲデヨー (C ワゲデ ミンナ ナ トメデ) ウーウーン ト  
合けてよう 合けて みんな なあ 泊めて うん うん 泊

メデナー オエサダキャ ゴゲンモ ロッケンモ トマテ ホロー。  
めてなあ 俺家には 五軒も 六軒も 泊まて ほらあ。<sup>(45)</sup>

A ミンナ エッケンサ ( B ウー ン ) アー ゴログニンバ  
 みんな 一軒<sup>12</sup> ーん ン ) みあ 五 六 人ばかり

ヅヅ オッキ ドゴ<sup>(46)</sup> ジューニンバツツデモナ ( C トマタナー  
 ずつ 大きい 所<sup>46</sup> へ ナ 人 ばかり<sup>46</sup> ずつでもな ( 伯<sup>46</sup> さんなあ

) ミンナ ドゴノ エサモ ロー ネゲデ キタ フトンドダバ  
 みんな どこ<sup>46</sup> の 家にも ほか<sup>46</sup> 逃げし 来た 人 達なら

タンゲ ハー エッシュカンモ ( C ホンダ ウン ) オエデ  
 たがい はあ 一 週<sup>46</sup> 間<sup>46</sup> も ( えい<sup>46</sup> だ うん ) 置いて

タベナ。ミンナ ミス タエデ カヘデー。  
 いえうな。みんな 飯<sup>(46)</sup> 炊いて 食わせて。

B ホダツケナー ウン。  
 えい<sup>46</sup> だ<sup>46</sup> と<sup>46</sup> い<sup>46</sup> せ<sup>46</sup> だ<sup>46</sup> なあ ン。

A ウー ホントネ ドンダモ カンダモ ヤゲダ アドサ エゲバ  
 うん ほんとうに どうにも こうにも 焼けた 跡へ 行くと

スندا フトモ ナモ ( B ウン ) ソツコツネ ゴロゴロゴロ  
 死んだ 人も 何<sup>46</sup> も ( ン ) そちこちに ごろごろごろ

テヨー ウン ヤヤ ミラエダ モンデ ネフタエナー。 ( B ウ  
 えよう ン やあやあ 見うれた もんで なかつたよなあ。 ( ン )

ン) ウン。ソステ ネゲデ フル ズギデモヨー オナゴンドー  
 ン) ン。そして 逃げて 来る 時でもよ 女 達<sup>(46)</sup>

ワラス オボテヨ ( B ウン ) ネゲダ フトンド アンマリ ホ  
 幼児<sup>(46)</sup> あぶってよ ( ン ) ン 逃げた 人 達<sup>(46)</sup> あんまり は

ロー ヘデ ヘデ ( B ウン ) ヘナガ オボテダ ワラス ロー  
 うあ せいて せいて ( ン ) 背 中<sup>(46)</sup> あぶってん 幼児<sup>(46)</sup> ほか

ヘナガガラ オツダ スラネデー ウー ネゲデ キタ ロー  
 背 中<sup>(46)</sup> か 茂 ちた<sup>(46)</sup> しらないで ン 逃げて 来た ほか

ソスタ ヘトモ フトンドモ (B ウン. C ンダナー ウン)  
ないう 人<sup>xxxx</sup>も 人 達<sup>も</sup> ( じん とうなあ じん )

ナンニンモ アッタゼア。 (C ナー) ウン。マング ホロア ド  
何 人<sup>も</sup> あった<sup>いう</sup>。 ( なあ じん。 また ほろあ ど

ンドトンドト (B ウン) クーシェー ホラー クルドゴデ  
んどん どん<sup>どん</sup> ( じん ) 空 襲<sup>め</sup> ほろあ 来る<sup>ので</sup>

モエルドゴデ (B ウン) ソエゴソ フラスサ スツガテレバ  
燃え<sup>る</sup><sup>ので</sup> ( じん ) それこそ 幼児<sup>に</sup> かま<sup>て</sup>いると

ツブデモ (B ウンウン) マング ホロ エノヅ ナグスベ。ス  
毎分<sup>でも</sup> ( じん じん ) また ほろ 命<sup>(を)</sup> なく<sup>る</sup>だろう。

タハンデ ホロー スタ ゴド ナンモカモ ハー コドモモ ナ  
だから ほろあ せい<sup>じ</sup> こと どうも こ<sup>の</sup> はあ 子<sup>ども</sup>も<sup>も</sup> 何

ンモ アッタ モンデ ネヤ ツブデ フトリデモハ (B ウン  
も あった も<sup>ん</sup>で な<sup>い</sup>や 毎分<sup>で</sup> 一人<sup>で</sup> ( じん

ネゲルエネ (B ウン) ソーユー ホロー キモヅネ ナテ マ  
逃<sup>げる</sup><sup>ように</sup> ( じん せい<sup>いう</sup> ほろあ 気持<sup>に</sup> な<sup>って</sup> し<sup>や</sup>

テ エル モンダビョン (B ウン)。  
て いる も<sup>ん</sup>だろう ( じん )。

C ナッ ホントニ ホントニ コング クエモノネ コマテ マテ。  
なあ ほん<sup>と</sup>に ほん<sup>と</sup>に<sup>に</sup> こ<sup>ん</sup>ご 食<sup>の</sup>物<sup>に</sup> 困<sup>っ</sup>て し<sup>ま</sup>て。

(B ウンウン) オラクヅンド アノー ナッパ ヘダリ ヨゴ  
( じん じん ) 俺 達<sup>(は)</sup> あ<sup>の</sup>う 景<sup>景</sup>入<sup>り</sup> 違<sup>い</sup>

(47) ミ (B ウン) ヘダリ ダエゴンダバ オナスモ ダエゴンド  
( じん ) 入<sup>れ</sup>る<sup>大</sup>根<sup>な</sup>に 周<sup>り</sup>も<sup>の</sup> 大根<sup>と</sup>

マダバヨア (A アーアー ウーング) フト キテモ メグサ  
豆<sup>な</sup>う<sup>う</sup> ( ああ<sup>あ</sup> せい<sup>だ</sup> (48) 人<sup>の</sup> 来<sup>る</sup>も 取<sup>ら</sup>ず<sup>か</sup>

グ ネァンデタバタテ ナニハダノ<sup>(47)</sup> ヨゴミダノテ アタ アツ  
 しく なかつたけれで 葉の葉の 逢 ぶつと あんな やつ

(B ウン) ヘダツ モノー マックロニ ナッテ マルドゴデ。  
 ( うん ) 入れたい ちの 真ッ、黒に なって しまつたで。

アレ コンドア ミンツ ダップド ヘデー オ<sup>(30)</sup> ケアダケアニ  
 あれ こんど 水<sup>(水)</sup> なつぷりと 入れて<sup>xxx</sup> 粥<sup>xxx</sup> のように

ステ ニデ ク モンダ モノ ナー。

して 煮て 食う もんだ ちの なあ。

A スタテ クエモノ ネァ (C ウーン) ホラ ナグ ナツタドゴ  
 ぶつて 食い物<sup>xxx</sup> 無 ( うーん ) ぼろ 無く なつたので

デ。(B ウン) デァゴナー (B.ウン C.ウン) ケンツテ  
 。 ( うん ) 大根 ちあ ( うん うん ) 削って

コマグ キジャンデヨー。デァゴド コメド マンジェデ ミスニ  
 細かく 刻 んでよう。大根と 米と 混ぜて 飯に

タエダリ (C ウン) アー ソステ ミンナ クタ モンダエ  
 炊いたり ( うん ) ああ もして みんな 食ふ もんだよ

ナー。(B ウン) ウン。サドデバ ナンモ ネァ。サドモ サガ  
 なあ。 ( うん ) うん。砂糖といふ 何も 無い。砂糖も 魚

ナモ ナンモ ネァ アダエナー。

も 何も 無いやぶるなあ。



## 注記

- (1) 第二次世界大戦で青森市がアメリカ軍飛行機約70機による空襲を受けたのは昭和20年7月28日夜であった。一夜で市内の90%は焦土と化した。収録地は南方へ約7kmの郊外にあるため被害はなかったが、焼け出された人々の宿泊、食糧等に尽力した。なお話者にはこの頃子が月間、横須賀市海兵団に勤務していて不在であったことを付記する。
- (2) 「ダバ〔daba〕」→〔dɒ〕, 〔d〕の脱落。
- (3) アメリカ軍重爆撃飛行機。空の要塞といわれた。
- (4) 普通「タナー」である。
- (5) 「以前にも、偵察機など二、三機程度飛んで来ているのに今度はグングンうなるように高音がする程多く」の意。「ダゲ(だけ)」は限定の副助詞であり、このような使い方が一般的か否かは今後考察を要す。
- (6) 「アメリカ」の「ア」にアクセントを置くのは当地では一般的でない。当地は「アメリカ」である。
- (7) 「稲の間に生える雑草」のこと。
- (8) 「掻き回して除草する」こと。
- (9) 実際には空襲の日が7月28日だった。注記(1)参照。
- (10) 当地特有の表現で、せせら笑う際に使う感動詞。
- (11) 注記(10)と同じ意味だが、訳は「～なうだい」の中に入れえ。
- (12) 地名、青森市「堤町」<sup>つたまち</sup>。収録地から直線距離で約8km北東方。
- (13) 地名、青森市の郊外にある。収録地から直線距離で約3km北東方。当時は大聖神社のみで人家はなかった。
- (14) 収録地のすぐ北側にかかっている水道管を吊り橋状にして通している橋。別に水道橋とも呼んでいる。
- (15) 「～ドモテ」は「ト<sup>おも</sup>思ッテ」の約音。滑軽では必ずこのように言う。
- (16) 地名、青森市大字「滝沢」<sup>たきざわ</sup>。収録地から東北方へ直線距離で約12km離れた農村。市中心部からほぼ川距離。
- (17) 「ホダ〔hoda〕」の〔d〕の無声化。
- (18) このあと文脈が整わない。「屋内から布団を持ち出して戸口の節の所へ来たら焼夷弾が落ちた」のである。この収録地には弾は落ちなか

っだが、あまりにも多数読者、その音と明るさに恐怖を感じてゐるのである。

(19) 「コノ」は不要。あるいは強めのために使うのがわからない。

(20) 「マツ」は旧青森市。

(41) 「ヅ」はほとんど聞かれない。

(22) 終止形は「ヘル(言う)」であるが、主語は「音」であるため「する」と訳す。

(23) 文脈上「オヅテ」と言うべきところである。

(24) 地名、青森市大字「<sup>ほろ</sup>細越」。収録地から西方約5km。

(25) 「オエ(俺家)ノエ(家)」は「家」の繰り返しであるが、当地ではよくいう。また「オエ」だけをもう使う。

(26) 隣家の名前。

(27) 話者Aの妻。

(68) 「ダーエステ」の「ステ」の扱い方はむしろかしい。正確に訳すなら「誰がそんなことをする必要があるか」となる。

(29) この「ナ」は当地特有の表現。自己の意見を主張する際に用いる。

(30) 「キメァ ヤブ」は「肝を焼く」が語源。

(31) 「エマノ トッチャ」は「自分の長男」のこと。

(32) 「テンデバラバウニ」というのが普通の表現。

(33) 手段、方法。

(34) 「～なる」「～をなる」の表現は話者Cの口ぐせ。この場合、前の「ソカエス」の意である。

(35) 代名詞の「アエ(あれ)」は「収容できない」の意。

(36) 収録地「牛館村の人はみんな」の意。

(37) 「ミンナ」の「ナ」が聞き取り不可能。

(38) 「ドンダガダモテ」の「ダモテ」は「ドモテ」の訛。注記(4)参照。

(39) 「(青函)レンラクセン(加入った時)」と補う。この話は7月28日のことかどうかわからない。話者Cはこの頃3ヵ月間横濱市海兵団に勤務していた不仕であった。多分、7月15日のアメリカ軍艦載機(グラマン戦闘機)が青函連絡船を襲撃したのだろう。

(40) 地名、青森市大字「大野」<sup>おの</sup>、収録地から北方約4km。当時、青森市にはほぼ近接していた村であった。

(41)(42)(43) いずれも青森市中央部で互いに接していた町名。

(44)(45) 「五世帯も六世帯も」の意。

(46) 収録地牛館の「罹災者を多く収容できる大きい家」の意。

(47) 「ヨモギ」を一般に近郷近産で「ヨゴミ」という。

(48) 「産」の意。

(49) 「景の葉」は「ナノハ、ナニハ、ナッパ」と様々にいう。

(50) 「おつゆ」か「お粥」か、いずれかを言及していると推定。

## II. 新潟県柏崎市大字<sup>おり い</sup>折居字<sup>もちろう</sup>餅糧

収録・文字化担当者 剣 持 隼一郎

## <A>

### I

収録地点名 新潟県柏崎市大字折居字餅粒

### II

## 収録地点の概観

### 1. 位置

越後の上越地方（頸城<sup>くわき</sup>地方）と中越地方と隔てる米山の海岸段丘が海に没する「米山三里」の嶺を西から越えて、中越地方に入ると所が旧宿場町の柏崎市である。この柏崎市の旧市域に南から流入する鵜川（24km）の上流に小さい鵜川盆地があり、これが旧鵜川村である。その東南の傾斜地に住する大字折居の大字、餅粒が収録地である。

### 2. 交通

柏崎旧市域から鵜川に沿って、南方に上条地区野田地区を経、中山峠（海拔160m）を越えて鵜川盆地に通ずる、県道柏崎保倉高田線が交通の幹線であった。この道は宮原から餅粒を経ず、阿相島から南の樫坂峠（417m）を越えて、中頸城郡吉川町の岩野に出、更に東頸城郡大島村大字に出る。宮原と柏崎駅との間に越後交通の定期バスが13往復する。所要時間片道45分である。宮原から中頸城郡岩野まで一時定期バスが通じたこともあったが、今は廃止された。岩野は柏崎市の経済圏に属している。然し冬期は雪のため交通でさうい。

最近上記の柏崎保倉高田線は昇格して国道353号線となり、路線が一部変り、餅粒を経て拝庭まで開通した。将来拝庭から東頸城郡松代町中魚沼副澤南所等を経て群馬県に通ずる計画があるということである。

南方の黒姫山の地蔵峠（海拔約600m）を越えて刈羽郡高柳町に通ずる山道がある。昔は馬も通り高柳町の石黒板橋等の人々々は国府所から鯖石<sup>さばいし</sup>に添って柏崎市に通ずるバスがでてきたまでは、この峠を越えて柏崎方面に出たのであって、鵜川地区と縁組みもあったが、現在はこの道の交通は少ない。

以上より南北の交通路で、柏崎から西の方、頸城地方や東の方の中越地方の文化が強力に入って来、南の方からはさして強力ではなくとも魚沼郡・東頸城郡の山地の文化が入って来たと思われる。

これに対して東西の交通路もある。鶴川地区の北に接する野田地区から、西は小村峠(328m)を越えて中頸城郡柿崎町黒岩を経て米山の南をまわって柿崎に達し、東の方には野田から鯖石地区を経て小川谷市に通ずる、県道小川谷柿崎線がある。郷土史の就えるところによればこの道は古来からの重要な交通路で上越地方の文化の入って来るひとつの道である。鶴川地区からは市野新田を経て、小村峠の南に並んでいる桂枝峠(368m)を越えて、黒岩の手前で小川谷柿崎線に接続する市道がある。定期バスは走っていないが自動車での通行が可能であり中頸城との交流もあり、市野新田はことばも頸城色が濃いと土地の人々は感じている。冬期は交通は杜絶する。

### 3. 地勢・気候

鶴川地区は標高600m~800mの山々に囲まれた山村である。海拔500m位の山麓傾斜地に傾斜集落がある。鶴川地区全体として耕地率は10.8%にすぎない。平地の少ない傾斜の耕地率はもっと低いであろう。

鶴川の雪の観測によれば、昭和38年~41年の平均最高積雪は、216cm、根雪期間116日とあって厚く、最高積雪は昭和38年の360cmとなっている。豪雪地である。

### 4. 行政区画

この地方は6~7世紀は米山以北に新設され、高志深江国に属したといわれる。702年には越後七国の中の三島郡(柏崎市が三島の駅)に属した。その頃先に述べた頸城地方から米山の南と小村峠や桂枝峠を通って中越に通ずる道路が開けたといわれる。

平安時代927年に「鶴川庄」の名があらわれ、海岸を通る米山峠の開港は、鎌倉時代柏崎が港津と発達をはじめた頃と考えられている。室町時代に三島の別は荻羽郡と改称されるがこの頃、鶴川地区は長く上杉氏の支配を受けたらしい。

江戸時代のはじめ1616年鶴川地区は刈羽郡西山郷に属し、長瀬藩牧野忠成領となつた、(刈羽郡の大部分は高田藩の沼井家治の領であった。) 1619年高田藩松平忠昌領(一部刈羽郡椎尾藩領)、16

又4年高田、松平光長領、1681~1700頃に幕府領となつたが、1710~1857年慶長まで150年間、桑名・奥州白河藩、松平氏領であり、1742年柏崎大久保に柏崎陣屋が立ち、その支配下にある。

1868年(明治元年)柏崎県が置かれ、明治6年まで柏崎県庁が、頸城・古志・刈羽・魚沼の五郡を管理したが、餅粒の属する折居村は刈羽郡下にあった。柏崎県は明治6年新潟県に統合された。

1876年(明治8年)刈羽郡折居村ができて、1901年折居村の女谷村と合併して鶴川村となり、1956年栗に野田村と合併して黒姫村となり、1968年に柏崎市に合併された。

### 5. 産業・人口・産業

大字折居は餅粒・拝庭・上向・北向・阿相島の五つの小字から成る。大字の戸数をみると、明治34年の170余戸が昭和40年には116戸に減少している。(65年間に68%に減っている。)餅粒は以前は40戸あったというが過疎が進み、現在は30世帯137人である。

産業として稲作と水産が二本の柱である。一時盛んであった製炭業は今では皆無となり、歴史的な産物も現在では殆ど行なわれない。一時高産にも手をあしめたが需の制約のため失敗したという。

水田一戸平均所有7反、畑5畝、山林1反位にすぎず、農家で生産性は低い。専業農家は昭和33年44.7%35年21.4%、40年8.2%と激減している。鶴川地区の40年の統計によって職業の構成をみよう。

| 職種 | 職別勤務 | 賃労働者 | 出稼   | 日雇人夫 | 自営業  |
|----|------|------|------|------|------|
| 40 | 13.9 | 9.3  | 45.6 | 18.5 | 12.7 |

このような出稼が非常に多いが、その職別別は次の通りである。

|      |      |     |     |
|------|------|-----|-----|
| 酒造工  | 401人 | 炭鉱  | 11  |
| 食品加工 | 31   | 荷振  | 11  |
| 土工   | 29   | 鋳造工 | 11  |
| 染色工  | 14   | 合計  | 561 |

自動車製造 12

(昭和40年鶴川村統計)

70%以上が酒造工である、いよ、ゆるサカヤモンである、この地方は江

少時代から出稼地帯であった。冬期11月から4月中旬まで男子は遠く関東、甲斐、大沢方面へ出稼でに行く。江前出稼でに行くことを「上州行き」、帰ることを「上州帰り」と言う。魚沼地方を回り、三國峠を越えて群馬県方面に行く人が多いが、そこから起ることはあろう。その多くが泊道工としての仕事であった。サカヤモシ(酒屋番)はトウジ(杜氏)に奪い取られてあかひきである。

現在餅粒の3.0歩の中スロアが出稼で出かける。

### Ⅲ

## 収録した方言の特色

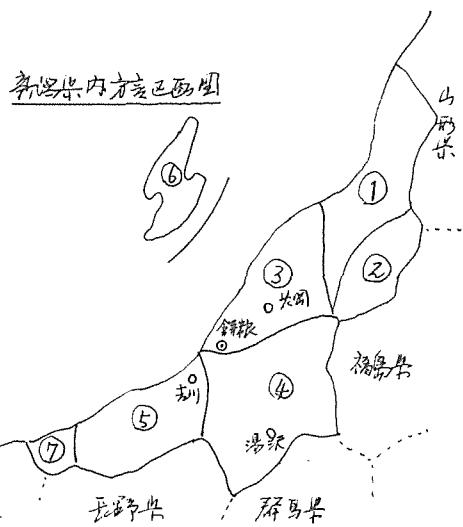
### 1. 方言区画上の位置

左の地図は加藤正信氏の「新潟県内方言区画図」と簡略化したものである。収録地餅粒は③に属している。ここは新潟三条長岡柏崎市と西・中・南の藩管郡と古志・三島・妙羽の諸郡を含む、越後の中心地帯であり、加藤氏もこれを新潟県の代表的方言と考えて居られる。

加藤氏は①②は共に東北方言的なズーズー弁地帯だが、文法面では①が関西的、②は関東東北的だとされる。これと下越地方方言としよう。

③と④は音韻上は共通点が多いが、文法は③が関西的なのに、④は関東方言的であるとされる。③を中部北部方言、④を中部南部方言あるいは魚沼方言ということにしよう。⑤は音韻文法の点で最も共通語に近い地域とされる、これを上越地方方言または頸城方言としよう。⑥は西部方言色、濃い信濃方言、⑦は西頸城郡の半田、春海地方で東西二大方言の接触地帯であるとされている。

餅粒は上の③の中部北部方言地域の西南端にある。概略を言うならば



(方言講座第二巻中の加藤正信氏の図による)



既に見て来た様な地理的位置からして、長崎市を中心とする中越北部方言に属するけれども、音韻方面で(4)の魚沼方言と多く、の共通点を探し、又(5)の頸城方言、影響もみられる。要するに餅粒方言は中越方言の中で最も上越方言の影響を強く受けている方言ということかである。

### エ、湯掛方言との関係

「湯掛方言」を前述の(4)の魚沼方言、(5)の頸城方言とし、それと此から湯沢町方言、吉川町方言をとりあげ、また同一区域内から長岡市方言をとりあげ、これらと餅粒方言との関係を説明しよう。地点の位置は先の地図の上に示しておいた。吉川町方言については昭和29年の私の調査結果、湯沢町方言については私の方言の内観、長岡方言については方言集や都市圏年雄氏の御調査等によることとする。

#### (1) 上越地方の吉川町方言との関係

##### 音韻の共通点

- /h/を/シ/ と発音することが多い。然し吉川方言の方がより多い。
- $i > e$ 、 $hi > he$ 、 $pi > pe$ 、 $ni > ne$ 、 $ju > jo$  の執りや  $kwa$ 、 $gwa$  等の存在、 $n$ 音が語頭に立つことがある点など共通である。然し餅粒方言の方がより強い。

##### 音韻の差

- ・ いわゆる関合両種の音が餅粒にはある。吉川町にも正折は残っているが餅粒ほど強くなく、頸城地方の西に進むに従い失われる。
- ・ 吉川町には  $[kam]$  (寝)  $[em]$  (影) 等の連母音があるが、餅粒ではこの外  $[ko:]$   $[jo:]$  とも言う。
- ・ 吉川方言では  $d > r$  の変化は少ないが、餅粒方言では中越の影響でかなりみられる。
- ・ 餅粒には  $/fi/$   $[ɕi]$  があるが吉川にはない。
- ・ ラ行音が撥音化することは両方にあるが吉川方言の方が多い。例えば、キンタッテ (切れ石、て) ワスンタ (忘れ石) < 吉川町 >

##### 文法の共通点

- ・ 過去完了とも言われる タッ、ダッ が両方にある。但し吉川町では、「キータコトアッ」 (聞いたことがあった) という言い方の方が多

い、餅粒ではタッタ・ダッタの方が多い。

- ・推量打消の助動詞マイはどちらも動詞の連用形に接続する。カイマイ（買うまい）〈吉川〉 カエメー（買）まい）〈餅粒〉
- ・詳細な用法には差はあるが、両方とも準体助詞「ガ・ガン」がありこれは北陸地方まで及んでいる。

## 文法の差異点

- ・吉川町方言は促音便が多く、ウ音便は少ないが、餅粒はウ音便がさかんであり、またカーテ（買って）と言いかもさかんである。（西礪波郡・長岡地方もカーテである。）
- ・サ行四段活用動詞のイ音便が吉川町にある。餅粒にはないが妙羽郡妙羽町の老人のことばにはある。
- ・吉川町には尊敬の助動詞ナサル・ナハル・ナルがある。餅粒でもナサルもやや使われるが、一般的なのはレル・ラレル・シャルである。
- ・推量の助動詞は吉川ではダロウを多く用い、ロウを用いることは少ないが、餅粒は反対である。
- ・吉川では目的格助詞にヲバを用いるが、餅粒ではヲを用い、又それを省略することが多い。逆接の助詞は吉川はデモ、餅粒はドモである。

## (2) 魚沼地方湯沢町方言との関係

### 音韻の共通点

〔O:〕〔O:〕の別、〔E:〕〔kwa〕〔gwa〕〔wo〕〔we〕〔we〕の存在、〔i〕が小さいこと、促音化撥音化の多いこと、エグ（行く）ドキ（膝）等の語彙の清音化エとヨ、イとエ、ウ段者とオ段者の混淆などの点において共通である。

### 音韻の差異点

- ・湯沢町方言では撥音の促音化がある。サッピョー（三俵）サッズ（三升）北魚沼郡ではセダリ（洗濯）もさかれる。この現象は餅粒にも認められるが、湯沢ほど強くはない。
- ・湯沢町方言ではヒとヘと読めることが老人のことばに多い。餅粒にもこの傾向はあるが、それよりもヒはシに読めることが多い。
- ・餅粒方言では助詞ニとネと読めるが湯沢方言にはこれが無い。
- ・餅粒に多いダ行ラ行者の混淆は湯沢方言には無い。

## 文法の共通点

- ・ノセル・ノシテなどの二段活用、シム（死ぬ）のマ行活用、カ行変格活用、便宜形コエバの存在など共通である。
- ・尊敬の助動詞としてシャル系の語がとしかるである。
- ・接統助詞としてスヶー、ンガ、ドモがある。

## 文法の差異点

- ・湯沢町方言では動詞形容詞のウ音便は極めて稀であり、促音便がとしかるであるが、餅粒方言ではウ音便がとしかるで促音便は稀である。
- ・ア行五段活用の終止形は湯沢町方言では[waraɯ]（笑う）[kaɯ]（買う）であるが、餅粒では[wara:] [ka:]とも言う。
- ・文法上の已然形と同じ用法が餅粒方言にあるが、湯沢町方言にない。
- ・打消に湯沢はナイを用い、餅粒は四段にソ、他にナイと接統する。
- ・湯沢町方言でサ変動詞はサレルシルシレバと二段に活用するが、餅粒方言ではセーバが加わって三段に活用する。
- ・動詞命令形は湯沢町ではオキロ、シロであるが、餅粒方言ではオキレ、シレであってオキロ、シロは少ない。
- ・形容動詞の連体形は湯沢町方言ではジズカノなどであるが、餅粒ではシズカナなどである。
- ・湯沢町方言では尊敬の助動詞にレル、ラレルは多く、ナサルもよくシャル・ラッシャル類が用いられる。餅粒方言ではレル・ラレルが普及して多く用いられる外、シャル・サッシャル、ナサルがそれより地位の高いものとして用いられるなど敬語の発達が異なる。
- ・湯沢町方言の可能の言い方にはレル、ラレルをつけていう言い方の他に～イル・～エル、～イタ・～エタと言う言い方があるが、餅粒にはレル・ラレルの外に、カケル・カケレル（何れも煮ける意）という言い方がある。
- ・湯沢町方言には過去完了的な言い方にカイテアッタ（煮いたことがある）ヨシデアッタ（読んだことがある）という言い方がある。これは魚沼郡の外三島郡、中頸城郡の南部にもある。餅粒方言では、ヨシタッタ、カイタッタと、コアテアッタ（飼ってあった）の両形がある。

- 湯沢町方言には推量の助動詞に、関東的ベ-を使うが、餅粒方言ではロ-〔ɾo:〕を使う。
- 湯沢方言で推量の打消、助動詞マイは動詞の終止形（サ変は連用形カ変は未然形）に接続するが、餅粒方言では連用形に接続する。
- 準体助詞は湯沢町方言ではガ(の)、ガダ(のど)であるが、餅粒方言ではガン、ガンダ、アングという。
- 湯沢町方言には間投助詞ネーの古形と考えられるナイがあるが、餅粒ではノーかきかんである。

### (3) 中越北部方言長岡方言との関係

#### 音韻の共通点

- 〔o:〕〔ɔ:〕〔kwa〕〔gwa〕の存在、〔i〕がない、ju>jɔの混同など。

#### 音韻の差異点

- 餅粒方言及び羽羽郡にあるfi音は長岡方言にはない。
- 餅粒方言は頸城方言の影響でヒカシに訛ることが多いが、長岡方言ではあずかる俗語に限られる。
- う行者の促音化及び促音添加が長岡方言には強い。例 ホルナ（飲れるな）ミテラッル（見ていられる）クズ（呉れる）ヤッスイ（安い）餅粒にもこの傾向はあるものの、長岡ほど強くはなく、クズという類はない。
- 撥音の促音化も長岡方言の方が多い。例 コッケー（こんな）
- ダ行者かう行者に訛ることは長岡方言の文と異なる特色であり、母音間のみならず読頭にもあらわれる。これは三島郡・刈羽郡の中越地方まで広く行なわれ、餅粒方言にも影響を与えており、しばしばd>ɾの混同がきかれるけれども一部の話にかぎられる。

#### 文法の共通点

- 動詞・形容詞の活用、助動詞ナイ、シの接続の区別等共通の点が多い。身内の者のことを言うのにも敬語を使う。

#### 文法の差異点

- 長岡市では尊敬、助動詞ナサルが多用され連用形にナシタがあり、市周辺ではレル、ラレルがラッル、ラッズと発音される。これに対し餅粒

。長岡は城下町であつたため、旧士族のことが残っていると云われている。オミシャン（あささ）オクリヤエ（おさめ）オシ（しなさい）～ザア（～しなれば）～マイカ（勤王表現）などの表現があるという。鍋糠にはこうしたことは見当らない。

### 3. 音韻上の特色

[illegible]

## (2) 音素的特徴

1. いわゆる開合の別がある。/o/ はほぼ基本母音の[O]に当なり、共通語の才段長音よりもかなり狭いように思われる。開者の/o/は基本母音の[O]にあたるが共通語の才段長音に近いように思われる。

例 eakO (一個) eakKO: (一向)  
 to: dʒi (冬至・杜氏) to: dʒi (当時)  
 do: (胸) do: (堂)  
 so: rjO: (統領) so: re: (葬礼)  
 bim boda (筒先登) bo: (棒)  
 tʃo: ʃi (調子)

[O:] は次第に減少して行く傾向がある。

店丁 ho: tʃO: > ho: tʃO > ho: tʃO:

帽子 bo: ʃi > boʃi > bo: ʃi

船頭 sendo > sendO:

総理 so: ri > so: ri

印刷のことを[hankO:]と言っているのはこの語の語源が「版行」であることを示すものかもしれない。開者はオーと表記した。

2. /ai/ /ae/ が変化して[ɛ:] となっている。[Ome:] お前 [ere:] えらい、これはオメー、エレーなどと記した。

3. 早者の[i] は共通語の語の影響を受け左者以外には存在しない。いちごもえちごもすべてえちごと発音される。その/e/は[i]と[e]の中間母音[ɛ]に近いものであろうか。子者と合した場合[i]と[e]の区別はあるが、時にはイがエに読まれることがある。特に助詞「に」は「ね」となり特に老人においてヒがへと読んてへうテ(平手)、へうク(開く)、へラスミ(昼休み)などと発音することがある。才段者の場合ではイが[i]に近く発音されたり、[i] [ɛ]の如く発音されたりする。

4. [ɣ] は語頭以外でも[ɣ]であって[ɾ]は存在しない。

5. 老人に/ɸi/ 者がある。フィシモケ(菱餅) フィヤザケ(冷酒)等で[ɸi]であろうか。

6. /sʲɛ/ は[siraʃɛ:] シラッシャ(しそさい)などにあらわれる。

7. [Cjɛ] は暑いの変化 [accjɛ:] 等にあられる。[jɛ]の例 [hajɛ:](早い)  
 8. [ca] はツァーツァ(父) アンツァスト(あんなことの卑下者)、[Cɔ] はゴツツォ(御馳走)、ジツツォク(十束)、[Cɔ]はアツタツォー(あつたさ) 等と。  
 9. [wɔ] は感動詞 ウォーエ [wɔ:ɛ]、金おう [kwɔ:]、[wɛ]は具金 [quwɛ:]  
 [wɛ]は上 [juwɛ] 桑を植えたり [kwa:juwɛtari] 等にあられる。  
 10. [ɾjɛ] は [harjɛ:ne:](強念をい)等にあられる。  
 11. [kwa]は [kwa] 桑 [kwaseru] 金おせる、[gwa] は [ɕɔ:gwaɾsɯ] 正月等にあられる。

以下音素の変化について述べる。

#### 12. 促音について

- ・ 促音が流音に立つことがある。ッジャー(それでは) ッデ(それで)
- ・ う行音が促音化することがある。エッラ(入れて)、ソダラッドキ(着てる時)、オッドヤ(下りろよ)、オッテクレ(下りて呉れ)
- ・ 促音が添加される。アツイ(暑い)、アツキ(山豆)
- ・ 撥音が促音となる。ナッテモ カッデモ(なんでもかんでも) ガッギ(雁木)

#### 13. 撥音について

- ・ 撥音が流音にくることがある。  
 ンメー(うまい)、ンラサキ(紫)、ンネ(ほんとうに) ンナ(皆)  
 ンダドモ(そうぞうれども)
- ・ う行音の撥音化 カウンネー(紫られない)、ソンネ(それに)、カウンニ(代りに)、オワレンガンモ(遊われるのも)

#### 13. 長音化について

- ・ 一音節語は特に長音化する。マー(馬) フー(麴)
- ・ 形容詞は長音化に固執しているものがある。ニーグー(若い)、ワーケー(若い)、ナーグー(若い)
- ・ 強調するために長音化することがある。ミンナー(皆) ゼンナー(金部)、ホンナー(ほんとうに) マエーンタ(毎日) リーレカ(それが)、ロー(それだ)、サーンザク(三束)

#### 14. 清音化について

カ行・タ行の音がわすかしく聞かれる語について語ることもある。

エグ (egm 行く) ドグ エエカッシャル (どこへおいでか) ガニ(かに)  
セギ (壇) ハダケ (畑) ワラハダキ (葉叩き) ソダテッドキ (着て  
る時) ソンドキ (その時)

#### 16. ヒシの混同

シ (日だ) シカル (光る) エトシキ (糸引) 製糸、シンナカ (虫の中  
から国許裏のこと)、シダナ (火棚)、シト (人)、シトツ (ひと) 等  
のようにかなり目立つ。中にはヒシの中間者の如く聞こえる場合もあ  
る。表、裏等には混同をさかすか。ヒシの混同は中頭域方言  
の影響である。シフヒは少々く軟くにあらわれる程度である。

#### 17. 魚沼域に似てヒとへの混同もややある。ヘー (稗)、へり (昼)

へはガル (店がさ)、へはー (捨る)、ヘンガワリー (品が悪い)

#### 18. サ行者 > リ行者 ホーシテ (そうして)、ホーテ (そうして)

#### 19. ハ行者の脱落がある。

アナズラ (鼻面 - 直前)、キノア (木の葉)、クロエメ (黒姓)  
エヤシリ (冷や汁)、シーネ (ほんとうに)、オンネ (ほんとうに)  
ニヤク (ニ着)

#### 20. う行者の脱落

エーラ (着るで)、～ナンワ (～ならぬいよ)。シネケナン (しな  
ければならぬい)、ホドコ (ぬところ)

#### 21. う行者の撥音化程度化 12a 12b 参照

#### 22. ダ行者のう行者化 長岡地方の影響でしばしばとれる。

オウロコ (おらどこ、私の家) センゴラック (戦後だつた) ネラック  
(ねだつた)、～ガレヤナンレヤ (～だかなんだか)

ダラの中間者に発音される場合もある。[rgo:gidra] (ごうぎだ)

#### 23. ザ行ダ行の混同

シンゴジャン (新五左衛門)、エゼテ (ゆでで)、ナゼ (なだれいまで)  
オカンネード (置かぬいぞ)

#### 24. 段者と才段者の混同

スル (剃る)、ノエハリ (経い針)、フーノキ (朴)、ホドコ (懐)  
アマゴ (雨具)、モコ (婿)、ヨーカタ (夕方)



#### 4. 文法上の特色

##### (1) 動詞について

1. 二段活用がある。ノセル, ノシテ (載<sup>せ</sup>り) ヨセル, ヨシテ (寄<sup>せ</sup>る)
2. 「死ぬ」はナ行にもマ行にも活用する。マ行四段に活用する点は關東の西南部地方・福島県に似ている。(中頸城郡にはガ行四段に活用する。これは花野、栃木、茨城、御妻川西部、山梨と共通である。)
3. 四段活用の動詞の連用形はウ考便がさかんであり、これについて「カーテ」(累<sup>て</sup>て)という「ア考便形」が多く、促考便は極めて稀である。この状況をや、詳しくみると、明治生れの老人(明治29年生れ)にはウ考便<sup>レ</sup>けがみられる。今回の文字化の時の「4. 養老」について、「飼う」という語についてのウ考便とア考便のあらわれ方の比をみると、明治30年代生れの男女においては、ほぼ3対1であり、大正生れの者においては逆転して1対3となっている。

「ア考便」は中趾の長岡地方、刈羽郡内、柏崎市の市域及び中頸城をとりこめて両頸城郡に多い現象である。飼<sup>レ</sup>粒ではアラテ(洗<sup>て</sup>て)クテ(食<sup>て</sup>て)の様に終考便<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>形も存在する。

4. ア行五段活用の終止形は例えは、[kɔ:] (買<sup>う</sup>・飼<sup>う</sup>) (warɔ:] (笑<sup>う</sup>)の外 [kaw][waraw]ともなる。中頸城郡では[waraw][kaw]と連母音になる。
5. カ変動詞の未然形にセーバ、セバ、命令形にセー・シロ・シレがある。またシレバ、シル、シロ、シレと一般化の傾向もある。
6. カ変の未然形はコエバである。マイが接尾する場合はキマイである。
7. 文法動詞の未然形と同じ用法がある。

セーフテ キメラ エラレレバ ゼン エッパー モラウノオシガエ。  
(政府で決めていられるから、金をたくさん貰われたいね。)  
(大正七年生れ男子)

ソーシタレバ (そうし<sup>る</sup>) (著<sup>説</sup>から) トイッタレドモ (と<sup>言</sup>つ<sup>た</sup><sup>ら</sup>か) (著<sup>説</sup>)

8. 一段活用動詞の命令形には起キロ、受ケロという形と起キレ、受ケレという形と二つが行なわれている。老人の語る著説では起キロ、見<sup>に</sup>寝<sup>に</sup>が圧倒的で、起キレ等は皆無に近い。ロ命令形は魚沼郡から關東につまがり、レ命令形は中趾から東北地方に分布しているものである。

だから、辞書では口命令形が左く、レ命令形が新しい形であろう。

### (2) 形容詞・形容動詞

1. 形容詞の連用形はうき便が圧倒的に多用され、ヨウクテの様な例は殆ど見られず。うき便は短く発音されてハヨシ早く)のようになりこともある。

2. 形容詞の活用は単純化し、無活用化する傾向がある。終止形がひろく他の活用形に用いられず、語尾もあとし語幹のみが用いられることもある。アシガ ナンギーテ (足が若しくて) スズシナッテ (涼しくなッテ) オモシロエカッタ (おもしろかった)

3. 形容動詞の連体形はヘナの形で魚泥部で～ノとい形に対立する。

サカンナコは、ラクナ絵、マクはナ、マッカナ。

### (3) 助動詞・助詞

1. 敬語が発達していて広く用いられる。最も多用されるのはレル・ラレル類である。昔話にも「かん」に次ぐ子し、誰もが広く用いる。普通語からするものでは若く左代語の正装と思われる。しかし、レル・ラレルは地の尊敬の助動詞よりもやゝ敬意の軽いもののようである。評説はさける。

2. 前期上方語や前期江戸語として「かん」に用いられるとされるシャル類がレルラレル類より敬意の高いものとして用いられている。

オトツツァンガ エワッシャルヨアネ (明治34年生女→29年生れ男)

オメアサソ ジョアズデ エサシツ (明治39年生女→35年生れ男)

3. シャル類に「ラッシャル」「サッシャル」がある。一段活用・カ変、サ変に連続する。

オメアサソ ユーテ ミラッシャエ (明治29年生れ男→34・39年生れ女)

ユーテ エサシツ。

4. 旧柏崎市域や中越、刈羽郡地方で最も標準的な尊敬の助動詞である、ナサル(江戸後期の代表的敬語)は、辞書では大正生れの男女に少しみられるだけで、明治生れの老人には普及していないようである。

5. 近世上方語、江戸語とされる「ヤル」という尊敬の助動詞や「マイル」などの語も昔話にみえる。昔話には「オヘニサル」もみえる。

下から右からまいりゃれの (下から右からお金できさい)

花押さんかみんなめえらしきふうだ (花押様かみんなでお金でなさらしい)

6. 打消の助動詞ナイは一段活用・サ変・カ変の動詞の未然形に、シは四段活用動詞の未然形に接続する。助動詞レルラレルにはナイ、マスにはンが接続する。但しナイは[mɛ:]と発音される。

7. 推量打消の助動詞マイ [mɛ:]は動詞の連用形に接続する。

ヨミマ<sup>ー</sup> (読むまい) フリマ<sup>ー</sup> (有るまい) キマ<sup>ー</sup> (来まい) シマ<sup>ー</sup> (はい)

8. 理由原因をあらわす接続助詞が豊富である。

○明治金丸の者がさかんに用い、また若狭しにも多用され、また文正金丸の者も際には用いるものに「エニ」「エネ」がある。

セガレモ チョット キタエネ オウ キョア<sup>ー</sup>ワ ドッコモ エカンデ<sup>ニ</sup>エル  
格助詞「ニ」の変化したものであろうか。

○明治生れの者に用いられる「モンガ」があり、その変化と思われる「ンガ」は広く用いられる。

トシヨリバ<sup>ッ</sup>カ アエンデ<sup>ニ</sup> エカンケ ナランモンガ カナンヨ<sup>ア</sup>ダ  
コレネ (年寄りだけが歩いて行かなければならないから困るよね)  
カネ トル ドコガ ネ<sup>ン</sup>ダ<sup>ン</sup>ガ ハー (金と取る所が無いのだから、はい)

ンガは広く中部地方で用いられる。

○関西系のスケ<sup>ア</sup>・スケ<sup>ア</sup>デ<sup>ニ</sup>・スケ<sup>ア</sup>ニが最もさかんに用いられる語である。 殊ま<sup>ニ</sup>る場合には普通語のカラを用いる。

9. 二つの動作が同時にあ<sup>ニ</sup>るいは連続的に起ることを示す接続助詞に次のようなものがある。

○ドコテモンガ・ドコテンガ・ドコガ

遑<sup>ニ</sup>か<sup>ニ</sup>けておれどこてもんが、落<sup>ニ</sup>し<sup>ニ</sup>次に爺<sup>ニ</sup>さんが落<sup>ニ</sup>ちてしもうて。

猿<sup>ニ</sup>がまあ細<sup>ニ</sup>か<sup>ニ</sup>づいで、そして来<sup>ニ</sup>れどこてん<sup>ニ</sup>が、土<sup>ニ</sup>手<sup>ニ</sup>へ来<sup>ニ</sup>れどこてん<sup>ニ</sup>が、桜<sup>ニ</sup>がそれ<sup>ニ</sup>とに咲<sup>ニ</sup>いていて。

.. と言うとどこか、そのア<sup>ニ</sup>ニが弟<sup>ニ</sup>の腹<sup>ニ</sup>さいてみえと。

語彙は「所<sup>ニ</sup>と言うもの<sup>ニ</sup>が」であろう。 (「黒姫の昔話」より)

○ツガヤ

ソーレガ オメアサン アッタケー カゼン 1ッテ クルツガヤ クチ  
ンナカマデ ニゴアナル (高橋ケエノ 明治34年録)

○トサエニャー

アキン ナルトサエニャー シトワ コノ デヤノサカオ オメアサン  
ツナギン ナッテ エネ カズクデショアネ (同前)

この三つの語はいずれも老人のことばで、昔語にはしほしほ係われる。  
特にトサエニャーが多くあらわれる。「と際には」が語源である。

岐阜三雲嶺登山口のトサイガ、石川勢国、名古屋千景のトサイニャ  
佐渡のトセーカ、中頸城郡の(タウ)サイナ等と同類である。

トコレンガは魚沼郡につながらうようである。

10. 接頭助詞のドモがある。中頸城・常頸城と同じくデモと発音されるこ  
ともある。

11. 助詞が省略されることがある。接頭助詞ヲの場合特に多い。

オドリー ミル (踊りを見る) エキ ホル (窓を揺る)

ハンコー オシテ (判を押して) カエコ カータ (庵を銅で)

接頭助詞ヲもこれに次いで省略されるンセが多く、それ前の語と融合す  
ることもある。

ヨアサン オソカッタ (蕎麦はおそかった) ソラー (それは) ヨラ  
ー (これは) オラー (俺は)

「ニ・ヘ」もわずかに省略されるンセがある。

トマリー エク (泊りに行く) トナリー エッテ (隣へ行って)

12. 「ではないか」という元語の表現をする時、

カータンダ ネーカ。デルヨアネ ナッテルンダ ネアカナ。

のように言うこともあるが、「では」にあたる語を係わらず、「ネアカ」  
が直接接頭助詞や形容詞や助動詞(シル, ラレル, タ, マス等)に接して、  
ユータネアカ (言ったではないか) アルネアカ (あるではないか)

のように言うことが多い。佐渡方言にもこの表現がある。

オソカッタガン ネアカネ (遅かったのではないかね)

のような例もある。

その 他

1. 地点選定の理由

(1) 調査地の方言は、新潟県の中越後側の代表的方言と考えられる、中越方言に属すること。

(2) NHKの「全国方言資料」に中越地方の方言が採り上げられていなかったこと。

(3) 調査地は旧市街から20キロメートルしか離れていない麓山村であるが古い方言が保存されていることの多い所であり、また若者の帰郷者も多いこと。

以上のよう各理由で選定した。

2. 協力者の氏名と協力内容

高橋慶宣氏

調査地に生れ育ちそこに住み、新潟市役所総務課広報係でいらっしゃるこの方からご協力願った。教習の紹介と対談会話の許可をしてくださる、また聴きとりの困難な部分について意見をきいたり、教中にでて来る方言やこれに関連する語彙・音韻・語法について教えてくださる、地名の概観のための資料の一部の提供を願ったりした。

田村彦雄氏

新潟県立西越高等学校教諭で生物学専攻。刈羽郡周辺の植物の調査をしてくださるので、植物の方言名学名について教えてくださる。

## <B>

### 表記について

表記は表音的カタカナ表記による。そして次の方式に従う。

1. 長音には「ー」の印を用いる。
2. 合拗音の〔kwa〕〔gwa〕はクワ、グワのように表れる。
3. 〔ʃe〕〔dʒe〕はシェ、ジェのように表れる。
4. 〔ɕi〕… はフィのようにあらわす。
5. 〔ɛ〕〔kɛ〕〔sɛ〕〔ʃɛ〕… はエァ、ケァ、セァ、シェァのようにあらわす。
6. 〔ɔ〕〔kɔ〕〔sɔ〕〔kʲɔ〕… はオァ、コァ、ソァ、キョァ…のように表れる。

アクセント、イントネーションは表記しなかつた。

カタの表わす母体音声について、判断に迷った微妙な音声の処理原則について。

1. エァ、ケァ、セァ、シェァ等で表記した音声は、共通語のエ段音よりも少し聞いて居り、基本母音の〔ɛ〕と同じくらいか、あるいはそれよりいくらか聞いている音声のように思われる。

2. いわゆる聞合の別の残っている地方音ので、オー、コーで合音と、オァー、コァーで聞合と表わした。オーは基本母音〔o:]に近く、共通語のオ段音よりも少しせまいように思われる。〔ɔ:]に近いかもしれない。オァーはほぼ基本母音の〔ɔ〕にあたり、共通語のオ段音に極めて近いが、あるいはわずかに聞いている音声のように思われる。

3. 表記に迷ったのは〔i〕～〔e〕の音声群である。この方言には単独の〔i〕は存在しなかつたが、敬音やマスコミなどの影響で、敬音ある人には〔i〕に近い音声もみられるようになって来ている。イがウ段音の次に来る場合など特に〔i〕に近く発音されることがある。〔ɛ〕であつたり〔e〕であつたり微妙である。調査者もこの地帯に音声これらの音声に対して敏感でないこともあり、判断に迷うことが多かつた。それで〔i〕に近いと思われる場合はイと表記し、〔e〕に近いと思われる場合はエと表記することとした。

4. ウは非円唇の〔u〕であると思われる。

5. ヒ〔ʃi〕はシ〔ʃi〕に近きことがあり、時にはその中間の音に聞こえることもある。〔ʃi〕に近い場合はヒ、〔ʃi〕に近い場合はシと表記した。

6. 母方の無事化はほぼ東京流と同じいと思われるが、符号はいつをかんた。

## < C >

### 収録内容の概要

1. タイトル I. 昔の労働

2. 録音年月日 昭和50年(1975)8月10日

3. 録音場所 柏崎市大字新居字餅粒 教者Bの自宅座敷

4. 話し手の氏名 A. 高橋鹿之助

同 性 男

同 生 年 明治29年

同 職 歴 農業

同 役 職 名 村の司法保護司28年間、民生委員17年間、村会議員2年間。鶴川地区老人会長。(現)

居住歴 柏崎中学校在学中2年間は柏崎市に下宿した以外は餅粒に在住。

言語的特長 80歳を越す老年であるがすこぶる元気でしゃべりしている。郷土史・華草学に関心が深く、古い村の生活やことはよく保存している。新しい好きではなさうしなことはと新すか、他歴の関係で共通語化もかなり見受けられるが、関念の別を保存し、古いことばを継ぐ。親戚人であるので、新が知的、説明的になりことがあり、対話会話においてとかく発言を独立する傾向もみられる。はじめ司会者や調査者に対して説明する傾向があったが、指導によって後には改まった。文字化した部分にはそうしな名点の少ない部分である。

この人の話しぶりを「チャリが多い」と批評した人から、新が古い道にそれることが多いことらしい。この人に対しては古いが、他の人の話しに比べると新しくはない所がある。

話し手氏名 B.高橋フエノ

性 女

生 年 明治34年

職 歴 主婦・農業

役職歴 なし

居住歴 旧鶴川村大字女名字下野に生れ者なり（祖母・母ともに餅  
糰者身）餅糰に嫁いで居る。14歳の時東京に出て3  
か月お亭主さんをして居ることがある。

言語的特長 話し好きで静かに情緒的に具体的に話す。調査者の意  
図を穿くのみこと。古い方言を保存している。捲舌助  
詞トカリチャ、エネ等を用いる。記憶もなしかで、  
皆新のよき伝承者でもある。話し方と同じく他の話者  
の話しの特徴をうろに発言するところもある。

話し手氏名 C.高橋春宣（司会者）

性 男

生 年 大正15年

職 歴 地方公務員

役職歴 鶴川郵便局員2年、林役場・市役所吏員24年間、現  
在柏崎市役所総務課広報係長

居住歴 餅糰に生れ、雅行学校（場所不明）在学の際に1年  
間他村等に居住したことがある。

言語的特長 低声でやさしくおれを多の存在。役職上英語を話すか  
果敢の人とは方言で話す。

## 5. 餅糰の環境

同居も無く、池の邊のれも止めてもらい、静かな部屋で、三つのマイ  
クを使用し、餅糰した。司会者の指導もあり、軽やかな気分で、話し  
合いはスムーズに進行した。



1. タイトル II. 冬の仕事
2. 録音年月日 昭和50年(1975)8月22日
3. 録音場所 柏崎市大宮折居字餅根話者Bの自宅座敷
4. 話し手氏名 A. 高橋 清治
- 同 性 男
- 同 生年 明治35年
- 同 職歴 餅根で農業、一時製炭に従事し、各期間は酒造労働者として40年間出稼をした。
- 同居住歴 兵役で高田市に転居。昭和11年12月30日で内地送還。戦時時代から40余年間各期6ヵ月間の出稼に、東京都西多摩郡(2年)葛城山笠間荘(40年)湯松荘(3年)に出向いた。
- 同言語的特徴 言語がなめらかでなくにごもつたり、どえりような話しぶり、連続する音がちがまったり飛躍するところがあり、とらえにくいところがある。他の話者には話しが早い。
- 長い出稼によることばの共通語化は鮮明認められようである。「オマエ」などというこの地方のあそびことばとさかんに使う。
- 話し手氏名 B. 高橋 ケエノ
- 同 性 以下I. 著の「労働」に記述したので省略
- 話し手氏名 C. 高橋 ミサノ
- 同 性 女
- 同 生年 明治39年
- 同 職歴 農業・主婦
- 同居住歴 生家は餅根と同一大宮の字北向、母は大宮清水谷出身。北向に育ち餅根に嫁いで来る、他の居住経歴はない。
- 同言語的特徴 上下の前歯が抜けていたが発音に異常はなかった。鶴刈地区に於ける代表的な昔話伝承者で、その語り調子は重々さとして、内容も整っていると評されている。

他の土地の居住歴もなく方言の保有度が高い。話者A  
Cとは隣家同士で、特にBとは親しく、しきりに行き  
来して話しあう仲である。

#### 5. 録音環境

I、IIの場合と同じく、話者Bの自宅座敷の静かなところ  
で行ない、同席者なく、司会は調査者が行ない、前以  
てお合せとし、司会者の発言はそくとして話はスムーズ  
に進行した。

#### 1. タイトル

#### Ⅲ. 養 蚕

#### 2. 録音年月日

昭和50年(1975)11月8日

#### 3. 録音場所

柏崎市大字新屋字餅粒 話者A高橋真氏宅座敷

#### 4. 話し手の氏名

A. 高橋 真

同 性

男

同 生 年

大正7年

同 職 歴

農業

同 居住歴

餅粒に生まれ餅粒に居住。但し昭和14年より6年間兵  
隊のため東京郊外及び外地で過ごした。(在外期間が3  
年を超えて、望ましくないので、他に適任者が無い。)

#### 同 言語的特長

元気に大声で朗らかに話す。話のテンポが早く、こと  
ばに飛躍があり、早口で、聞き取りにくい点がある。  
しかし方言を保有し、また会話をリードして行く、

同 氏 名

B. 高橋 マツノ

同 性

女

同 生 年

大正元年

同 職 歴

製糸工女・農家の主婦

同 居住歴

餅粒に生まれ小学校卒業後群馬県前橋市へ女工として  
行き、六年間そこに居住した。(在外期間3年以上と  
なり望ましくないので、本邦各地で上り下り得た。)

同言語的特長 静かに明瞭に話す。年令・居住所の関心もあり明治生まれの老人より共通語化している、話者3人の中で共通語化が最も進んでいる、

同 氏 名 C、高橋 初枝

同 性 女

同 生 年 大正2年

同 職 歴 女工・農家の主婦

同 居 住 歴 餅屋に生帯し、高等小学1年終了後、女工として嫁入りし、前橋市に6年、京都市に4年居住の後帰郷し、農業に従事した。

同言語的特長 母は中須城郡に最も近い市野新田生まれで、餅屋に嫁いだが高橋サヨ子で、舌話の伝承者である。朗らかに話し好きである。但し母は孫を産み後にほんまに抱いて対話と会話に耽りつたので、その孫にさきやうもて発言と会話されたりい加減な。鼻をつまむ口でいるらしい発言がある。

(同命者)  
話者の氏名 D、高橋 厚宣

同 性 男

同 生 年 大正15年

同 職 歴 地方公務員

同 役 職 歴 鶴川郵便局員2年、村役場市役所吏員4年現在市役所総務課広報係長

同 居 住 歴 餅屋に生帯し、聴行学校(場所不明)在学のため1年間他県に居住した以外は餅屋に居住。

同言語的特長 低声でややかすれ声の静重。役職上共通語を話すが素直な人との話しには方言が多い。

5. 録音の環境 A 氏宅は道路に面しているため、時折道路を通るバイクの音がかなり大きく入っている。録音機にはマイク3箇所を使った。何のせいか少し雑音が入っている。話者Cは家庭の都合で孫、子守りとして来ればと

うなか、その中で、はじめ存に慰い、後にはこをって膝の上に抱きながら話・今話にのぞいた、孫が退席してむすか、その高橋も録音された割合もあり、また話者にもそれと発言を創約されたものもある。同席者として親戚の真がお茶の接待をしたり、隣室のこをって見守っていたりした。司会者のリードで話のスムーズに進んだ。

1. タイトル IV. 雪の中の生活
2. 録音年月日 昭和50年11月8日
3. 録音場所 柏崎市大字折居字餅根 話者A高橋真氏自宅座敷
4. 話し手氏名 A. 高橋 真 男 大正7年生れ  
B. 高橋初枝 女 大正2年生れ  
(司会) D. 高橋存宣 男 大正15年生れ  
(話し手の職歴以下の事項についてはⅢ、Ⅳ参照)

1. タイトル V. 冬の楽しみ
2. 録音年月日 昭和50年11月8日
3. 録音場所 柏崎市大字折居字餅根 話者A高橋真氏自宅座敷
4. 話し手氏名 A. 高橋 真 男 大正7年生れ  
C. 高橋マツノ 女 大正3年生れ  
(司会) D. 高橋存宣 男 大正15年生れ  
(話し手の職歴以下の事項についてはⅢ、Ⅳ参照)

# 1. 昔の労働

註し号

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 高橋鹿之助 男 明治29年

B 高橋チエノ 女 明治34年

C(司会)高橋 寿宣 男 大正15年

C ソレー マー <sup>(1)</sup> イツ <sup>(2)</sup> ナラータ モンデス。オンナシューワ イツ=  
それを まあ いつ 習った もんですか。女衆は いつも  
<sup>(3)</sup> モ イリガシーンデスカ。  
忙しいのですか。

A ガッ <sup>(4)</sup> コー <sup>(5)</sup> オエテノー。  
学校が 終ってねえ。

B ソレワネー ハルン ナッテカラ。 マー マー オショアグワツニ <sup>(6)</sup>  
それはねえ 春に なってから。 まあまあ お正月に  
ナッテカラ <sup>(7)</sup> ヤマエ <sup>(8)</sup> デルマデ。 <sup>(9)</sup> セッ キウチワ <sup>(10)</sup> オメアサン オ=  
なってから 山に 出るまで。 節季うちは あんた お  
ハリシル <sup>(11)</sup> アッデスコテ……。

A ン アー フエウチ ソノ アノ オハリシショアテノガ ドコニ=  
ああ 冬うち その あの お針師匠というのか どこにも  
モ アッタカラサ <sup>(12)</sup> オーアザニ シトリグレア <sup>(13)</sup> ズツワノー オシ=  
あったからさ、 大卒に ひとりくらいずつはねえ、 教える。

(13)  
エロ。

B コノ ウカワデモッテ エッケバン ハリノ カテアー ヒトワ ホ=  
この 鶏川で いちばん 針の 堅い 人は どれ

レ オメッサンタ<sup>(14)</sup> ホンケノ マルトカラ<sup>(15)</sup> コラッタ<sup>(16)</sup> オッカサン。  
あななの家の 本家の まるこから 来られた おかあさん。

(A ソニシノ。)<sup>(17)</sup> ソレカラ<sup>(18)</sup> シモノノ<sup>(19)</sup> ドーシノヤ アレガ<sup>(20)</sup>  
(うん、西の。) それから 下町の 道正の大家 あれが

アノ<sup>(21)</sup> ~~~~~。 アノ オッカサントチガ エッバン ~~~~~。  
あの ~~~~~。 あの おかあさんたちが いちばん ~~~~~。

A ソコエ オーカタ アノ サエホーテダカネ ナラエ。 ノエハリ<sup>(22)</sup>  
そこへ 大方 あの 裁縫と言うのかね 習いに。 縫い針

テッタ アノ コは ノエハリ ノエハリダ。  
と云った、あの 頃は 縫い針 縫い針だ。

B ア ソッテ<sup>(23)</sup> ~~~~~ ショーグワツワ ワリアエ----- ニグワツ  
あ それで ~~~~~ 正月は わりあい ----- 二月

サングワツ ショーグワツカラ ショーグワツ ニグワツ サングワ  
三月 正月から 正月 二月 三月

ツ マ ミツキグラー エキマシタネ オハリナラエ。  
まあ 三月くらい 行きたるね、 お針習いに。

A オハリナラエノー オハリナラエ-----。ソッテ サン<sup>x x</sup> ミフエグラー  
お針習いにねえ、 お針習いに……。 それで 三月くらい

エカンケア フエウケ-----。 アソ ----。  
行かなければ 冬うち -----, あ -----。

B ミツキグラーネー ミツキグラー ミフエグラー エカンケラ  
三月くらいねえ 三月くらい 三月くらい 行かなければ

オマエサソ (A) ソアソア。 (22) ハー スーテ コター デキネア。   
 あなを (そう。そう。) はい 縫う、という ことは ごきない、

A エッテヨアーマーナ マー ワフクオ エッテヨアーマーッテ マー   
 一人前な まあ 和服と 一人前と言っても まあ

(24) ソンガノ アノ アノ ホラ シューゲンニ キルヨア ナノマデ=   
 そんな あの あの それ 祝言に 着るようなのまでは

ワ ノワンネアデモネ (25) アタリメアノ...ン。 (26)   
 縫われなければいけませんね、 普通の... うん。

B ソアソア。 マー ホントノ エー キモンワ ノワンネアデモ   
 そうそう。 まあ 本当の いい 着物は 縫われなければいけません

アッデスコテ コドモニ キセルグラーワ。 (27) コドモネ (28) オラカ   
 あれですよ 子供に 着せるくらいは……。 ×××× 私とモカ

コドモオ ソダテッ (29) ドキワ アッデスエネ エーノカ ヒトカサネ   
 子供と 育てる 時は あれですよ いいのか ひとかさね

ソレカラ キルノガ (30) マエンチ キテ アエクノガ フタツ ナケラ   
 それから ×××× 毎日 着て 歩くのか ふたつ なければ

ヨゴシテ キタ ドキ カワリガ ノアテ (31) コマルスケア...。 (32) ソレガ   
 汚して 来た 時 代わりに なくて 困るから...。 それから

アキ ハハル アノ アワセト ハダコト (33) ワタエレト ソレカ   
 秋 × 春 あの 袷と ひとえ物と 綿入れと それから

ミトリー ネアケラ...。 (34) ダスケア オメアサン ハチクツワ アッデスエネ   
 シ通り 着れず...。 右から あなを 八月は あれですよ

ホレ エマミチャージャー (35) フリマセンスケア アノー ヒマダスケア   
 それ 今みたいでは ありまの、 あの 暇だから、

ミンナ (36) ハリモシ シテラ (37) ホエラ オラカ (38) ンナ (39) キミカ   
 みんな 針仕事を しておいて そうして 私が まっぴく きめが

(40)

ワリースケア エネカリノ ハジマルマデネ ヨーサリ ヨナベニ  
悪いから 稲刈りの 始まるまでに 夜 夜おへに

ミンナー フスモナー ワタ エレテテ ソレカラ ヨーサリワ  
みんな 冬物は 綿を 入れておいて それから 夜は

オソテモ ハヨテモ デコァーテモ ケーソァーテモ ソノ ワタエレオ  
遅くても 早くても 大きくても 小さくても その 綿入れを

シトツズツ マトメチャー ネタモンデスエネ。 (A ヨメネ… アー)  
ひとつずつ まとめては 寝るものですよ。 ( 嫁に… あみ… )

(41)

エネカリガ ハジマルト ホレ アカギレガ キレチモァテ アノ  
稲刈りが 始まると それ あかぎルガ 切られてしまって あの

マワタガ クツツイチモァテ ワタエレニ ナリマセンスケア  
真綿が (指に)くっついてしまって 綿入れに なりませんから、

ココノツデモ トーデモ ゼンブ ハリナオシ エマノ  
九つでも ナでも 全部 張り直し、 今の

モンミテァーネ マエトシ アタラシー モンナ カワシネァスケア  
者みそいに 毎年 新しい 物は 買われないから

(42)

ソレオ ホグシテ アラテ ハッテ ソシテ アッデスエネ ソノ ゼンブ  
それを ほぐして 洗って 張って そうして 取れですよ その せんぶ

フエ アレシル スータンデスエネ ハー。  
冬 ×××× 縫ったのですよ はい。

(43)

A アノ ホレ ヨメネ エッテカラ マー ソノ エーノ ジジョーニモ  
あの それ 嫁に 行ってから、 まあ その 家の 事情にも

(44)

ヨルドモ ナンネングレァタ アノ ハチグツツ ホラ ホラ  
よるけれども 何年か、いそがうか あの 八月に そら そら

(45)

トテァーテテ コドモガ シタリモ サンニンモ デキテモ マー  
斗代と言って 子供が 二人も 三人も できても、 まあ



デッケー コワ ヨメネ エッタウチニ オイテキテモ チーセー  
大きい 子は 嫁に 行つた家に 置いて来ても 小さい

コドモノ シタリグラーワ ブータリ テー ヒータリ シテ  
子供の 二人くらいは 負つたり 手と ひいたり して

トデァーヤスミテノガ…… ソレガ ソノ ボロ ツズクル……<sup>(46)</sup>  
半代休みというのが……、 それが その ぼろを 継ぐ…… (B笑)

ウー ノノノ<sup>(47)</sup>。 アラ ハチグワツダ ネァーカ。 キューレキノ  
ん ののねえ。 あれは 八月では ないか。 旧暦の

ハチグワツ。 シ キューレキノ ハチグワツダデノー エネカリノ  
八月 うん 旧暦の 八月をよねえ、 稲刈りの

ハジマル メァーニ。

始まる 前に……。

B オラガ マダ ヨメ ハー ヨメノ コロワ アリマシタコテ。<sup>(48)</sup>  
私とよか まだ 嫁、 はい 嫁の 頃は ありましたよ。

ハー。 ウチエ ボロ ヒトリエ カズイテッテ ゼンブ<sup>(49)</sup>  
はい。 実家へ ぼろを ひと背負い かついて行って ぜんぶ

ウチデモッテ ソレネー……。 マー オラ ドコワ アレ  
実家で それをねえ……。 まあ 私の 所は

オラ トシヨリガ<sup>(50)</sup> トシヨリダッタスケァー ソノ ツトメワ シマセン<sup>(51)</sup>  
私の家の 年寄りが 年をとつていぬから その 勤めは しません

カッタガネー。 (A ンー。 ホァテ ウシガ エルスケァ (A ンー。)) イヤ  
でしなかね。 (うん。) そうして 牛が いるから、 (そう。) いや

マ マ アノ コロワ マーデ<sup>(52)</sup> アッタガ マエーンケ マエンケ  
馬 馬 あの 頃は 馬で あつたか、 毎日 毎日、

ホレ トツツアンテ<sup>(54)</sup> モンナ マエーンケ ヨソエ デネッケ ナランシ  
それ 主人という者は 毎日 よそへ 出なければならぬし、

マノ クサカリ シネ<sup>ア</sup>ケ ナラン。 (A <sup>ン</sup>ー<sup>ン</sup>。) <sup>ア</sup>ー ヨーガ<sup>ダ</sup>  
馬の 算<sup>メ</sup>リりと しなけれ<sup>ば</sup> なら<sup>ない</sup>。 ( <sup>ん</sup> <sup>ん</sup>。 ) <sup>もう</sup> <sup>タ</sup>ガ

スス<sup>(56)</sup>シ ナッテ クルト <sup>ン</sup>マノクサ シトソエズ<sup>(57)</sup>ツ カッテ キテ……。  
涼しく なって 来ると 馬の算と ひと背負い<sup>す</sup>つ <sup>メ</sup>リ<sup>て</sup> 来<sup>て</sup>…。

(A <sup>ハ</sup>ー。 ) ソレガ アッデスエネ (A <sup>ん</sup> ) アレン ナッテ アキン<sup>(58)</sup>  
<sup>はい。</sup> <sup>それが</sup> <sup>あれです</sup> <sup>×××</sup> <sup>×××</sup> <sup>秋に</sup>

ナルトサエ<sup>(59)</sup>ニヤー ソノ シトワ コノ デヤノサカ<sup>(60)</sup>オ オメ<sup>ア</sup>サン  
なると <sup>その、人</sup>は <sup>この</sup> 出<sup>い</sup>合<sup>あ</sup>の坂と <sup>あな</sup>を

ツナギン ナッテ<sup>(61)</sup> エネ カズクデ<sup>シ</sup>ョアーネ (A <sup>ン</sup>ー。 ) オラ ソレー  
繋<sup>つ</sup>が<sup>な</sup>って <sup>ねを</sup> <sup>かつぐ</sup>で<sup>し</sup>ょうね、 ( <sup>ん</sup>。 ) <sup>おーい</sup> <sup>それと</sup>

マエー<sup>ン</sup>チ アッデスエネ ソノ ハチグ<sup>ツ</sup>ツ シトノ ヤスム ドキモ  
<sup>毎日</sup> <sup>あれです</sup> <sup>その</sup> <sup>八月</sup> <sup>人の</sup> <sup>休み</sup> <sup>時</sup>も

クサ シトソエズ<sup>ツ</sup> カズイテ アガルス<sup>ケ</sup>ア エネカズ<sup>キ</sup>テ モンナ  
算と ひと背負い<sup>す</sup>つ <sup>かついて</sup> <sup>上がる</sup> から <sup>船</sup> <sup>かつぎ</sup>と<sup>い</sup>う<sup>もの</sup>は

シマセンカッ<sup>タ</sup>ガネ。

しませんで<sup>し</sup>な<sup>か</sup>ね。

A ア <sup>ン</sup>マニ カツガ<sup>シ</sup>テノー。 (B ンマニ カズ<sup>カ</sup>シテ。) ソーソー  
<sup>ああ</sup> <sup>馬に</sup> <sup>かつが</sup>して<sup>ねえ</sup>。 ( <sup>馬に</sup> <sup>かつが</sup>して<sup>…</sup>。 ) <sup>もう</sup> <sup>もう</sup>

ソラー <sup>ン</sup>マノ アル <sup>(62)</sup> <sup>ショ</sup>ー<sup>ワ</sup> ンマ<sup>ダ</sup>。  
<sup>それは</sup> <sup>馬の</sup> <sup>算</sup> <sup>人々</sup>は <sup>馬</sup>を。

B ソレガ マタ カラ<sup>ダ</sup>ノ ナレ<sup>コ</sup>テ<sup>エ</sup> <sup>(63)</sup> エワ<sup>ッ</sup>コシテ <sup>(64)</sup> アッデ コンガ<sup>ネ</sup>モ  
<sup>それが</sup> <sup>また</sup> <sup>体の</sup> <sup>馬</sup>に<sup>レ</sup>て <sup>上</sup> <sup>算</sup> <sup>み</sup>を<sup>して</sup> <sup>こんな</sup>に<sup>も</sup>

シテ クサオネ ゴリククレ<sup>ア</sup>ーモ カズイテ クルガ<sup>ン</sup>タ<sup>ダ</sup>。<sup>(65)</sup>  
して 算とね 五<sup>まい</sup>くらい <sup>かついて</sup> <sup>来る</sup>の<sup>と</sup>。

リョ<sup>ア</sup>ーマル<sup>ケ</sup>ニ<sup>(66)</sup> シタガ<sup>ン</sup>オ。 デヤノサカ ナ<sup>ン</sup>ーニモ ナン<sup>ギ</sup>  
<sup>両</sup> <sup>来</sup>ねに <sup>しな</sup>つと。 <sup>出</sup> <sup>い</sup>合<sup>あ</sup>の坂と <sup>少し</sup> <sup>若</sup>しく

ノアテ トットトット アガッテ キタ モンデスガ サー ユンダ<sup>(67)</sup>  
なくて とっとととと 登って 来た もので「あが」 さあ 今は

トチクヲエ<sup>(68)</sup> エネカリー エッテ サー ンゾク カズイテモ アノ  
柄倉へ ぬめりには 行って 来た かついでと あの

サカガ コンダ アガラシネア カラダガ ナレッコニ ナッチモアテ。  
坂か 今度は 登られない。 体が 馴れっこに なってしまて。

A ハーハーハー。  
はいはいはいッ

B (笑) ソー ユー<sup>(69)</sup> (笑) オラガ ワーケアー ドギャー リアナンデス。  
×× ×× 私と私の 若い 時は そうなんです。

A ア アノ コロノ シマデノガ エマノ コーウシキト… (Bハー。)  
あの あの 頃の 馬とかのか 今の 耕田機と… (はい。)

アルイワ アノ… ジドーシャノ ホウ ユカダ… ナンダ… アレッテダカ ……  
あるいは あの… 自動車の ほら 小型… 何だ… あれとかのか…

アノ ノセル ニ ノセル ジドーシャ ナンタカナ ユーネッカ…  
あの ××× 荷を 載せる 自動車は 何と云々かな、言うじゃないか、

ソー エッタヨアノ モンデ<sup>(70)</sup> アッタンダヨ ムカシノ シマトカ  
そう 言っような もので あんなに「よ、昔の 馬とか

ウシトカテ モノワネ エマノ クルマ キカエト オンナシ<sup>(71)</sup>  
牛とかと云う 物はね、 今の 車、 機械と 同じ

コッデ。 ダカラ アノ シマヤ ウシノ アル シトリ アンマリ  
ことで。 だから あの 馬や 牛の ある 人は あまり

ジブンジャ オモ<sup>(72)</sup>ニ シネアデモノー トーヤマヤ<sup>(73)</sup> アタリノ  
自分では 重荷を しなくてもねえ 遠い耕地や 近くの

ホントノ エーノ メグラデ……。  
まったくの 家の まわりで……。

B アキダゲツネー<sup>(74)</sup> アー。 ソノ カワリ タノクサトリー  
秋だけね、 ああ。 その かわり 田の草取りに

ナッタッテ シトワ モモシキ<sup>(75)</sup> エッソク コーシテ アラータノオ  
なっても 人は 股引 一疋と こうして 洗ったのを

カタネ カケテ ヘヤカリ<sup>(76)</sup> シテ クルガ" サー オメアサン  
肩に 掛けて 登りて して 来るが、 さあ あんた

エッソクデモ ニソクデモ セナカエ<sup>(77)</sup> ノシテ キテ。ダスケア コノ  
一束でも ニ束でも 背中に 載せて 来て……。さ"から この

シタノ<sup>(78)</sup> ゴロアゼンノ<sup>(79)</sup> ショーガ" アッデスエネ ヒルマ クル ドキワ  
下の 五郎左衛門の 股が" あれですよ 昼間 来る 時は

ヘア<sup>(80)</sup> オヒル タベテ エラレッ ドキ オラ アノ メアー トーッタ  
もう お昼を 食べて いられる 時 私 は あの 前を 通った

モンダシ<sup>(81)</sup> (A ンー。) ソレカラ コンダ" ヨーサリヤー オヨハン  
ものをし、 うん。 それから こんどは 夜は お夕飯を

タベテ<sup>(82)</sup> ラレッ ドキ<sup>(83)</sup> アッデスエネ アノ メアー トーッタ モンデスエネ。  
食べて いられる 時 あれですよ あの 前を 通った ものですよ。

(A アー。) ソレダゲドツネー<sup>(84)</sup> トチクラカラ クルニヤ チゴアータ  
(ああ。) それだけすつ わえ 板倉から 来るには 違った

モンデスエネ。  
ものですよ。

A ソーソーソー。 エヤ エーノ アタリデモッテ ヒヤクショアー シテル  
そうそうそう。 いや 家の、 あたりで" 聚楽を している

ヒトナンテア オメアー ヒョコヒョコト ウチエ<sup>(85)</sup> ヘアッチモア<sup>(86)</sup> ンダアンネ  
人な"は、 あんた ひよひよこと 家に 入って(は)うの"どのに、

(B ハー。) オメアサンタ ソレ エク アノ アッダー ナンバエデモ  
(はい。) あんたたちは 誰と 行く あの あれだよ 何倍も

ムコッパードー トケクラテ ドコワノ一。(87)

向こうよ、柳倉と云う 所はねえ。

B ハー ナンバエデモ ムコッパードシタコデー。

はい、何れも 向こうでよ。

A アー ッダカラ…。 ソレカラ デヤノサカテ ユー サカガ ヒトツ  
ああ 右から…。 それから 出金の坂と 言う 坂か ひと

アルシサー。(B ソーリー。) アノ デヤノサカッテ ユーノワネー  
あるしね。 そうです。 あの 出金の坂と 言うのはねえ、

コノ マエニ アノ ゼームショガ ミンナ トケシラベー キタリ  
この 前に あの 税務署が みんな 土地調べに 来たり

(88) アエ シタ ドキ オレニ アノ ユータカサー アノ カシワザキノ  
あれ した 時 俺に あの 言ったかね、 あの 柳崎の

ゼームショインガ キテ ンナ ナンカ シラベタ ドキ ナンカ  
税務署員が 来て みんな 何か 調べた 時

キテ ユータカ コレガ アッラカネ アノ トキ オレ クチョー  
来て 言ったか、「これが あれかね」、あの 時 俺は 正長と

シテ イタカナ ナシタカナ(89) クチョーサン アー ナダカエ ソノ  
して いかな どうであつたかな、「正長さん ああ 高い その

(90) アノ ナタデ アタマ スルカ (B 笑) モチロエ ヨメネ  
あの 『金で 頭を 剃るか (B 笑) 餅糰へ 嫁に

エクラ アケラモ アノ ナンダカナ デヤノサカ アケラモ  
行くか 明けても』 あの なんぞかな 『出金の坂 明けても

クレラモ コシニ ミナワノ タエガ ネーテ ユー ドコ ウタオ  
暮れても 腰に 荷銀の 絶えか ない』と 言う 歌を

(93) オラ シッテルカ「ンダガ」 テバ エー オマエサマ ワケアー  
俺は 知っているのぞか」と言うので、「そう、 あなをば 若い

(94)

ゼームシヨ) ヤクニンサンワ ソンガ<sup>ン</sup> ユト シッテルカエテ  
税務署の 役人さんは そんな ことを 知っていますか?

エッタラ ソアコテ オッダッテ カシワザ<sup>キ</sup> コノ カリワグ<sup>ン</sup>グ<sup>レ</sup>ア<sup>ン</sup>ン  
言った、「そうさ、 俺ぞって 柏崎 この メリ羽<sup>羽</sup>部<sup>部</sup>くらいの

コター キーテ<sup>ラ</sup>エ テナ コト ユーテ…。 ソア ユー  
ことは 聞いていますよ」といふようなことを 言て……。 そう 言う

(95)

デヤノサカナンダ<sup>ノ</sup>ア。 アサカラ バンマデ コシニ ニナワノ  
会合の坂をのぞねえ。 朝から 晩まで 腰に 荷<sup>荷</sup>縄<sup>縄</sup>の

タエガ ネア<sup>テ</sup>ヤ アノ ミンナ ドコノ ウチニモ シマヤ マ  
蛇<sup>蛇</sup>が ないというのは、あの みんな どの 家にも 馬屋、あ

ウシワ (B ハー) ソノ ゴダ<sup>ガ</sup> ハジメ<sup>リ</sup> シマ<sup>ダ</sup>ッ<sup>タ</sup>ノ<sup>ー</sup>。(B ウシワ  
牛は (はい。) その 後<sup>後</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>か はじめは 馬<sup>馬</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>ねえ。 牛は

サエキンデシタ…。) シマノ ネア<sup>ウ</sup>チナンテ マー ヒヤクシ<sup>ア</sup>ア<sup>ガ</sup>  
最近でし…。 馬の ない 家など まあ 農業<sup>業</sup>か

ナランテ ユータグ<sup>レ</sup>ア<sup>テ</sup> エマノ コア<sup>ウ</sup>ンキト オンナシ  
でもないと言ったくらいで、 今の 耕<sup>耕</sup>耘<sup>耘</sup>機<sup>機</sup>と 同じ

コンデネー。(B ソア<sup>ソア</sup>。) ダカラ アノ シマニ クセル ク<sup>ク</sup>  
ことぞねえ。(そうそう。) だから あの 馬に 食<sup>食</sup>わせる x

クサオネー (B ソア<sup>ソア</sup>。) マー アノ コア<sup>ジ</sup>ブ<sup>ン</sup>ノ エーノ  
草<sup>草</sup>ぞねえ。(そうそう。) まあ あの こう 自分<sup>分</sup>の 家<sup>家</sup>の

チケア ドコニ クサバ<sup>ガ</sup> クサー カル バシ<sup>ガ</sup> アル シトワ  
近い 所<sup>所</sup>に 草<sup>草</sup>場<sup>場</sup>か、 草<sup>草</sup>を 刈<sup>刈</sup>る 場<sup>場</sup>所<sup>所</sup>か ある 人は

(96)

エー<sup>ン</sup>ダ<sup>ト</sup>モ トーノ ホア<sup>エ</sup> サクバ モッテルヨ<sup>ア</sup>ナ シトワ  
いいのを<sup>の</sup>けれと<sup>と</sup>も 遠い 方<sup>方</sup>、 作<sup>作</sup>場<sup>場</sup>を 持<sup>持</sup>っているような 人は

サクバ<sup>エ</sup> エカンケ<sup>ラ</sup>ノ<sup>ー</sup> クサカリバ<sup>ガ</sup> ネア。 ア クサカリバ<sup>ガ</sup>  
作<sup>作</sup>場<sup>場</sup>、 行<sup>行</sup>かなければ<sup>ねえ</sup> 草<sup>草</sup>刈<sup>刈</sup>場<sup>場</sup>か ない。 あ 草<sup>草</sup>刈<sup>刈</sup>場<sup>場</sup>か

$$T_1 \text{ の } T_2 \circ$$

コラ ンネ<sup>ア</sup>ガ<sup>ン</sup>ダ<sup>...</sup>。 ソッテ マタ ウシネ<sub>x</sub> シマネ フマシタノオ  
来れないの<sup>...</sup>を<sup>...</sup>で<sup>...</sup> また 馬に 踏ませるのを

カワシネ マタ トケクラエ カズイテ エカ~~~~~ (A カズイテ  
代りに また 橋倉へ かついて 行か~~~~~ かついて)

絶えが ありませんよ。

エケリワ ヨンキはダケラ ニキは ニキはモ アルンダンガノ一。  
一里は 4キに ならば スキは、 スキはモ あるのねからねえ。

(99)  
ソコン ドコエ エクサ クルサ ソアシテ リノ ナタデ アタマ  
そこへ 所へ 行ても 帰るも そのようにして、 その 金で 頭を

スルカ モケにアエ ヨメニ エクカテ エー デヤノサカテノガ  
剃るか 餅を 嫁に 行くかと 言う 女中の坂というのか

エクマカリ アルンダー シトマカリ シタマカリ ミマカリ  
幾曲り あるのだろう、 ひと曲り ふた曲り 三曲り

ヨマカリモ アルカ。(笑) ソノ マカリ マガッテ アガッテ  
四曲りも あるか。 その 曲りを 曲って 上って

(100) (101)  
ノボッテ クル サカオ メアンケ アエッタスケネ。  
登って 来る 坂を 毎日 歩いたからね。

B アノ サカカ マタネ オモシロエ サカテ (A アー。) カラミテ  
あの 坂か またね、 おもしろい 坂で ああ。 空身で

(102)  
アガッタッテ ナンギーンデスエネ。  
上がったって 難儀なのですよ。

A ア マ ソアエンタ。(笑) カラミ……。  
ああ まち そうなんだ。 空身……。

B (笑) シカモ チョエット {A ニーカズイタ……。} ヒツカケニ シタ  
むしろ ちょっと 荷る かついだ……。 引っ掛け荷る しを

ホアガ ア ラクダッタ。  
おか あ 楽だった。

A エヤ アノ サカノ ヤスミバデ ニー カズイタノオ ヤスム  
いや、あの 坂の 休み場で 荷る かついだのを 休む

ドキノア (B ソアソア。) マタ キモチ エーンドア。  
暗ねえ、 そうそう。 また 気持が いいのよ。



キタカゼガ <sup>(105)</sup> ホドコエ ハッテ クルシノー。(笑)  
 北風が ぶところへ 入って 来しねえ。

B ダスケ ムカシノ ショー …… アノ エカキネ エッ4バン  
 だから 昔の 人々 …… あの 絵書きに いちばん  
 シバジュエデモッテ <sup>(106)</sup> ミッタクネア <sup>(107)</sup> ミタドコノ ワリー エー カエテ  
 娯楽中で みにくい 見る所の わるい 絵を 書いて  
 クレッタラ アノー <sup>(108)</sup> オトコモリー エ カエテ クレタテ ユー。  
 果れと言つたら あのう 男子守りの 絵を 書いて 呉れねと 言う。

(笑) (A ハーン オトコノ ……) ホーシタラ コンダ エ4バン  
 (ふうん 男の ……) そうしたら こんどは いちばん  
ラクナ ラクシナ <sup>(109)</sup> エ カエテ クレッタラ ムツムツムツムツ <sup>(110)</sup>  
 楽な 楽な 絵を 書いて 呉れと言つたら ひとつひとつひとつと

デヤノサカノヨーナ <sup>(111)</sup> ドコオ ニオド カズイテ アガッテ  
 出合の坂のような 所を 堆(にお)ほと かついて 登って

ヤシミバデ ストント ヤスンダ ドコ カエテ クレタナンテ  
 休み場で ちゃんと 休んぞ 所を 書いて 呉れねなどという

ハナシ オラ キキマシタガ。( A ア ア …… ) リレガ マー  
 話しを 私は 聞きましたか。 うん うん …… それか まあ

リノ ヤスンダ ドキカ シバジュノ マー ( A ゴクラクダ )  
 その 休んぞ 時か 娯楽中での まあ ( 極楽だ )

ゴクラクデ ア ……  
 極楽で あっ ……

A アー イヤ チョアード マタ アレガ ゴゴン ナルト ヒカゲン  
 ああ いや ちょうど また あれが 午後に なると 日蔭に  
 ナッテ ネー。 ホアテ ( B ハ …… ) アコガ ヒカゲニ ナルエネ <sup>(112)</sup>  
 なって 好え。 そうして ( はい。 あそんが 日蔭に なるので )

キタカセ"ガ" キタカセ"ガ" ソヨソヨト ハァッテ クルシ。オラ モー  
北風か 北風か そよそよと 入って 来るし。 私どもも

アコカラ エネノー ンー ニヤク サンビヤク サン サンビヤクモ  
あそこから 綿の ンん ニ面 ミ面 ミ 三百束も

カズイタカ。( B ソアーデスネー オマエサンタモ アコニ  
かついね"か。 そうですなあ、 あなたの所も あそこに

アッタンダスケ。) アー オー エネノ サンビヤクリクモ カズイタ  
あつたの"から。 ああ おう、 綿の ミ面束も かついね"

モンダ"ガ" カズイテ アガッタ モンダ"ガ"サ エー アコア マタ  
もの"か。 かついで 登った もの"か"ね、 ええ あそこは なる

ソラ ホントニ ゴクラクノ テーソーダ"ヨ。アノ ムツムツムツ  
それは ほんとうに 極楽の 姿"よ。 あの ひっむっむつと

アセ アセ エッハァン ナッテ シ~~~~ダ ドキ アノ ヤスミバ"ガ  
汗 汗 いっぱいになって ~~~~~ 時 あの 休み場か

マタ ンマク デキテ エルカラノー。エワオ ダン ツケテ  
また うまく できて いるからなあ。 岩を 紋を つけて

デキテル。 アコテ" ヤスムト アレナンダ"。 アノ ケヨア"ド" ソノ  
できている。 あそこ"で 体むと あれ"の"。 あの ちょうど" その

コハ キタカセ"ガ"ネ キタ ムイテ エルカラ キタカセ"ガ"  
頃 北風か"ね、 北を 向いて いるから 北風か

ホドコエ コアー ハァッテ クルシ ホァテ マー アノ ラヌグイ  
ふところへ こう 入って 来るし、 そうして まあ あの 手拭、

クビー マイタリ ハケマキ シテル ラヌグイデモッテ コアー コアー  
首に 巻いねり 鉢巻に している 手拭'でもって こうこう

コアーコアー シテ テーデ (B 笑) コアー マワストノアー (115)  
こうこう して 手で こう 回すとねえ、 (B ソアーソアー。)  
そうそう。

カゼガ<sup>カ</sup> ヘアッテ クルシサー。(B笑) ホアーデ マー チット ヘアー  
風が ほういて 来るしねえ。 そうして まあ 少し そう

アノ アンギーノガ ラクン アッタ コロ マタ ウントコサト  
あの 苦しいのが 喉に 当たった 頃 また うんとこさと

カズイテ アノ コシ キッテ アガッテ クルンダドモネ。ヤスミバ  
かついで あの 腰を 切って 登って 来るのだけれどもね。休み場

ガ ミドコ ヨドコ テンジョーマデ ヨドコ アッタカノアー。(116)  
が 三所 四所 上まで 四所 あったかねえ。(B)ソアー そう

ソアー。) ソレ マー ヨアーエジャ ネアーンダテー アノ… ミンナ ソコ  
そう。 それ まあ 容易じゃ ないのだよ。 あの… みんな ヤン

ン ドコ カズキアゲネンダケラ ナランノダンガノー。(117)  
の 所を かつぎ上げなければ ならぬのだからねえ。(118)

B ソアーソアー。(Aー。) ハナシガ マタ ヨコエ ソレマストモ  
そう そう。(うん。) 話が また 横へ それますけれども、

コンダネー タアガリノ ホレネ アノ ドヨエ ヘールト (Aー)  
こんどはねえ 田上ガリの それね あの 土用に はいると (うん。)

ノグサカリテノガ (121) クハエメノ (122) ハジマルンデスエネ。  
野苺梅りというのが 黒姫の 始まるのですよ。

オラ ヒリョアー (123) ミツカグラー タノンデテ カッテ シアーシテ  
私といは 人夫と 三日くらい 頼んでおいて 刈って、そうして

オマエサン ソレオ ミンナ ニューネ ツンデテ ホイテ オボン  
あなた それを みんな 堆(いかに)に 頼んでおいて そうして お盆

スギネ ダスンデスエネ。(Aー) ソレ トケクラエ  
過ぎに 女ですよ。(うん) (そういうこと。) それと 桶倉に

オマエサン ハンブン オイテ ウチー ソノ ニュー シトツグラー  
あなた 半分 置いて。家へ その 堆 ひとつくらい

モッテ キテ フエウッテ ソレ マタネ シマネ フマセルンデスエネ。<sup>(124)</sup>  
 持って来て 冬中 それを まねね 馬に 踏ませるのですよ。

(A ソー エンダ。)<sup>(125)</sup> ハー ソレオ マタ シタゴエニ シテ オマ=  
 (そう いうことな。)<sup>(125)</sup> はい、 それを まね 基肥と して ある

エサン アノ タンボエ モッテグンダ。  
 な あの 田へ 持って行くのよ

A ノグサテノワ アラ ドーヌケテ ユー アノ クサダガネ<sup>(126)</sup> (B  
 野苺というの は あれは どおぬけと 言う あの 草ジガね。

ソア。)<sup>(127)</sup> アレガ テカナカ シマニ フマシテモ グラシャグラシャ シネアデ  
 そう。 あれが ぴかぴか 馬に 踏ませても ぐしゃぐしゃと なくて

サ カワエテ。

ね。 乾いて

B ア ソノ ナカニ ムラダチテガンガ<sup>(128)</sup> アルト ソーレガ オメアサン  
 あ その 中に むらだちというのか 有ると それか あんた

マタ アツタケアー カゼニ ノッテ クルツガヤ<sup>(129)</sup> クチン ナカマデ  
 また 暖かい 風に 乗って 来ると 口の 中まで

ニゴー ナル。<sup>(130)</sup>

にがく なる

A アー アレガ エマ オレノ ヤクソアーノ コノ アノ オヤカタドーエ<sup>(131)</sup>  
 ああ あれか 今 私の 華草の この あの 親方ですよ、

(B ハー。)<sup>(132)</sup> アノ ムラダチガネー。 (B ハー。)<sup>(132)</sup> アラ エンメーソー  
 はい。 あの むらだちかねえ。 はい、 あれは 延命草

テントアー。 (B ハー。)<sup>(133)</sup> エマ ヤクソアーノ アー ナマエカウ ユート  
 というのよ。 はい。 今 華草の ああ 名前から 言うて

エンメーソー エノチオ ノバス……。アラ ニゲャーグンダ。  
 延命草 命を 延ばす……。あれは にがいのよ。

B ッジニサンケ マダジキガハヨア エッテ コー クサ カリマストサエニヤ  
それでニ三日 まだ時期が早く行つて うちに 薬を メリますと、

(133)  
(A ン。) ミンナ テガ ンラサキニ ンナ リマッテモア クサカリ  
(うん。) まったく 手が 紫に まったく 染まつてしまふ、薬を

シット。

すると。

A ヤッロシ アレ アノ ンマナンカノ アノ ノグサノ ドーヌケノ  
やはり ある あの 馬などの あの 野草の どうぬけの

ノグサン ナカエ アノ ムラダケ (B ンラダケ ~~~~~ ハー) ガ  
野草の 中に あの くらだち (くらだち ~~~~~ はい。) が

ハアッテルト (B ハー) アレ ンマノ アッラヨ エケヨアガ (B ハーハー)  
はいっている、 はい。 あれは 馬の あれだよ 胃腸が (はいはい)

(134) ガエニ ナッタンダヨ。 ニガエ ニガエ クスリガネ。 (B アレ  
丈夫に なつたのだよ。 にかい にかい 薬 がね。 あれを

ンナ クイマス……。 ヤッロシ ヤクソア …… ドーブツダッテ  
みんな 食います……。 やはり 薬草 …… 動物だつて

ヤクソア ヤクソア クリンカラ クータ オアガ エンダカラサ。  
薬草 薬草と 食わないから 食つた 方が いいのだからね。

エー ソレデ アノ マー ムラダケ ナルベク アノ ヒルメシ  
ええ それで あの まあ くらだちを なるべく あの 昼飯と

クー コロン ナッたら オエ ムラダケ ソノ カマデ カルナヤ  
食べる 頃に なつたら おい くらだちを その 鎌で メリなや

ナンテ……。アノ ソノ カマデモッテ キウリオ アノ ホラ  
など ……。あの その 鎌で きゅうりを あの それ

(136)  
コスッテ アノ (B ン。) キザンデテノワ アノ カマニネー  
こすつて あの (うん。) きざんでというのは、あの 鎌にねえ

(137) (138)  
 (B ソーデスネー。) コアコアコア シテ エー ケソエデ エ  
 (そうでおねえ。) こうこうこうして ええ けりいて" ええ

(139)  
 クワンケ ナンダスケデ" ニーゲアーカラッ。

食わなければならぬのぞから、にかいから。

B エヤ モケハアーノ アノ ヒガ<sup>(140)</sup>シノ オ<sup>(141)</sup>ッカサンガ<sup>(142)</sup> エキノ キレル  
 いや 餅粒の あの 東の おかあさんが 息を 引きとる

ドキワ アノ アカエハアーノ <sup>(143)</sup>エヤシリガ<sup>(144)</sup> タベテアーテ <sup>(145)</sup>エワシッタ  
 時には あの 赤年の 冷や汁が 食べたいと 言われたと

テーガ マタ ヤマカラ アツツイ メ <sup>(146)</sup>シテ オリテ キテ  
 言うが、 また 山から 暑い 日に あって 下りて 来て

<sup>(147)</sup>スズバネ<sup>(148)</sup> マッテ オトツツアンガ<sup>(149)</sup> エワ<sup>(150)</sup>シャルヨアーネ (A アー。) カマデ<sup>(151)</sup>  
<sup>(152)</sup>涼み場に 経って、 おとおさんが 言われるように (あゝ) 鎌で

コーシテ ケズッテ (A ナマミソデノー) ソン ナカエ ナマミズ<sup>(153)</sup>  
 こうして 削って (金味嚙でねえ。) その 中に 生ける

エレテ コアー シテ……。 ソレ マタ エマデ<sup>(154)</sup>モ ワスレラレマセン。  
 入れて こう して……。 それ また 今でも 忘れられませんか。

~~~~~。

A アー <sup>(155)</sup>ヒヤッコエ ソノ オクヤマノ <sup>(156)</sup>タベテアー ミズオネ ヒヤッコエ  
 あゝ つめたい その 奥山の つめたい 水をね、 ひゃっこい

ミズ……。 オラ ホーデ" エーバ" ホーゲソワ マー ヒヤッコエ  
 水……。 私どもの方で 言えば" 方々は まあ ひゃっこい

ランダ"。 ヒヤッコエ ミズ" エレテ ソアーシテ ソノ ミソ エレテ  
 と言うのぞ。 つめたい 水を 入れて そうして その 味嚙を入れて

カンモアーシテ <sup>(157)</sup>エ クーノガ" ~~~~~ ソレ トッテモ ~~~~~。  
 かきまわして ええ 金うのか" それ とても。

B ソーシテ シマエネ オメッサン ゴハンガ ノユルト ソレ コンダ  
 そうして ほいに あんち 御飯か 残ると それを こんどは

ゴハン ストント エレテ ソーシテ コー シテ オエテ  
 御飯を すんと 入れて そうして こう して おいて

タベルンデスエネ。(笑)

食べるのですよ。

A <sup>(153)</sup>  
 ワハト ユー アノ キオ マゲタ キノ マー エタ…。  
 輪っかと言う あの 木を 曲げた 木の まゝ 板を…。

## 注記

1. ソレー それを。裁縫のことを指す。
2. イツ [itsum] 副詞
3. イソガシー [sogasi:] 司会者は公務員で最も若く若く普通語化している。
4. ガ、コー [gakko:] コーは関考で普通語の才校長考よりやや広いがあるいはほとんど等しい考多のようと思われる。
5. オエテノー オエルは自動詞ア行下一段終る。ノーは[no:]間投助詞。感動をあらわし、同意を求めたり、納得させようとする場合で相手に訴える。親しい関係の目上、同輩、目下に対して用いる。強い感動訴えの時は関考の[no:]になることもある。花岡を中心とする中越地方の普通語といえる。糸魚川市西川原ではno:は品位なあまりよくないといわれる。
6. オショアグツ [osjo:gwatsum] 佐渡郡・中頸城郡の一部を除き本県は[gnu]考を保存している。
7. ヤマ 田畑のあるところと山岳をさす。田畑はすべて傾斜地にある。「ヤマエテル」は四五月の交に農作業を開始すること。
8. キキウケ 節骨中。十一月正月前のこと。
9. オメサン [omesan] あんを。=人称代名詞が間投詞的に用いられる。品位はわるくない。最も丁寧になるとオマエサマとなる。
10. アッデスコテ 「あれですよ」の意が間投詞的に用いられる。ことばを思い浮かべた時にいう。コテは[kote]文末に来て強い感動と主張と時に及ぶくの心持をこめて相手に訴える終助詞。著者のことばの中に「コトイ」「コトイネ」が見える。花岡県に「コトヨ」富山県に「コトー・コトイネ」本県西頸城郡糸魚川市西川原に「コトイネ」柏崎・中頸城郡柏崎に「コテヤ」がある。コトヨ→コトイ→コテと変わったか。コテは佐渡、下越、中越、魚沼、頸城に広い。南魚沼郡湯沢町のコテヤ[kute:]はコトヤレの変化であろう。コテヤレとも言う。語彙でも「コテヤ」とも言う。IIの注47参照。
11. オーアザ [o:aza]
12. [sitorigure:] gi>si ai>ε 中頸城の影響でヒフシが多い。



13. オシエル 「お針を教えるお針師匠というのか」の意。

14. オメサント お前様方の変化であなた等の所の意で、司会者の家庭とさす。

15. マルト 柏崎市中央にあった某家の屋号。漢字不明。

16. コラッタ 来られ等の変化。ラレルの連用形の怪変化。レルラレルは最も普及して使われている軽い尊敬の助動詞で、教員、近隣の親しい人についても使う。主婦は主人を使用対象としても用いる。親しくない目下についても用いる。使用対象が面前に居る場合はもっと敬意の深い「シャルネ」を用いることもある。レルラレルは室町末期使用対象が不在の場面に主として用いられるというロドリゲスの文書が参考になる。在国古方面ではラレルが変化してラッル・ラッズとなるところがある。これらのレルラレルは共通語(現代の)の普及したものではなくもっと古いものと思われる。

17. ニシ 屋号西。司会の高橋氏(屋号山西)の本家にあそる。

18. シモノ 折居の湯の文宮女館の字の如。

19. ドーシノヤ 屋号 道正の大家と書くが、道正は「どうしよう」(何とかしようか)から起ったという伝説がある。

20. オッカサン 一家の主婦で中年以上の人という。

21. ノエハリ スイハリ縮い針の変化で針仕事のこと。江戸時代語で寛城松崎にも行なわれている事。針物でオハリ・ハリモンとも言う。佐渡・南魚沼郡にはハシン、佐渡にスイハシン・スイモンがある。

22. ソーソー [SO: SO:]

23. エッコーマーナ [ettjo: me: na] 形容動詞の連体形。一丁前等の変化。語源はナである。南魚沼郡では語源はノである。

24. ソンガン [songan] か。また [songana] [songano] のようにも見える。終止形はリンガダ、その連体形か連用形がよく分らない。そんな、そんなにの意。頸城地方にソングナ、ソングナ、魚沼郡にソッゲダ、ソッゲニ、ソッゲノがあり、西蒲原郡にリンガがある。江戸時代語それがい(それ概)の変化であろう。コンガダ、ソングダ、アソガダ、ドンガダと体系をなす形容動詞である。佐渡のそねえに、

そのうに・そのん(佐渡方言辞典)南魚沼郡湯沢町のソナー)等は「その様に」の変化であろう。

25. ノワンネデモ 縫われるいけれどもの変化。デモは通接の接統助詞で中頸城・東頸城郡の特徵形。その影響である。昔話の中にもよくある老人語であり、ドモとも言い又ドモデモの中間者と思われる時もある。この場合も中間者的である。中越三祭市付近ではドモと読む。

26. 形容動詞の連体形「暑通の」の意。あとに「和服は縫われる」のような意味のことは省略されている。

27. キセルクレーワの次に「縫われるようになる」のような語が略されている。

28. ネは接統助詞「に」の変化。

29. ソダテッドキ ラ行音は変化しそり消えそりする傾向がある。時はよくドキと脱落化する。

30. [no:te]. [na:te] となることもある。明治生れには少者便が多く、大正生れには [~a:te] というア者便(後編)が多い。

31. コマルスケ [smkε] は [smkε:] と。また [smkε] のように聞こえる場合もある。

32. ハダコ 肌着ではなく、夏着るひとえ物と言う。用例 サブイノニハダコ エケマエデ エタ 寒いのにひとえ一枚で居る。

33. ネケラ 縫ければの変化。次に「縫らぬい」の意が略されている。ネと終止形ケラを助詞と考えなければい。

34. シマダスケ シはヒシの中間でシに近い。暖ださかいの変化。スケはスカー・スカーニ・スカーデともなる。縁由原因を表わす接統助詞で最も新潟に用いられる。エニ・エネは明治生れの老人が用いる。スケ類は近世上方方言サカイ・サカイニ・サカイデの変化である。語源は「境ひ」と言われる。佐渡郡にサカイ・サカヤ・サケ・スキヤスケ・スケン・サケニ・(シ)があり、上越地方にサカイ・サケ・シケシケ・スケ・スカエラがあり、中越地方にスケ・スカー・スカエスカーニ・ツケンがあり、下越地方にスカエ・スカ・スカエデ・ス

カデニ・サカニ・サカデニ・サカガ・サデ(粟島)・カデガがある。サカイ  
系の外に佐渡にシ、上越にソイ・ソイニ・サエ、中越にセー・ンダ  
ン・ンダンガ・ンナンガ、銚子にモンガ・ンガ・ニ・エニ、下越に  
サニ・ンダンがある。サカイはサカイデとヒメに岩手・盛岡まで、  
サカイニは青森まで引いていり、

35、ミナーナ 強調する為、等二者節を省略する傾向がある。ミと脱  
落してナーナと言うことがある。 38参照

36. シテテはシテイテ・シテオイテの變化。

37. おエテ      そうして      ソシテ、ソイテ、ソエテ、おエテ

38. ーナ みんなの変化、顧問全くの意。語彙のム・ミは変化したり脱落したりする。

39. キミ きめ(肌)の変化。手のきめかゝの意。

40. ヨーサリ [jo:sari] 夜。昼に對する語。古語ゆうさりの變化。  
上越・中越地方で広く使われ、なお中越にはヨースル(刈羽郡古志郡)  
ヨースレ(中富原郡など)があり、上越にはヨース・バンゲ、佐渡  
にはヨーマ・エーマがある。餅屋でバンゲは夕食と晩・夜の兩義が  
ある。バンゲは夕方の意として中越・柏崎地方、今晚の意で東富原  
郡で用いられる。

41. [kiretʃimɔːte] 毛は長者が短い。

42. [arate]

43. [dʒi dʒ o:] [dʒ o:]では失いように思われる。

44. 何年位。結婚後何年間ぐらゐかの意。

45. トジャー [todɕi] 後者のトジャーヤスミの略語であろう。中世近世語の斗代に由来するか。(方言では西播磨郡・青森秋田での作物・小作米の意味で用いられている。) トジャーヤスミは農耕の休み(野休み・洗濯<sup>お洗濯</sup>休みとも云う)の一確で、お盆(現在は八月)と稲刈(杜野とも云う)の中間に、嫁が実家に帰り休屋しつゝ、衣服の修理などする休みを云う。現在はオオ化てしまつた。内容上本文中に説明されている。

46、ツズクル ぼろ(襖褌)を礎ぐ。ぼろをボロ-タリとも言ふ。着古し

な衣服を修理するのである。

47. ノノノー [no no no:] 形動助詞 + 格助詞 + 間接助詞 おとに「休みであつた」など加前置されていよう。

48. コテ 10参照

49. カズイテ カ行五能沈同連用イ者仮形。并角つて運ぶこと。カツグカツイテの変化。北陸地方と新潟県の特殊形（「日本言語地図」参照）馬にカスカスとも言う。

50. トシヨリ 老人で、新者の姑（義母）をさす。

51. トシヨリグツスケーとは、若くなく、新者が実家に帰り不在とすると家事に困るほどの年齢であつたということ。

52. ソノツツメ トヂーヤスミに実家へ帰ることをさしている。それと「勤め」と表現するのは、この風習で嫁が実家に帰り時には十日間以上もそこで生活することは、衣食に全しく特に食を大切にしない者として、嫁家にそれだけプラスすること、嫁家の歓迎するところであり、従つてそれは嫁家における嫁のひとりのつとめとなるという意識が生じているからであらう。

53. マー [ma:] 馬の古者というより uma > mma > ma と変化したものであらう。県下ではンマが多く、日本言語地図作成の際の調査では中頸城郡南部にわずかに「マ」があつた。他県では喜森に集中し岩手県でのびている。新者のA男はンマと言つてゐる。

54. トツツン [tottsan] トトサンの変化。オトツツンより品位は低いカツツツ（隣りの町高柳町石黒方面から来た人は使うという）よりは高い。トツツンテモンの表現はトツツンワを略めた表現であらう。

55. ヨーガタ エフヨは中頸城の特色。

56. スズシナッテ 涼しくなつての変化。形容詞は語尾を失つたりして沈用が単純化したり、無沈用化したりする。特にシク沈用にはスズシエーというイ者仮形が多く、シクも少なく、シ・シーのー形となる。

57. シトリエ ひとそいの変化。ソエはソー [so:] という動詞の連用形ソイフソエから来た名詞、リーマセオウの変化。セオウ > セーフリーソー + 中頸城・中頸城郡・魚沼郡から辰野峠につづき、岩手県内に

もあり、ソウは中頸城・中魚沼郡にある。(日本言語地理)

58. アレンナッテ あれにあってで終っての意か。本文に××印を付け、  
が、言いあがいとともええかもしれない。

59. トサイニャー [tosaeɲja:] とし [tose:ɲja:] とし。順接条件の接続助詞、  
時間的・状態起関係を表わす。と、とするとに省える。語源は「と際  
には」であろう。北陸から入った方言であろう。今は老人語で、  
若語にもよく使われる。中頸城郡に(タラ)サイナがあり、佐渡に  
トセーカ・トセニャー・トセニャ、佐渡外海郡にサイゴニャ(但し外  
海郡吉野郷には「あらは」「でゐるか」と注され少し意味がずれる  
ようである。)があり。全国的にみると岐阜三重滋賀山口にトサイが、  
岐阜三重滋賀にトセーカ、京都にサイナ、石川勝田各々屋久島等に  
トサイニ、トサイニャ、タサイニャがある。(「日本国語大辞典」「トサ  
イが考」その他による。)

60. デヤノサカ 地知出合の坂

61. ツナギ 動詞ツナグの連用形から来る名詞。繋ぎ。列を組んでの意。

62. ショー [sjɔ:] [sjɯ:] の変化。ショフショは越後中野の方言。衆。人々。

63. エワッコ [ewakkɔ] のようでもあり [jowakkɔ] のようでもある。語源は  
「上ッこ」か。ウは植えるを [jmeru] [joeru] と言うようにエエヨと  
変化する傾向がある。魚沼方面にもある傾向である。コは東北的接  
尾か。上荷・上積みの意味で、正常な量の荷物の上に更におまけの  
荷を上積みすること。

64. コンガニ ユンガイニの変化。形容動詞の連用形。終止形はコンガ  
ダ。こんな。24 参照。手振で大きい形を示しそのであろう。

語源は「この概に」(ロドリゲス氏本文文典) 参考、頸城地方にコ  
ナナ(こんな) コンナメ(こんなに) 三重九州にコゲン、山陰九州  
にコギン、米沢にコガイナコガイニがある。魚沼方面ではコンゲニ  
コゲニである、佐渡にはコンゲニとコネーニとある。

65. ガン [gan] 準接助詞 物、の物、の。本来は格助詞であろう。ガ  
が基本形、それに接尾語の添加した。ガンは越後全縣と佐渡郡の外海  
郡地方にあるが、この外ガが佐志郡魚沼郡中頸城郡に、また東頸城

郡・中越・下越地方にアンが用いられる。餘程でも中越の影響でアンも行なわれる。ガンダはのど、ガンニはのどの意である。これに於いて佐渡郡にはノンダ、西頸城・中頸城及び下越の岩船郡にナンダ、ナダという語がある。ガンは「越後のガン」と云われ著明であるが、愛媛県・北陸地方から福島県まで分布している。

66. リョーマルケ 両束ねの意。荷物を二か所でしなめること。東北地方富山県西にも分布するマルケル(束ねる)から来る語がマルケ。

67. コンダ コンどはの意で、若い頃に比べて現在はの意。

68. トチクラ 地名柳倉

69. ソーユー そう云うで「そんな」の意、ユーは[ウ:]に近い。

70. ソーエッタヨーノモン 新語はその名称を思い出さずこう云った。軽自動車のことであろうか。

71. オナシユト オナシユトの変化。オンナシは形容詞、オンナシダは形容動詞。中世語に「オナシ」があつたからその残存か。大正七年生れの男子は「オンナジ」と云つてゐる。上越地方(最も共通語化されているとされる)ではオナジ、オンナジと用い、魚沼郡中越から山形・福島県にかけてオナシ、オンナシ、オンナジが用いられている。

72. オモニスル 重荷をするの変化であろう。重い荷物を背負つて歩くこと。

73. トーヤマ 遠い耕作地や山。漢語は遠山。10 トーノ ヲー参照。

74. アキダケワネー 今に「(馬が使われなから)よかつた」の意が省略されるのであろう。

75. モモシキ 股引 農作業用の褲から下にはく筒状のほきもの、パツケ。

76. ヘヤガリ ヒルアガリの変化。ヒフヘは中越の山間部の特徴。昼食をたべるために家に帰ること。

77. シテ 「のせる」の連用形 シセの二段に活用する。刈草を背負つての意。

78. ゴロゼン 屋号五郎左衛門

79. ショー [ʃo:]に近い。

80. ハー [hɛ:] ハヤ>ハエ>ハー 副詞 もう、すでに。長野県上田市  
ハー。上田市ハエ。西御原郡笠野原郡新ハイ。南魚沼郡は群馬県と  
同じくハーと言う。
81. ヨーサリ 40参照
82. ラレドキ 「居られる時」の変化。梨敵のラレルは16参照。
83. デスエネ デスは英函院の丁寧の助動詞。エは活用語の終止形や助  
詞に接続し、時には下にネ・ヤ等の助詞を伴って、軽い感動、丁  
寧親愛の情を表わす款々の終助詞。ネは普通語的間投助詞。
84. ソレダケドツ ソレは朝晩における他の人との時間的距離的不利  
な条件を指すのであろう。ドツは割合程度を表わす副助詞ズツの変  
化。
85. アンネ ガンニ>ガンネ>アンネと変化した語。接続助詞「のに」  
に相当する。アンは脱出(64参照)のガンの変化、ネは連接条件を示  
す接続助詞「ニ」の変化したもの。アンネは熟後の特殊形である。  
アンネガンネは終助詞となることもある。ガニは北陸にも南伊予に  
もある。ガンニ類は東頸城、中頸城北郡から中越・下越にかけて分  
布するのにおし、頸城地方と佐渡郡、山形県米沢にはノニ類(ノニ  
ニ、ナニ、ンニ、ンネ)があり、中魚沼郡西頸城郡にはセンノ、ヤ  
ンネがある。
86. ドー [dɔ:] 「だよ」の変化か。体言や準体助詞が、ガン、ノに接続  
して活用はまじ。強く断言して相手を新える終助詞。同輩以下に対  
して用いる。丁寧に言う時はエを加えてドーエと言う。その変化と考  
えられる終助詞ドは[dɔ]である。中越・西頸城郡新井市西川原にあ  
り、長野山梨県にも見られる。
87. ノー 5参照
88. アエ あれの変化であることをいふ。
89. ナシタカナ 本来どうしをいふの意味が、こゝでは「普通語記に近い  
意味。
91. モタロー 調査地の小宮餅屋
92. ミナワ ニナワのようによきこえる。「鶴川方言集」にミナワとあ

る。物と接する時同じる特製の太いなわ。

93. テバ「と言えは」の変化。文法の已然形と同形で「言う・言うので」の意か。

94. エ 88 参照

95. /ア- こゝではのうは古い[mj:] 新えへ心強いからか。

96. トーノ 遠いの語幹に格助詞「ノ」がついた。古い表現であろうか。  
遠方の意である。

97. 「アルンダン」の末尾の「ン」。「モノガ」「モンガ」(5の注 85 参照)の変化か。モンガは形式名詞モンに格助詞が順接の接統助詞となつて「ガ」がついてでもな、理由・原因を表わす接統助詞であり、こゝでは更に終助詞となつたもの。アルンダンはあるのだからの意。石川忠羽啄郎志雄郎の「アルモンノ」(あるからの意、国立国語研究所録考資料 1968 年)が参考になる。「モンガ」は鈴鹿及び伊予城郡内にあり。以下の題後には古い「ンガ」という接統助詞はこの語の変化したものである。理由を表わす助詞としては「サカイ」系の語よりも古い形であろうか。

98. エカシタの「シ」は尊敬の助動詞シタルの連用形の変化したもの。前期江戸語において「エカシタ」等の～シッ～の形が著くに用いられたというかそれと関係がある。鈴鹿ではレルラレル(16 参照)よりも新しく敬意も高いようである。魚沼方面でも用いられる。

99. エクサリルサ サは時を表わす接尾語。行く時来る時、行きにも帰りにも、往復の意。ゆくさくさ見れば飽かぬ岩室の田中に立てる一つ松玉はれ 良寛

100. アエ、田段助詞アエクの促考便形。皆さまある、移動する意、古語ありく・あるくの変化。アイク(東頸城郡安塚町・静岡・長野・岐阜・岐阜南知多)、アイグ(中越い 岩船町・柏崎市)、アク(頸城郡)(松田)、アーキ(佐州鳥取)ヤーク(静岡)、アラク(富山)、アラグ(山形)

101. スケー る1 参照

102. ナンギー 形容詞、肉体的に苦しいつらいさま、難儀を形容詞化したもの、形容動詞もある、



103. ワーエング 「そう言うのを」の変化で、「そうぞ」と人のことをばを肯定して言う時同じる常用句。

104. ヒッカケニ ヒはシに似たる。 「引ッ掛ケに」であろう。 ヒッカケとはホンカズキ (事務的かつぎ方) に対して軽い物を無難作にかつぐことぞという。 ぞたとえば刈草をら四束、稲をらば五束とかつぐのがホンカズキであるが、それを一束ぐらいをかつぐのがヒッカケであるという。「=」は荷でなくて、助詞であると思う。

105. オトコ フトコロの変化 懐

106. ミッタクネー 形容詞 みつともない。 見なくさいの変化か。 中頭城から中越、東蒲原郡から東北米で命布する場だが、佐渡はミットモナイ、ミットムナイ、ミトメナイ と言う。

107. ミタドコ 視全名詞 佳裁、外形

108. オトコモリ 男余り。 子まりは女娃の命布ぞつ らから男余りを見苦しいと考える。

109. ラクンナ ラクナの言いあやまりか。

110. ムツムツ 新詞 カをこめて重い物を運ぶさま。 根気よく物事をするさまにも言うという。 岸下では中頭城・西頭城郡で「根気よく仕事をするさま」下越で「事の勢いよくはかどるさま」頭城地方と佐渡郡で「おまて仕事に務める」とぞという。

111. ニオド [ni:odo] とぞとえる。 訛方にぞとすと [ni:odo] とぞという。 種者化しり音が消えていゝ。「にお程」の変化。 稲・薪・わら等をうす高く積んだあのお(堆)程なくさんじの意。 上越地方と佐渡地方でニオ、中頭城には他にニユ、ニゴもあり、岸下は一般にニユー・ニヨア・ニユと云う。

112. エネ エニの変化。 エニとも言う。 理由原因根拠動機などを表わす接統助詞。 明治生まれの老人が同じる。 語源は未詳であるが次の様な例から考えると、接統助詞「に」の前におろりの者へエがはいったもののようにならる。

くれてやるに、はよ取れ取れ。(「黒姫の苦詠」)(柳崎有清水伝)

どうしても嫁にもらいをい、て言うに、向こう、申しこんぞ。(「黒

姫へ著説」)(柏崎市大字新居村延)

コネーウジャ アンジゴング＝ ババー 帰って来ない中は心細いから、わらしは。(新潟県岩船郡朝日村高根NHK全国方言資料第二巻)  
高いにまっとうけてもろいとい。(静岡県富士郡「日本国語大辞典」)  
いかはをかきるといけなにいに簀の上によく並べて置けよ。(伊豆大島「日本国語大辞典」)

俺は此地に居るに。(愛知県南設楽郡「日本国語大辞典」)

おじさんも来てるぞに (長野県上田「日本国語大辞典」)

同じ理由原因を表わす接続助詞「モンガ」「スケ」との異同についてはまだよく分らない。スケが最も新しいもののように思われるがエニとモンガの新古については何とも言えない。

113. サ 間投助詞。サーと発音に言う時もあり。確認の気持をこめて話しかける時の語。さかんに用いるが親しい関係の者に使い、目上などにもう少し丁寧な語を話す時は其通語的助詞ネをつけサネと言う。サは其通語的といえないだろうか。

114. テーゾー [te:so:] 有様様・姿等の意か。語源不明。語者は「俳句」ではなつかうと云った。老人語である。大正七年生れの男子はこの語を知っている。用例を記す。

アーノ テーゾダ ダメダコラー。(あんが有様では駄目だよ。)

オラドコノ テーゾー ミラクダサイ。(私の家の様子をみて下さい。(いいで)よう。)(とりちらしている時人へ訪問を受けする場合など)

アコンケワ ウケジーノ モンガ ランデンノ エト エーテ ウケナカガ ワリースケ、アレガ ホンノ ジゴリノ テーゾーダコラー。(あそこの家は家中の者が勝手なことを言ってお伴が悪いから、あれが本当の地獄の有様というものでよ。)

本文は「よい場合」の例だが、こゝに引いた用例はみだ「悪い場合」に限られている。

115. 1アー 広い[ɔ:] のようである。普通[ɱo:]が多いのどが強く新える時は広くなるようである。

116. 1アー [ɱo:]

117. カズキアゲネケラ と言うりが正常の表現だと思う。ここでは断定の  
ダが介入している。～ダケラ(～のなら、であるなら)という言い方も  
あるから、間違いとはいえないまでも稀な言い方と思う。

118. ダンガノー ダモンガノー の変化。ダは新覚、モンガは理由の助詞  
(97参考) ノーは訴えの間投助詞。

119. タアガリ 田植え終了後の時期。田上がり。

120. ドヨ [dojo] セまい〇、夏の土用

121. ノグサカリ 本文中に説明がでてくる。黒姫山麓のアカエロ(赤平)、  
ツキノコビロー、ミナワ等の名のつく掃蕩地で野草刈りをする。

122. クロエメ はじめ意味がわからなかった。クレメのようにも聞こえ  
た。クロエメの前の部分にアノという語があるようである。辞書と  
文字化後の調査で分かった点があるので、この部分の本文を次の  
ように修正する。

ノグサカリテノガ アノ クロエメノ フモトデ ハジマルンデ  
スエネ。                      あの 黒姫山の 麓で

クロヒメ>クロイメ>クロエメ>クレメ と変化しただけであろう。  
この方言ではりきと語とす性質がある。黒姫山は集落の東南東にあ  
る889.5mの山で高柳町と鶴川地区とを分けていている。

123. ヒリョー 料金を支払って左の日本人夫、右の賃金、その慣習。転  
じて子供に与える間食の菓など、駄賃。用例 ヒリョータノミエッ  
キタし人夫を頼みに行つて来た) ヒリョーセンターカー ナッモアテマ  
ル(人夫賃が高くなって困る) コドモニヒリョーカク(子供にお  
駄賃を与える) ヒリョートリ(日傭人夫)

ヒリョーは中越魚沼地方群島並郷に広く分布する語。但し中越の三島  
郡ではヒロー並郷では日傭人夫をヒョトリという。全国的にはヒョ  
ーという語が広い。

124. シマネフマセル 馬にふませるというのはうまやに草を投げ入れ食  
せさせふませて厩肥にすること。

125. シタゴエ 下肥の意で基肥のことであろう。

126. ドーヌケ [do:nuke] 植物名 みやまあぶらすすき ドーは節のこ

とで、節の折がぬけて折れやすいことからの命名といわれている。  
宮北向では [do:pikε]、三島郡長智崎町でドニケというという。南  
魚沼郡六日町ではドーヌケは別の植物かりやすをさすという。

127. グシグシ 副助詞 水分の多いさま。

128. ムラダケ 植物名 唇形科のひまおこし。本文にその説明がでて来  
る。南魚沼郡六日町でもムラダケ、糸魚川市ではオガラムラダケと  
いう。ムラダケとは隣がけをえる性質からあそび名という。

129 ツガヤ [tsugaja] 接続助詞、時間的な継起関係を表わす順接条件  
を示す。〜と。〜すると。語源は「トサエニヤー」(注 59 参照)と同じと  
と説明している。極めて古い表現らしく、今のところ昔語の中にも  
あてはまひし、大正生まれの老人も知らない語である。語源も未詳で  
あるが、ツは「と」「という」「で」等の変化した助詞であろうか。「  
ガヤ」についてでは上代東国語「ガハ」(連語「…する上に」「…する一方  
で」)が思いあわさるが、一応「ガ」は「トコランガ」(すると)「モ  
ンガ」(から)(注 85、109 参照)等の「ガ」と同じく格助詞から来る接続  
助詞、「ヤ」は間投助詞と考えておこう。結局「ツガヤ」は「と」、  
「…と なると」「という」と「やいなや」の如き意であろうか。

130. ニゴーパール 若くするの方便 ひまおこしに含まれている成分の  
プレクトラチンはにがく健胃剤であるという。中野蘭山はひまおこ  
しに一種の臭気があることを言っている。

131. ドーエ [dɔːe] です。強い断言を同輩や同輩などに丁寧に新え  
る表現。「ドー」は注 86 に説明した強い新えの助詞、それに注 83 の  
丁寧親愛の新えの助詞「エ」を合した連語。

132. エンメーソー ひまおこしの別名。延命草。語源は漢法華に明く華  
草を採取し製剤している。

133. シラサギ mu>N 語源はシラサギのは格崎市外刈羽郡の老人のこと  
ばによくみること。例 ひしろ>んしろ、むらぎぢはノガリヤ人の仲  
間で、昔草木染めの染掛にしろということである。

134. ガエニ 形容動詞の連用形。強く、丈夫にの意。ガエはガイの変化  
であろう。ガイは我意又は異(ガ)・怪(ケ)・実(ゲ)を語源とする説があ

る方言であり、方言としても関東・北陸・長野・その周辺の地方に分布している。上越地方で俵や物が丈夫で強い、魚沼中越以北で物事が大抵強いより強しい多量の無理な等の意味で俵れ、山形福島県につまかることばである。

135. ニガイクスリ にかい化学成分。前述へプロクトラテンとす。

136. カマ=「鎌で」でなく「鎌に」と言ったのは、鎌の方を動かさず固定して、まわりを動かして鎌の刃に当たって切りまじむからであろう。

137. コーコー こゝに小さい身振があつたのであろう。治にあるまじりる「ケツグ」動作をしたのであろう。

138. ケソグ 五穀活用動詞 ケは接頭語。滋賀県に「コソグ」がある。中越地方に「コーゲル・コゲル」という語がある。ケ又はコは先・木が。ソグは左語ソク(刃物などでななめにけずりおとす意)の転化か。佐渡郡西蒲原郡上越地方ではへズル、ハツルという。

139. スケデ カカイデの変化。スケーデとも言うであろう。老人語。近世上方では「さかい・さかいに」よりも「さかいで」が多く用いられるという。スケーデが南魚沼郡湯沢町に、スカデ=か越後北部にスカイデ・スカデが西頸城系魚川西川町にある。この類は盛岡紫波宮山県京都・徳島にもある。

140. ヒガシ 屋号 東

141. オッカサン こゝの所不明瞭で分らなかつたが、訛者に左しかめて文字化した。オッカサンは主婦をいう品名あることば。

142. エキキレルドキ 死期・断絶を言う。「息の切れま時」の変化。

143. アカエにパー 地知赤平アカヒウの変化。黒姫山の麓にあり既述のように夏野草刈りをやる場所、冷たい水がわいている。

144. エヤシリ 訛者に左として「冷汁」の変化だと分る。hi>i>e u>i。冷汁は煮汁に対することば、冷水に五味粉を入れまじり等を入れて汁。夏の野外の作業の時ワッパ(曲げ物の弁当)に清水を入れて作る。古語の冷汁(ヒヤジル)は冷たく冷やした汁であるが銚子の火を通さない汁である。長野県児島愛媛喜森のヒヤシルも同様の味噌汁らしい。ヒヤシル 岩船郡山北町。

145. エワシツ 98 巻

146. メスル 同する。同にあるともいい、体験すること。

147. スズバ スズミバ (涼み場) の変化か。上に木が生いかり、や  
や平らかで涼しい所、遠い耕地や山地に労働に行つた時、休んだり  
食事をしてにやすむに適する場所。簡単な小屋を依りそれをスズバと  
言うこともあつたらしい。本文を スズバニ ネマッテ と訂正する。  
あづ場に 坐つて

148. オトツツン 一家の主人。こゝでは執事を指す。

149. ナマミス 生水。山のデツボ (湧水がちようちよと流れており、あるい  
はモロモロと湧き出るところ、出壺か) の生水。

150. ヒャッコエ [ɕjakkoɕ] ひやこいの変化。形容詞つめたい。県下には  
外にハッコイ (南魚沼郡・上越地方) シャッコエ (中越など) もあり。

151. チベター [tɕibetɕ:] 形容詞つめたいの変化。頸城郡地方にチベ  
タイ、チビタイ、チブタイ、ツベタイ、中越にチベタイ、チベター、  
ツベタイ、佐渡にチベターがある。

152. カンモース [kammɔ:su] 五段動詞、攪拌する、かきまぜる。

カンモースは県下に広く外にガリモス (頸城地方) カマス、カンマス  
(東陽郡) カクムス (佐渡郡) がある。東北地方関東地方長野県  
ではカンマスが有力である。語源は頸城地方でカエモース山形県で  
カンマウスと書くことから「かきまわす」であろうと思われる。

153. ワッパ 俚言ではこい、輪っか、曲木製の食器、ここでは飯を入れる  
弁当用の器具。南魚沼郡ではメンパと言つてゐる。

## 2. 冬の仕事

話し手

(略号) (氏名) (姓) (生年)

A 高橋 清治 男 明治35年

B 高橋 千エノ 女 明治34年

C 高橋 ミサノ 女 明治39年

D (同令) 創 梓 集 一 朝 男 明治45年

C オメッサン ソーネ スミ ヤクニモ ジョアーズデ<sup>(1)</sup> エサシッタジ。  
あなをば ほんとに 炭を 焼くにも 上手で いっぱやっせし。

B ソア ソア。 ソッデ マタ スミヤキー スル アー エカゲンネ<sup>(2)</sup>  
そう そう それで まえ 炭焼きを する、 ああ いいかげんに

オモ<sup>(3)</sup>ーオド ヤクカ ヤカンネ コンダ マタ エネカリダ。  
思うほど<sup>^^</sup> 焼くか 焼かないに こんどは まえ 稲刈を。

A<sup>(4)</sup> ダスケアソア。 (B 笑) アノ スミヤキテノモ アッデスエネ  
ぞからさあ。 あの 炭焼きというのも あれですよ。

ジブンデモッテ マー ムシガ スカンケラ マー ヤランネア  
自分で まあ 炭が 好かなければ、 まあ やられない

ショアバエダガネ。 (B ソアダネ。(笑)) シトガ カネ クレツカラ  
職業だかね。 (そうぞね、) 人か 金と やるから

ヤレナンタッテ マー ヤランネア ショアバエ<sup>デス</sup>エネ。 (B ソアダ  
やれなとて言ってる まあ やられない 職業ですよ。 (そうぞ

ソアダ。)) ハー マー スミノ エーノガ デキタ デタ ドキニヤ  
そうぞ。)) はい、 まあ 炭の いいのか できえ あれ 狩には

キモ今 ヨーテ。

氣持が よくて。

B ソレガ タノシミデネー。

それが 楽しみでねえ。

A ハー。

はい。

C ソーカネー。

そうかねえ。

B ソーデスコテー。 エヤ オンネ<sup>(5)</sup> アノ スミヤキ シテ マタ  
そうですよ。 いや ほんとに あの 炭焼<sup>(5)</sup>を して、 ま

ヤスム ヒマモ ネア<sup>(6)</sup> コンダ マタ エネカリ シテ サー  
休む 暇も なく こんどは まな 締<sup>(6)</sup>める して、 さあ

サカヤエ エク シカ<sup>(7)</sup> キマッタテ ヨー ホア<sup>(8)</sup>ラ アレア  
酒屋へ 行く ほか 決ま<sup>(7)</sup>ったと なると、 そうら あれは

オヤサンケ ナラン コレア オヤサンケ ナランテテ(笑) ナカナカ  
清ま<sup>(9)</sup>さなければ ならない これは 清ま<sup>(9)</sup>さなければ ならないといって、 なかなか

(A ダスケアソー。) ハー ヨー エジャー ナカッタコテー オマエサンワ。  
なからさあ。 はい 容易<sup>(10)</sup>では なかなかよ あなとは。

オラ ドコデモ<sup>(11)</sup> アッダッタドモ マー デカセキダケア  
私の 主人も あれであつたけれども まな 名家<sup>(11)</sup>ぎなけは

シネアカタスケアネ アッデストモ<sup>(12)</sup> リッデモ シネアケラ シネアヨアネ<sup>(12)</sup>  
しなかったから あれであつたけれども、それでも しなけれは しないように

オメアサン シゴト カラメテルスケネ。(13)  
あなた 仕事を 持っているからね。 (A ソアソア。) アー ヤー  
そう そう。 ああ やあ

エケバン アレナノワ アッデスコテネ ハー フエガコエワ シネアケ  
いちばん あれなのよ あれですよ、 ああ 冬風<sup>(13)</sup>いは しなけれは



ナラント エー アー へアー ヨーガタ へアー カマデモ クワデモ  
ならないヒ いう、 ああ もう タカ もう 金銀でも 金銀でも

ソトニャー オカンネアド<sup>(14)</sup> ホラ バンネ エキャー フルヤラ  
外には 置かれないぞ、 ほら 晩に 雪は 降るやら

ワカラントナンテテ サワギタッテ アエシテ キタンダガ……。 <sup>(15)</sup>  
分らないぞなどヒって 大騒ぎして あれして 来んのぞが……。

C エマー キカエカ ヤルスケアテヨアーナ モンダドモ ソッデモ ナカナカ  
今は 機械<sup>(16)</sup>か するからといふような ものだけれども、 それでも なかなか  
エソガシテネー。  
忙しくてねえ。

B エヤ キカエモ キカエネ オワレンガンモネー ( A ソアーソアー )  
いや、 機械<sup>(16)</sup>も、 機械<sup>(16)</sup>に 追われるのもねえ ( そろそろ )

エソガシースケアー ( A ハー ) アー。 エヤ ホンネ ムカシワ  
忙しいから、 ( はい ) ああ。 いや ほんとに 昔は

センバデ<sup>(17)</sup> コエテ アー ジッソクモ<sup>(18)</sup> コケバ オーヨナベデ ( A  
今把で 扱いて ああ 十束も 扱けば 大夜なべて

ソアーダネ。 )<sup>(19)</sup> アッタンダ。 エー マー オマエサン キカエテ  
そうぞね。 ) あったのぞから。 今は あなを 機械<sup>(19)</sup>で

ナンビャクモ ココアーテガンダスケアー ナカナカ……。 <sup>(20)</sup>  
何百(束)も 扱こうというのぞから なかなか……。

C オラガ ワーケアー ドキ センバデ コエタ モンデスラ。  
私どもの 若い 時は 今把で 扱いた せんですよ。

B アー オラモ コエタエネ アー。  
ああ 今もいも 扱きまいたよ ああ。

C ホエテ ソレカラ アシフミダナンテテ アシデ ドンドンドンドン……。 <sup>(21)</sup>  
そして それから 足踏みぞなどヒって 足で どんどんどん……。

A ソアダネ ドンドンドント オマエ (Cア) コエテ オマエ。  
 そうだね、 どんどんどんと あんち (あ) 扱いて あんち。

アレガ マタ ボッヅアラガテノガ デテ オマエ (笑) ( 戻笑オラ )  
 あれが また ぼっつあら<sup>(22)</sup>というのか 出て あんち ( 第4の )

アトシマツガ ヨアエジャ ネアテネ。

後始末か 容易では 無くてね。

B ヨアエジャ ネア。 オラ うチンノワ コクノワ シトバンネ  
 容易では ない。 わしの 家<sup>(23)</sup>のものは 扱くのは 一晩<sup>(24)</sup>に

ニヤクグ<sup>(23)</sup>レア コクドモ ( A アー。 ) コンダ ボッヅアラガ<sup>(24)</sup> デルスケア  
 ニ百(束)くらい 扱くけれども、 ( ああ。 ) ンどは ぼっつあら<sup>(24)</sup>出るから、

マエーンケ マエーンケ ボッヅアラガチガ フタバソングレア カカルンダ。  
 毎日 毎日 ぼっつあら<sup>(24)</sup>揃さか ニ晩くらい かかしのね。

A ソア。  
 そう。

B アー ヤ ナカナカ アッダノア。  
 ああ いや なかなか あれだねえ。

C ワーケア ドキノ アノ ボッヅアラオトシガ ヤーデー。  
 若い 時の あの ぼっつあら<sup>(24)</sup>落しとか いやで……。

B イヤ ホンネネ…。  
 いや ほんとうに……。

A ネムイテガンネ オマエ…。  
 眠いというのに あんち……。

B アー。  
 うん

C ホンネネ アンガン エト オモナラ<sup>(25)</sup> エマ ハア ミガ  
 ほんとうに あんち ことを 思おうなら 今ほ もう 身<sup>(25)</sup>か

ブルブル シルヨ<sup>ダ</sup>コテ<sup>ー</sup>。

ふふふと すまよう<sup>ダ</sup>よ。

3 ソ<sup>ア</sup>ソ<sup>ア</sup>。 ホ<sup>ア</sup>テ アッ<sup>ス</sup>コテ<sup>ー</sup> ソレマデ オマエサン アレー  
そうそう。 そうして あれですよ。 それまで あなぬ あれ

トクベ<sup>ア</sup>ノ<sup>(26)</sup> ショ<sup>ー</sup>ガ ハジメテネ<sup>ー</sup> (A ソ<sup>ア</sup>。 ) アレオ キカエオ  
徳兵衛<sup>ア</sup>の 船<sup>ガ</sup> 始めてねえ (そう。 ) あれを 機械<sup>を</sup>

モッテ キテ シラッ<sup>タ</sup>ノ<sup>ダ</sup>ガ<sup>ア</sup> アレ メ<sup>ア</sup>ワ オマ<sup>ア</sup>サン エ<sup>ー</sup> シテ<sup>(27)</sup>  
持って 来て されぬ<sup>ダ</sup>か、 あれ ス<sup>ル</sup>前<sup>ハ</sup>は あなぬ 銚<sup>い</sup>を<sup>シ</sup>て

モ<sup>ア</sup>テ<sup>(28)</sup> (A ソ<sup>ア</sup>ダ<sup>ネ</sup>。 ) ジュ<sup>ー</sup>サンビョ<sup>ー</sup>グ<sup>レ</sup>ア<sup>ズ</sup>ツ シクガ<sup>ン</sup>ダ<sup>ガ</sup>  
もらって (そう<sup>ダ</sup>ねえ。 ) ナニ<sup>ハ</sup>表<sup>ク</sup>らい<sup>ス</sup>つ 石<sup>展</sup>く<sup>の</sup>ダ<sup>カ</sup>、

オラ サンシロ<sup>ー</sup>ノ<sup>(30)</sup> コナエ<sup>ダ</sup> シナッ<sup>タ</sup> オジジト エ<sup>ー</sup> シテ  
私<sup>ハ</sup>は 三<sup>四</sup>郎<sup>ハ</sup>の この 闇 死<sup>な</sup>れぬ おじい<sup>さん</sup>と 銚<sup>い</sup>を<sup>シ</sup>て

モ<sup>ア</sup>タラ<sup>(31)</sup> ハ<sup>ア</sup> ジッ<sup>ビ</sup>ョ<sup>ー</sup>グ<sup>レ</sup>ア<sup>ズ</sup>ツ シク<sup>ト</sup>セ<sup>ア</sup>ニ<sup>ヤ</sup>ー アノ タ<sup>テ</sup>  
もらったら、 もう ナニ<sup>ハ</sup>表<sup>ク</sup>らい 石<sup>展</sup>くと あの 「たて」<sup>を</sup>

ミー チョコ<sup>チ</sup>ョ<sup>コ</sup>ッ チョコ<sup>チ</sup>ョ<sup>コ</sup>ツ エカ<sup>レ</sup>ル<sup>ン</sup>ダ<sup>ア</sup>。~~~~~。  
見<sup>に</sup> ちょこ<sup>ちょ</sup>こ ちょこ<sup>ちょ</sup>こと 行<sup>か</sup>れ<sup>る</sup>の<sup>ダ</sup>。

(A ア<sup>ー</sup>。 ) ホ<sup>ア</sup>シテ ヤスミ<sup>ニ</sup> ナルト オマエサン サツマエ<sup>モ</sup>  
(ああ。 ) そうして 休<sup>み</sup>に なると あなぬ さつま<sup>芋</sup>を

デッ<sup>ケ</sup>ア<sup>(32)</sup> ナベ<sup>デ</sup> エゼテ<sup>テ</sup> ソレ マ<sup>ー</sup> ヒトハラ ク<sup>レ</sup> リレカ<sup>ラ</sup>  
大きい 鍋<sup>で</sup> ゆ<sup>で</sup>て<sup>お</sup>いて それを まあ 一<sup>腹</sup> 食<sup>っ</sup>て、それ<sup>か</sup>ら

マタ ソノ ウスシ<sup>キ</sup>ガ オエル<sup>ト</sup> コ<sup>ー</sup>ン<sup>ダ</sup> ゴ<sup>ハ</sup>ン タ<sup>エ</sup>テ  
また その 白<sup>石</sup>展<sup>も</sup>か 終<sup>る</sup>と こんど<sup>は</sup> ご<sup>飯</sup>を 炊<sup>い</sup>て

ダ<sup>エ</sup>コゼ<sup>ア</sup> シトナ<sup>ベ</sup> ニテ ソッ<sup>テ</sup> マタ ソレ ミ<sup>ン</sup>ナ  
大<sup>根</sup>菜<sup>を</sup> ひと<sup>鍋</sup> 煮<sup>て</sup> それ<sup>で</sup> また それ<sup>を</sup> みんな

タバ<sup>タ</sup>ン<sup>ダ</sup>ス<sup>ケ</sup>ネ<sup>ー</sup>。 (A マ<sup>ー</sup> ソ<sup>ア</sup>ダ<sup>ネ</sup>。 ) ダ<sup>ス</sup>ケ<sup>ア</sup> ムカ<sup>シ</sup>ワ  
食<sup>べ</sup>ぬ<sup>の</sup>ダ<sup>カ</sup>からねえ。 (まあ そう<sup>ダ</sup>ね。 ) ダ<sup>カ</sup>から 昔<sup>ハ</sup>

ユッデ アッダコテ マー シゴトモ シタシ チカラシゴトデ  
これで あれですよ まあ 仕事も したし、 カ仕事で

アッタスケア アッデスコテネ タベタコテ。  
あつたから あれですよ 食べなもんをよ。

C マー エマ ケアモケナンタッテ ホンノ シトツカ シトツハン  
まあ 今ほ おはぎ<sup>だ</sup>などといつたところで ほんの ひとつか ふたつ 半

グレア タベレバ チーセーノ タベルガ<sup>(33)</sup> ムカシヤ マー ナナツヤ  
くらい 食べれば 小さいのを 食べるか、 昔は まあ 七つや

ヤッソ アッダノー タベタノー。  
ハッ あれだ<sup>ねえ</sup> 食べな<sup>ねえ</sup>。

B マー エネカリガ オエタラテ ケアモケ セーヤ ソレ マッテテ  
まあ 縮刈<sup>か</sup> 終った<sup>と</sup>いって おはぎ<sup>を</sup> すれば それを 待っていて

タベタ モンダシ (A ソアー.) コロバシヤゲダテテ (A ンー.)  
食べな ものだし、 (そう。) 唐箸<sup>を</sup> 上げ<sup>だ</sup>といつて (うん。)

エネ コキヤグレバ シテ ソレ マタ タベタ モンダシサ。  
縮を 扱き上げると 作って それを また 食べな ものだしね。

C ホーテ カリヤゲノ ケアモケダナンテ モッテ アノ ヤマエモホリー  
そうして メリリ上げの おはぎ<sup>だ</sup>などといつて 持って あの 山芋<sup>を</sup>掘りに

エクナンテッテノー。  
行くなどといつてねえ…。

B (笑) ホンネネ…。  
ほんとうに…。

A (笑)

B ダスケア ヒャクショアーワ ナカナカ ツギー ツギート へッ オエタ  
だから 百姓は なかなか ね ねと もう 終った

(34)  
シータ ネアー マンデー エキノ フルマジャー ツギー ツギート  
引いたか 無く、 ままで 雲の 降るまでは 今 今と

ヤマーモマデ<sup>(35)</sup> ホランケ ナランスクア (笑) (A ソアーダネー。<sup>(36)</sup>  
山芋 まで 掘らなければ ならないから、 そうねえ。)

ヨアーエナ モンジャ ネアー。 (笑)  
容易な ものではない。

C ホーテ エマ マー キカエダドモ ムカシワ コメツキダナンテ  
そうして 今ほ まあ 機械<sup>(37)</sup>が<sup>(38)</sup>けれども 昔は 米搗きなどといって

クルマヤエ<sup>(39)</sup> ヨーサリ エケジカソネ エッピョースツ ツクア<sup>(38)</sup>ンダナンテ  
車屋 夜 一時間に 一俵ずつ 搗くのぞなどと、

ネネアーデテ エケジカン タツト クルマヤマデ<sup>(40)</sup> ソノ コメ アゲ  
寝な<sup>(40)</sup>いていて 一時間 そつと 車屋へ その 米を 揚げる

エッタナンカ シタリネー。  
行ったりなど しねえ。

B ソアーダソアーダ。 オラ アッデスエネ アノ アレー ハンダワラ  
そうぞ そうぞ。 私は あれです、 あの あれを 半俵。

エッピョー カズカンネアスケ ハンダワラズツ カズイテ (A ソアー。<sup>(41)</sup>  
一俵 かつかれないから 半俵ずつ かついで、 そう。)

ホーエテ アノ アエッタ モンダガ<sup>(41)</sup> アッダコレソ<sup>(42)</sup> ダスケネ  
そして あの 歩いた そのどか、 あれぞよね、 だから

クルマヤバンガ<sup>(42)</sup> クットセ<sup>(42)</sup>ア<sup>(42)</sup>ヤー マー ヨル シトバンジュー ツカーテ。  
車屋 番か 来ると まあ 夜 一晩中 使つて。

(A ソアーネー。) ハー。  
そうねえ。 はい。

A ホーシテ エマミテアー ハクヒモノガ<sup>(43)</sup> エケヤ エードモ アノ  
そうして 今み<sup>(43)</sup>ないに 寝さず 牛 か つ よければ いいけれど あの

ジブンワ オメアー ワラジ ハエテ ( B (笑) ワラジ ハエテ )  
 時分は あんち わらじを 履いて ( わらじを 履いて。 )

シメジテ<sup>(44)</sup> オメアー。 ( B (笑) サー。 ) ソアーシテ アシガ<sup>(45)</sup> チベトアーテ  
 濡って あんち ( さあ。 ) そうして 足が 冷たくて

チベトアーテ マ コマ<sup>(45)</sup> ッタツケサ。  
 冷たくて まあ 困ったわけね。

B ヤー カセガ<sup>(46)</sup> ファイテ マーシテ アノ キノアガ<sup>(46)</sup> ツケアーテ コ  
 やあ。 風が 吹いて うどく あの 木の葉が つかえて

コネアーデナンテテ ユー ドキヤ シモガ<sup>(47)</sup> レデソアー ( A ソアー。 )  
 (水が) 来ないで"など"と いう 時は、 霜 枯れ 時で"ね、 ( そう。 )

ホアーテ エマ サ<sup>(48)</sup> キナモ エワッシャル<sup>(48)</sup> ヨーネ オレ ミソテガ<sup>(49)</sup>  
 そうして 今 じつと おっしゃる ように ほら みぞれが

フルンダン<sup>(50)</sup> ( A アー。 ) アー クルマヤノ<sup>(51)</sup> マウチニ ソアーラ  
 降るから、 ( ああ。 ) ああ 車座の<sup>x</sup> 回るうちに そうら

ツカン ナンワテテ<sup>(52)</sup> エクバンモ オメアサン ヨトギ<sup>(52)</sup> シタコテー。  
 揚がねば" ならぬ"わといって 幾 晩も あんち 猪と夜 しねよ。

A マー ソアーネー。  
 まあ そうだねえ。

B ハーハー。 エヤー ホンネ ナカナカ ムカシノ ハナシ ショ<sup>(53)</sup> ナラ  
 はいはい。 いやあほんとに なかなか 昔の 話を しようなら

エマー マンデ<sup>(54)</sup>...。 デモ マー アッデスコテ ムカシンヨ<sup>(55)</sup> デ<sup>(55)</sup> ナラ  
 今は まるで...。 でも まあ あれですよ。 昔のようであらうなら

トショリモ コンガン<sup>(56)</sup> コト シテランネアー デテ チリグ<sup>(56)</sup> レアー  
 年寄りも こんな ことを していられなく 出て 産 くらい

へはワンケ ナンガ。 ( A ソアーダ<sup>(57)</sup> ネ。 ) ッダドモ マー エマ  
 捨たなければ" ならぬ"が...。 ( そうだね。 ) だそれども まあ 今は

ニワノ アイテ カンソーキノ<sup>(57)</sup> バン シルグラーナ モンデ  
 作業の 相手は 乾燥器の 番を するくらいの ため

(A ソー。 ) ニワノ アイテ<sup>(58)</sup> ナランスケー エードモ。  
 そう。 作業の 相手には ならないから いいけれども。

C ソッデモ エリガシーワ。(笑)  
 それでも 忙しいわ。

B (笑) エソガシー。(笑) ホンネ エソガシー。  
 忙しい。 ほんとうに 忙しい。

C (笑) ホン… ナニ<sup>(59)</sup> ノーカ<sup>(59)</sup> キカエニ シルエネ<sup>(60)</sup>  
 なんと、 かえて 機械に するから

エリガシー ヨーナ キカ シラー。  
 忙しい ような 気が するよ。

B ソーダネー。(C アー。) キカエネ ツカワレルスケアー。 ヤー  
 そうだねえ。 ああ。 機械に 使われるから。 やあ。

アコノ ウケデ エッケン オエタナンテ<sup>(61)</sup> エーバ ヘアー マルデ  
 あきこの 家で 一軒 終ったなと 言えば もう ままで  
 キケグアーサワギダモン。<sup>(62)</sup>  
 気遣い 騒ぎたから。

A ソーアネー。  
 そうだねえ。

B ハー。  
 はい。

A ヤー アノ コメツキナンテ<sup>(63)</sup> ユーテト エッペア カツイデ  
 やあ、あの 米 揚きなと ゆうと いっぱい かついで  
 エカンネー<sup>(64)</sup> ヤツガ ハンダワラグラー カリガシラ リアーシテ  
 行けない 奴が 半儀 くらい かつがせて そうして

ヤラレルガンカ<sup>(65)</sup> エッちゃん センナカッタガ<sup>(66)</sup> アー。  
 遣られるのか いちばん 切なかつたが ああ。

B ソーレ オメアサン ウチエ モッテ キテ ソレ コンダ センゴクネ<sup>(67)</sup>  
 それを あんぬ 家へ 持って 来て それを こんどは 千石 通りに

カケテ (A ソーダネー。 ) トーミテ<sup>(68)</sup> アオッテ (A ソー。 ) ソーシテ  
 かけて、 (そうぞねえ。 ) 唐 築で あおって、 (そう。 ) そうして

タワラエ ツメル。  
 儀に 読める。

A ハー。  
 はい。

C ソッデモ マダ チットワ エーコラ。 ソノ ムカシワ アノ  
 それでも まだ かしは いいさ、 その 昔は あの

ウスデモッテ サンニンデモ ゴニンモ トントン ツイタモンダテガ  
 臼で 三人でい 五人も とんとんと 搦いたものなというが、

(B アー) ザマナ モンワ オゴトダコラー。<sup>(69)</sup>  
 (ああ。 ) 体力のない 昔は 大変ださ。

B ソーソー。 ソノ コロダ<sup>(70)</sup> アノ フミガラテノモ アッタガンナ  
 そうそう。 その こうぞうう、 あの 踏み度というの あつたのは、

(A ソーネー。 ) スタンスタントネー。  
 (そうぞねえ。 ) おとんとんとねえ。

A ジガラテダカネ<sup>(71)</sup> ハー。  
 地唐と言うのかね、 はい。

B ジガラテガンダカ<sup>(72)</sup> エガラテガンダカ シラントモ…。 エヤ  
 地唐と言うのか えがらと言うのか 知らないけれど…。 いや

ナカナカ アッダコラネ ホンネ サー~~~~~シー。<sup>(73)</sup>  
 なかなか あれですよほんとに ~~~~~。



A エマ ソレ オマエ ネテテ<sup>x</sup> オマエ (笑) (B 笑) テレビ  
 今は それを あんた 寝ていて あんた テレビを  
 ミテテ<sup>x</sup> コメ ツキ シテラレルガンダ。 エーガンダトモ  
 みていて 米搗きと していられるのだ。 いいのだケルビと  
 ソレヲモ ラクダト オモワンガンダスケ (B ハーイ。) ニンゲンワ  
 それでし 樂だと 思わないのだから。 (はい。) 人間は…  
 ……。(笑)  
 ……。

B (笑) ハー ヒヤヒヤヒヤヒヤト カゼガ サムー ナッテ キタ  
 「ああ ひやひやひやひやと 風が 寒く なって 来た  
 ハー バンニャー エキダ<sup>(76)</sup> ローナンテッテ オメッサン コアナレガ<sup>(77)</sup>  
 ああ 晩には 雪だぞ」などと言って、 あんた いあられか  
 サラサラサラサラト トブルガ<sup>(78)</sup>ンネ クルマヤガヨエ シタモンダー。  
<sup>x x x</sup> 降るのに 車屋通い (78) (79) (24のど。  
 ホーエテ コンダ<sup>(80)</sup> ホレ フユウチノ アレオ シナケ ナンスケネ  
 そうして こんどは ほれ 冬の あれを しなければならぬから。  
 ハキモンオ<sup>(81)</sup> コシャワンケ<sup>(82)</sup> ナンスケ (A ソアー。) サー ワラスグリ<sup>(83)</sup>  
 履物を こしらえなければ ならないから、 (そう。) さあ 藁選りを  
 マガ アレバ シテテ コンダ<sup>(84)</sup> ワラハダ<sup>(84)</sup>キダ。 (A ソアーネ。) (そうぞね。)  
 間が あれは において、 こんどは 藁叩きだ。  
 ウスシキ ワラハダ<sup>(85)</sup>キ。 (A リア。) ハー。 ワラハダ<sup>(85)</sup>キモ  
 臼石履き 藁叩き。 (そう。) はい。 藁叩き  
 エッチューヤ マー バン<sup>(86)</sup> シネケラ マネアワンカッダシ ウスシキモ  
 一昼夜 まあ 蕎麦を しなければ 間に合えなかつたし。 臼石履き  
 エッチューヤ シネケラ アトノ コザコザ<sup>(87)</sup>ガ アルスケ  
 一昼夜 しなければ 後の 小ざぶざが あるから

マネアワンカッタシ ネズネ オメサシ アレシッタガンダ<sup>(87)</sup>。

間に合わなからし、 寝ずに あんぬ あれしていたのだ。

C スッヂモ<sup>(88)</sup> ウチニ エル ショワ マダ エーガンダガ<sup>(89)</sup> ゴロスケノ  
それでも 家に いる 衆は まだ いいのだが、 五郎丸の

オジーサンダケワ<sup>(90)</sup> ソレ オヤシテ コンダ サカヤエ エコパート  
おじいさん達は それを 清まして こんどは 酒屋へ 行こうと

モーンダガ<sup>(91)</sup> (B ウン。) ウチノ ショーニ ミンナ シテ  
思うのだが、 (うん。) 家の 衆に みんな して。

カコエマデ<sup>(92)</sup> シラ サカヤエ エコパーテガンダガ<sup>(93)</sup> (B ダスケー。  
雪囲いまで して 酒屋へ 行こうというのだが、 (だから。)

オシマエニ<sup>(94)</sup> ムカシン ショワ ワラーテ マエンチ クー アノ  
「結局」、(昔の 衆は 笑って)、 「毎日 食う あの

ヤクモチマデ<sup>(95)</sup> コネテ エカンケ ナラン ~~~~~ <sup>(96)</sup> (A B (笑))  
焼餅まで こねて 行かなければ ならない ~~~~~」

ナンテ ハナシガ アルガンネ (B イヤー ホンネ  
などといった話か あるのに、 いやあ ほんとに)

オジーサンダケノ サカヤン ドキヤ ホンネ (B ナカナカ  
おじいさん達の 酒屋の 時は ほんとに なかなか。)

ワシゲア<sup>(97)</sup> モンダッタコテー。  
そんな ものだねえさ。

B ソレガ マタ ミンナ テシゴトダスケアー (C アー。) (A ダスケアー。  
それが また みんな 午イ仕事だから ああ、) (だから。)

ヨーエジャ ナカッタコテー。 エヤー ホンネ オラ エンデジャー<sup>(98)</sup>  
容易では なかったさ。 いや ほんとに 私の 主人は

マー サカヤニ<sup>(99)</sup> デランネアカッタドモ ヤッパリ マダ ホカノ  
まあ 酒屋に 出られなかつたけれど、 やっぱり まだ 別の

(99)

ダチントリ シタリ シテラッタモンダスケネ オーカタ オメアサン  
駄賃取りと しぬり していらねえものぞから 大分 あんぞ

(100)

ウチシゴトワ

シトリデ

シタガ

アウノアタマエ

キミガ

内仕事は

ひとりで

したが

その上に

きめか

(101)

(102)

ワリーガンデ

エビノ

アタマアタマネ

ガニノメミテアネ ナッテ

悪いので

指の

頸頸に

蟹の目みえいに

なつて

(103)

アカギリガ

キレテ

( A ソアネー。 )

ソーレ

コンド

エドノ

皮算か

切れて、

そうぞねえ。

それを

こんど

井戸の

ツルベ

アゲルネ

カネノ

クサリダにアネ

( A ソア。 )

つまづを

上げるに

金の

鎖ぞうね、

そう。

ガラグワラグワラッ

ジャボアント

オチタッタ

コンダ

コア

アゲル

がらがらかっつと

じゃほんと

落ちても

こんどは

こうして

上げる

ドキガ

オメアサン

コレガ

ヒリヒリト

~~~~~

ノー。

ホンネ

時か

あんぞ

これか

ひりひりと

~~~~~

ねえ。

ほんとに

エマデモ……。

( A

ヒリヒリト

エビガ

サケルヨアダスケアネー。 )

今でも……。

ひりひりと

指か

裂けようぞからねえ。

(104)

アネー。

エマデモ

オモートサエニャー

ミガ

サワサワト

うん。

今でも

思うと

身か

ざわざわと

シルヨアダ。

するようぞ。

(105)

C

オマエサント

ウチノ

エドガ

フケアアンデネー。

(106)

あんぞの

家の

井戸か

深いものでねえ。

A

ダスケア

オラはユノ

(107)

(笑)

エドガ

フケアアンデ

アッダエネ……。

ぞから

私の所の

井戸か

深いので

あれだよ……。

(笑)

C エヤー……。  
いやあ……。

B オラ ウチノ エドワ ソー フコッ ネアカッタ。 (A アー。)  
私の家の 井戸は そんなに 深く なかった。 (ああ。)

アー ~~~~~ エマ ソーナ ~~~~~ オモーナラ アッダコテ  
ああ ~~~~~ 今 みんな ~~~~~ と 思おうな あれだよ、

エマ / ショワ ホンネナンカ シマセンコラー。  
今の 衆は 事あるなど しませんよ。

A マー ソーアネー (B ソー。) スイッチ エッレバ グーッ アゲテ  
まあ そうぞねえ。 (うん。) スウィッチと 入れれば ぐうっと G(に)上げて  
クレルステア<sup>108</sup> オメアー (笑) (B 笑) セワ ネアーガンダガー。  
くれるから あんた 世話か ないんぞよ。

(笑)

B (笑) ソーダ ソーダ。  
そうぞ そうぞ。

## 注記

1. サシ、尊敬の助動詞「サシヤレ」の連用形。一般動詞・カ変動詞の連用形に接続する。Iの注98エカシタ参照。
2. エカゲソネ形容動詞 かさり、相当 「いゝ加減に」の変化。
3. オモーオド オモーホドの変化。[h]はかすかである。
4. ダスケーソア のソア 終助詞・間投助詞 さ。よ。ね。カ又はサー(Iの113参照)との差については未詳。ソアは南魚沼郡でも用いられ、大分県にもある。(大分県のは終助詞)
5. オンネ ホンニの変化。
6. ネア [ne:] 形容詞「無い」の連用形。
7. サカヤエエク 酒屋に行く。酒造り従業員として告げること。十一月から四月中旬まで関東・中央・大分方面に出かける。三國峠と越えて群馬県へ行く人が多いから、そので「上州行き・上州帰り」と言う語が使われる。天保期(1830~1843)に告げ者数が飛躍的に増加したと言われる。昭和40年の旧黒姫村の統計によれば労働人口1409人中告げ者が643人(55.6%)を占め、この中70%が酒造りである。新着者は14歳から告げざにあら。
8. ヨー [jo:] 言うの変化。さまつなと言うと、さまみやいふやに近い表現であろう。
9. オラドコ 私の所の意で、話者が自分の史を述べている。
10. アッダドモ あれぞれれども の意で「忙しかうなが」ということか。
11. アッデスドモ 「それなどではなかつたけれども」という心持か。

12. シネケラ シネヤーネ 虫縁ざとしなければいけないように、それほまそ  
それで揃当にの意。
13. シゴトカラメル 仕事を持っていること。<sup>カラ</sup>終める。他動詞、身辺  
に持つこと。「カラマルコドモガナー」(刈羽郡刈羽村)のカラマ  
ルは毎動詞で母親にまつわりつぎ年のかかる幼児を持つていない意。  
南魚沼郡湯沢町では「コドモオカラメル」と他動詞に用いる。身辺  
にあそ世話をよくみる意である。
14. ド [dO] ドーと長考にも言う。終動詞。男社とも用い、対象又は因  
下の者に念を押しやり注意をうながしやりして強く働きかける時用  
いる。「ぞ」の変化と考えられる。(南魚沼地方はゾという。)親しい  
目上に対しては「ゼ」の変化と考えられる「ヂ・ヂー」を用いる。  
ドは長野県上田・広島・島原、ドーは静岡・志摩・島原にある。
15. アエシテ 仕事を片付け冬に備えてというようなことを指すか。
16. エソガシテ 形容詞忙しいの連用形+テ。終止形(この場合は終呼  
されている)を連用形に用いる。大阪方言の言い方に似ている。
17. センバ 稲扱き用具 千把扱きの略であろう。既述の「カラハシ」(  
Ⅱの連83 コロバシヤゲ参照)より能率的なことからついた名であろう。  
鉄のとか、右櫛状の板を主要部とする稲扱具で、大正初年まで使わ  
れた。
18. ジツソク [tsO] の音がある。十束。一束は八把から成る。
19. アッタンダン 語尾が崩れているが、「あつたのなから」の意。
20. ガンダ 準接動詞ガン+断定の助動詞ダ I の注65参照。
21. アシフミ 足踏み稲扱器 大正初年頃から使われた。
22. ボッヅラガ ボッヅラの言い誤りか。24参照。
23. ニヤク ニヤク の[h] 音が脱落。
24. ボッヅラ [tsa] の音は古音が又は[sa]の変化かは未詳。稲扱きの略称  
が穂からはなれず穂の一部とともに折れそりしもの。それを臼で  
ついて穀を穂からはなす作業が後のボッヅラオトシ・ボッヅラガチで  
ある。「綜合民俗語彙」に「穂打ち・棒打」とする語源説があるが、  
茨城県・静岡県にボッカリ(木の皮つとさま)、長野県諏訪・群馬県に

ボツカ(稲扱きをして残り)を穀・くさむら)、又栃木県・長野県・群馬県にボツツラ(十分脱穀できなかつた稲穂)があるから、接尾語が語彙であろう。

25. オモーナラ [omō:nara] とさこえる。omōwō:mononara > omōwō:nara > omō:nara と変化しを語であろう。

26. トクバー 屋号

27. エー [e:] ゆいの変化 結い、労働交換。佐渡郡イイ、佐渡郡海村エエ、中頸城郡エーッ、南魚沼郡場沢町エー。

28. モーテ [mō:te] [morō:te] の変化、トモはさこえないと思う。

29. ビョー [bjō:] 俵 せまい。

30. サンシロー 屋号

31. タテ ミシロ(むしろ、3尺×6尺)をニ枚又は三枚縫につなぎ、輪状にして、むしろを敷いた作業場の平面上に立て、扱き終わる穀を穀すり棒で収めておく、臨時の置き場・容器。ニ枚のをニマエタテ、三枚のをサンマエタテと言ひ、それぞれ八俵分、十五俵分の穀を収容できる。共通語にタテ(餅)があり、茶や綿を入れる俵という。「立て」に由来するか。青森・新潟・奈良県にこの語があり、堅餅(タテフコ)の略かという。〔総合民俗語彙〕

タテミー は「タテ見ニ」の変化で、残りの穀を見に行くこと。早く作業を終りたい心理のあらわれを動作。

32. エゼラ エデラの変化。jūwe, de > ze エゼル南魚沼郡石見郡エゼル 長岡地方橋島島。

33. タベルカ [taberuɡa] のようにさこえる。

34. オエタシータ オエタヒータの変化か。「終わる退いた」か。終わるを語源(を語、オエタヘタガネー(柏崎市「消えゆく方言」)

35. ヤマーモ [jamaimo] 山芋の変化、重母音をさけている。

36. リーダ [sɔ:ɔ] のようにさこえる。

37. クルマヤ 水車小屋 五六ヶ所が共同で作つたという。米を搗いたり蕎麦を打つたりする。

38. ヨーサリ タサリの変化。夜。中頸城地方にこの外ヨーサル、ヨーサレ

があり、中頭城郡にヨーサリ・ヨーサ、バングがあり、佐渡にはエーマ・エーマがある。

39. アンダ ガンダ(のダ)の変化。中越の長岡地方の特色。

40. コメアゲ「米を上げに」の意。つまり終えぬ米を臼からとること。

41. アダコラン アレダコラネの変化。

42. クルマヤバン バンはボンのようにも聞こえる。車屋番。水事を使う順義。

43. ハクヒモノ ハキモノの言い誤り。

44. シメジテテ こゝのように聞こえるが、新着Bは「シメリがアガッテ」ではないかという。新着Aは前述(右)のように名がもつれるよう不明瞭な発考をすることがある。

45. ケ 四郎の助動詞。

46. キノア キノハの変化。ハの脱落

47. シモガレ 霜枯れ時で。老人はシモツキ(霜月)という語を使っている。十一月のこと。

48. シル I の注98参照。

49. ミツテ みぞれ。中頭城郡海部地方・上越市・佐野県でミツテという。この外ミツタ(上越地方)ミツタエキ(上越地方)ミズエキ・ミズエキ(上越)、ミヅレ・ヅブエキ・ザブエキ・ジャビエキ(佐渡郡)ミド(福島県)がある。

50. ダンガ ダモンガの変化。ダから

51. マウチ 「マウルウチ」の変化。W・Y は脱落することがある。

52. ナンワ ナランワの変化。ウの脱落

53. ヨトギ 徹夜。用例 ヨーベワ オキクサンガ トレテ ヨトギシテシマータ。お通夜もヨトギと書く。普通語の「夜伽」である。

54. マンダ まるで、まったく。この次に「樂々そのダ」という意味のことばが省略されている。

55. ヨーダゾーナラ 珍しい表現。

56. コンガン ガは[ga]だと思う。

56' チリ 稲穂を後の穀に混、ている藁屑など。塵、



57. カンソーキ 米乾燥器

58. ニワノアイテ ニワシゴトの桐年。男子のする編提等の作業の手伝い。

59. ノーカエ [no:kæ] 新詞なおか。naokafisは naokapiの变化であろうか。長野県に「のうかし」佐渡郡に「なおか」「なおしか」がある。ノー・ノーコト(南魚沼郡)ナオカ(中頸城郡中越地方中蒲原郡)ノカ(上越新井市柏崎旧市域)ノカ(上越市)もある。

60. エネ Iの述12参照

61. オエタ 自動詞 終わった。

62. キケゲーサワギダモン 気強い騒ぎだから。モンはモンガの略か。

63. カツイデ〜〜 はっきりしないが「カツイデエカンネーヤツガ」で、「背負って行けない奴つまり私が」の意の様に思われる。

64. カツガシテはカツガセラレテと言うべきところか。

65. エッセン イチバン(一番)の变化。新詞。1ヶ南魚沼郡・花岡市・柏崎市・中越地方・全国各地・江戸。1ヶ南魚沼郡。1ヶカ山形県。1ヶバン茅渚郡・岩手県。

66. セツナカタ つらかつた 精神的・肉体的面義。佐渡郡・関東・東北。

67. センゴク 千石通しの略 器具の名

68. トーミ 唐箕 器具の名

69. ガマナ ガマダという形容動詞の連体形。体力の弱いこと。語源は様か。中越地方では役に立たぬ人・弱者をガマナシ・ガマナレと言ひ、佐渡郡で年若い氣力体力の衰えることをガマガノールと言ひ。同郡で力が無い、役に立たぬ、意気地の無いこと<sup>2420</sup>人をガマナシと言う。米沢にガマザマシイ・ガマデナイという語がある。

70. オゴト オーゴトの短音化、大変

71. フミガラ 足で踏んでつく白。踏痕。痕白。「踏痕白」の略語か、東京都・島根県で言う。

72. ジガラ 地面に白を埋め固まして踏む、柵を足で踏んでつく白。地唐白の略か、「綜合民俗語彙」に「地面踏白」の意とある。江戸の在・埼玉県にある。

73. エガラ 不明。あまいは存在しないもの、
74. ききわけられたい、
75. ニンゲンワ 人間というものはわかちまたものぞ、因、それのぞと  
言いながら、それであろう。
76. ロー ゴーの変化  $RO: > dO: > ro$  経助詞 妹筆・利トに詳しく強く  
主張し抑えることをあらわす、同上に於ては「レ」となる。
77. コアナレ コアラレ、小竅。アナレの語は富山県から新潟県東北地方  
に分布。佐渡郡はアラネ。
78. トブル フル(降る)の言い語り。サウサウトのトの影響か、トブルは  
中越地方で雪や泥の中に足をふみこむこと。
79. クルマヤ 前出の水車小屋へ行き来すること。
80. アレ 次に言うハキモソを思い知らせよう言うな。
81. ハキモン はきもの、冬のはき物でワラグツ・シビガウミ・ツマカ  
ケ・ウソカケなど。
82. コシワ 五段活用動詞コシウの未然形。こしらえる。コシラウの変  
化に、参考コシウの形半コシル東北地方コソー 茨城
83. ワラスグリ わら選り 藁の不要な葉の部分をどを半又は半の形を  
しな木製の用具で除き、細工に適するようにすぐること。また1寸  
×3寸くらいの長四角の板の面に釘の足をブラシ状に並べたもので  
わらをかいてすぐること。
84. ワラハダキ ワラハタキの变化。ジョーバイシという栗用の石の上で  
藁をうって細工に適する軟かさにすること、ここでは水車の幹でわ  
らを打つ語なのである。
85. 水車による藁打ちの見張り。
86. コガコガ こまごまとした仕事、例えば蕎麦ことうせん送り・団子の  
粉ひきなどの細かい仕事などの「ダイセン」(大要・第要、主要とそ  
の意)であつたと言う。
87. アレシタ アレシテイタの变化、働いていた意か。
88. スッデモ 水車でもソレデモフソッデモフスッデモ
89. ゴロスケノオジーサン 五郎助は屋号。読者Aを指す。

90. オヤム 地動詞 終える。

91. カコエ カコイ の変化 困い、雪囲い。

92. オシマエニ オシバエニ の感じもする、オシマイニ の変化、結局と  
か極端なことを言えばのような意味で、あとの「ヤクモク・エリゴダ  
ンゴ」とを省略する。

93. ヤクモク 焼き餅。餅を焼いたものでほろい。エゴモク・エリゴダ  
ンゴともある。エリゴは屑米のこと、各割屑米などと粉に混ぜ、こね  
てまるめ、中に味噌・小豆などを入れて焼いて食べる食物。

94. コネテ ヤクモク をコネテ 作るのは主婦の毎朝の仕事であるのと、  
男がしきも前もってこねておくなどあるといことを誇張しておもし  
うく言っている。

95. 〜 の部分に「と云うな」のような語が入れば論理的なのだが、著  
者が重なったためききとれない。語者は「テガンネ」（というのに  
の意）と云うなとするが聴聞である。

96. ソンダ そんな。I の通ス4音程。

97. エンデ オラエンデは「私の所」くらいの意らしい。わか家<sup>と主</sup>をし、そ  
の近辺もふくむ感じがする。これに似る語オラアタリ・オラッタリ・  
オラタリがあり、これは反対に近隣を主にしそれにわか家も含ませ  
る言い方なのである。但しここでは語者が自分の夫をさしている。  
尾張で近隣をインデと言ったといい、秋田県北部では戸主をイデ、  
津軽地方では鬼家の亭主を指してエテと言ったという。それらと類  
似があるが、餅屋では「オラエンデー」（あらえんでは）とも言ひ、  
要するに語意は不明である。

98. ラレ 夫のことを語りのに尊敬の助動詞を使うのは栃崎市地方の一  
般の傾向である。

99. ダゲントリ 日雇の仕事 手伝いをする人、駆篭取り、ヒリョートリなど。

100. ウケシゴト 屋外の仕事、社し家の内側の仕事。

101. アタマエ 「アウノ」というような音がこの前にきこえる。語者は「ソ  
ノ アタマエ」と言ったと言う。「その上に」の意である。

102. キミ ヤメ の変化、肌理である。

103. アカギリ 原 中 鉦城 別 アギリ・アギレ。南魚沼 別 湯沢 別 アカギレ。  
。 社田 崇、千景 崇、橋井 崇・純州、島根 崇で アカギリ。
104. サワサリト 新 詞 ぞくぞくと。悪戯のするさま。
105. オマエサント お前様よ。「お存心」の怪親から祐希の家庭とさ
106. <sup>す</sup>アング 「ガング」の变化。ので、
107. オラニコ オラドコの変化、私の所、私の家。
108. エーターが簡単に水と揚げてくれる意。

### 3. 養 蚕

話し手

(田舎者) (氏 名) (性) (生年)

A 高橋 真 男 大正7年

B 高橋マツノ 女 大正元年

C 高橋初 枝 女 大正2年

D(田舎) 高橋 春 宣 男 大正15年

D ハイ リーセヤ ソーシキノ ホーワ マー ソンナ テードニシテ。  
はい、それでは 葬式の おは まあ そんな 程度にしてい。

ソレカラ マー アノ エマワ アンマリ ナクナッタンデスガ  
それから まあ あの 今は あまり 無くなつたのですが、

ムカシワ アノ ヨーサンガ ヒジョーニ マー ハヤッタンデスガ  
昔は あの 養蚕が 非常に まあ 流行したのですが

エチバン ヨーサンガ オラ ホーデ サカンナ コロラヤ<sup>(1)</sup> アラ  
ー 蚕 養 蚕が 私どもの方で 盛んな 頃といえは あれは

エツゴロデシタカネー。

いつ 頃でしぬかねえ。

A ヨーサンノ イチバン サカンナ ジブンテ<sup>(2)</sup> ヤッポシ<sup>(3)</sup> モチローワ  
養蚕の いちばん 盛んな 時分といえは やはり、餅糰は

ワリヤエニ ヨーサン オソカッタガン オアカネー。<sup>(4)</sup> (C オソカッタデスネー。  
割合に 養蚕は 遅からぬのでは ないかねえ。 (遅からぬですええ。)

ホカムラデ<sup>(5)</sup> エッペー (C ソーゾー。 ) ツクッテ アッタドモ  
外の集落で いっぱい (そうぞう。 ) 作って あつたけれど、 (C

モチロージャー ワリアエニ…。 ) アノ ヨーテ アッタドモ<sup>(5)</sup> ちう  
餅糰では 割合に ……、 ) あの 飼って あつたけれど、 私どもの

ホー アンマリ カワレカッタンサネ。<sup>(6)</sup> デモ センゴダッタローカーネー<sup>(7)</sup>  
 方は あまり 飼わなからぬのですよ。 でも 戦後であつたろうかねえ、

エチダエニ<sup>(8)</sup> ツコ<sup>(9)</sup>アタノワネー。  
 いちどに 飼つたのはねえ。 ( センゴデシヨ<sup>(9)</sup>ーネー。 ) ねえ。  
 戦後でしようねえ。

( リアデスコテ<sup>(10)</sup>。 ) センゼンモ リア エッパ<sup>(10)</sup>ア  
 そろですさ。 戦前も そんなに いっぱい ( チッタ<sup>(10)</sup> )  
 ずしは

~~~~ ハー。 ) カッタ<sup>(11)</sup> シトワ アッタドモサ<sup>(11)</sup>ーネ。 ダドモ マー  
 はい。 飼つた 人は あつたけれどさ。 しかし、まあ

ブラクノ カズトシテ シイクスル シトノ カズトシテ エッパ<sup>(11)</sup>ン  
 島落の 数として、 飼つる 人の 数として いっぱいに

タッタノワ センゴダッタコテネ。 ( センゴデスコテ<sup>(12)</sup>ーネ。 ) ハー。  
 なつたのは 戦後であつたさね。 戦後ですさねえ。 はい。

センゼンワ リア<sup>(12)</sup> アノ アー ブラクデモ ゴニンヤ (12) ニンノ  
 戦前は そう あの ああ 島落でい みんなの

シェウワ カーテ<sup>(13)</sup> アッタドモ アー<sup>(14)</sup> ミンナワ カワ<sup>(15)</sup>ンネアカッタネー<sup>(15)</sup>  
 衆は 飼つて あつたけれど あんまり みんなは 飼つたあつたねえ。

ハー。

はい。

C カワ<sup>(16)</sup>ンネアカッタヨ<sup>(16)</sup>ーデスネー。  
 飼われなかつたようですねえ。

A アノー オラガ<sup>(16)</sup> マー アッデスコテ アノー オー ジエニサンカ  
 あのう 私とかが まあ あれですよ あのう おう ナニニカ

マー オマエサンガタ オレヨリワ マー トシガ<sup>(17)</sup> エッパ<sup>(17)</sup>ダスケ  
 まあ あなを方は 私よりは まあ 年が 多いから

アッタドモ アノー モトリ ホレ ガッコー オエレバ スグ  
 あつたけれど あの 昔は ほれ 学校が 終つたあ すぐに

エトシキダナンテ<sup>(17)</sup> ミンナ マー エキマシタコラネ。 エ  
糸引だ<sup>な</sup>ビヒ<sup>て</sup> みんな まあ 行きま<sup>し</sup>たさ。

ロクネンセーガ オエレ… エマノ マー… (C リアーゾアー。) モトリ  
六年生か 終れ… 今の まあ… (そうそう。) 著は

アノ ジンジョ<sup>(18)</sup> ショアーガッショアー オエレバ オエタ…。ソノ ジブンワ  
あの 藤巻の学校か 終れは 終った…。その 時分は

ンダドモ オラ ホーワ アンマリ カエユワ (B ヰシマセンカッテ。)   
しかし 私どの 方は あまり 産は (…しませんでした。)

カワソ<sup>(19)</sup>カッタ ネアカネー。 (C カワソカッタデス…。) ヨーサンワネー。  
飼わな<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>ないか<sup>ねえ</sup>。 (か<sup>わ</sup>な<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>です。 養<sup>子</sup>は<sup>ねえ</sup>。

(C ハー。 ) マー カーテタ シトモ アッタドモ リアー<sup>(20)</sup> サカ<sup>ン</sup>ダ  
はい。 まあ 飼<sup>っ</sup>ていた 人も あ<sup>っ</sup>た<sup>け</sup>れ<sup>ど</sup>も 先<sup>ず</sup> 盛<sup>ん</sup>では

ネアカ<sup>(21)</sup>。 センゴ<sup>(22)</sup>ラッタ ネアカ エチバン エッパ カタノワネ コノ  
な<sup>か</sup>た。 戦<sup>後</sup>であ<sup>っ</sup>た<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>ないか、いちば<sup>ん</sup> 左<sup>く</sup>さん 飼<sup>っ</sup>た<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>い<sup>ね</sup>、この

ブラクデワネー。 (C エチバン カータノワ センゴ<sup>(23)</sup>ジャ  
集<sup>落</sup>では<sup>ねえ</sup>。 いちば<sup>ん</sup> 飼<sup>っ</sup>た<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>い<sup>ね</sup> 戦<sup>後</sup>では

ネーデスカ ハー。 ) ハー。  
ない<sup>で</sup>すか はい。 はい。

B オラミ<sup>(24)</sup>テアン ラガ<sup>ン</sup>ネ<sup>(25)</sup> オアテモ カエコ カーテ…。  
私の家のように 人<sup>々</sup>か なく<sup>て</sup>も 産<sup>を</sup> 飼<sup>っ</sup>て…。

A ソアーソアー ホトンド<sup>(26)</sup> アノ ノギナミニ カエマシタコラ ハー。  
そうそう、 ほとん<sup>ど</sup> あり 軒並みに 飼<sup>い</sup>ま<sup>し</sup>た<sup>さ</sup>、 はい。

B ソレデ<sup>(27)</sup> コドモニモ マタ ボンノ スカート カーテ  
それで 子供<sup>に</sup>も ま<sup>だ</sup> お金<sup>の</sup> スカートを 買<sup>っ</sup>て

ヤルド<sup>(28)</sup>ナンカッテ コドモニ テツダ<sup>(29)</sup>エ サシテサ。  
や<sup>る</sup>ぞ<sup>と</sup>な<sup>ら</sup>い<sup>と</sup>言<sup>っ</sup>て 子供<sup>に</sup> 手<sup>伝</sup>い<sup>を</sup> させ<sup>て</sup>さ。

A シカシ アレ エリョーシナガ フソクシタ ソア ユー クワンケーモ  
しかし あれは 衣料品が 不足した そう いう 壁 際

アッタシネー。 ( B ソアデスネー。 ) ソレカラ ホカニ ソア  
あったねえ。 ( そうですねえ。 ) それから 外に そう

タエシタ シューニエーガ ナクテ ワリアエニ アノ カイユガ ネガ  
ないしな 収入が なくて、割合に あの 番が 値が

エーカッタスケ ソッヂ マー ミンナ カータ クモ<sup>(24)</sup> ダエブ エエタシネ。<sup>(25)</sup>  
良かったから それで まあ みんな 飼った、桑も だいたい 植えたね。

( C ソアデスネー。 ) ハー。 エマノ アノ ランジョアマノ<sup>(26)</sup>  
( そうですねえ。 ) はい。 今の あの 元上山の

ボクナシカ カエコンシタノモ ソノ ジブン ( C ソノ ジブンデシタネ。 )  
基地などと 開墾したもの その 時分、 ( その 時分でしたね。 )

ソノ ジブンデ…… ハー。  
その 時分で…… はい。

D ハーハー ナルホドネー。  
はい はい、さきほどねえ。

A センゴウ ホトンド マ ノキナミニ カータンダ ネーカ。  
戦後は ほとんど まあ 軒並に 飼ったのではないかな。

B ソア ユー ジタイモ<sup>(27)</sup> アリマシタネー。  
そう いう 時代も ありましたねえ。

A ハー。  
はい。

C カワンネア ショナシカ ホトンド ネアッタ。  
飼われた 衆など ほとんど 無かった。

D オラ マー カエマシタシサ。 ( A ソアデスネー。 ) マー  
私の家は まあ 飼いましたさ。 ( そうですねえ。 ) まあ



ザラダッタノ一。

さらだつたねえ。

- A ハー ソッデ アノ一 ムカシワ ナッデモ カッデモ<sup>(28)</sup> アノ コー  
はい、それで あのう 昔は なんでも かんでも あの こう
- タナ コシヨア一<sup>(29)</sup> ホア一シテ ゼンブ アノ エケメアズツ  
棚と こしらえて、 そうして 全部 あの 一枚ずつ
- カゴン<sup>(30)</sup> ナカエ (C ソアデス。 ) エッテ<sup>(31)</sup> ソア一シテ シタ ケア一<sup>(32)</sup>  
巻の 中に ( そろです ) 入れて、 そうして 下を 替えて
- クッテ<sup>(33)</sup> カ一タモ ソノゴ オメア アッデス コア一 キゴト  
呉れて 飼ったけれど その後 あんな あれですよ 木ごと
- クセラ レルナンテラ ジョアソア一キョア一エク (C ハー。 ) アノ  
食わせられるなどと言って 糸 桑 ×××××× ( はい ) あの
- シイクナンテラ ハヤッテ キタスケア コンド カエヤスー ナッタテ  
飼育などと言って はやて 来々から こんど 飼いやすく なつたという
- コトモ アッタンデスネ。 (C アッタンデシヨア一ネ。 ) ハー。 ソア一シテ  
これと あんなでね。 ( あんなでしようね。 ) はい。 そうして
- ムカシワ ソレ アノ マブシオ コア ワラデモッテ (C ワラテ  
昔は それ あの 族を こう 藁で ( わらで
- オッタデス ハー。 ) コア一コア一コア一コア一<sup>(34)</sup> オッタ一ネ一<sup>(35)</sup> (C  
折ったです、はい。 ) こうこうこうこうヒ 織ったのをねえ (
- ソア一ソア一。 ) コア一 オショッ<sup>(36)</sup>タバツカミ<sup>(37)</sup>テアン (C ハー。 ) コア一 シバツテ  
そうそう。 ) こ 折っただけみたい ( はい。 ) こう しはって、
- ソレオ コア一 ヒロゲタ<sup>(38)</sup>ンダスガネ (C ハワシタ。 ) エマ ソレ  
それを こう 広げたものであつたね。 ( 違わせね。 ) 今は それと
- アノ カエリ<sup>(39)</sup>マブシダナンテラ アンガン モン デキラネ。  
あの 改良 おぼしななどと言って、 あんなものが できてね。

C ソレカラ ホレ テデ コー シルガンカ<sup>(40)</sup> ハヤッタコネー。(A  
 それから ほれ 手で こう するの か はやりました。

アーアー。) ヤマン ナッタノカ<sup>(41)</sup> (A ヤマン ナッタノネー。  
 ああ ああ。) 山に なったのか。 山に なったのかねえ。

オラガ ソッヂ ヤーノ<sup>(42)</sup> シタンデススケ (A アーアーアー。  
 私ども をれで しなのですから、 ああ ああ ああ。

アー アレ アレ エツゴロダ アレ クグリー コノー カワシモ<sup>(43)</sup>  
 ああ あれ あれは いつ頃ぞ。 あれは 隧道、 この 川下の

クグリーノ<sup>(44)</sup> アイタトシヤ アケタ コロ アッデスエネ ソノ スダマブシカ  
 隧道の 明い石(年は) 明けな 頃 あれですよ、 その 麓か

ハヤッテ キタンデスエネ。  
 はやて 来たのですよ。

A ソー セバ<sup>(45)</sup> ソラー センゾーチュードーネ。  
 そう すれば" それは 戦争中ですよ。

C センゾーチューダカネ。  
 戦争中ですよ。

A オラ エネーカッタモン ～ コロ…。 ジューゴロクネン…。  
 私は 居なかつたから その頃。 十五六年…。

C ハー。  
 はい。

D カワシモノ アコダケラ<sup>(46)</sup> デンザブローノ オヤジヤ ヤゼンヤ  
 川下の あそこなら 伝三郎の 親爺や 弥左衛門や

エノスケノ シュカ ホラッタンダ～ オラガ コドモン ドキ…。  
 伊之助の 衆か 振られたのぞ、 私どもの 子供の 時に。

A ハー。  
 はい。

C ハー ソー セバ センジ...  
はい そうすれば 戦争...

A タッカ <sup>(47)</sup> ジュ  
そこから +...

D センソアーチューダ  
戦争中。

C センソアーチューデスネ、(A ジューシゴネンダエネ。) ソノ コノ  
戦争中ですね。 十四五年ですよ。 その頃

エッペアー ハヤッタ。 ソレ メアーチャー ホレネ (A フン。) マブシワ  
ひどく はやっさ。 それ 前には ほらね (うん。) まぶしは

ヨゼンデ <sup>(48)</sup> アノ (A フン。) ハリカネ <sup>(49)</sup> マエタノガ (A ハーハーハー。)  
与左衛門で あの (うん。) 針金を 巻いてのか (はいはいはい)

ハヤッタコテ。 ソレカラ コンダ コノ カワシモノ アノ クグリノ  
はやっささ。 それから こんどは この 川下の あのう 隧道の

アノ トシー アッデスエネ ドッカガ マー アレダ ハアー ジッキ  
明く 毎に あれてすよ。 どちらか まあ あれさ、もう 直に

ツキソアーダテ <sup>(50)</sup> トキ マエバン マエバン オレガ アノ ソノ  
着せうだという 時、 毎晩 毎晩 私か あの その

マブシオ アノ シュノ アガッテ コラレルマデ ジュニジ ジブシマデ  
まぶしを あの 衆の 上がるて 来られるまで 十二時 時分まで

ヨナベニ ソノ シタコトガ アルンデス。 (A ハーン。) ハー。  
夜毎に その しることか あるのです。 (ふうん。) はい。

A ソー セバ センソアーチューダノ。 (C センソアーチューデスカ。) アー。  
そうすれば 戦争中ねえ。 (戦争中ですか。) ああ、

ジュシゴネンダノ。

十四五年だねえ。

C ソノ コロカラ マー カイコガ エッペーダッタナダ ネアンデショアカネ。  
その 頃 から まあ 喬か いっぱいいっぱいなのではないでしょうかね。

A アー ソーダネ。 ダエタエ センソーカラ センゴネ カケテ  
ああ そうだね。 大体 戦争から 戦後に かけて  
カエコ エッペー カウヨーネ ナッタナダネ。 (Cハー。) ハー。  
喬と いっぱい 飼うように なったのだね。 (はい。) はい。

C ソノ コロ オレガ オラ ホカニヤ (笑) オボエテ ネアンダドモ  
その 頃 私か、私は 外には 覚えて 居ないのだからね。

(Aハーハー。) ソノ カワシモノ シューガ アカッテ コラレル  
(はいはい。) その、川下の 衆が 上がって 来られる、

クボタノ<sup>(51)</sup> オジジガタガ オヤカタデ (Aハー。) アカッテ<sup>(52)</sup> コラレル  
久保田の お爺さん方が 親方で (はい。) 上がって 来られる

トギ オレガ アノ シューガ コラレルマデ ソノ マブシオ  
時、私か あの 衆が 来られるまで その まぶしと

オッテ (Aハー。) ホーシテ シタガンガ<sup>(53)</sup> ヨー オボエガ  
折って (はい。) そうして しなこじか よく 記憶して

アリマスネ。

いませよ。

A クボタノ アレダコテ エマノ シカノスケサノ オジーサンガ  
久保田の あれねさ。 今の 鹿之田さんの お爺さんか

(Cハー オジーサンガ オヤカタデ。) アレダコテ。 アノ カ  
(はい、お爺さんか 親方で。) あれねさ。 あの

カイコモ<sup>(54)</sup> オヤカタダッタコテネー。 (Cハー(笑) オヤカタデ  
喬も 親方でしたさ。 (はい。 親方で

アツタネー。<sup>(55)</sup> (D~~~~) オラモ マー アノ シトカラ  
したねえ。) (私も まあ あの 人から

カイコテ モン ハジメテ ~~~ ナハアータンダ。ハー。  
蚕というものを 始めて 飼ったのを。 はい。

B ソレデ<sup>(56)</sup> ケートモ カエナクラサー (A ソアソアソア。 ) ソレデ<sup>(57)</sup> ソノ  
それで 糸糸も 買えなくてさあ、 ( そうそうそう。 ) それで その  
マータノ<sup>(58)</sup> チョッキオ コシラエタリ<sup>(59)</sup> (Aアソアソアソア。 ) スルノデ<sup>(60)</sup>  
真綿の チョッキと こしらえたり ( ああ そうそうそう。 ) するので、

ワタシナンカモ カータンデスエネ。  
わたしなども 飼ったのですよ。

C ソアタダ。  
そうだけ。

A ヤー ダカラネー オレガ ハジメテサー アノ カイコ カテサネ  
やあ だからね、 私が 始めてさ あの 蚕を 飼ってね、

ホーテ アノ マー アノ モトワ ホレ デンザブにアデ  
そして あの まあ、あの 昔は ほれ 伝三郎で

カータコラ トジョリガネ。 (C ソアソアソア。 ) ホーテ カイコ  
飼ったさ、 年寄りかね。 ( そう そう そう。 ) そして 蚕を

コータラ ホレ エチレー ニレー サンレート アノ キン  
飼ったら、 ほれ 一 歳半 二 歳半 三 歳半と あの 衣

ヌクコラネー<sup>(59)</sup> (C ハー。 ) アノ ドキニ カワオ キン ヌク  
脱ぐよね。 ( はい。 ) あの 時に 皮を、 衣を 脱ぐ

ドキニ アノ エトー コア ダシテサーネ ソアシテ コア アッデスコテ  
時に あの 糸を こう 巻いてね、 そうして こう あれですよ

ソコラノ マー アノ アッデスコテ<sup>(60)</sup> アノー クワノハヤ<sup>(61)</sup> ソレカラ  
そこの まあ あの あれですさ あのう 桑の葉や それから

アノ エダニ コア カケテ ソレデアキヌ ヌクンダコラ。  
あの 枝に こう かけて それでこう 衣を 脱ぐのさ。

ソレオ オレ カイコナンテ ハジメテ コーター<sup>(62)</sup> シラン  
それを 私は 着なんて 始めて 銅つんか 知らない

モンダモンネー<sup>(63)</sup> ヴァーシテ コー ヤスミーニ カカッタ ヤ  
もんねからねえ。 そうして こう 休みに かかったら、<sup>x</sup>

オラ ヤスム ユーシダネー アノ (ヒヴァーヴァーヴァー。 ) ヤスミニ  
おれと 妹と 言うのねえ、 あの そう そう そう。 休みに

カカッタ コー エト ダシタンダ。 ターマゲケモアテ (ヒ笑)  
かかったら こう 糸を 出さのね。 ねえけして

ホエカラ リノ<sup>~~~~~</sup> デンザブローエ リレ カエコ モッテ エッテサ  
それから その 伝三郎へ それを 着と 持って行ってさ、

「オジジ オラ ロコノ<sup>(64)</sup> カエコワ エナ<sup>(65)</sup> モンダエネ」テ...「ナシター」<sup>(66)</sup>  
「おじいさん 私の 所の 着は 異昔 もんですよ」といって、「どうして」

テ ユースケ 「エマッカラ ハーネ アガルガシヤ ナンレヤ<sup>(67)</sup>  
と 言うから、 「今から もね 上着するのであるかなんぞか、

コンガンターセーノガ<sup>(68)</sup> エト ダシタエネー」ッたら ホーシタラ  
こんなに 小さいのか 糸を 出さしよ」と言ったら、 そうしたら

(笑) ワローテラ<sup>~~~~~</sup>レルノサー。 ホッテ 「ドー シタンダローネ  
笑っていられるのさ。 それで「 どう (さのね) だろうね、

コラ ドーカ タッタンダローカネ コンガンナッテ コンガンターセー  
これは どうか なつたのねだろうかね、 こんなに なって、こんな 小さい

ナリ シテ エマッカラ エト ハキダシタガ アレ アノ ニワヤスミ<sup>(69)</sup>  
なりをして 今から 糸を 吐きはじめたか、 あれ あの にわやみと

シテ オキテ ヴァーシテ ソレカラ エト ハクンダター アノ  
して 起きて そうして それから 糸を 吐くのね」といって、 あの

ジッコー ナルガンダガンネ<sup>(70)</sup> リレー スキトーリモ シネアーガンネ  
大きく 出るのねのに、 それを (偉か) 透き通る (ないのに

コンガソ ケーセー ウチニ エト ハエタエネー<sup>(71)</sup> ヲッ<sup>ツ</sup>タラ ソーシタラ  
こんなに 小さい うちに 糸を 吐きまはよと 吐いたら そうなら、

ワローラ ラッタツケヤ 「バーカ ソーラ ソーエ<sup>(71)</sup> モントアー。  
笑って いられぬが、 「ばか それは そういふものぞ」よ。

カエコテ モンワノー (笑) (C笑) ヤスム<sup>(72)</sup> ゴッ<sup>ツ</sup>トラネ カワ アノ  
喬という せいのねえ。 休むごときに 皮を ぬくの

キンヌカンケ ナランヌク<sup>(73)</sup> (Cソーソー。) ソーシテ ソーエヨニ<sup>(74)</sup>  
衣を 脱ぐものぞ「よ」<sup>(73)</sup> ならないではないか、(そうそう) そうして そういふように

アノ エトデ ソレ アノ ヒツカケラテ (C~~~~) ソーシテ  
あの 糸で それを あの ひっかけておいて そうして

ヌク モントアー。」テテ エヤー ワラータ コト アッ<sup>ツ</sup>タケ。(笑)  
脱ぐものぞ「よ」<sup>(73)</sup> といって、 いやあ 笑った ことか あったけ。

(C笑) ハジメテ カエココエシタラ<sup>(75)</sup> オメサ<sup>ン</sup>…。 (笑) (C笑)  
初めて 養育をしたら あんた……。

B ハー ソラ ハジメテドアー。 (A キンヌグドコ……。) (C  
へえ、 それは 始めてぞ「よ」。

ソング<sup>(76)</sup> コト……。) (A ハー。) シリマセン<sup>(77)</sup>カ、タエネ。 カエコ  
そんな こと……。 (はい。) 知らなからなです。 喬と

チッター カータドモ ムチューデ カータタスケ (Aハー。) ソングネ  
少しは 飼ってられども 夢中で 飼っていたから (はい) そんなに

エト ダシテ キンヌグナンテ コト シリマセン<sup>(77)</sup>カ、タエネ。  
糸を 出して 衣を 脱ぐ「なんと言」<sup>(77)</sup> これは 知りませんでしたよ。

A ソレネー オラ ハジメ タマゲマシタエネ。 (D ハー。) タマゲテ  
それをぬえ 糸は 始末 ならせよ。 (はい。) ならせて

ホーテ ランザブ<sup>(78)</sup>にアーエ モッテ エッ<sup>ツ</sup>。 (D ハー。) 「ミテクダサイ  
そうして 何三郎へ 持って行った。 (はい。) 「みてくれさい、

オジジ「ッッタラ オジジ ワハッテバツカ エアン。<sup>(78)</sup> (D ハー。) (C ンー。  
おじいさん」と言うなら おじいさんは 笑ってはかり いるのだ。 はい。 うん。

アレ アタ<sup>(79)</sup> ヤッハシ アノ ホレ キン スクニ ソアテ アノ  
あれ やはり あの ほら 衣 脱ぐのに、 そうして あの

(C シカケガ オアケラ…。) シカケガ オアケラ スカンオアカラサ  
は掛けか なければ…。 は掛けか なければ 脱がれないからさ。

(C ソア ソア。) ハー。 ソア エーバオー アノ ソレカラ  
そう そう。 はい。 そう いえねえ、 あの それから

オレガ キョ ツケテ ミテ エタガ アノ アー サンレー ヨンレーン  
わたしは 氣をつけて 見て いるか、 あの あみ 三 畚 四 畚に

ナッテ テッコア ナッテ エルト アエラー<sup>(80)</sup> スギカケタガ<sup>(81)</sup> ヤタラニ  
なつて 大きく なつて いると 彼等は 脱ぎかけのを やたらに

ウゴカストユート<sup>(82)</sup> スゲレーオアノガ<sup>(83)</sup> アルンデスヨ ハー。  
動かすと 脱がれないのか あるんですよ、 はい。

B ンー。  
うん。

C ソア ソア。 ホアテ<sup>(84)</sup> ヤッハシ アレ コア ムイテ クッタタッ  
そう そう。 そうして やはり あれを こうして むいて やつても

ダメダ~~~~サ~~~~。  
ダメだ~~~~。

A ダメダ ハー。 (D ンー。) ヤッハシ アレ<sup>(85)</sup> (C アル テード  
ダメだ、 はい。 うん。 やはり あれは、 ある 程度

シキガ<sup>(85)</sup> アッテ…。 ) ヤツラ コア ヒッカカッテ ソアシテ ソノ  
湿気か あつて…。 奴等は こう ひっかかっている そうして その

ズート ソノ スクヨーニ ナッテルンダ。 ソレオ オラガ ソノ  
ずうと その 脱ぐように なっているのだ。 それを われどもか その



エ ヤスンデ キヌ ヌキハジメルガン コー ウゴカストユート  
え 休んで 衣と 脱ぎはじめるのを こう 動かすと。

ソノ エトガ キレチャウスケアネ シカケ アッタ ドコ キルスケア  
その 糸が 切れてしまふから、 仕掛の あつた 所が 切れるから。

ヌケレーネアノガ アルンデスヨ ハー ハー。  
脱がれないのか あみんでは、 はい はい。

C ソーデスネ。  
そうですね。

D ハー セッパリ シゼンガ エンデスネー。  
はい、やはり 自然 なのがいいのですねえ。

A マー アノ センゴ アッテ カイコデモッテ ダイブ ミンナガ マー  
まあ あの 戦後 あれで 倉で 大分 みんなが まあ

アレ フクギョアデ タスカッタコネ ハー。(C ソーソア。)(B  
あれ 副業で 助かりましたよね、 はい。(そうそう。)

「ソーデスネ。」 ハー。 ナンタッテ ホカニ オメアサン カネ トル  
そうですね、) はい、 なんと云っても 外に あんた 金を 取る

ドコガ <sup>(86)</sup>ネア<sup>ン</sup>ダ<sup>ン</sup>ガ<sup>ン</sup> ハー。  
所が 無いのから、 はい。

C ホアテ ワリエア<sup>(87)</sup>= アノ コロワ ソア<sup>(87)</sup> ネダンモ エカッタ<sup>(88)</sup>  
そして わりあいに あの 頃は そら 値段も よからぬ。

A ネダンモ エカッタ ハー。 ネダン エカッタ。 ホアテ コメワ ホレ  
値段も よからぬ はい。 値段が よからぬ。 そして 米は それ

ミンナ ホレ アノ ダセダセダセテ<sup>(89)</sup> ミンナ <sup>(90)</sup>ダサ<sup>レ</sup>シソア<sup>ー</sup>  
みんな それ あの ぢせぢせぢせと云って みんな ぢせられるしさ。

ホアテ ネダンワ ホレ セーフデモッテ キメラ エラレレバ<sup>(90)</sup> オメア<sup>ー</sup>  
そして 値段は それ 既で 決めて いられるから あんた

ゼン エッハー モラワンネアシサエ。 ダカラ アレダ マー カエコ  
金と 女くんは 驚かせませんしね。 だから あれで、 まあ 奮と

カーテ コズカエ トリー…。 (C ソーデスネ。) エマミテアーネ  
飼って 小遣い 取り……。 そうですね。 今みそいけ

ホカニ コーバエ エクトカネー (C アレガ ネアカッタデススケネー。  
外に 工場へ 行くとかねえ、 それが ありませんでしたからねえ。

) ホカニー コーキョー ジキョーダッテ ネアカッタシソアー ハー。  
外に 公共事業だつて 無かったし、 はい。

(D ナルホドネー。) デー マー ブラック ヨケー アレ カエコ  
なるほどねえ。) それで まあ 炭炭が 一層 あれと 奮と

カーダンダ オアーロア カネー。 (D ナル……。) ダカラ アレデスコテー  
飼うのでは ないだろうかねえ。 なるほど、 だから あれですよ、

マー アノ ミンナ アレダコラー クワ<sup>(91)</sup> エウエタリサー ソレカラ  
まあ あの みんな あれでさ 祭と 植えたりさ、 それから

アノ コンダ タナ コショアタリ マブシ コショアタリ マー  
あの こんどは 棚と こしらえたり、 まぶしと こしらえたり、 まあ

オラ カエコナンテ マー カエコテ… オラ トコモ オレノ  
私もは 奮とど、… まあ 奮と言えど 私の 分も 私の

マゴジサンノ アノソアー アノ オトートノ シトワサ マー  
祖父の ちのそれ ちの 弟、 人はさ、 まあ

ヨアサンノ ギジュツインダタスケ マー オキナワマデ エッテソアー  
養父の 技術員だ、だから まあ 沖縄まで 行ってさ、

カエコ ソノ ジブン カワタテ アンダドモ (C ンー。) ソレゴ  
奮と その 時分に 岡本武彦ということだけれども、 (うん。) その後

オラウケン ゼンゼン カータ コタ ネアンデスモン ハー。  
私の家は 全然 飼、え ことは 無いのですから はい。

(C ソーデスネー。) ソレ マー ハジメテ マー カエコ コータ。  
そうですねえ。 それを まあ はじめて まあ 蚕と 飼った。

モットン マー ホレ センゾーネ エッテ キラ タンボ" コント"  
もつとも まあ ほれ 戦争に 行って 来て 田圃か こんど"

チットバ"カン ナッタジ カエコデモ カワシケラ シゴトモ ネースケア  
少しばかりに なったし、 蚕でも 飼わなければ 仕事も 無いから

シタドモ ソッテ<sup>(92)</sup> ハジメテ オラ マー カエコラ モノモ カーテ  
やねければ、 それで はじめて 私は まあ 蚕という ものも 飼って

ミタンダ"ガネ ハー。

みだのたがね はい。

D ハー ~~~~~。  
はい。

B オジーサンノ ダイニヤ カワッシャランカッタンダナ。  
おじいさんの 代には お飼いにならなかつたな。

A ゼンゼン カワシネア<sup>(93)</sup> ハー。  
全然 飼われない、 はい。

C オジーサンノ ダイニヤ カワッシャネア。  
おじいさんの 代には お飼いにならない。

A タンボ" イッポ"ンダ" ハー。  
田圃 -本と" はい。

C テガ" ネカッタモンネ。  
人々か 無かつたものね。

A ソレデ" ウカワダ"タッテ アノ ジブ"ン カエコノ シューニエ"テ  
それで、 親りだつて あの 時分 蚕の 収入という  
モンワ サカヤモン<sup>(94)</sup> デカセギ"ノ<sup>(95)</sup> シューニエ"ヨリ ヨケ"ダッタノカネ  
それは 酒屋者、 虫稼ぎ" 収入より 多からなかつたかね、

アノ ジブンデ。 コメニ ツグノワ アン ドキャ スミダッタローカ  
あの 時分で。 米に 次ぐね、よ あの 時は 木炭であつたろうか。

ソレカラ カエコダッタローカ デカセギダッタローカ。  
それから 戻つたろうか、 出稼ぎであつたろうか。

D ソーダノ。 ミンナ ~~~~~ ダイブ ~~~~~。  
そうねえ。 みんな 大分

A オラ ワスレタナー。 オンナジダッタカナー。 ソートアーナ アノ  
私は 忘れねえ。 同じだったか。 相当な あの

シューシューノ エケ シメッタデスエネ ハー。  
収入の 位置を 占めていたのです。 はい。

C ソーソー。  
そう。

B シメッタヨーデスネ スミダカ カイコダカ。  
占めていた ようですね、 木炭であるか 炭であるか。

A ~~~~~ ネー。  
ねえ。

B ハー。  
はい。

A ダモ<sup>(96)</sup> ギジュツインダッタ チヤントネ アノ シトリズツ  
しかし、 競技会<sup>テニ</sup>で ちゃんと あの ひとりずつ

エラッタシサ。  
居られたのさ。

B ダモ スミヨリ カイコノ ジダイモ アリマシタコテ。(Aハー)  
しかし、 木炭よりも 炭 時代も ありました。(はい。)

センソアーテ ミンナ デラ エラス<sup>(97)</sup> タ ドキャ (A カイコノ ホーガ"  
戦争で みんな 出て いられた 時は、 炭の 方が

ヨケーダッタカ シラソ。<sup>(98)</sup> カエコノ ホーガ ヨケーデシタガネ。  
 多かたかしら。 蚕の 方が 多かたですかね。

A ソレガ エマ ホトンド ネー バッタスケネ カイコナンカ。 (C  
 それが 今は ほとんど 無く なったからね、 蚕などは。

ハー。) ウカワノ カーテルナンカ ホシノ ニサンニンデシヨア。  
 はい。) 鶴川の 飼っている(人)など ほんい ニ三人でしょう。

D ソーデスネ。  
 そうですね。

C ソーデスネー。 シモノ シューバッカダ ネーデスカ。  
 そうですねえ。 下町の 人々は"バリ"では ないですか。

A ソーソーソー。  
 そうそうそう。

D シー。  
 うん。

A マー カエコト ウシダコラー。 アノ キューニ タエタノワ  
 まあ 蚕と 年ださ。 あの 急に 絶えぬのは

カチクダコラー。  
 家畜ださ。

D ソーデスネー。  
 そうですねえ。

## 注記

1. テヤ と言えばの變化か、と言いやの變化か。
2. テ と言えばが極端に短くなった。
3. ヤ、バシ 副詞 岸下に広く分布する。山羽部山羽部の人々はヤ、バシのような発音とする。岸下には「ヤ、バ」もある。りの脱落であろう。
4. ガンネーカネ 準体助詞ガン(Iの注6を参照)に形容詞ナイが直接接した。間にはジャ・ダを入れて言うこともある。のではなにかの意。
5. テアッタ。ア有った。接続助詞テ+ア動詞+過去の助動詞。過去のことを確認断定する気持である。「銅っを」「銅っをのであつた」とも話すが、これは正しいか、直話してよい。この表現は南魚沼郡湯沢町にもある。これをちがめて「タッタ」ということは餅糠をちがめとして西蔵原部その他の中部地方にある。タッタは富山県、長野県、愛知県、東北地方にもあり、普通過去完了の助動詞と説明されている。テアッタとちがひと確認断定の外に回想の気持が加わる。
6. サ 確認の気持をこめて新しかける間投助詞。同輩目下に対して用いる。Iの113参照
7. タッタ テアッタの變化。5参照。
8. エチダエニ いちどきに、いっせいに位の意味。語源不明、「一代にか」。
9. ツコータ この様に聞こえる。新着にちがねると「コータ」であるという。言い替りか。
10. 「ちっとは(少しわ)銅っを人があるけれども」のようなことを言っているのだから、よく合らない。
11. カッタ 共通語化して促音便となっている。
12. ソー [S:] 指示して注意を促す間投助詞。「そう」が語源であろうか。
13. カーテ 銅っでのア音便 IIIの4文法上の特色の助詞について参照。
14. アー 副詞 あんなに、あれほど、
15. カワンネカッタ 「ン」は尊敬の助動詞「れ」の變化。
16. オー [O:] 間投助詞 あそびに

17. エトシキ イトヒキ の変化 糸引き、製糸、製糸工女。
18. オエタ 終つた この次に「時にみんな糸引きに行つた」のような語が有るかもしれないのであろう。
19. ンダドモ 塩焼詞 だけどの意。
20. ヲア [SO:] 動詞 そんなに、それほど、さして、
21. サカンダネアカタ サカンダは形容動詞終止形と同形の連用形。
22. センゴラッタ ダンラ の変化。
23. ラガンネアテモ 「ン」はまちから てはいうを考へてあろう。ネアはみ／＼と同じく終止形と同形が連用形とある例。「人手がなぐても」の意。
24. ク [Kw] 桑
25. エエタ うええ(植ええ)の変化。
26. ランジョアマ 地名大字折居地内の共同墓地のあるところ。元上山のヤカ脱落している。
27. ジタイモ このようにきこえろが「ジダイ」の言ひあやまりであらう。
28. ナンデモカマデモ ナンデモカンデモの変化。何でも彼でも。従者のようにきくとれる。ここは魚沼郡にかけて掘居の所が継ぎに接する地帯である。
29. コショアテ II の注32参照
30. カゴ 養蚕用の竹製の3尺×4尺程のかご。
31. エッテ イレテ の変化。入れて。
32. シタケアテ シタオカエテ の変化。蚕の下の層の糞や古い桑などを取り去ること。
33. クッテ クレテ の変化。
34. コア コア 動詞 左右の手交互に動かして、まぶしを折る身振を(その)であらう。
35. オッタ / オ アクセントから考へて、折るでなく、織るであらう。  
オル(折る) オル(織る) の別がある。
36. オショル 折る。オルよりオショルが普通。押し折るが語源か、本巻の外東北地方群芳花語集市大令の各典で用いる。
37. ここの従考は不明瞭である。語源は「オショッタバクン / ー」(折つ

なばかりの物を)と主張するが、実際は文字化しなように聞こえる。  
「折」なばかりみえいに」と解した。

38. ハワシッタと聞こえる。読者は「ハワシタ」と主張する。まぶしを遠  
わせるように伸ばしひろげたこと。

39. カエリヨア マブシ 改良まぶし。ボール紙を組み合わせて折りを  
みのできるもので、一匹画に一匹の禽が羽を折り、何年でも使用  
できる改良されたまぶし。

40. テデシル 手でするの変化で、手で組み立てる意か。

41. ヤマンタツ 山形になっていることで、一種の改良まぶ<sup>し</sup>の綱の目の  
形状が山形、三筒状になっているものらしい。

42. ヤーノ 不明 「やまの」か「山の」か。

43. カワシモ 地名 川下、用水路のトンネルのあるあたり。

44. クグ<sup>リ</sup> るくるところ。トンネル。暗渠。土や雪の中に作った<sup>り</sup>雪道。

45. セバ サ変動詞未然形+助詞バ

46. アコダケラ はじめアゴアケラのように聞こえるが、読者にをしめ  
めて、本文のように分かった。

47. ダッカ はっきりとは分らない。だから「意かあるいは「だけら」  
の変化で「をえなら」の意か。

48. ヨゼン 字押庭にある家の屋号。

49. ミカデマブシと言って針金で作ったむかで状のまぶし。

50. ワキソアダ 着せようぞとは両端から掘り進んだトンネル工事の中  
で掘して貫通しせうぞの意。

51. クボタノオジジ 久保田は屋号、その老人の男で高橋辰之助氏をさ  
す。前出エノスケも同じ家の屋号。

52. アガル 家に帰ること。仕事などやめて家に帰ること。

53. シタガンガ 養蚕をしおのかの意。

54. カイコモ 「カイコノ」ではなからう。

55. アッタッタ 有ってあったの変化。5参照。

56. マータ マワタの変化、Wの脱略。



57. コシラエタリ 共通語化した表現。コシヤータリなどが本来の表現。
58. スルノデ 共通語化した表現。
59. キンヌク 衣を脱ぐ。脱皮する。上代の文献では脱ぐはヌクであったとされる。ヌグも本文の後にでてくる。共通語化したのであろう。南魚沼郡ではノクといい、これは千葉県にもある。ヌクは千葉県・大田原・対馬にある。
60. アッデスコテのデはレの感じもある。
61. クワノハ 共通語化している。普通クワノハ。
62. コーターの語尾が不明瞭。かっ、えら、のらが混ざっているであろう。
63. モンダモンはシランモンダモンガの略さねたものであろうか。
64. オラニコ オラドコの変化 俺の所 わが家。
65. エナ 共通語イナ(異な)連体詞の変化。
66. ナーシター 何した。どうした。
67. アガルガンレヤナンレヤ アガルガンダヤラナンダヤラの変化。dとtの中間的発音。[re]は[re]に近いが。
68. コンガン 形容動詞コンガタの連用形かと思われる。クーセーを修飾するを考える。コンガイニフコンガニフコンガンと変化しをを考える。コンガイノフコンガノフコンガンと考えれば「クーセーノ」と修飾する連体形となる。
- Iの24・64参照。コゲン(連体詞)(新詞)九州名典 コゲンニ三重県
69. ニワヤスミ 番の第四眼 新潟県・長野県・群馬県・埼玉県。
70. ここのところは正確にもよるとこでかでない。早口の上に舌の蓄積がある、読者の説明に従って文字化してみよう。
71. ヴァーエ 連体詞 そんな、そのような 語源は「そう言う」である。
72. ゴットラネ 撥尾語…毎に。これに似る語に「グテラ・ゴテラ」がある。～ごと、～ぐみみ～共の意味である。「りんごなんか皮ぐちら食うで」(柏崎市「消えゆく方言」) 豫知県・近畿地方にある「グテ」に更に「ラ」がついている。ゴットラネも同様にゴトにラ、更に新詞的ニがついてできているのであろう。ニはネと読める。
73. 「ナンヌク」のようにゆきこえる。ナラネカ(知らないではない

か」のこの人らしい感じの早い表現から出てくる感じが著者  
なのであろう。

74. ヴァーエヨニ そういようにの変化。

75. カエココエ 唇餞いの変化 [kai] の変化 [kae] が終止形の [kɔ:]  
に同化して生れた著者である。

76. ソンガノ 形容動詞の連体形。

77. エネ I の注 83 参照。

78. エアン イルアンダと考え「いさのさ」と記したが、この語のこ  
とをから、イラレルアンダと尊属の助動詞を入れていさつよりなの  
かもしれない。

79. アレアタ 不明 アレワマタと言おうとしなのか。

80. アエラー アイラワの変化 アイラは江戸時代語通称代名詞複数、  
彼等。当地ではののしる気持はなく、同輩、同下に使って使う。ここで  
は「養をうは」の意である。後者の「ヤッラ」はこれに比し見下す  
る気持のある卑語である。参考あい。彼。三重・新緑山・新川・濃  
峯・佐賀・鹿児島。

81. ガ ガオ(のを)の変化。

82. トエート「と言うと」で「と」を添えている。

83. ヌゲレーネ ヌゲレーネとも。ヌゲレール(脱ぐことかどきる)の  
否定。可能の言い方はヌゲレルヌゲレルとも言ふ。

84. オアテ そうして

85. はっさりしなかつたが語者 A にきいて、養の体に湿気があつての意  
とわかつた。

86. ダンガは語尾加はっさりしない。I の注 99 参照。

87. ソア [ɔ:] 感動詞。相手の体意と喚起する時用いる。

88. エカッタ よかつた。ヨアネア、エーネア、エーロー、エーナ、ヨアナ、エー、  
エーヒト、エーケラと活用する。

89. ダサレシ ダサセラレルシが此の人のくせでちがひて著者ではない。

90. エラレレバ ラレルは尊属。その已然形。文語的な表現。

91. [kwa: jmetari] に近い。

92. ソッテはソッテのようにもよこえる。それでの変化。
93. カウンネー 尊敬の意定 前のBのこぼの中「シャラン」より敬意は低い。
94. サカヤモン 酒造業従業者。トージはその指導的地位にあるものを一般酒造従業者の意時に多く使うこともある。参考トージ 新潟、富山、岐阜、静岡、三重、島根、広島、高知、熊本。
95. テカセギ II 収録地点の概観5戸数人口産業の都参照。
96. ダモ ソーダドモ>ンダドモ>ダドモ>ダモ
97. エラスト イラシタヒイナスツの混成か。
98. カシラン 連語。カシランは終助詞として左かよいかもしれが。江戸語の入ったものか。刈羽村では九十歳の老婆も使っているよう。こゝでも老人、しかも男性が使っている。普通語からのものではな

#### 4. 雪の中の生活

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 高橋 真 男 大正7年

B 高橋 初枝 女 大正8年

D (同令) 高橋 春宜 男 大正15年

D コンドウ フエノ セークツノ コトデモ チョット キーテ  
こんどは 冬の 生活の ことでしょ ちゃんと 聞いて

ミマショアカーネー。 マー フエターバ エキガ フッテ ヒラバノ<sup>(1)</sup>  
みましようかねえ。 まあ 冬と言えは 雪が 降って 平場の

フエト チョット チガイマスノデ ソコラヘンノ ハナシカラ  
冬と ちゃんと 違いますので、 そくら辺の 新しから

ダシテ ミテ クンナセア。  
出して みて 下さい。

A マ エキガ フルノワ アレダコテ コラー (B 笑) ヤマン  
まあ 雪が 降るのは あれねえよ これは 山の

ナカデ<sup>(2)</sup>…。 ダケ<sup>(3)</sup> ヨー<sup>(4)</sup> ホレ アノ シンブンヤサー テレビデ  
中で…。 だから よく ほら あの 新聞やねえ テレビで

モッテ アッラコテ<sup>(5)</sup> アノ ゴメーター アノ サンメーター フッテ  
あれねえよ あの ゴメーター、 あの エメートル 降って

オーエキダナンテ<sup>(6)</sup> エードモ サンメーターナンテ ウカワデ  
大雪やなどと 言うけれど、 るメートルなど 鵜飼りで

サンメーターナンカ ユキ エッパ<sup>○</sup>ーダト オモワンガネー。 { D  
ミメーター<sup>く</sup>らいな 雪は 多いと 思わな<sup>い</sup>かねえ。

ソーデスネー。 ) タイター ヨンメーター。 マー サンメーター  
そうすねえ。 ) 大抵 四メーターだ。 まあ ミメーター

グレ<sup>(7)</sup>ーダケラ タイシタ エッパ<sup>○</sup>ーダト オモワンネ。  
ぐらいなら たいして 多いと 思わな<sup>い</sup>ね。

B シミス<sup>(8)</sup>ダニノ ショワ ヨ<sup>○</sup>ーエダ<sup>○</sup> ネ<sup>○</sup>カッタデスコテネー。 { A ア  
清水谷の 人は 容易では ありませんでしよねえ。 ああ

ヨ<sup>○</sup>ーエダ<sup>○</sup> ネ<sup>○</sup>カッタ ハー。 ) アレ カヨーテ キナスツタンダ<sup>○</sup>スケ<sup>○</sup>。  
容易では なかつた、 はい。 ) あれを 通って 来られぬのだから。

{ A ソ<sup>○</sup>ーソ<sup>○</sup>ーソ<sup>○</sup>ーソ<sup>○</sup>ー アー。 ) ハー。 アノ アレーネー { A  
そうそうそう、 ああ。 ) はい。 あの あれを ねえ、 {

カンジキ カケテネ。 ) カンジキ<sup>(9)</sup> カケテ { A アー。 ) ホ<sup>○</sup>ーシテ  
かんじきを かけてね。 ) かんじきを かけて、 { ああ ) そうして

アレーネー { A アー。 ) アノ カクマギニ<sup>(10)</sup> ナワ トーシテ  
あれをねえ、 { ああ。 ) あの 角巻に 縄を 通して

モローテ ホ<sup>○</sup>ーシテ コ<sup>○</sup>ー クビノ ホコテ<sup>○</sup> シバッテ。  
もらて そうして ぬかに 頸の ところで はって

A シバッテ。 ソ<sup>○</sup>ーダッタネ。 ソノ エウエ<sup>(11)</sup> ミノ<sup>××</sup> ミノボシ<sup>(12)</sup> カブッテ  
はって。 そうだつたね。 その 上に 簗帽子と かぶって、

テンボ<sup>(13)</sup>クラニ。 { B ミノボシ カブッテ ハー。 ) ソ<sup>○</sup>ーシテ  
頭上に。 { 簗帽子と かぶって、 はい。 ) そうして

ガッコ<sup>○</sup>ーエ カヨータンダネ。 { B ハー ガッコ<sup>○</sup>ーエ カヨエマシタ。  
学校へ 通つたのだね。 ) はい、 学校へ 通いました。

ソ<sup>○</sup>ーシテ オヤドモワ ミンナ オクッテ キタンダ<sup>○</sup>。 ダースケ<sup>○</sup>  
そうして 親達は みんな 送って 来たのだ。 ねから

シミズダンノ ショーワ ヤダテッテ コノ ガックカラ ハナレラッタンダ。  
清水社の くんは いやだと言って この 家から 落れられぬのだ。

コノ ミチ ツケルダケテ<sup>(14)</sup> ヨーエジャ ネー<sup>(15)</sup>ン。  
この 道を つけるまで 容易では 無いから。

B オラガ ドキワ キット オクッテ クルナンテ コト ネアカッタカ  
私どもの 時代は まっと 送って 来るぞという ことは 無かったかも  
シレマセ<sup>~~~~</sup>ンテ。  
知られませんでした。

A オソラク ネアカッタネ アノ コロワネー。  
おそらく 無かったね。 あの 頃はねえ。

B ハー ソーソー。  
はい そうそう。

A ソーシテ モトワ アッダコテ アノ エキガ エッパ フッテ ガッコーガ  
そうして 昔は あれだよ あの 雪が たくさん 降って、学校が  
ホレ クジハジマリガ デキネーデサ (B ソーソー。 ) ソーシテ  
ほれ 九時始末が 出来なくてさ、 ( そうそう。 ) そうして

(B オソー ナッテ キラネ。 ) オソ ナッタ ドキア エッパ アッタコテ。  
( 遅く なって 来てね。 ) 遅く なった 時は しばしば あったさ。

(B ソーソー。 ) ソレカラ ノタノ アノ ホレ タヤノ ナダレノ  
( そうそう。 ) それから 野田の あの ほれ 田屋の 雪崩の

デタノワ アレ <sup>(17)</sup>~~~~ エツ ダッダッケナー。 タイショアー サン…  
出たのは あれ いつだったかねえ。 文正 三…

ナンネンダローネ。 <sup>(18)</sup>アレ ニガツノ エッカダッタンエー。  
何年だろうね。 あれは 二月の 何年かであったねえ。

B オラ エネアカッタソダ ネーダローカ ソノ コロ。  
私は 辰蔵からなのは 正しいだろうか、 その 頃。

A ソーダッタロパーカ。  
そうなのだろうか。

B オラ オボエカ<sup>(19)</sup> ネーガンネ。…エタンダ<sup>ナ</sup>ナー。  
わたし 記憶が ないもの。(いや)居たのだな。

A エヤ エタッタ。 (B エタンダノ。 エタンダ。) ンー オラカ  
いや、居たのだよ。(居たのだな。 居たのだ。) うん、わたしにもか  
エタネン ア サンネンセーノ ドキダモン<sup>(20)</sup> エラッタコテア。  
×××× ああ 三年生の 暗なもの 居られたさ。

B ソー セヤ オラ ゴネングレ<sup>ア</sup>ダッタスケノパー。  
そう それは わたしは 五年生くらいだったからねえ。

A アレ フッテ マエンケ フッテ ホーテ エマミテア<sup>ニ</sup> ガッコー  
あれは 降って、毎日 降って、そして 今みたいに 学校は  
デンキカ<sup>ニ</sup> ネーデ<sup>ニ</sup>ショアー ホーッテ ランプ<sup>ニ</sup> ブラサゲテ シタノ  
電灯が ないでしょう、そして ランプを ぶらさげて 下の  
キョーシツ センブ<sup>ニ</sup> ランプ<sup>ニ</sup> シタノ。 ソッデ メーナクテ マ  
教室 全部 ランプに したの。 それでも 見えなくて、まあ  
ニケアーノ ホーワ クロ<sup>(21)</sup>アーク<sup>ニ</sup> ネードモ オラ シタダッタスケ  
ニ階の 方は 暗く ないけれども、私どもは 下だったから

メーノアーテ ホーテ ジュギョアー ヤスンダ<sup>ニ</sup>ンダ。 アラネー アノ  
見えなくて、そして 授業を 休んだのだ。 あれねえ、あの

ニグワツノ オソー<sup>(22)</sup> ナッテカラ フリダシタ<sup>ニ</sup>ンダ。 ソレマデ<sup>ニ</sup> エキワ  
ニ月の 遅く なってから 降り出したのだ。 それまで 雪は

ナンニモ ネアカッタ<sup>ニ</sup>ンダ。  
少しも なかったのだ。

B ソン ドキ ナカヤマカ<sup>(23)</sup> エッジュカン ミナガ アカンカッタ<sup>ニ</sup>ンダステネ。  
その 時 中山峠が 一週間 道が 明かになったってね。

A アー ソアダッタネー。  
ああ、そうなのねえ。

B ソアデスッテ。 エッシャーカン ミケガ アキマセンデシタ。  
そですって、 一週間 遙か 明きませんでしな。

A アー アン ドキ アッレ アノ アレダコテ アノ ヤマダノ ナダレノ  
ああ、 あの 時、 あれ あの あれなよ、 あの 山田の 雪崩の

(B ハー。) ドキ ジンカガ (B ソアソア。) エッシャー<sup>(24)</sup> ツツレタコテ。  
はい、 時、 人家が (そうそう。) たくさん つぶれなさ。

ニンゲンモ<sup>(25)</sup> シンダシネー。 ホレ ココラカラ ミンナガ アノ  
人間も 死ねたしねえ、 そして この辺から みんなが あの

(B ソアソア。) ホレ アッダコテ エキホリ エッタコテアー。 ハー。  
(そうそう。) ほれ あれなよ 雪崩りに 行ったさ。 はい。

B シタリ<sup>(26)</sup> アッタ モンワ ミンナ エガレマシタ。  
二人(人々の)有った 者は みんな 行かれたしな。

A アラ オラ ジンジョアーサンネンノ ドキダエネ ハー。  
あれは わたしどもが 尋常三年の 時ですよ、 はい。

B サンネンノ ドキデシタカネー。  
三年生の 時でしなかねえ。

A ダスケア オマエサマガター<sup>(28)</sup> ママダ<sup>x</sup> エラッタ ワケダ<sup>(29)</sup>。(B エラッタネー)  
だから あなさがなほ ままだ 居られな わけな、 (居られなねえ。)

エラッタ コアガクネンニ (B ソアダネー。) エラッタ アー。 アノ  
居られな、 高等年に (そうなのねえ、) 居られな、 ああ、 あの

ドキワ マエンケマエンケ ガッコーエ エクノガ ジュージダッタコテ。  
時は 毎日毎日 学校、 行くのか 十時なのさ、

(B ソアソア。) ネー。  
(そうそう、) ねえ、



B エキガ ハー フレバ ジュージダシタ コテネ。 (A ジュージダッダッ)   
 雪が もう 降れば 十時でしたさ。 (十時過ぎぬ。)

ハー。

はい。

A アレカラネー エマ アンマリ フランネー。 アンガ<sup>(30)</sup>ン コト   
 あれからねえ 今は あまり 降らないねえ。 あんな ことは

ネー オアカネ。

ないじゃ ないかね。

B フランガンデショア ネ。   
 降らないのでしょうね。

A ダッテ アノ トシモ ダドモ アッテスゼ アノ ジブンワ ニグッツ   
 ダッテ あの 年も しかし あれですぜ あの 時分は 二月   
 ダガサー ショアグッツガ マー ミンナ<sup>(31)</sup> イチグッツダッタ。 (B ソアソア)   
 だがさ、 正月が まあ みんな 一月であった。 (そうそう。)

シトツキオクレダッタンダスケ ニグッツノ ショーグッツダスケアーネー   
 一月遅れたったのだから 二月の 正月だからねえ。

アレ マダ イチグッツノ サンジュー イチンチガ トシトリナンダ   
 あれは まだ 一月の 三十 一日が 年取りなのだ。

ガ ソノ ジブンワ マダ ユキガ ネカッタンデス。 (B ソアデスネ)   
 が、その 時分は まだ 雪が なかったのです。 (そうですね。)

アラ ニグッツノネー<sup>(32)</sup> エッカカラ フリダシタカサ。 ニグッツニ   
 あれは 二月のねえ 何日から 降り出したかな、 二月に

ハアッテカラ フッタン~~~~。 アン ドキワー マー アノ チュ   
 入ってから 降ったんだ。 あの 時分は まあ あの

キューゲキニ フッタンダガネ。 マエンチマエンチ フッタンダガネ。   
 急激に 降ったんだがね。 毎日 毎日 降ったんだがね。

マエンケマエンケ サンジャクグレースツ <sup>(33)</sup> フッタンダ アノ ヒトバンニ。  
毎日毎日 ミ足くらいずい 降、なんだ、あの ヒト晩に。

B ソレマデ フラン アノー <sup>(34)</sup> ヒト、キリ <sup>(35)</sup> アワエガ アッタソアーデスネ。  
それまで 降らない あの しはらく 間いか あったそうですね。

(Aアアソアーソアーソアー。) デ エキガ カタマツ ドコエ (A アー。  
ああそうそう。 ) ね、雪が 溜まった 所へ (ああ。)

フッタスケアー アッタデ コーエガンダ <sup>(36)</sup>。  
降ったから あああなたと こういうことだ。

A ア ソアーダッタネー。 (B ハー。) エヤ コノ エキテ モノガ  
ああ、そうだったねえ。 (はい。) いや、この 雪と いうものが

ソアー ナントカ マー ヨノナカガ ススンデ アノ ブンメーガ  
そら なんとか…、まあ 世の中が 進んで、 あの 文明が

ススンデルンダ <sup>(37)</sup> クワクガ ススンデルンダ <sup>(38)</sup> ナントカ ナラン  
進んでいるのだから、 科学が 進んでいるのだから、 なんとか ならない

モンカノー コノ エキガー。 エキサ <sup>(39)</sup> フランケレバ マー  
ものがねえ、 この 雪が。 雪さえ 降らなければ まあ

コエラ <sup>(40)</sup> マー アノ (B マー エー ドコデスコテ。) エー  
こらも まあ あの (まあ いい 所ですさ。 ) いい

ドコダドモ、 (B ソアーソアー。) マー エッてバン コマルノワ コノ  
所だ、けれども、 (そうそう。 ) まあ いちばん 困るのは この

エキホリ。 マー ミケミケフミワー <sup>(41)</sup> コノゴロワサー アノ  
雪が揺りだ。 まあ 道踏みは この頃はさ あの

ブルガ キテ マー アノ ジョセツ シタリサー フミカタメラ  
ブルドーザーが来て まあ あの 除雪 したりさ 踏み固めて

クレルスケ マー ヨー フッタドモ エキホリワ ヨーエジャー  
あれるから まあ 良く 落ちたけれども、雪揺りは 容易だよ

ネー コテ ハー、  
ないさ、 はい。

B ムーエ ジャ ネーデスネ。  
容易では ないですね。

A ソレヨリ アノー ミンナ ホレ デカセギシテ シマウスケアー  
それより あの みんな ほら 出稼ぎして しょうから

アレデスコラ オンナショバツカン ナッテット ヤネノユエノ アタマエ  
あれですさ 女衆ばかりに なっていると 屋根の上の 頭(棟)に

アガルノガ ネー ムー ドーショアーモ ネーシタ。 (B ハー、)  
上がる者が 無い ムー どうしようも ないのぞ、 はい、

ソアーシテ マタ ハツエキン ドキヤ オッカネアースケアー。 (B  
そうして また 初雪の 時は こわいからねえ、

オッカネアースケ。シタガ アエテマースケアー。 (45) ハー。ソアーシテ エマ  
こわいから。 下が 明いていますからねえ、 はい、 そうして 今

クズヤテ" ホリオトスタッテ サスカ タッテルデショアー ミンナネ  
かやぶも屋根で(雪を)振り落とすとしても 扱着が 立っているで(はう)、 みんなね

ドコ) エーモネー。 ダカラ ナカナカ ヌーエタ" ネーシタ"  
どこの 家もねえ。 だから なかなか 容易では ないのぞ、

オッカノアーテ ハー。 マー サンメーターグ'レアー) エキダ'ケヤ  
こわくて はい。 まあ ミーターぐらいの 雪なら

エードモ マー ヨンメーター コセバ へアー ドーショアーモ  
いいけれど、 まあ 四メーターを 越せば もう どうしようも

ネーコテ、 (B ムーネー、) ハー、  
ないさ、 ねえ、 はい、

B マー ホトンド" エキホリテ" ソトネ エネアケ ナリマセンスケアー。  
まあ ほとんど" 雪振りで 屋外に 落ちてくれれば 足りませんからねえ、

A ソーソーソーソー。 マー オーエキノ ドキワ ヨンジュンチグラー  
そう そう そう。 まあ 大雪の 時は 四十日くらい

ツズクスケアー エキホリガー。  
続くからねえ、 雪掘りか。

B ソーネー。  
そうねえ。

A カンジキガ ミンナー ハアー コワレテ シモアーテ (B ハクガンカ  
かんじきか みんな もう こわれて はいて (はくのか

ネアー。 ) ハクノガ ネアー ア。 エマ マー ホレ ワリアエニ アノ  
ない。 ) はくのか ない ああ、 今は まる はら 密会いに あの

ンアー アマゴガ (B シン ソーソー。 ) ヨー ナツタスケアー エードモ  
んん 雨具か (うん そうそう。 ) 良く なったから いいけれども

(B ソアーデスネ。 ) オラ ドギャ アレダッタコテ モト ムカシヤ  
そうですね。 ) われどきの 時は あれだったさ、 え 昔は

(B ミノト<sup>(48)</sup> ) ホレ ミノトネ (B カサダ<sup>(49)</sup>。 ) カサダスケアー  
簾と ) ほら 簾とね (簾だ。 ) 簾石から、

フブギン ナレバ コラ マッテ<sup>(50)</sup> サブテ コゴエシム ヨアーダ<sup>(51)</sup>。  
吹雪に ねれば これは ほんとうに 寒くて 凍え死ぬようだ。

B ソレ ミンナ シンナカエ<sup>(52)</sup> モッテ ハアッテ (A モッテ ハアッテネ。 )  
それと みんな 囲炉裏に 持って 入って、 (もって 入ってね。 )

カワカシテ マタ アシタダ<sup>(53)</sup>。  
乾かして また あすだ。

A ソアーソー。 ソアーシテ ミンナ アノ ナガグツ<sup>(54)</sup> アノ フカグツ  
そう そう。 そうして みんな あの x x x x あの 深靴

(B フカグツ。 ) ツクッテネー ホアーテ アレダコラ (B ナンゾクデモ  
深靴 ) 作ってねえ、 そうして あれださ、 (何足でも

シダナエ。<sup>(55)</sup> シダナエ ブラサゲッタ。 ソシテ ソノ マー アノ  
火棚に。 火棚に ぶら下げている。 そして その まあ あの

フカグツノ ナカ ワラ ホレ エレ (B 笑) エンネテソアー…。<sup>(56)</sup>  
深靴の 中に 藁を ほら 入れ 入れないでさ……。

ソアーテ オラモ アノ アレ シタ モンダガ アノ オレア<sup>(57)</sup>  
そうして 私ども あの あれ した ものさ、 あの わたしは

アシノ ギョーサガ<sup>(58)</sup> ワリー ワケテ オードモ (B 笑) マカ  
足の 行作が 悪い わけでは ないか (曲か……)。

マガルンデネ フカグツガネー。 (B ソアーソアー。) アー。  
曲がるのでね、 深靴かねえ。 そうそう。 ああ。

B トンデモネアー ドコ ハイテ<sup>(59)</sup> ハー。  
とんでもない 所を 履いて、 はい。

A ソアーソアーソアーソアー ヨコッテヨアー ハイテ。 ソレデモ マー  
そうそうそうそう。 横側を 履いて。 それでも まあ

アレダコテ アノ ヨキホリニ アノ オマエサンガタモ ツ  
あれさ あの 雪揺りに あの 女をさがすも っ

ツマガケテ<sup>(60)</sup> ハカッタデシヨアーネ。  
爪掛けというのは 履かれたでしょうね。

B ガッコーエネ (A ハー。) ハー。  
学校へね。 (はい。) はい。

A ツマガケネー。  
爪掛け ねえ。

B ハー。  
はい。

A ハー。 ソレカラ アノ ダイモケナンカニ<sup>(61)</sup> デンニャ ホレ  
はい。 それから あの 文物などに 出るには ほら

オソカケ<sup>(62)</sup>。

おそかけ。

B オソカケ。

おそかけ。

A ハー オソカケ スイブン アエシタコテ ツカータコテ。

はい、おそかけを すいぶん あれしな、 使、な、さ。

B アレ オソカケッタッテ フツカモ ハケバ キレッチモマーシ。

あれは、おそかけといつって ニ日も 履けは 切れてしまし、

A ソアーソアーソアーソアー。 ッダドモ アレガ アノ マタ アノ ワランジト  
そうそうそう。 しかし、 あれが あの まだ あの わらじと

アラ ナンダ<sup>63</sup> (B ナガグツ ハー。) フカグツト チゴアーテネ  
あれは 何だ、 (長靴と、 はい。) 深靴と ちがってね、

アシノ ケアーリガ<sup>63</sup> エー~~~~ (B ハー。) ダカラ ソノー ドーキュー  
足の 反りが いい~~~~。 (はい。) だから そのう 道中を

シルチャネー ミチオ アルクニャー マタ アレノ ホアーガ エーシダネ。  
すみにはね 道を 歩くには また あれの方 いいのだね。

ダエモケ シクナンラ ドキモ エーシサー。

大物と 引くなどという 噂も いいしさあ。

D ハー。

はい。

B ガッコーエワ アシャノ<sup>(64)</sup> アレ ハエテネー クツ<sup>(65)</sup> ハエテ (A ハーハー)  
学校へは アシャノ あれを 履いて 草鞋を 履いて (はいはい)

ココエ アノ アレ ナンデアーナー (笑) (A シガラ<sup>(66)</sup>...) シガラ  
ここに あの あれを 何だったかなあ、 (しガラ) しガラ

(笑)<sup>(67)</sup> シン アレ ハエテ ガッコーエワ カヨータコテ。 (A ソアー  
うん あれを 履いて 学校へは 通ったさ。 (そう))

ソアーソアー。 ) アノ コロワ エマヨリワ エキャ フツンデスコテネー。  
 そうそう。 ) あの 頃は 今よりは 雪は 降ったのですよねえ。

A フツタ ヨアーナ キガ シマスネー ハー。 (B ソアーデスネ。 ) エマ  
 降ったような 気が しますねえ、 はい、 ( そうですね。 ) 今は

(68)  
 アンゲ<sup>68</sup> サンジューンケモ ツズケテ エキ フルヨアーナ コタ  
 あんなに シナぬも 続けて 雪の 降るような ことは

アンマリ ネアーヨアーダ<sup>69</sup> ネアカネー。 (B ~~~ネ。 ) アノ ジブンワ  
 あまり 無いようでは ないかねえ。 ( ...ね。 ) あの 場合は

アノ シトバン ニジャク サンジャク フルナンカ ヘー (B ヘーキデシ。 )  
 あの ヒト 晩に ニ尺 ミ尺 降るなど ( 平気でね。 )

ヘーキ シジュー フツタガンネネー<sup>(69)</sup> ハー。 ホーッテ アノ ソアー  
 平気、 始終 あったものねえ、 はい、 そうして あの それ

フツノ カンジキジャ ダメデサー スカリツツ<sup>(70)</sup> (B スカ~~。 ) モアー  
 普通の かんじきでは 駄目です、 雪かきという(のき) ( 雪か……。 ) もう

シトツ カケタコテネ (B ソアーソアー。 ) アノ コンゲ<sup>(71)</sup> キノ  
 ひとつ かけたさね。 ( そうそう。 ) あの こんな 木の

デッケー (B ハー。 ) ワッカオネー<sup>(72)</sup> ハー。 アレ アノ オラ サイショ  
 大きい ( はい ) 輪をねえ、 はい、 あれを あの わたしは 最初

アレ カケコト ~~~~~<sup>(73)</sup> クビー カケテネー コアーコアーコアー<sup>(74)</sup>  
 あれを かけること ~~~~~ 頸に かけてねえ、 こうこうこう

シテ……、 (B ハー。 ) ソノ ホアーガ ラクダテアンデネ。 (B ソアーソアー。 )  
 して……。 ( はい。 ) その 方が 楽だというのでね。 ( そうそう。 )

ホアーシテ アレデスコテ エワムケ<sup>(75)</sup>カラ ホレ オリイノガ<sup>(76)</sup> ヨアーノ  
 そうして あれですさ、 上辺から ほら 折居の 蒙校の

ミチツケガ<sup>(77)</sup> マエアサゲ<sup>(78)</sup> デルノデ<sup>(79)</sup> アノ ソレア コイデ<sup>(80)</sup> アエク<sup>(81)</sup>  
 通付けか 毎朝 出るの あれ それか 滑いで 歩く

ソノ アトカラ マー オラガ アノ デッケ ヌドモカラ エッタ  
その 後から まち わたしどもか あの 大きい 子どもから 行った

モンダコテネー。

ものださねえ。

B ソーデスネー。

そうでもねえ。

A エマ ソレ マー マー フルガ キテ クレッシェマー マー ヨクワ  
今は それ まあまゝ ブルドーザーが 来てくれるから まあ 良くな

ナッタンダドモ…。

なっただのなトルども…。

B ヨク ナリマシタコテー。

よく なりました。

A ハー。

はい。

D エキオロシニ シャベルガ ハヤッタノワ イツゴロデスカ。

雪降るしに シャベルか はやりのは いつ頃ですか。

B ハー。

はい。

A シャベルワー アレモ ダイブ オソイワネ。 ミンナ コー マ  
シャベルは… あれも 大分 遅いよね。 みんな こう まあ

オラ エカシ<sup>(81)</sup> ナルマデ<sup>(82)</sup> コンスキダッタスケネー。

私たち かなり早くにそきで 木鋤だのをからねえ。

B コンスキデシタスケネー。

木鋤でをからねえ。

A シャベルノ ハヤッタノワ アルチャ アッタドモ ココエラデ ツカウヨアン  
シャベルは はやりのは 有るには 有るアルぞも こころで 僕のように



ナッタノワ

なっただのは、

B エキガ ムコーエ エカソスケダ ダメナ モンダナンテテネ  
雪か 向こうへ 行かないから なめな ものをどと売ってね、

A ソアー ソアー ソアーソアー ハー。  
そうそうそう、 はい、

B ツカワソカッタンデススケアー。  
使わなかったのですから。

A アレワネー ナンダ<sup>(83)</sup>ロパーノー。  
あれはねえ、 あれだろうねえ。

B マー オラガ ガッコージダエワ コンスキバツカデシタ。  
まあ われしどの 学校時代は 木金助ばかりでした。

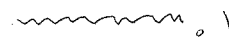
A コーンスキダッタネー。(B ハー。 ) ハー アー シャベルノ ハエッテ  
木金助だろうねえ。 はい、 はい、 ああ シャベルの 入って

キタノワ スット オソー ナッテカラダネ。  
来たのは ずっと 遅く なってからのね。

B オソー ナッテカラノデショアカネー。  
遅く なってからののでしょうかねえ。

A ハー オソー ナッテカラダノー ハー。 <sup>(84)</sup>ダ マタ アノ  
はい、 遅く なってからのねえ はい、 しかし また あの

コンスキテノワ マタ アラー アレデスモンガ <sup>(85)</sup>アノ ラクダシ  
木金助というのは また あれは あれですから、 あの 樂だし、

ムコーエ ナゲンニワネー (B  ) <sup>(86)</sup>ヨケー エクエニ  
遅く、 投げるにはねえ、 余計 とぶから、

ハー。 マタ エキテノワ ホレ ウエカラ オトスノワ  
はい、 また 雪というのは ほら 上から 落すのよ

<sup>87</sup>ハヤエドモ <sup>88</sup>シタエオ スケルノガ ヨーエデ ネー。 (B シタオ  
 早いけれども 下を 空けるのか 容易で ない。 下を  
 スケルノガ ヨーエデ ネー。 ) ダッケー ヤッハシ テマー トッテモ  
 空けるのか 容易では ない。 下から やはり 手間と とも  
 コンスキノ ヨーナンデ スーシート ムコーエ ナゲタ ホーガ...<sup>(89)</sup>  
 木鋤のようそで そう ずっと 向こうへ 投げた 方が...。

(B ナゲタ ホーガネ。 ) ハー。 アラ アノ タエラナ エタネ  
 投げた 方がね。 はい。 あれは あの 平らな 板に。

コー エガ ツイテルッケ ナゲズレヤー ヨーナ モンダドモ ナレルト  
 こゝ 柄が 付いているから 投げにくいような ものだけれども 投げると

ユート アレ マタ ワリアエニ ハヤエ モンデスワネー ハー。  
 いうと あれは まだ 割合いに 早い もんですよねえ、 はい。

コンスキ オモニ アッダコテ アノ モトワ ホレ エタヤダッタコチー  
 木鋤は 主に あれださ あの 昔は ほら いちやそつださ、

コッテワネ (B ハー。 ) エタヤトカ <sup>(90)</sup>ブナデ <sup>(91)</sup>コ <sup>(92)</sup>シャータ (B ブナデネー  
 こちらはね、 いちやとか ぶなで こしらえた、 ぶなでねえ

。 ) ハー コシャータモンデスコレ。 ドコノ ウチデモ コッレ  
 。 ) はい、 こしらえたもんですさ。 どの 家でも これで

コンスキノ ヨンチョーヤ ゴチョーワ ミンナ モッテタコレネー。  
 木鋤の 四丁や 五丁は みんな 持っていねえねえ。

B ソーソーソーソー。  
 そろそろそろ。

A エマワ アンナ コンスキナンテ <sup>(93)</sup>ツコール ウチワ スクノアテ  
 今は あんた 木鋤をど 使われる 家は 少なくて

ホトンド シャベルニ ナリマシタ ハー。  
 ほとんど シャベルに なりました、 はい、

B シャベルニ ナリ マシタ スケネー。

シャベルは 取りましたからねえ。

A モトノ ガッコーノ エキホリナンテ モンワ ネアカッタ<sup>(94)</sup> ネカ。 アラ  
昔の 学校の 雪掘りなどという もは なからなくてはいいか。 あれは

ダレカ タノンデ" ムラデ" タノンデ" ムラデ" (B ソー ソラ  
誰かを 頼んで" 村で 頼んで" 村で うん それは

ムラデ" タノンダ" タンデ" ネアーデ" ショアーカネ。 ハー ガッ コアー  
村で 頼んだのでよ ないでしょうかね。 もう 学校の

エキホリニソク...<sup>(95)</sup> ) タノンデ" ヤッタンダ" ネー。 アンナ  
雪掘り人足...。 頼んで しぬかねえ。 あんた

エキワリナンテッテ<sup>(96)</sup> エマミテアーニ ミンナ アノ カクブ" ラリ  
雪割りなどというて 今みえい みんな あの 各集落

コータエゴータエニ エキホリ コエナンテ ネアカッタ ヨア" ダ" ネー。  
交代交代に 雪掘りに 来いなどということは 無からなよだねえ。

B ネアカッタ デスネ。 ハー  
無からですね。 はい。

D ソレデ" コーガクネンガ" テツダエ シマシタ。 (A ア コーガクネンガ"  
それで 高学年が 手伝いを しました。 ああ、高学年が

テツダエ シタネ。 ) センセーガ" シナ デレネー。 (B リア" リア" )  
手伝いを したね。 先生が みんな でてねえ。 そう そう。 )

A センセー デレ...。 エマ マー コドモナンカ アノ (D ツカエマセジ  
先生が 出て...。 今は まあ 子供たちと あの 使いますし。

。 ) ツカワンネア" スケネ<sup>(97)</sup> ミンナ ~~~~~ ドモネー。  
使われないからね みんな ~~~~~ けれどもねえ。

B ガッコーノ エキホリテガンワ ニンソクデ" ハー キマッテタンダ" ノ。  
学校の 雪掘りというのは 人足で もう 決まっていたのだねえ。

A キマッテタ。 ダトモ エマモネー アノネー カッコーノ エキホリデ  
決っていた。 しかし、 今もねえ あのねえ 学校の 雪崩りで

マー アノ ネンニ ナンクワエモ マワッテ クルガサー アノー  
まあ あの 年に 何回も 回って 来たからさ あの

アッダエネ アノー コーシャノ ア キョア シツノ ~ナンカ ニカエ  
あれですよ、 あのう 校舎の ああ 教室の など ニ階の

タケノ オッカネアエネ (B オッカネア。 ) アー。 ソレデ アノ  
高いのは こわいですが、 (こわい。 ) ああ。 それで あの

アタンデモッテサ アノ ナダレドメア シテ アルロモサ アレ  
トタン板です、 あの 雪崩止めは して あるけれどもさ、 あれは

オッカネアデステ。 (B スベルスケア。 ) ア オンナショモ セーッダガデ<sup>(98)</sup>  
こわいですが、 (すべるから、 ) ああ、 女性も 言ったので(あって)、

エヤ ワケアショデモ オッカネアワネ ハー。 (B ~~~~~ スケア。 )  
いや 青年でも (こわいよね、 はい。 ) ~~~~~ だから、

コトニネー ハツヨキン ドキトカサー アメアガリノ エルンダ<sup>(99)</sup>  
珠にねえ、 初雪の 暗とかさ 雨上がりの ゆんね

ドキワ (B ストント。 ) サート ワレテ オケルスカ  
時は (すとうんと。 ) さあ、と 割れて 落ちるから

オッカネアサネ。 マー コレカラ アーユー コアキョア~~~~<sup>(100)</sup>  
こわいですが、 まあ これから ああね 公共の

タテモンワ ヨーエジャ ネーガネ。 ワカエショガ エランネアシ (B  
建物は 容易では 無いからね。 青年が 居られぬし、

ワカエショガ ホトンド~~~~。 ) オンナショバ、カン ナルスケアネー ハー。  
青年が ほとんど。 ) 女性ばかりに なるからねえ、 はい。

キョネン アタリダッテ サンクワエグラエ ホッタローカ ニクワエ……。  
去年 あたりなつて 三回くらい 振っただろうが ニ回……。

B ヒナカズツダスケ<sup>(101)</sup> サンクワエグレア キタンド ネカナ ハー。  
 半日ずつだから 三回ぐらい 来たのでは ないかな、はい。

A サンクワエ グレア キタカネー。  
 三回ぐらい 来なかねえ。

B ハー。  
 はい。

A ダエフ キマシタコテ。アレガネー アノ マー アノー  
 大分 来ました。 あれがねえ、あの まあ あのう

チューガッコーノ タエーツクワソノ ホーモ アッレストモ<sup>(102)</sup> マ ショーガッコーノ  
 中学校の 体育館の 方も あれですけれども、まあ 小学校の

タエーツクワソノ アンマリ アカランデ エースケネ (B アガランデ…)  
 体育館は あまり 上がらなくて いいからね、 (あがらないで…)

アラ マー エマノ ツクリダスケネ。ソレカラ ショーガッコーノ  
 あれは まあ 今の 造りだからね。 それから 小学校の

アノ アレデスコテ アノー キョーシツノ ホーワ アラ マー  
 あの あれですさ、あのう 教室の 方は あれは まあ

アノ タエラダト エーガネ タエラダスケ ワリアエ エードモネ  
 あの ××××× ××××× いいからね、平らだから 寄り合いに いいけれどもね

(B ソーデスネー。) チューガッコーノネー (B アコワ ターケー  
 そうですねえ、 中学校のねえ、 あそこは 高い

デススケネー。) キョーシツワ ターケーカラ オッカネーサネ  
 ですからねえ、 教室は 高いから こわいですよ、

ハー。  
 はい。

B ネー。  
 ねえ。

- A コノ エキテノガネー マタ ナントカ ナレヤ エードモ マー  
この 雪というのがねえ、 また なんとか なれば いいけれど、 まあ  
エチネンニ アレデショアー コノ マー エキデ ツイヤス ロアードアー  
一年に あれでしょう、 この まあ 雪で 貰す 労働。  
ジカンテノモ ソアートアーナ モンデスデー (B ソアーデスネー。  
時間というもの 相当な ものですぜえ、 そうですね。  
アー。 マー オラナンカモ コッデ エキホリサ ダレカ マカッテ (103)  
ああ、 まあ 私なども これで 雪振りさえ 誰かが 引き受けて  
クレレバ アノ フユウチ ドッカエ カセギニ エカレッドモ (B 笑)  
くれれば あの 冬うち 冬うち どこかへ 稼ぎに 行かれるけれども  
マカリテガ オースケアー (B マカリテガ ネアー。) シカタネアー  
引き受け手が 無いから 引き受け手で ない。 仕方なく  
ウチニ エルヨアーナ モンデ... (B ソアーデスネー。) ハー。 ソラ  
家に 居るような もので、 はい。 それは  
マタ エッテ アッレスコテ フユウチニ カネ チットグラー モローテ  
また 行って あれですよ、 冬うちに 金を 少しぐらい 貰って  
キタッテ ガンギ<sup>(104)</sup> ツブシタダノ<sup>(105)</sup> ゲンカンガ<sup>(106)</sup> メアー ノメッタダノト  
来ても、 雁木を 潰したぞの 玄関が 前に のめったぞのと  
エーバ ソラ オメアー カネ モローテ キタタッテ ドアーニモ  
言えは、 それは あんた 金を 貰って 来ても どうにも  
ナリマセンスケネー ハー。 マー コノ エキノ マー アノ  
ありませんからねえ、 はい。 まあ この 雪の まあ あの  
デ ソンシツワ オーキーネ デッケーネ。  
× 損失は 大きいね、 ぞかいね。  
B デッケーデスネ。  
ぞかいですね。

A ハー、  
はい。

D ソアデスネ。  
そうですね。

A コレカラ マー エーノ コアゾーオ マー ケアネアケレバ ワケア  
これから は まあ 家の 構造を まあ 変えなければ 若い

モンガ マー エネアテ コトニ ナレバ ナオサラダガ マー  
者が まあ 居ないという ことに なれば なおさらだが、 まあ

ケアネアケラ ナンガ<sup>(107)</sup> マー オロシトカ<sup>(108)</sup> ツノモン<sup>(109)</sup> マー オラ  
変えなければ ならないか、 まあ 「おろし」とか 「つのもん」 まあ わたしどの

エンテ<sup>(110)</sup> ツノモン (B オロシ。) ユードモ ソエ モン  
あたりで 「つのもん」と (おろし。) 言うけれども、 言ういう物を

モガンケラ トッテモ ヤリキンネアドモ マー モグッダッテ エマ  
もがなければ とても やりきれないけれども、 まあ もぐといつても 今

ユータヨアネ トーフヤ ダイコン キルヨアネ スパント  
言ったように 豆腐や 大根を 切るように ずぼんと

キラレレバ エードモ アト フサゲルニ ケーヒヤ カカルシサ  
切られれば いいけれども、 あれを 塞ぐのに 経費は かかるしさ。

ヨアエダ オアデスコテ ハー。 ソレト エキノ タメネ エタム  
容易では ないですさ、 はい。 それと 雪の ために いたむ

ヤネネー コノ マー ホ<sub>x</sub> アノ アッラコテ シューリヒモ リアターナ  
屋根ねえ、 この まあ あの あれねえ 修理費も 相当な

モンデスデ。 (B ネー、) エマ エッチバン タカク ナッタノワ  
ものですぜ、 (ねえ、) 今 いちばん 高く なったのは

コノ カヤブキダスケアネー。 (B リアデスネ。) コレワ マー  
この 葺き木からねえ。 (そうですね。) これは まあ

カヤジタエガ ホレ アノ アッデス コテ アノ テガ ネースケア  
茅自体が ほら あの あれですよ あの 人年が 無いから、

タランスケア ターケア (B ハー。) ドコエ モッテキテ コンダ  
足りないから 高い ところへ こんなとは

オメッサン ジンケンヒガ ショクニンノ テガ タコー ナッタデショア。  
あんた 人件費が 職人の 年間が 高く なったでしょう。

ダカラ トモジャネーガ ナカナカ コレデ ヨーエジャ ネーデス。  
だから とてもじゃないか なかなか これで 容易では ないですよ。

オメッサンタ ソレデモ マー シタノ ホアー アノ シモオ  
あんたの所は それでも まあ 下の 方 あの しもやを

モガッタスケア...

もかれたから...

B ハー シモオ モエダスケア スット アッデスドモネ。 (112)  
はい、 しもやを もいねから ざっと あれですけれどね。 (A コレカラ  
これから)

アンダカラ エキニ タエスル...。 ) オラ ドコワ ホレネ  
だから 雪に 対する...。 ) わたしの 所は ほらね、

グルグルーット オロシガ オレデ エルデショア。 (A ハーハー。) (笑)  
ぐるぐるっと 「おろし」が 下りて いるでしょう。 (はいはい。)

A ア ソアー ア ソレガネ ショアー ショアー アノネ メンセキガ  
ああ そう、 ああ それがね、 少し あのね 面積が

デッコアーテモネ ソノ ツノモンガ ナケレバ (B ナケレバ。) エンデスヨ。  
大きくてもね、 その 「つのもん」が なければ (なければ。) いいんですよ。

ソアー セバネー アノ ホレ エキホリガ ラクダ。  
そう あれはねえ あの ほら 雪振りが 楽だ。

B オラガ オロシカラ アレノ コノ コツラノ アワエガ オラガ  
わたしの家の「おろし」から あれの この 小面の 間が わたしの



セーヨリ ターケアデス<sup>ンガ</sup>。  
背より 高いですから。

A アーアー ソアーネ。  
ああああ そうね。

B ソアーシテ ソレダケ<sup>(116)</sup> オアー モンニ ナレバ (A アーアー。) スット  
そうして それだけ 無い 物に なれば (ああああ。) すうと

ラクデスコテー。  
楽ですさ。

A コレオ コノ ヤネオ カエゾアーシテ マー エマ ホレ アノ  
これを、この 屋根と 改造して、 まあ 今 ほら あの  
エロエロ マ アノ オー エキ ホルニ ヨアーエジャー ネーテノデ  
色々 まあ あの おう 雪を 振るのに 容易では ないという

モッテ アノ クズヤネ アタン カブセルノガ ハヤッテ クルテ<sup>(117)</sup>  
ので、あの 茅屋根に トタンを かぶせるのか はやて くれて、

コレガ マー アノ カネモ マー ソアトアー カカルシ マー  
これが まあ あの 金も まあ 相当 かかるし、 まあ

ジョアジョアー アタリマデ<sup>ン</sup> マー ヤッテモ エキガ スクネアスケサ  
上条 あたりまでは まあ やつても 雪が 少ないからさ

エードモ ウカワデ コッデ<sup>ン</sup> ドアー ユー モンダ<sup>カ</sup>。 ウシロデモ<sup>(119)</sup>  
いいけれども、鵜川では 氷で どう いう せなか、 後ろでも

サガッテ エル シェワ エードモ ソアーデ<sup>ン</sup> ネアケラ コンドワ  
下って いる 家々は いいけれども そうで なければ こんどは

コノ シタエ オッテ クル ユキデ ナカナカ コレデ コレ  
この 下へ 落ちて 来る 雪で なかなか これで これを

ヌケルニ<sup>(120)</sup> ヨアーエジャ ネアート モーター。<sup>(121)</sup>

のけるのに 容易では ないと 思って

B <sup>(122)</sup>  
 ソーシテ ナジョアーネカ カラーデスト。(ハ ア ソーデジョアー。)  
 やうして 大変 堅いそうです。( ああ そうでしょう。 )

オッタ エキワ カラーデスト。  
 落ちた 雪は 堅いそうです。

A ウエカラ オチルガンネ ソーデスコテー。 ソッデ タジョアー ホレ  
 上から 落ちるもの そうです。 それで 多少 ほら

トケテ コッダ ホレ アノ スイブンガ シタエ オッテ クルカラ  
 溶けて こんどは ほら あの 水分が 下へ 落ちて 来るから

ソレガ、コンダ コールスケッ ソラ マー カラー ワケデスコデ  
 それか こんどは 氷るから それは まあ 堅い わけです、

(B カラーデスト。) アー。  
 ( 堅いそうです。 ) ああ。

B <sup>(123)</sup>  
 ダスケアー ナゼガ ツケバ ソレクサ ヨーサリデモ ホランケ  
 なから なでれか 突けば それこそ 夜でも 揺らなければ  
 ナラン。  
 ならない。

A ハーハー。  
 はい はい。

B <sup>(124)</sup>  
 マー ミズノ キク ドコワ エーデジョードモネ。  
 まあ 水の 利く 所は いいでしょうかね。

A ハーハー。 ソレデ グルグルト マー アタンネ シテ ヘーキンニ  
 はい はい。 それで ぐるぐると まあ トタンに して 平均に

オチルヨアーニ シネアケラ エエーモ カシガル。  
 落ちるよりに びなけれは <sup>(125)</sup> 家も 化員く。

B ~~~~~ネー。  
 ねえ。

A リラネー エキノ ケカラテヤ モノスゴーイ ケカラ アノ  
 それねえ 雪の カといえは ものすごい カ あの  
 ジューリョー アルンデステ。 オラー アノー オレヤネー アノー  
 重量が あらんですよ。 わたしは あのう、 わたしはねえ あのう  
 マー アンマリ カラダガ ジョーブデ ネアンダスケアー ニサンネン  
 まあ あまり 体が 丈夫で ないものだから、 ニ三年  
 ホランダ オイタラデスネ 〜ダ〜 ウシロノ ホ ホッタガ マエノ  
 振らないで、 おいならですね、 後ろの おを 振つねが 前の  
 ホーワ エーヨア エーヨアッテ <sup>(126)</sup> オッタラ エーガ マッテ カシガッマツク。  
 方は いいわ いいわといって いたら 家が まるで 傾いてしまった。  
 (Dハー。) モノスゴー カシガル。 ダカラ ヤッパシ アノネー  
 (はい。) ものすごく 化頃く。 だから やはり あのねえ、  
 オタ フタン カブセツ シテワ ゼンブ カブセネートエートネー  
 ×× トタンを かぶせるならば 全都 かぶせないとねえ、  
 カタッホアー アタン カブセルト オチルデショアー カブセネアー  
 片方 トタンを かぶせると おちるでしょう、 かぶせない  
 ホーワ オチネーカラ カナラズ エーワ カシガリマス。 (B  
 方は 落ちないから 必ず 家は 傾きます。  
 ソーデショアーネー。) ハー アレ ソーナーノ ジューリョーデスカラネー。  
 そうでしょうねえ。 はい、 あれは 相当の 重量ですからねえ。  
 マー コッテ ココニ トシヨリンバツカン ナッテモ マー エラレルヨネニ  
 まあ これで ここに 年寄りばかりに なっても まあ 居られるように  
 シルニヤ マー ヤネサエ モランケラ エラレンガネ。 ダカラ  
 するには、 まあ 屋根さえ 浅らなければ 居られるかね。 だから  
 ソー シンチャー エキニ タイスル ヤネオ マー ドアーユー  
 そう するには 雪に 対する 屋根と まあ、 どういう

(127)

フーニ シルカ マー イーワ イマ ユータ ヨーニ ツノモン  
風に するか、 まあ 家は 今 言ったように 「つのもん」

ソーエ モンワ モエテ" シモア"テ ナルベク アノ ウチン  
そういう ものは もいで" しまって なるべく あの 家の

アノー ヤネオネ ウエエ アガランデ エー ヨーネ トシ トッテ  
あのう 屋根をね 上に 上がらないで いいように、 年を とって

カラ マー ヤネノ ウエ アガレテンテッタッテ トテモ トテモ  
から まあ 屋根の 上に 上がれなぞと言っても とても とても

コラ オメアサン アガラレル モンジャ ネアー ハー (B...ネー。) タエラナ  
これは あんた 上がられる ものでは ない、 はい、 (ねえ。) 平らな

アガラレル モンジャ ネアー ハー (B...ネー。) タエラナ  
上がられる ものでは ない、 はい、 (ねえ。) 平らな

ドコサモッテ オメアサン (B 笑) アノ タガ"タガ" シレンノガ  
所々も あんた あの たかたかと しているのか、

オマエ ヤネ アガッテ エキ ホレナンテ エーバ トラモ デキネアガ  
あんた 屋根に上がって 雪を 振れなぞと 言えば とて できないか、

ゾアー セバ" タシヨアー ワケアー ショガ エナクテモ アル テードワ  
そう ねえ" 多少 若い 人か 居なくても ある 程度は

マ ガンバッテ エラレンダ"ドモ アノ ヤーネノ エキガ  
まあ がんばって 居られるのだから、 あの 屋根の 雪が

ホランネアー ヨア"ン ナレバ" コレー ドア シタッ"タッテ エランネア"テコト。  
振られないように ねえ" これよ どう したところで 居られないさ。~~~~~

マ オエオエ ユレカラ マー アノ アタン カブ"セル クズヤニ  
まあ おいおいと これから まあ あの トタンを かぶ"せる、 茅屋に

アタン カブ"セル... コレカラ マー エマ ホア"ボア"デ  
トタンを かぶ"せる... これから まあ 今 方方で

ヤッテルスケ ャルヨア ニ ナルト オモ一ネ。 マタ アタンノ  
やっているから やるように なると 思うね。 また トタンの

ホアガ ヤスイ ~~~~~ ハー。 カヤ ~~~~~ ダイタイ エマネー  
方か 守い、 はい 茅 大体 今ほねえ

カヤ カイテアッテ ネー カヤ ネアデショア ダイタイ カラン  
茅を 買いたくても ねえ 茅は 無いでしょう。 大体 刈らな

モンダモン

いものだから

## 注記

1. ヒラバ 山間部に対して平野部を言う。
2. ヤマシナカデ… 次に「仕方がない」というような心持の表現が省略される。
3. ダケ {dake} ソーダスケ>ダスケ>ダッケ>ダケと変わった。
4. ヨー {jo:} せまい{O} よくのうろ便。
5. アッラコテ フレダコトイの変化、あれぞさ、なんぞさの意。
6. この辺界はでとえにくい。
7. タイシタ 副詞 たいして、程度の甚しいさま。後ろに打海表現を伴う。ここではオモワシネを修飾する。本安岩船跡や社田島福島奥宮城島根にあるように、タイシタが肯定の語句を修飾することはない。またタイシテという形もあるがタイシタより用いられることが少ないという。また連体詞タイシタもある。タイシタコターネー(左いし右ことは右い)
8. シミスダニ 清水谷 餅粒からスルメ鵜川の下流にある大字。鵜川小学校の学区から野田地区の学区に変わった。
9. カンジキ 標 雪の道、雪の山野を歩く暗はき物の下に縫いつけて雪中に脚が埋まる様になり、あるいは雪を踏みかためて雪上の道をつけたりする、木・竹製のU形の輪状の団具。
10. カクマキ 角巻、毛布の防寒具。ここでは四角の毛織物を三角に二つに折り、折り目に縫いを通し、肩から胴をおおい、踵の所で縫い

を結ぶ。後妻ら女性が用い、安全ピンで前をとめる。刈羽新内デマワシカッパとも言うという。

11. エウエ ウエ(上)の変化。「植える」もエエルとある。エウエ(静岡県)  
エウエ(南東沼田湯田町・富山県・島根県) エエ(岐阜県・静岡県・志摩  
紀州・和歌山)

12. ミノボシ [minobosi] 簪帽子 タツノケ (和名こしのほんもんじす  
げ) またはクゴ (和名不明) で編み、頭と胴をおおう、長さ1m余  
りの各の両具。その裏側は精巧に編みだす特殊の模様がある。近隣  
の古道具屋として現在も作られ使用されている。

13. テンボトラ 木・山などの頂上、ここでは体の頂上つまり頭の意。  
テンボク (滋賀県で頂上)。餅屋ではテンボ・デッペンとも言い、木  
のウラ (うれ・梢) はシンボクとも言う。うは接尾語。

14. ミチツケル 雪の積ったのを踏みつめて通れるようにすること。ミ  
チ(オ)フムともいい、和名にエキフミ (雪踏み) ミチフミ (道踏み)  
がある。上越市ではエキフミ、佐渡郡ではエキフミ・ミチツケ。

15. 語尾がはっさりしないが「ンガ」(理由をあらわす助詞)があると  
文脈上考えらる。

16. タヤノナダレ 調査地点から5km北、柏崎市大字田屋小字山田(当  
時刈羽新内野田村に属す)に、昭和25年(1950)2月上旬に起った  
表層雪崩。一戸を残し八戸が全滅したといわれる。

18. [pigaɾtsu] 普通 [-gwa~] ののであるがこの場合 [-ga-] であつた。普通  
語化したのであろうか。

17. つかみにくい音声がある。話者の主張に従って文字化した。

19. ガンニ 終助詞。「だって、記憶がないもの」と言うに近く、理由を  
述べて訴える表現となっている。語源は「ガニ」で「ガンニ・ガン  
ネ・アンネ」となって用いられている。「ガ」は格助詞から来る準体  
助詞、「ニ」は格助詞から来る接続助詞であり、「ガンニ」は逆接の  
接続助詞として「のに」の意味に多用される。「ハア ショア・グワモ  
クルガンニ、ヤダノー」(もうお正月も来るというのに、こんなに  
大雪がふるとは) や「ねえ」の「ガンニ」やIの85の「アンネ」

も逆接の例である。

これが順接の接統助詞となって、「祭りが来るかに、おしを依る」(何立利島、〈燕城集はガンニ〉。「日本国語大辞典」による)のように、故に・から・のでの意味に用いられ、越後にもその用法があることを「日本大辞典」(山田素村著)がかいていっているという。19の「ガンニ」は利島の例文とちがい、後件を欠いて、接統助詞となっている。しかし理由をのべる点は同一である。一行とんで前にある同一読者のことは「オラ エネアカタンダ ネーダロカ ソノ コロ」という判断の理由をここでのべているとみることができる。

といって「ガンニ」を単純に理由の接統助詞とは言えない。

ンダドモ、コノ エキジャー マーンデ ツモルバ、カダガンネ。エ  
カンネー ヨーネ ナレヤ カナンスケ エカーネ。(明治39年女性)  
(然し、この雪ではほんとに積るばかりだもの。行けないように  
すれば困るから行きますよ。)

もっとゆっくして行けとまわってことわる場合の表現である。形の上で終助詞であるが、心持からは逆接の如く、順接の如く、まことに微妙な表現である。相手の希望に与える理由を逆接的な余情をにじませて新える終助詞になっている。

20. モン 順接の接統助詞で理由をのべて主張する表現と思われる。理由の助詞「モンカ」とはちがい、「モノ」という助詞から生れた江戸時代語なのであろう。女子用語とは限らない。

21. 発音がはつきりしない。「コークネー」のようにも聞こえる。発音に足しかめるところ、「クロークネー」だと教えてくれた。クラクナイの変化。クラクとそのうろ便形の混成語形が、

22. オソー 二月下旬の意ではなく、雪は12月ごろから積るのに、2月という遅い時期に降りだしたということ。

23. ナカヤマ 地名 鶴ヶ江地区から旧野田村へ通ずる中山峠。

24. エッペー ハ戸だつたと言っている。

25. ニンゲン 十人だつたと言っている。

26. エキホリ 除雪すること。主として家屋の上や側面の雪を振り落し



をり掘りのナをりする作業。「北越雪語」に説明されている。中越  
の山間部の用語。上越地方は屋根についてはエキオロシ、道路上や  
家の側面についてはエキワリ、中越地方平野部でもエキオロシ、佐  
渡郡と下越地方はエキカキと称し、雪の厚浅と対応した用語をきくこ  
とがでる。参考 山形県 エキオロシ・エキカギ・エキハギ

27. シタリ 二人。エキホりの出来る人が二人いる家はの意で、一人は  
自宅の除雪に残す必要があること。

28. オマエサマガタ 話者男Aが五・六歳年長の女性話者BCに向って  
いう最高の対称の尊敬代名詞敬称。

29. ラッタ られる 話者Bは自分たちの動作を言うのに敬語を使っているが  
Aのことはにひかれて（まって）間違っているか、これを意識してそれを敬  
うために言うのかいそれかであろう。

30. アンガン あんが 形容動詞の連体形。「ア(1)概ナ」の変化か。I  
の24「ソنگン」IVの68「コンガン」参照。アンゲナ（中越郡  
中越村林存氏による）アンツケナ（中越村林存氏）アケナ、アガイ  
ナ（上越村林存氏）アナナ・アンナナ・アンナン（両頭城郡糸魚川  
市青海町、大橋勝男氏による）アンナ・アンナン・アインノ（佐渡  
郡）南魚沼郡湯沢町ではアンゲ1・アンゲン。

31. ミンナ おそではみんなの意。

32. このおそりからBの子なりしている孫娘が飽きておそりはじめた。  
このおとあらわれる泣き声はそれである。

33. 「毎日三尺」 前述山田の雪崩の際は一丈五尺（約4.5m）の積雪の上  
に一丈五尺の新雪が積る、と伝えられている。

34. ヒトツキリ 一切りの変化、一時、僅量ではない。シトツキリ（南魚沼  
郡・東条郡）シトシキリ（富山県）

35. アワエ あわい。間。時間や物や場所の間。

36. は、さりしおの発音。古い固い雪の上に軽い新雪が積るために「  
長唐雪崩（アイという）がまじえというところ」ということを簡単  
に言う、といわれている。

37. 38 「シダガ」を話者は「ガンダモシガ」（のどからの意）と言っている。

ると主張するがそうとは思われない。

39. サ 副助詞「さえ」の変化か、南魚沼郡でも使う。

40. コエラ ここら・ここいらの変化か、古語「これら」の変化か未詳。

41. ミケフミ 14参照

42. ヤネノエエノアタマ 「屋根りの上」で屋根(葺屋根)の最高部のグシ(棟木)の部分をさす。

43. ネー の名がはっきりしない。ネーの直後に「ンガ」(からの意)のような考があるようでもあり、又は「ドー・シャン ネーンド」にも見える。

44. オッカネー 危険で恐ろしい。越後佐渡・関東中部・東北地方。

45. シタガアエテル 平地の雪が少なくため、地上と屋根との高さの差が大きいこと。

46. サスカタツ サスは古語・建築用語「扱着」民家の「斜め材」「通常ちぎ木をささえる金掌状のものをいう」(「建築用語辞典」)サスカタツとはサスの勾配が強く屋根の傾斜が急で高いこと。

47. ママゴ 両県の文化。

48. ミノ ヒにはヒ葦で編んだ山みのであろう。他にフシンミノ(藁蓆簾)・マワシミノ(圓し蓆?)といつて軽い蓆蓆に服用するやうなのこんど装飾性の加わったものもあるという。

49. カサ マンジューガサ・トンガリ笠等をさうという。清水谷では雪の降シヤーナイ帽子をかぶるという。

50. マツテ 副詞マルデの変化。

51. シム 死ぬのマ行五段活用。頸城地方ではシグ。

52. シンナカ 風炉裏・地炉。「中の中」の変化。南魚沼郡湯沢町ジロ。

53. アシタダ 「まを翌日履くのを」の意。

54. フカグツ 葦で編んだ長靴型の雪中の履物。越後に多い。南魚沼郡湯沢町でフンゴミ・フツゴミと書く。

55. シタナ 火棚 風炉裏の上スミ位の高さの空間に吊した五尺四方位の木を組み合わせた格子状の棚で、冬期その他季節に、ぬれ物を上にのせたりあるいはこれに吊したりして乾燥させる器具。現在

も便利してこの家がある。

56. はっさりしたい、エンネラソパーとさこえる、詠者は足と「エ」  
ネデソパー」などという。「入れたいでさ」で、深靴の中に藁を入れて敷けば  
暖くていいのに、それを入れないでさ」の意味にさす。
57. アレシタは「履いた」の意味であろう。
58. ギョーサ 行儀作法。行儀・行儀。中野ギョーサイ、上野地方結城郡・南  
魚沼郡山形県ギョーサ、
- 59 トンデモネードコハリ 慣用句 藁フカグツの藁先端まで足先を入れ  
て履かずルーズに履くと、靴の底でさい縦の筒状の部分までが底の  
ように靴の形が崩れてしまうのをあもしろく表現した。「ヨコッテッ  
ーハク」とも言うが、前にはこれを「ギョーサガワリー」と表現し  
たのである。
60. ツマカケ 藁製雪靴の一種、爪掛け。ツマカケワラジの略か、次に  
あるオソカケと同一物か。構造は説明しにくい。三島郡・鹿沼で  
使う。
61. ダイモケ ダイモシのようにもさこえる。大持・大物。ダイモケヒキ  
(大物引き)の略か。「修繕に大材木・大石をのせて引くこと」と「北  
越智語」に出ている。
62. オソカケ ウソカケとも言う。藁製の遠足用の冬履物。わらじと  
ウソ(足の爪先と平足の上部とを包むためにわらじの上部にかぶせ  
る藁製のもの)とを組み合わせた足さき物。現在も着たの山入りに使  
くという。ウソカケ 中野城郡・花野県上田 オソカケ新潟県・高  
山県・花野県、
63. アシノケアー 足の通り。軽く歩けること。
64. アシノ 不明。「足に」か。
65. ワラグツのこと。おろろい硬い藁で編むスリッパ状の浅いはきもので  
かかとの方が鋭くなる。近寄りに使用する。通常にかかとを包むと  
めにシガラをつけた。このワラは現在も使用する。東北・花野県  
群馬県等。
66. 踏に当てる雪や旅行用の藁製の足物、シガラミ(褥)又はシブカラ

この変化か。「北越雪語」にシブカウミが書いている。南魚沼郡湯沢町で  
ルシブカウミと言った。

67. このあたりからバイクの姿が入ってくる。

68. アンゲ アンゲンのようにもよめる。注30に出る形容動詞の連用  
形である。

69. ガンネ 注19参照

70. スカリ 深雪をふんで道をつける時にカンジキの下などに更に重ね  
てはく足用形の雪中用具。ここでは木の輪を縄であんだものとなっ  
ているが、他に山竹をU字にわけたものを二つを輪状につなぎ作っ  
たものもあった。二つの(たね)輪の各々の先端に紐をつけ両手でそ  
れと撐ちながら歩いた。この紐のように紐の両端を結び輪にして首  
にかけ(手が滑る)なくてよい)で使うこととでさる。「北越雪語」に  
も図がある。スカリツはスカリと言った意か、スカリと言うものの  
意か不明。この人独特の早足なのだろうか。

71. コンゲ こんな連体形 コンガンとも。Iの64、4の68参照。

72. ワッカ 輪 新潟県、山形県、福島県、秋田県。

73. ほつさりしない。諸者は「カケツトシランカッ」と言っていると説明す  
るが、「掛けること」の意味かわからない。

74. 道をつける身振があったのであろう。

75. エワムカエ 上向 字の如大字折居の中。

76. オリイ 折居 餅屋の係りる大字の如。

77. ミチツケ 朝夕集落間の雪をふんで道をつけること、またそれをする  
人。

78. アサゲ 朝 東北地方新潟県花野県群馬県湯沢。

79. コグ コザクとも。抵抗の多い雪の中を滑るように歩くこと。氷や  
草木の藪についてと言う。全国各地。コザリは魚沼地方頸城地方米  
沢地方。

80. アエク ありく、あるくの変化。動きまわる、歩きまわる。歩行は  
アエブ・エーブという。アイク新潟県、南知多花野県、岐阜県。アーク  
信州、鳥取県、島根県。

81. エカシ エーカンとル かなり、エーカン 山梨半奈良町
82. コンスキ ぶるやいをや。枕に板をつけた除雪用具。「北越雪議」に引  
がある。「木の鋤」の变化かあるいは「木鋤」に挽手が追加したか未  
詳。コエスキ 刈羽郡、コイスキ 柏崎市 中頸城郡 柿崎町、コスキ  
三島郡 佐渡郡 長野半崎半島橋井半島石川半島橋島半、クシキ 南魚沼郡  
エスキ 佐渡郡、スゴ 佐渡郡 小井町。
83. ナンダローノー 刈羽郡 刈羽村 長身の調査者夫妻は、「断定できず半  
信半疑の時に刈羽村ではこういう表現をする」と言う。
84. ダ ダドモ (ケルども) を省略したもののか。
85. モンガ I の注 97 で説明し、理由をあらわす接続助詞。こゝでは  
「軽いでちから」の意か。中頸城郡 和田村 (旧村) の用例をこゝで挙  
げておこう。「オラトールモンガモッテヤル」(私は魚子から持て  
行つてやる)
86. エニ 接続助詞 から・ので エネとあることもある。I の注 112 参  
照
87. ハヤエ [hajε:] 早い
88. シタオ シタエオ の様にきこえる。「下へ」といい「下を」と言いなおし  
のであろう。下を空けろとは、屋上から家の側面に投げおろした雪  
を壁面から掘りのけて雪の側圧を除き、かつ戸口に明かりをとる作  
業のことで、大さな労力を要する。「雪掘り」という語はこれにふさ  
わしい。
89. ホーガ… の次に「よい」のよう なことは省略されている。
90. エタヤ いをやかえでであろう。
91. じナ ぶる 抱物多
92. コシャータ ニしらえを。終止形はコシャウともコシャアとも。II の 32,  
IV の 29 参照。
93. ツ ユール ツカワレル (桑名) の変化した形か。
94. ナカツ 村人が新りあてられて無償ですることはないかの意。
95. …「として特定の者があつた」の意味の語が省略されたのであろう。
96. エキワリ 雪割り。道路などの雪を割り除くこと。以前は春になつ

て雪が降り止むと（大概四月）旧鶴川地正全地域から人夫400人程が出勤して新落造、林道、米道の除雪をしを。これをユキワリといふ。

97. ヲカワンナー 不可能のこと。

98. セーッマカテ 言う右のであつての意か。新着は「ソエッマはモ」（そう言うけれども）と主張するが、そうはききとれない。中頭城郡では「言う」とセウナ、セッテ、セウ、セーウ、セウシ などと「そう」（新詞）と「言う」と混同した動詞がある。こゝもその影響と考えてよいと思う。

99. ヲキ [jɯ] と [jɔ] の中間の如き音。

100. コーキョー この次に「ジョ」のような音がかすかにきこえる。土が。

101. ヒナカ 半田 中群地方富山石川半田幾中頭四町のこゝは 経田の意味で半田岩城郡及び広島県。

102. アレスドモ 「それほど高くなくてよいけれども」の意。

103. マカッテ 引き受けて。う行四段のマカルの連用形マカリテの促音便形。マカス（毎市）を自動詞化して作る便利な言語。毎せられて、引き受けての意で促音という意識はない。

104. ガンギ 「ガギ」の感じもする。魚沼地にかけて接岸のところに促音とす地帯である。雁木・縁側。家屋のザシキ・チャノマ（ヨコザとも言う）、暗にはニワ（植栽をする部分）の前面に母屋から依り出しを庇の下に部分と言う。玄関から上戸をカミガンギ、下戸をシモガンギと言うことがある。カミガンギは普通中三尺余りの板敷であり、畳を敷くこともできる。屋内に入る雨や日光を防ぎ、室への通路となり、物を乾したり、子供の遊ぶ場所となつておりある。シモガンギは四尺の土の土間が多く、農具軒、冬期には薪炭などを置く場所ともなる。「北越常語」に「江戸の町にいふ座下（しな）を越後に雁木又は庇といふ」とあり。高田谷岡新潟市等で座下の庇を人道として通行しているガンギはガンギの発展した形である。「さ」とこは」によれば西郷原郡では「庇の土間たるもの」をガンギといふ。こゝしにガンギは越後佐渡、長野県下水田郡、福井県にある。

る。「越後方言考」によれば「ガキ・ガキ」という形もありという、やはり竈  
竈の庇の形が雁の字に似ているからとカンギの語源を説明した。南  
魚沼郡湯沢町でもカンギと書くが、同地では別にガギという語があ  
り、これは物体や場所にあるぎぎぎぎの形状、階段状の上下左右の  
差を意味する。カンギの語源と関係があるか。

105. ツブシタ ツブレタ (年動詞) と言うところを他動詞で語を表現し  
た。「死んだ」というところを「殺した」ということが南魚沼郡湯沢町に  
あったと思う。

106. ゲンカン GENKAN と言わなかった。

107. ナンガ ナラナイガの変化 う行者はよく脱着する。

108. オロシ 下屋のこと。オモヤ(母屋)とシモヤ(作業場などの部分)  
との主屋(本家)につけて、本家よりふくい屋根を持つ建物の部分の  
総称。玄關・流し・カンギ・坪には名所、仏壇を置く部分・物置な  
どがオロシとあることがある。次のツノモンも同じものをさす。  
語源は下ろしである。栃木県神奈川県宮崎県でも言う。

109. ツノモン ツノモノとも言う。主屋から突き出ている子で言うが。  
ツノモロ(角室)が語源と説明した老人があった。

110. オラエン 私どものあそび。この辺。語源不明 オラエンデとも。  
Ⅲの注91参照。尾張インテ近隣。

111. シタ シモに同じ、家屋をほぼ玄關を境として上と下に二分し、座  
敷・茶の間の方をカミと言うに對し、二つ(作業する部分)のある  
方をシモ・シタと言う。カミシモはつながっているが巾がややちが  
い屋根のグシ(棟)の高さもちがい、時に床の高さもちがうのか。  
明治初年までの建て方であった。

112. アジス おしと便利にさうなの意。

113. オレテ オリテの変化。

114. セバ するの未然形+バ

115. コツラ 屋根の軒の最下端・軒先。「小面」からか。甲斐郡・長  
野県下北郡でも言う。雪下ろしの雪の量が多ければ庇の上はも  
ちろん、コツラまで雪の中に埋まってしまふ。除雪して「コツラヲダ

ス」ことの困難さをここでは新している。

116. リレダケ オロシ・ツノモンをさしている。

117. クルテ クレテの変化。

118. ジョー・ジョー 旧上條村 柏崎市上条地区。

119. ウシロ 家の後ろの地面が傾斜して低くなっていて降雪に便利なこと。

120. スケル のケル、除く。

121. オモッテ 思ふと言ひ切らず、余勢を残す表現。

122. ナジョー・ネカ たいへん。どんなにか。叙述の新詞。伝聞しきことについて想像してその様をのべる表現である。下に「そうぞ」「ぞと」などの表現がくる。「なにせんにか」から生れ取といわれる「ナジョー・ニカ」の変化。刈羽郡・中頸城郡柿崎地方にある。南魚沼郡湯沢町では「ナジョー・ニカ」。

123. ナゼ なぞれ。ナジの变化。県下にはナジ・ナゼ・ナザレが広く今布し、なぞれの発生を新潟では「ナゼガツク」(究く)と言い、南魚沼郡湯沢町では「ナゼガデル」(ぬる)という。「ナジ」という語は東北指木郡群馬県吾野郡高山郷にある。

124. ミスノキリ 水を家の周囲に流しとみ池のように湛えて消雪することのできる地形の家の意。

125. カシガル 傾く う行五段の新詞。東北地方新潟群馬山梨。

126. オッタラ この辺界口でよくさきとれな。オッタラ、オル(居る)はこの地方は使わぬ筈だが、「と言つていさう」が極端にちぢまった表現であろうか。

127. イーワ エーワと言うのが普通な発音であるが標準者記号として結果上のようになつてしまふ。

128. タガタガ 新詞 老人病人酒の酔った人などが足もとがぬしかでよくおろしおろしているさまや仕事などがのろくはかどらぬさま。「和歌集」にある古語である。

129. ラコト ラコトだと云つていふようにも聞こえる。あるいはコトが終助詞的により強い新定語新えとなつてゐるか。



## 5. 冬 の 楽 し み

話 し 手

(田舎号) (氏 名) (性) (生 年)

A 高橋 真 男 大正7年

C 高橋マツノ 女 大正元年

D(田舎) 高橋 友宣 男 大正15年

D マー フエワ ヤッパリ エチバン タノシーノワ ショアグワツデショアジ  
まあ 冬は やはり いちばん 楽しいのは 正月でしょうし、

マー ショアグワツニ アルノワ ヤッパリ イロイロノ ゴケゾアカラ  
まあ 正月に 有るのは やはり 色々の 御馬也走から

ハジマッテ ギョアジニャー マー サイノカミダトカ<sup>(1)</sup> ナンダトカ  
始まって、 行事には まあ 賽の神様とか さんざんとか

マー イロイロ アリマシタガ ソコラエンカラ ハナシ ハジメテ  
まあ 色々 有りまして、 そろそろから 話しを 始めて

クンナセア<sup>(2)</sup>。

下さい。

A ソアデスネ。 マ ヤマン ナカノ コトダスケア<sup>(3)</sup> タイシタ アノ  
そうですね。 まあ 山の 中の 事だから 大した あの

オモシロエ コトモ ネアカタドモ<sup>(4)</sup> (D ハイ。)  
面白い 事も たくさんあれども、 (はい。) ムカシワ  
昔は

アレダコテネー アノ フエン ナレヤ マー サッキモ ハナシ  
あれですよ あの 冬に なんて、 まあ さっさも 話しか

デタヨアネ ナニワブシガ<sup>(5)</sup> クルノガ タノシミグレァーン ~~~~~  
おれのように 浪花節が 来るのか 楽しみぐらいの……

エマミテァー テレビヤ ラジオワ ネァーシネー。

今みたいな テレビや ラジオは 無いしはえ。

㊦ ソァーデスネー。

そうですねえ。

A ホッデ<sup>(6)</sup> ホビキテノガ<sup>(6)</sup> アッタ。(笑) オメアサンガタ……。  
それで 宝引きというのか ある。 あんまり……。

㊦ オラ ツノ ホビキワ<sup>(7)</sup> ワカリマセンエネ。  
おれし その 宝引きは 分かりませんですね。

A ホッカネー (㊦ ハー。) ハーン。  
そうかねえ。(はい) ふうん。

㊦ ソレデ<sup>(8)</sup> アノ コエキノ トシニネ (A ハー。) キタムケァーノ  
それで あの 小雪の 年にね。(はい。) 北風の

ホァワ コトシワ コヨキデ<sup>(9)</sup> ダイモケガ<sup>(9)</sup> ハヤルテァナンテ (A  
方は 今年は 小雪で 大塚が はやるよなとて

ハー。) キーテサ ダッテ コヨキダケヤ ダイモケナンテ  
はい。) 聞いてさ、 だって 小雪ならば 大塚なとて

ヒカンネァーニッテ<sup>(10)</sup> ワラフッタ コトガ アリマシタ。(A シーンー。  
引かれないうのにとって 笑われな ことが ありました。(うんうんうんの)

ソノ ホビキテノワ (笑) オラ ケーケンガ ネァー……。  
その 宝引きというのは おれは 経験が ない。

A ソァーダ<sup>(11)</sup> ホビキノ コトー ダエモケ ユータコラネー。(B ハー。  
そうさ、 宝引きの ことを 大塚と 言ったよねえ。(はい。)

アノ ムカシノ ソァー アノーッ シカクノ アナノ アイタ ゼンオ  
あの 昔の そう あの 四角の 穴の 明いた 銭を

エッペー コー アレダコテアー ヨシテサー マー エロエロノカ  
 たくさん じい あれがさ 密せておいてさ、 まあ いろいろのか<sup>(11)</sup>

アッタドモ ホーテ ナワ エッペー コショアーテテ リアーシテ ヒツケテテ  
 あったか、 そうして 縄を たくさん こしらえておいて そうして 結びつけておいて

ホーテ オヤダナンテテ ソレオ オヤン ナッタ モンガ ヒーテ  
 そうして 親を<sup>おや</sup>などと言って それを 親に なった 者が 引いて

ミナ シンバツタコテアーネー。<sup>(12)</sup> ホー ダイモケダナンテテ。  
 みんなが引っぱらねえ。 <sup>お</sup>して 大塚を<sup>お</sup>などと言って...

C ソラ ンダー オトツツァン<sup>(13)</sup> ハナシ キキナスツタンデ オマサン  
 それは それなら おとうさんは 教を 聞かれたので(あって) あんたは

ヒータ コトナンカ ネー ンデショアー。  
 引いた ことなど ないの(でしょう)。

A オラ ドキモ アリマシタコテ。(C ソアーデスカ。) ハー オラ  
 わたしたちの 頃も ありましてさ。(C そうですか。) はい、わたしの

ドキ ホレ アノ ホレ アノ アコノ エノスケノ アノ オトツ  
 頃。 ほう あの ほれ あの あそこの 伊文助の あの お父  
 ツァンヤ<sup>(14)</sup> アノ ショガ ワケアー ドキ アノ (C ソアーデスネー。  
 さんや あの 人々が 若い 時、 あの (C そうですね。)

オラ マダ アノ マー ワケアー ドキダッタ。 ワケアーッテ マー マー  
 わたしはまだ あの まあ 若い 時だった。 若いといっても まあまあ

コドモミテアーナ マー ガッコー アガッタ ジブンダガ マダ アリ  
 子ともわたいな、 まあ、 学校に 上った 時分だが、 まだ あり  
 マシタコテ。(C ハー。) ハー。 マー アノ オクノ ホアーニヤ  
 ましたさ。(C はい。) はい。 まあ あの 奥の オには

マー アレガ アッラコテ サカンダッタテ ユータコテ。  
 まあ あれが あれがさ 盛んだったと 言ったさ。

C ~~~~~ マデ<sup>レ</sup>ネー、 (ハ ハー、) ~~~~~ マシタコテ。  
 までねえ。 はい、 まいねえ。

A マー アノ ムカシヤ ホレ エマト ケゴ<sup>ア</sup>ーテ アノ タイシタ  
 まあ あの 昔は ほん 今と ちがって あの 大した

ソノ ゴラク<sup>テ</sup> モンガ ネ<sup>ア</sup>ーカッタスケ アーエノガ<sup>ニ</sup> エイツノ  
 その 娯楽といふ ところが 無かったから、 ああ、いふところが 唯一の

アッラコテ アノ ゴラクダッタコテ。 (C ソ<sup>ア</sup>ーデスネ。 ) アー。  
 ああ、その 娯楽であつたさ。 そうですね。 ああ、

C ソシテ アノ オヤガ<sup>ニ</sup> ゴ<sup>ア</sup>ーリヤ ワラジヲ エロリノ ハタデ  
 をして ああ 親の 算盤や わらじと 田舎の裏へ はなで

クミナガ<sup>(15)</sup>ラサー (A ハー。 ) アノ ムカシバナシオネ (A ハー。  
 組みとからさ、 はい、 あの 一番新をね、 はい、

) シナス<sup>タ</sup>ノオ (A ハー、) アノ ワタシナンカノ センパエノ  
 さあ、そのを はい、 あ、 いにしなどの 急ぎの

シトガ<sup>ニ</sup> ミンナ カタリナス<sup>タ</sup> (ハ ハー、) アー エー ハナシオ  
 人か みんな 語りなされた はい、 ああ、 言う 教と

キータ オボエガ<sup>ニ</sup> アリマス<sup>テ</sup> (A アー ソ<sup>ア</sup>ーダ<sup>ニ</sup>ネ。 ) コタツエ  
 聞いた 記憶が ありますよ、 ああ、 そうだね。 こつに

ハエッテテ。 (笑)

はい、こいて。

A ダモ<sup>(16)</sup> ムカシノ ショワ<sup>(17)</sup> ヨク マー アレオ トショリショワ<sup>(18)</sup> マー  
 かし、 昔の 人は よく まあ あれと 年寄り達は まあ

アノ クケズ<sup>タ</sup>エデ<sup>ニ</sup> マー エータンダ<sup>ガ</sup> エロエロナ コトオ  
 あの へへえで まあ 言ふのをか、 いろいろな ことを

シカシ オボエタ<sup>ニ</sup>モンダ<sup>ニ</sup>ネ ハー。

しかし 覚えていふね、 はい、

C ソーデスネー、  
そ)でまねえ。

A アレオ フエン ナッテ、ショアーグツガ キテ エテ ホラ オメアサン  
あれを 冬に なって 正月か 来て して ほら、あんた、  
ウチカラ デタ トシヨリショガサ アノ トマリー コラッテ ホーエテ  
家から 出る 年寄り達かさ、 あの 泊りに 来られて、そして  
コタツノ メグラデサー モトワ オエ <sup>(19)</sup> ムサドコダナンテ <sup>(20)</sup>  
こたつの まわりでさ、 昔は あい ちさ床ぢぢどといて  
ゴァーギナカ<sup>(21)</sup>ンオ ヒータ <sup>(22)</sup> モンダコテネー (B ソーソー。 )  
ものすごいのを 敷いた ものさねえ、 ( そうそう。 )  
ホエテ ソコエ エテ アノ ムカシバナシ ユーテ カサッシャエ  
して そこに 居て あの 昔 話を 言ッテ 聞かせて下ッ  
<sup>(23)</sup> ナンテ ユーテ ユート…。  
いぢどと 言ッて…。

C マー ムカシバナシワ <sup>(24)</sup> ネダッタ モンデスコテ。 (A ハー。 )  
まあ 昔話は ねだった もんです。 ( はい、 )  
トシヨリノ カオサエ ミレヤ (A ソーソーソー。 ) ムカシバナシ  
年寄りの 爺さん 見れば ( そうそうそう、 ) 爺さんを  
ネダッタ モンデス。 アノ ショワ カタル ホアー シナサルシ ( +  
ねらった ものです。 あの 人々は 語る 方を されるし、  
アーアー。 ) オラ ソノ マタ シタデ<sup>(25)</sup> ネラッタ ホアーデスエネ。  
ああああ、 ) わたしはあの まえ 下で、 ねだった 方ですよ、  
A アー ソーソーソー、 ホアーデ<sup>(26)</sup> デ キクノガネ タノシミデー、  
ああ そうそうそう、 せんで で 隣のかわね 楽しみで…。  
C デ<sup>(27)</sup> サースーナンテ ユーテ キキナガラサ (A ソーソー、 ) リノ  
で、 さあす) ちどと 言ッて 隣りぢぢからさ、 ( そうそう、 ) その

サースーガ キコエナク ナルト オヤシューワ ソッデネ (+ ハー、)  
 サースーガ 聞こえなく なると、親殿は それでね (はい。)

ア ネタナンテノデネ (4 ハー。) ハナシ ヤメナスッタンダ ハー。  
 あ 寝ななどというへでね、 (はい。) 話を 止められぬやう ない。

A ソアソアソア。 ハー ヨー アッラコラー アノ…。  
 そろそろ、 はい、 よく あれや、 あのう…。

D ソノ ムカシバナシテモ キカシテ クンナセアネ。  
 その 昔話でも 聞かせて 下さいよ。

C ハー、  
 はい。

A オラ モー ダイク ワスレツモアタドモ。  
 わたしあ も) 太命 忘れてしまったけれど…。

D オモイデノノデモ アリマセンカ。  
 思い出の思い出も ありませんか。

A アノ ヨク アレ アレラ ネッカ アノ ミジケアノデ アノ オラ  
 あの よく それ あれでは ないか、あの 短いので あのをわたし  
 (28)

エマ カンガアテ ミッ ト オモシロエカッタ オモノワ アノ  
 今 考えて みると、 おもしろかった 思うのは、 あの

ホレ ヨー トシヨリガ アノ アノー ウエカラ ナンダタカ  
 ほら 良く 年寄りか あい あう) 上から 何ぞんか

カミカラカ (笑) (心笑) アエガ<sup>(29)</sup> キタトカ シモカラ タエガ  
 上からか、 あゆか 来たとか、 下から… 魚屋 かつ

アガッテ キタトカッテ エマ カンガエレバ タエナンカ カワン  
 上って 来たとかいって、 今 考えれば 鯛 ねと 川の

ナカエ ホンネ<sup>(20)</sup> アガッテ モンダカト エマデワ マア  
 中に ほんとうに 上った 思い出とかと、 今では まあ

ムカシハナシダスアアドモ。ホエテ アノ アエト タエト  
昔話だからとけれども……。そして あの 魚と 魚屋と

ケンカシタナンテネ ブワカッテ ナーガ<sup>(31)</sup> ヨケネーガ ワリートカ  
喧嘩したんだと云ってね、 ぶっかって お前が よけないのか 悪いとか

オレガ ヨケネーガ ワリートカ エッテ ケンカ シタラ ヤナギノ  
俺が よけないのか 悪いとか 云って 喧嘩を したら、 柳の

シタデ" コチガ ナガメヲタトカ テッテ (笑) ホーテ タエワ  
下で" こち(魚)が 毟めていたとかと 云って、 そうして 魚屋は

アノ ケーサエ スルドモ ナカナカ アノ オン ナカナオリ  
あの 仲裁と するけれども なかなか あの んん 仲直りと

シネデ" ドー ショーモ ノーテ ホーテ オレガ ワリーナダテ  
しないで" どう しようも なくて、 そうして 俺が 悪いのと

ユー オレガ<sup>(32)</sup> ワリーネーテテ ソーシタラ アー コチガ  
云う 俺が 悪くさいと云って、 そうしたら ああ 魚が

ソーエタナンテッテネ アエ タエノ スル コト コチャ カマエヤ  
こう云ったんだと云ってね、 魚 魚屋の する ことは こちゃ かまいは

センテ ユータナンテ (笑) ソンガノ ハナシオ シトクチバナシ  
(悪いと 云ったんだと云う)、 そんな 話を、 一に話を

キカシテ モロアタリサ。 (笑)  
聞かせて もらったりさ、

D ソーデ"スカネー、  
そうですかねえ、

A ヨク ムカシノ シューワ シカシ アー ユー ソノ ネ ヒトクチバ  
よく 昔の 人々は しかし ああ いう その 話 一口話

ナシダドモサ ナカナカ オモシロエ ハナシ シタモンダゴテネー。(笑)  
だがさ なかなか おもしろい 話を (したものだ)ねえ。

D ソーネー。

そうねえ。

A ナンカ コー エマン ナッテ カンガエテ ミルト ヤッパリ ソシ  
なんなか こい 今に なって 秀えて みると やはり それ

ニモネー ソレアリノ ソノ マー ナンカ コノ エミオ モッテ  
にもねえ それなりの その まあ ぎにか この 意味を 持って

エルンダドモネー。(笑) ヤ ムカシノ シューワ ホンネ アレタ  
いろいろのやねれどもねえ、 やあ 著の 人々は ほんとうに あれど

アキゴトトカ ショーグツダナンテ エーバ エロエロノ ムカシバナシ  
秋夢とか 正月などの ええよ いろいろの 著者を

(33)

サッシャッタコラー。

それです。

C ソーデスネ ハー。 マー ヨー コタツエ ハエッテ キカシテ  
そうですね はい。 まあ よく こえつに 入って 聞かせて

モロータ モンデスコラー。

もらった ものですさ。

D エチバン オモイデシナル フユノ ヤッパリ アソビテ イイマスカ  
いちばん 思いあふ なる 冬の やはり 遊びと いいまスカ

タノシー ヨーナ コトテバー ナンデショーネ ソノ ジブント  
楽しい ような ことと云えば 何でしょうね、 その 時分と

シマシテワ。

しましては。

A オラ コドモン ドキヤー…。オマサンタ ドーダッタエ オンナショーワ。  
わたしたちの 子どもの 時分…。 あんたがねえ どうでした 女の人々よ。

C ガッコーエ デテル コロノ タノシミテバ オラ コラー  
学校へ 出ている 頃へ 楽しみといえよ わたしどもの 時分よ。



スキーが アリマシタスデアカー。 (A ソア スキーハ アレ アッタネ)  
スキーが ありますからさ。 そう スキーは あれ あつね。

ハー。 (A アノ ジブンワネー。 ) スキーが オカンデシタテ。  
はい、 ああ 昨年はねえ、 スキーが 盛んでしたさ、

(A スキーモ アッタシネー。 ) デ アノー ムラデ  
スキーモ あつねえ。 で あつ 村で

ヒヤクケヨアグ レア ジャ オアデショアカーネー スキー カーテネー。  
百ぐらいでは 無いで(は)かねえ スキーを 買ってねえ、

(A ソアソアソアソア。 ) ハー ガッコーノ スキーテノガ  
そうそうそう。 はい、 学校、 スキーといふが

アリマシタンダエネ。 (A アッタネー ハンコー オシテネー。 )  
ありますのです。 あつねえ、 判を 押してねえ、

ハー。 (A アッタデスネー ハー。 ) ソレ ハエテ ノタノ サンアノ  
はい、 あつねですわ はい、 ) ねえ 履いて 野田の 山王の (35)

ヤマエ (A ソアソアソア。 ) スキーノ レンシューニ エキマシタコテ。  
山へ (そうそうそう、 スキーの 練習に 行きました。

(A ホンニ ソアダッタネ。 ) センシュダナンテ ナマエ (A ハー  
ほんとに そうであつね。 ) 選考などと 知前を はい、

ソアダネ、 ) ツケテ モロアテ (+ ハー。 ) アノ タングツニ  
そうさね、 ) つけて もって、 はい ) あの 短靴に (36)

クツシタ ハエテサ (+ ソアソアソアソア。 ) ソアシテ ワタエレオ  
靴に下を 履いてさ、 (そうそうそう。 ) そうして 綿入と

ジブンデ コシアゲ シテ ミジッコ シマシタネ (+ ハー、 )  
自分で 片腰上げて いて 短かく しましてね、 はい、 )

ホアテ ソレオ キテ シバラク アレデスガ エッシューカンモ  
そうして それを 着て いはらく ちね(すが) 一週間も

ニシユカンモ サンノアーノ スキージョアーエ カヨッ カヨエマシテ  
ニ 選 闘 も 山王の スキー場へ ××× 通いまして、

グンノ スキータエクワエガ アリマシテネ…。  
部 隊の スキー大会が 行われてね…。

A ワリアエニネー エマヨリモ カエッテ アノ スキーノリナンカワ  
割合いにねえ、 今よりも かえて あの スキー乗りなどは

ハヤッテタヨアーダッタネ ガッコーデネー、 (「ソアーデスネー。」) ハー ガッコー  
流行しているようだね。 学校にねえ、 そうだねえ。 はい 学校

ーデ アノ スキータエクワエ アッタシ タイツアーノ ジカンナンテノワ  
で あの スキー大会が ああし、 作操の 時間などというのは

ホレ アノ スキーノリノ ジカンガ アッタンデスコテ ハー、  
ほら あの スキー乗りの 時間が あつたのです、 はい。

C フェン ナレバ タエソアーノ ジカンデノワ ホトシド ヤマ  
冬に あるいは 体操の 時間というのは ほとんど 山へ

スキーノリニ ~~~~~ タエネ。  
スキー乗りに ~~~~~ まねよ、

A スキーダッタネー ハー。  
スキーだつたねえ はい、

D ナルホドネー。  
なるほどねえ、

A フェノ アソビナンテーバ コドモノ ドキワ オマエサンガタ  
冬の 遊びなどといえば 子どもの 時は あなた方

オンナショワ ナンゴ<sup>(37)</sup>ダ。  
女の人々よ お手紙を、

C ハー ナンゴ オレダマ ナンゴテ エーマシテネー。  
はい さんご、 お手紙を エんご<sup>と</sup> 書いてねえ、

A オオテダマオ ナンゴ エータネ ナンゴ エータ、ソレカラ  
お手紙を さんごと言ったね、さんごと言った、それから

(38) ギンナン エッチャオーノ アソビガ アッタ、  
銀杏、 いちようの 遊びか あった、

C エッチャオー フクロニ エレテ モッテッテネー。(A ハー。) ソシテ  
いちようを 袋に 入れて 持て行てねえ、(はい。) そして

(40) カンギリナン テッテ ソレー (A ハー。) コー (A アーアーアー ソー、)  
かんぎり などと言つて それを (はい。) こ (あああああ ああ、)

(41) ソレ コーッテ トルンデス。ソレ オトサンデ トレバ ミンナ  
それを こうやって とるのです、それを 落さぬいて とれば みんな

ジブンノニ ナルンデシテネー。  
自分の物に なるのでしてねえ。

A へ アー ソンゲンノ アッタネー。ソングノ アソビ...。  
へ、ああ、そんなののか あったねえ、そんな 遊び...

C カンギリテ エーマシタ。  
かんぎりと いいました、

A カンギリトカ ナントカ...。ソレカラ ホレ アノ イ マー  
かんぎりとか なんとか...、それから ほら あの マー

ナツ マタ フエモ コー アノ ユキン ナカ アナ ホッテテ...  
夏に、また ふえも こう あの 雪の 中に 穴を

(42) アラ インテラカラ... アナエッチャオー (43) ~~~。  
あれは ちゃんというのかな 穴 いちよう ~~~。

C アナエッチャオーテ エーマシタネ。  
穴 いちようと 言いましたね、

A ソンガノ アソビダッタネカネー ネー、  
そんな 遊びであつたのであつたね、ねえ。

C ハー コー キョリ オエテ ソコノ アナエ コー エレルンデ…。  
はい、こゝ 距離を 巻いて その 穴に こゝ 入るので…。

A ホーテ エッペー アレバ コツチャ トル ソー ユー マー ルールモ  
そうして いっぱい 入れば こっちは 取る、 そう いう まあ ルールも

アッタシ ソレカラ ヒトツダケ エレレバ アト ミナ トレットカ  
あとし、 それから ひとつだけ 入れれば あとを みんな 取られるとか

ノー フタツ エレテ アト ミンナ エンペーヨーン セバ  
ねえ ニッ 入れて あと みんな 入れないように すれば

ミナ トレットカナンテ ソンガノ エロエロノ アレガ ルールガ  
みんな 取られるとかなどと そんな いろいろな それか ルールか

アッテ ソンガソノモ アッタ ネカ オンナショワネー。  
あつて、 そんなのも あつては ないか、 せの人達(人達)はねえ。

C ソーデスネー。 コノ ジューイチグツノ ミツカン ナルト ハンニョー<sup>(46)</sup>  
そうですねえ。 この 十一月の 三日に 奇ると 拝庭の

ニラエノ<sup>(45)</sup> メーエ ミンナ オリーノ コドモガ アツマリマシテネー  
に郎衛門の 前に みんな 折居の 子どもが 集まりましてねえ、

(A ハーハー。) ソーシテ ギンナン モツテッテ (A ギンナン モツテ  
はいはい。) そうして 金吾と 持って行って (金吾と 持って

ハー。) アソビマシタデスコター。  
はい。) 遊びましたですさ。

A ハー、  
はい、

D ンー  
うん、

C アー ユーノガ マー タノシミデシタネー。  
ああ いろいろか まあ 楽しみでしたねえ。

A アノ ジブン ギンナン ギンナン エケゴァー ゴセンドッタ ネカネ。  
 あの 場合は 銀杏 銀杏は 一合 五銭<sup>ア</sup>だったので、はいかね。

サンセンカ ゴセンドッタ ネカネ、  
 三銭か 五銭<sup>ア</sup>だったので、はいかね。

C ゴセング<sup>レ</sup>ラー シマシタネ。  
 五銭<sup>レ</sup>ぐらい しまね。

A ゴセング<sup>レ</sup>ラーダッタネ ハー。  
 五銭<sup>レ</sup>ぐらいだね、 はい。

C ゴセング<sup>レ</sup>ラーダッタデシヨア<sup>レ</sup>ネ。  
 五銭<sup>レ</sup>ぐらいだね、ううね。

A ハー。エケゴァーズツ カカエ アエッタモンダ<sup>~~~~~</sup>。  
 はい。 一合ずつ <sup>X</sup> 買いに 持ったものを。

C ナンカ コメー エッショー ギンナン エッショー<sup>(46)</sup>デ カエー キタナン  
 なんぞか 米 一升 銀杏 一升<sup>(46)</sup>で 買いに 米など  
 テテネー。(A ハー。) ナンダ ギンナンテヤ ターケアー モンダナ  
 と言ってはえ。 そう。 びんと 銀杏というものは 高い 物だな  
 ンテ ユーテマシタドモ…。  
 どと 言っていたけれど

A エマ ソレ ギンナン エケキロ ナナヒャクエンモ<sup>~~~~</sup> コメナンテ  
 今、は それを 銀杏は 一キログラム 七百円 米など  
 アアシモトニモ オヨバン。 (B 笑)  
<sup>X</sup> 足下にも 及ばない。

D コトシワ センリョーデスト。  
 今年は 千両ですって。

A ハー<sup>(47)</sup> ギンナンキ エエナケ ナラン。 (笑) (B 笑)  
 はち<sup>(48)</sup>に 銀杏の木を 植えておれよ ちやない。

オトコ、コドモワ マー スキーノリ フエワ マー スキーノリダッタノ。   
 男の子どもは まあ スキー乗り、 冬は まあ、 スキー乗りだよねえ、

スキーノリノヨアナ モンダッタノ。 マー ガッコージャ ホレ   
 スキー乗りのぶさ めのぶさねえ、 まあ 学校では ほら

ドッジボールダトカ ( C ハー マー ドッジボールネー。 )   
 ドッジボールとか、 はい、 まあ ドッジボールねえ、

アンナノガ アッタドモネー ハー。   
 あんなのが あったねえともねえ、はい、

C ソーデスネ。 マー ソレカラ ワタシナンカガ ガッコーエ   
 そうだね、 まあ それから わるしなとか 学校へ

デタバツカリノ コロワ ヒバチガ トコロドコロニ フタツカ   
 あからぬばかりの 頃は 現金が 毎々に ニつか

ミツグレアーシカ ネアーカラ アタル シトナンカ ソアー アタッテ   
 ミつぐらいしか さいから ある 人など せんに あつて

ランネアーデ ( A ソーソーソーソー。 ) モチローブラク   
 居ねえくて、 そう そう そう そう、 餅屋 餅屋

キタムカエブラクッテ コアー ワニ ナリマシテネー…。 ( A ハーハー。 )   
 北の都府といつて こゝ 輪に ありまてねえ。 ( はいはい。 )

ソーシテ オンナノコデモ ナンデモ アシガキタナンテ カタアシ   
 そうして 女の子で さんで 足掻きなどという 片足で

モッテ ホアーシテ アエテオ (50) ( A アシガキガ アッタネー。 ) ハー   
 もつて そうして 桐子も…。 ( 足掻きか あつたねえ。 ) はい、

アレガー アッデスコテ ゲンキ エカッタシ…。   
 あれが あれですさ、 ええか よかったし…。

A アシガキテワ アノ アンノ アスビワ…タシカ アシモケテガ   
 足掻きというのよ あの、 あゝ 遊びは… せしかに 足持ちというのが

アッタコテネー。 ヒトリガ アシ モッテ (C 笑) (D ツアー ツアー)  
あつたよねえ。 ひトリガ 足を 持つて、 そろそろ、

ホパーテ コパー コロバス ~~~~~。  
そして こう ころばす。

C <sup>(52)</sup>  
コロバシゴクラテシタネ。  
ころばしころこでしねえ。

D ~~~~~ マシタネー。  
おねえねえ。

A アノ ホレ テッケー コドモノ オメアー アノ (D アシ モタセラレテ  
あの ほん 大きい 子どもの みんな あの 足指をせられて、  
笑) アシ モタセラレテ ナンギーテ ナンギテネー。  
足を 踏ませられて、 苦しくて 苦しくてねえ。

C エラエラムラエラ…。  
ゆらゆらゆらゆらと……。

A エラエラ…。  
ゆらゆらと……。

D アレ ミンナ サセラレマシタネー。  
あれを みんな させられましてねえ。

A アー エー アスビガ アッタネー。 アシガキダカ アシモクダナンテ…。  
ああ いう 遊びが あつたねえ。 足踏さずか 足持ちだぞと……。

モットモ フエダスケ アッタコテ アノ ウンドー ジョアニ バッカ <sup>(54)</sup>  
もつとも 冬から あれださ あの 運動場に はかり

エタリ シタスケッ ソンナ モンダコテ ハー。  
いなり しねから そんな ものださ。 はい。

C ソシテ オンヤノ コドモヲ ワー ツクッテ ソコデ オラダマ  
そして 女の 子どもは 輪を 作って そこで お手あそ

シテマシタシサー。

してしまったださ。

A ソーソーソーソー。 エマノ コドモ<sup>mm</sup> ナンゴナンテ ナンゴナン  
そう そう そうそう。 今の るど<sup>も</sup> なんご<sup>ちど</sup> なんご<sup>ちど</sup>と

(55)

タッテ エマノ コドモ ワカランド<sup>ア</sup>エ。  
ま<sup>あ</sup>ても 今の るど<sup>も</sup>は 合<sup>あ</sup>わ<sup>い</sup>る<sup>らう</sup>ね。

C ワカランデショアーネ。  
合<sup>あ</sup>わ<sup>い</sup>る<sup>らう</sup>ね。

A ハー。  
はい。

C ソーシテ エマノ コドモワ アーエ モンテ<sup>(56)</sup> アソビー  
そうして 今の るど<sup>も</sup>は あ<sup>あ</sup>いう もので あそび<sup>に</sup>

デマセンモンネー。  
あそ<sup>び</sup>せん<sup>もの</sup>ねえ。

A ソノ ナンゴダ<sup>タッテ</sup> ミソーナ ジブンデ ツクッタモンダ<sup>(57)</sup>ンネー。  
その なんご<sup>ちど</sup>って みんな 自分で 作った<sup>もの</sup>を<sup>を</sup>からねえ。

C ソーソー。 オヤノ ダイジナ アツキ コッソリ<sup>(58)</sup> (A~~~~)。  
そうそう。 親の 大事な あず<sup>き</sup>さを こっそり

モケダシテ (A ハー。 ) ツクッタモンデ<sup>サ</sup>ーネー。  
持ち出して ( はい。 ) 作った<sup>もの</sup>です<sup>わ</sup>ねえ。

A ソーソーソー アツキン ナカエ ンナ エッテネー。 <sup>(59)</sup>ゼンゼン  
そうそうそう。 あず<sup>き</sup>さ<sup>を</sup> 中に みんな 入れてねえ。 全然

アスビガ <sup>(60)</sup>ケガウガネ エマノ アスビトネ。  
遊び<sup>が</sup> 遊<sup>い</sup>ま<sup>あ</sup>よ。 今の 遊<sup>び</sup>と<sup>は</sup>ね。



## 注記

1. サイノカミ 竈の神。道祖神の祭り行事。どんと焼き。餅粒集落の行事として大人たちの多により子供等も参加して行なわれる小正月行事。先ず14日夜に小正月用の小豆と煮るが、その煮え立った時に杓子で小豆を少量すくいとって15日のスミウケの行事の準備とする。当日15日朝大人たちは山に入り、竈の神の祀めのかきりの大木を切りおとし、詠者高橋真氏所宿つ、道路に近い田の上に運び、この木を心にして盃宮竹(標者をあてせる石めという)と門松・しめ飾り・わらわうず高く積んで用意する。同日夕方これを焼き、妻初めをやし、餅を焼き、昔は前夜用意した小豆を竈の神の火・煙に合わせぬ。火の煙の靡く方向で豊凶を占うことが昔はあったという。煙に合わせぬ小豆は数人の人々が最後の家に立ち寄り、それによって豊凶を占ったというこじである。これをスミウケ・スミユケと言ったという。隣郡東頸城郡松之山町のスミスリ(墨塗り)行事との関連やその民俗学的な意味等についてはまだつかぬが、
2. クンナセー 下さい。補助動詞。ナサルはこの地方の標準的な敬表現。餅粒の標準的な敬の補助動詞レベルには命令形はなく、このナセーで表現する。
3. スケー 接統助詞 か；の。段[両]の「さかい」の变化。この地方の標準的な表現。大正時代のこの詠者はもう、理刃の接統助詞「エニ」を使わぬ。
4. ネアカタ ながら。さいの終止形[ne:]に同化されている。

5. m の終は「モンデ」と言っているがもし元来い、  
6. ホビキ [hobiki] h:ではない。遊びの名。宝引。(宝は闇考)中世  
近世の正月の遊戯「宝引」の地方化しをその。福引きの一様。六本  
の組の一本にタマ(昔はいわゆる穴明き銭・現在は五月碌資など)  
を多く福びつや、それを引きあてると競う。昔は賭博的にも行  
なうという。今も老人クラブの金樂などにするところもありという。  
この語は富山岐阜三重和歌山福岡熊本各県と分布があり、語源につ  
いては「国言采覧」に、ホウは福の奥考ホウかろきとありという。秋  
田県でも福引とホビギとっている。(「秋田方言」による。) 銚子のホ  
ビキの発考はこの語の語源に示唆とよえるものがある。

7. エ 丁寧親愛を表わす助詞 I の83参照

8. キタムケー 小室の歌

9. ガイモケ 前出ホビキの別名。宝引きの様子がガイモケ(大椿・大  
物引きVの61参照)の重いのと引くに似ているので、隠語的にあ  
まりよく言っているが、新語はこの隠語を知らず誤解を笑われるの  
である。

10. ワラワツレ (愛身の助動詞連用形) が優先化している。

11. ヒツケテテ [ʃi]か[ʃi]がは、きりしな。 「付けておいて」と思われる。  
語源は「引を付ける」であろうが、文語動詞他動詞下二段活用ひ  
つけるの一様活用化しをその。参考 ヒツケル(富山県和歌山県)へ  
ツケル(岐阜)ハツケル・ハツツケル(飛騨)

12. シッパッタコテーネー シッパッタコトイネーの變化 [ʃi] > [ʃi] コテーに  
ついてはIの10、ネーについてIの83参照。

13. オトツツァン 中年以上の一家の主人を呼ぶことば。大正元年金丸の女  
姓Cが大正七年金丸のAに対して使っている。79歳の高橋虎之助  
氏に対してAはオトツツァンと呼んでいる。まゆえ気て主人として活  
動しているからであろう。いわば中年以上の家の主人を呼ぶ語であ  
る。トツツァン、ツツァンはこまより品位が下がる。

14. オトツツァン 79歳の高橋虎之助をこう呼んでいる。

15. クム 草履などをわらで編み織ること。「組む」である。南魚沼郡湯沢

町では草履やわらじに、いそはツクルと云い、藁靴に、いそクムと云う。

16. ダモ ダトモ (タケレどもに類する) の変化。

17. ショ [ʃo] 合音、こゝでは短音。

18. トシリョ [toʃoriʃo]

19. オエ [oe] おい、感動詞。ホレの変化か。「おーい」であれば [je] となると思われるが、ホレの変化と考えるとあつた。[h] 音の脱落はこの方言の特徴である。

20. ムサドコ 畳の一種。本床・野郎床に於いて、土地産のちがやヤイワスゲ (細糸なめさらん) で織った畳表を使い、藁の細縄で締め、布のへりは付けず、「へり固をかく」と言つて、単になめさるようにならぬ部分と編んだ床を言う。現在は作らない。むさ苦しい床の意と云う。ムサイ (さなない) 中頸城郡・佐渡郡・全国各地

21. ゴーギナガン すごいもの。ゴーギダの連体形 + 形式名詞ガン  
ゴギの語源は強気・豪気かと云われ、程度のはげしいことで、こゝではわるい意味に使つてゐる。刈羽郡・魚沼地方・三島郡にあり、群馬県・伊豆利島・栃木県等の他西日本にもあり。

22. ヒータ 軟いものの変化。ここは中頸城郡に於いて hi > ʃi の変化が多いのだが、これはその逆で硬いもの。ヒシの混交の少ない柏崎市田舎域も青年層で一般に「布固をヒク」と言つてゐる。

23. カッシャエ キカセカッシャレの変化か。あるいは下一段活用にはラッシャルが接続するから、キカセラッシャルの変化とすべきか。落つて聞かせるをユーラカセルと云う。カッシャル・ラッシャルは尊敬の助動詞で「ナサル」よりもなまいちと思われる。

24. ネタタ タはヤ [ra] の感じがある。

25. ネラッ こゝでは [da] より [ra] に近い。

26. テー 「で」といふ助詞で終止する。余情を残す表現。抑揚はテー。

27. サースー 著者の聞き手のお榎のこと。この語は頸城地方と奥越である、中魚沼地方はサース・サーシー・サスケ、長岡市や佐和田でサンスケ、新潟県見附市でハーイ、佐渡郡でサーソであるとい

う。佐渡では、金槌を打つことを「サソをつぐ」と言う。

「さそうろう」の變化か。江戸時代法藏勅語(幼児語)に「さそう」がある。

28. オモシロエ カツ 終止形を連用形に用いる。

29. アエ 鮎 アエ>アイ>アエ アエは津軽地方秋田県岩手県山形県青森県  
鳥取県島根県岡山県にある。アヨは山形県・岩手県。

30. ホンネ ホンニの變化 本に。

31. ナー 二人称代名詞 同語以下に於て用いる品位の低い語。中部  
地方、青森県・琉球で用いられる。古語の残存。

32. ワリー 悪く。終止形を連用形に用いる。ワアリ・ワレ(山形県)  
ワリ(東北地方・新潟県南信濃郡新井市山形県)

33. サッシャル 勅語「する」の尊敬。なさる。「さしゃる」の變化。サレルより新しく、  
それより敬意が高い。但しサッシャーと命令する場合は敬意は軽くなる。  
室町江戸期のことば。方言では関東地方北陸地方にもかれる。

34. ハンカー [hankɔ:] 判子は当文字で、語源は版行・板行でありとい  
われている。[kɔ:]の関音は「行」の関音を保存していることとされる。

35. サンノパー 山王 地名 旧野田村にあり、鶴り地区から中山峠を下  
つたところにある。

36. タングツ 当地よく使用するように着いたゴム靴の短靴。

37. ナンゴ お手玉・お手玉あそび。布の袋の中に小豆を入れその、  
ウスタビガの藁の中に小豆三四粒入れその、(かうかうと動かす)、  
エゴノキの実を布の袋に入れその、布の袋に小豆を入れその(石ナンゴ・男ナンゴと  
言う)などがある。またケンボナシの実を入れそのもあるという。その遊びを「シー  
オートル」と言うことである。「ひーあー取る」である。「日本言語地図」によれば  
新潟県中越地方から千葉県までの本を横切つて帯状にナンゴという  
語が分布し、茨城県から福島県にも分布している。江戸から出た  
方言で、語源は「何個」であろうと言う。

38. ギンナン 銀杏 餅類としては「エッチャー」(いちやう)より古いことば  
であると思うと高橋テノ氏(明治34年生れ)が言っている。後

おもしろいといふのを「ギンナンキ」と言っていることはそれと  
示す一つの例が、南魚沼郡湯沢町では大正初めエッチャーと言っていた。

39. エッチャー [ettʃɔ:] いちよう、踊城地方、南魚沼郡もエッチャー、秋田  
県エッチョ 岐阜県イカ

40. カンギリ 遊戯名 おし合っさいちようを先ずてのひろいのせついで  
そのおと上に投げりや、そのひろをひろかえしていちようをつかみと  
り自分の所有とするおまじ。語源不明。

41. コアッテ こうやっての変化が。40で言った動脈を身振でしそので  
あろう。

42. ナンテラカラ ナンテダカラの変化。何と云うのかおの意。

43. アナエッチャー この今語の中で煩悶させるおまじの新語。地上  
多くは雪上にやさしい穴を作り、遠くから互におし合っさいちようの  
実を順番に投げ入れて入つたものを自分の所有にする遊び。

江戸時代の同様の遊びに「穴打ち(穴撃)・穴一」というものがあった。  
ムクロジ・セゼ貝・小石・木の実などを投げ入れて「穴うち」と呼んで  
いたのが、銭・穴一銭を用いる様になって「アナイチ」と呼ばれるよう  
になった(日本国語大辞典)とか、又一二を争う意味の方へ語の感  
じが移ったため「穴一」とよばれるようになった(綜合民間語彙)  
という語源説がある。この地方ではいちようの実を使うことが多かった  
ためさらに変化して「アナエッチャー」の語が出来たこととあろう。

44. イン=ョー 地名 押延

45. ニラエ ニローエモン 屋号

46. テヤ と言いやの変化が。

47. ギンナンキ ギンナンノキの変化であらう。

48. エエル ウエルの変化。

49. アシカキ 子供の遊び、片足とひをしなから両手をとおす遊び。「新  
語記」にあるといふという。「旧方言語地圖」によれば甲斐地方・魚沼地  
方の特徴形、南魚沼郡湯沢町ではアシンカキ。

50. アエテ アイテの変化、両手。

50' タシカ 新語 タシカ=よりや、確実性が弱く推量の心持を持つ表

現。こうした表現は室町時代の独言の詞から見える。

51. アシモテ 片足とびの揚げている足を他の足供に持たせて遊ぶ遊び。  
「足持ち」とある。

52. ゴクラ 撥尾語 くらで、くら、ごっこ。「田舎辞書」や江戸の文書にあらわれる語。

53. ナンギーテ 名詞難儀と形容詞とし、その終止形と連用形に同じ名。  
大坂方言に似ている。

54. バッカ バカリの変化。

55. ドーエ ローエの変化。ローは推量の前助詞。「ぞ」を命ぜり活用語の終止形に接する。エは丁寧親愛を表わす助詞。

56. アーエモンデ ああいうもので、著の足供へ遊ばせナンゴなどをつける。はじめアミモンデのようにきこえたりして分りにくいことなどであつたが、刈羽郡刈羽村出身の調査者の筆の助力でこのように文字化することができた。

57. ダンネーはダモンネーの変化であらう。

58. アツキ [atsuki] 語うまい、小豆。左巻の残存であらう。本草和名・色葉豆類に「アツキ」。アイヌ語「アントッキ」。島根県アツキ。預かるも「アツカル」といっている。

59. ンはオの誤りか。

60. ガ 終助詞。ガーと訛る化することもある。感動をあらわす。

### Ⅲ. 愛知県<sup>きたした</sup>北<sup>ら</sup>設楽郡<sup>とみやま</sup>富山<sup>なか</sup>村<sup>こう</sup>中の甲

収録・文字化担当者 山 口 幸 洋

## A 収録地奥とその方言について

### 1) 地奥名。愛知県北設楽郡富山村中の甲

### 2) 収録地奥の概観

富山村は、離島を除いては日本で一番小さい村である。昭和51年1月現在の人口は、わずか274人、80世帯である。村が小さいので農協もない。

富山村は、愛知県といっても東北端にあって、長野県天竜村、静岡県水窪町に接する山間の僻地である。昭和12年開通した国鉄飯田線大嵐駅から徒歩15分であるから鉄道の便には早くから恵まれたけれど自動車の乗り入れは遅かった。佐久間ダム完成に伴ってできた湖畔道路はかなりの悪路で、自動車によって愛知県の隣村、豊根村と往来できるようになったのは昭和50年の県道「津具——大嵐停車場」線の開通まで待たなければならなかった。

富山村は、佐久間ダムの人造湖の奥部の一角に位置する。大嵐駅は静岡県水窪町地内にあるが、周囲に民家は戸数もなく、大嵐駅直前の吊橋を渡ったところが、静岡、長野、愛知の三県の県境地奥である。村は佐久間ダムによって、その半数が水没しているとはいえ、あまりにも小さいが、それだけ隔絶した存在であるともいえる。これらのことから、この地奥の特異性は想像されるであろう。

この地方には天竜村坂部の「熊谷家伝記」をはじめ、あちこちに似たような書物があることで知られており、富山村にも「田辺年代記」という田辺家伝来の記録がある。それによると、正平元年(1346)に紀州田辺の人、田辺藤四郎国量が最初に市原に住んだ。市原は、同じ富山村となっている。漆島、河内(水没)、大谷等とともに、「熊谷家伝記」に記されている生々しい事件の主舞台となっているが、それらによってわかる通り、この地方は当時の武士達が集団をなして、「世を忍び、名を忍んで」移り住み、切り開いた安住の奥地であった。たとえば現在の富山村在住の全戸が祖先をたどっていけば、150年前



の古い家につながるともいう。見方にもよるが、村の全戸がおそらく南北朝時代の武士の集団の子孫達だといえるかもしれない。

### 3) 収録方言の特色

#### ① 方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

この地方の方言は「遠三信国境地帯方言」として、ほぼ独立した区画名称を与えて良いと思われるが将来の課題であろう。少なくとも、愛知県富山村、豊根村、長野県天竜村、静岡県水窪町、佐久間町は、ほとんど共通する特色を持ち、この地域を愛知的、長野的、静岡的とし三分割するのは容易ではない。又、この地域を一括して三県のどれかに属せしめると結論づけることも不可能である。やや有力な見方としては「非愛知的」であることもかもしれないが、富山、豊根を非愛知的というならば、奥三河の広大な地域「北設楽郡」全域も、非愛知的と言わなければならなくなると思う。そのようなわけで区画上の位置を一言でいうのはなかなかむずかしい。

隣接諸方言との関係としては、長野県天竜村坂部と殆ど同一方言と考えられる(坂部方言を詳細に調べていないので決定できないだけである)。次に天竜村平岡。富山村では現在も、動詞過去形の～ツが健在であるとは天竜村より、静岡県水窪町方言の状態に近いと思われる。しかし、～ツが天竜村で比較的使われなくなったのは最近だろうから、この違いは本質的なものではない。富山村方言が水窪と異なり、天竜村に近いという最大の特徴は、「連母音の融合」があるという点である。

#### ② 音韻上の特色

アイウエオ順のモーラ表と、標準的な音声をしめす。

|   |   |   |   |   |    |    |    |   |         |    |
|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---------|----|
| ア | イ | ウ | エ | オ | ヤ  | ユ  | ヨ  | ワ | ウエ (ウオ) | ウヤ |
| カ | キ | ク | ケ | コ | キャ | キュ | キョ |   |         |    |
| ガ | ギ | グ | ゲ | ゴ | ギャ | ギユ | ギョ |   |         |    |
| サ | シ | ス | セ | ソ | シャ | シュ | ショ |   |         |    |
| ザ | ジ | ズ | ゼ | ゾ | ジャ | ジュ | ジョ |   |         |    |
| タ | チ | ツ | テ | ト | チャ | チュ | チョ |   |         |    |

| ツァ     |   |   | ツォ     |   |        |    |    |    |    |
|--------|---|---|--------|---|--------|----|----|----|----|
| ダ      |   |   | デ      | ド |        |    |    |    |    |
| ナ      | ニ | ヌ | ネ      | ノ | ニャ     | ニュ | ニョ | ネエ | ネヨ |
| ハ      | ヒ | フ | ヘ      | ホ | ヒャ     | ヒュ | ヒョ |    |    |
| バ      | ビ | ブ | ベ      | ボ | ビャ     | ビュ | ビョ |    |    |
| パ      | ピ | プ | ペ      | ポ | ピャ     | ピュ | ピョ |    |    |
| マ      | ミ | ム | メ      | モ | ミャ     | ミュ | ミョ |    |    |
| ラ      | リ | ル | レ      | ロ | リャ     | リュ | リョ |    |    |
| ン (撥音) |   |   | ッ (促音) |   | ー (長音) |    |    |    |    |

具体音声について東京語と異なるものを個条書き的に述べる。

まず、母音では、ウ列音の母音が私には異様に感じられる。それは私などのウが〔u〕であるのに対し、当方言のは唇を横に張り気味に強く構える〔ɯ〕(但し、丸めない)であることによるからだと思う。

次に全般にこの方言には、いわゆる母音無声化が少なくない。語末あるいは、無声子音の音節の前の、ギ、ク、シ、ス、チ、ツ、ヒ、フ、ビ、プの母音が有声音として発音されるわけであるが、その「有聲化」が特別に強いように感じられる。これはかなり耳につく特徴であって、同じようにそれが「有聲化」あるといわれる名古屋方言、大阪方言よりも強いように感じられる。

次にこの方言では /ɑi, ɔi/ などのいわゆる連母音が融合する傾向が認められる。その具体的な姿は /ɑi, ɔi/ とともに〔e:] となる場合と、中間的な発音ともいうべき〔œ:] 又は〔ɛ:] (/ɑi/ の場合)、〔ø:] (/ɔi/ の場合) となる場合と、更にそれらの中間的な発音で、表記に迷うような発音とがいろいろにまざって実現する。又、融合しないで〔ɑi〕〔ɔi〕と実現することも少なくない。/ɑi/ にくらべて /ɔi/ の方が融合しないことが多い。〔œ:] 〔ø:] のような発音は、私には、「中途半ばな回帰」の現象ではないかと思える。もっとも「回帰」という現象が必ずしも新しいかどうかということとは別問題である。〔ɑi〕〔ɔi〕とも〔e:] ともいう傾向がずっと以前からあって、いつでも回帰しようという「抑え」を持った融合、

それが連母音の融合（広義の連声化）の本質であろうと思う。

そのような現象に類似の融合化（広義の連声化）は、ほかにもある。それは助詞「は」（ワ）、「を」（ウオ）の接続や、用言仮定形における融合発音である。「山は」「山が」が、ヤマーと発音され、「道は」「道を」が、ミチャー、ミチョーと発音され、「行けば」「良ければ」が、イキヤー、ヨケリヤーと発音される「融合化」も、いつでも、ヤマワ、ヤマウオ、ミクワ、ミクウオ、イケバ、ヨケレバと回歸しうる特性を持った「融合」であるように思われる。ただし習慣上、仮定形はいつも融合形で実現しやすく、「を」の場合は融合しにくいということは、方言的理由によって存在すると思う。

拗音は、そのような「融合形」や、擬音語や、漢語外来語に主として認められる。

なお、〔æ:〕は、アエー、〔kæ:〕は、カエー、〔ø:〕は、オエー、〔kø:〕は、コエー、と表記する。〔ɛ:〕と〔e:〕は区別せず、エーと表記した。

馬瀬良雄氏は、論文「天竜村 — 大河内の方言」（民俗資料報告書『大河内の民俗』所収）のなかで、富山村方言にきわめて近いとみられる天竜村大河内の母音について、/e/は殆ど〔ɛ〕（広いエ）であり、/o/は〔ɔ〕に近いと述べておられる。富山村方言も結局そうではないかと思われるが、確かな観察をしていない。なお、テープで聞いた限りでは、/o:/という音声は、明らかに〔ɔ:〕であると感じられることはある。

当方言の単独の/e/は、語頭において本来〔je〕（本稿においてはイエと表記した）であるが、感動詞や間投助詞のエーは〔e:〕と発音されている。また、「上」「（灸を）すえる」など/ue/という連続においては〔juwe〕〔suweru〕のように〔we〕と発音されることが多い。そのほか「買え」「食え」のようなワ行四段動詞の命令形、「買える」「食える」のようなワ行四段動詞の可能動詞形において〔we〕が実現する。それらは、ウエと表記した。次に助詞「へ」は〔we〕と発音されることが多く、時には〔uwe〕のよ

うに実現することもある。

次に単独の /o/ は、語中で [wɔ] と実現する。[ɕiwo] (塩)、[kawo] (顔) の如くであるが、これは、音韻としては [o] と対立しないから、ウォというモーラを認めることは不適当である。また、助詞「を」がかなりはっきりと [wɔ] と発音されていることも、「語中」という範ちゅうに含まれる事柄だと思う。

モーラとして掲げた、ワ [wja] は、「買えば」に当る、カウワーのような例から拾ったものである。

モーラ表のうち、同様の特殊条件下で実現するものが他に、ツァ [tsa] (例、ショーイツァ (正一さん))、ツォ [tso] (例、ゴツォー (ごちそう))、バビブバボ (擬音語等を除き、一般単語では促音の後でのみ実現する)、ラリルレロ (語頭に実現することが一部外来語以外は極度に少ない) 等がある。

が行音子音は、語頭で [ɸ]、語中で [ɾ] である。

ハ行音子音は、ハヒフヘホを通じて [h] でそれもやや有声気味な場合が多く [ɦ] とみられる。当録音中でも [hata] (畑)、[ɦitotsu] (一っ)、[ɦutari] (二人)、[ɦokā] (ほか) 等が観察される。

なお、ハヨリッダデのような濁音の前の促音が数回観察されたのは注目すべきことで今後掘りさげて調査したい。

### ③ 文法上の特色

敬語は殆どなく、文末部のネーの使用なども殆ど近年の習得とみられる。文法的な特色は静岡県水窪、佐久間地方とし、意思未来推量のズ、推量のラ、ズラ、伝聞のチョー、過去のツ(ズ)等がある。詳しくは、拙稿「水窪 — 語法にみる遠州山地方言のサンプル」(「国語学」34所収)にゆずり、ここでは過去形のツについてのみ記しておく。

この方言で、動詞過去形を、行ッツ、見ッ、飛ンズのようにいうこともっとも注目すべき特徴で、行ッタ、見タ、飛ンダのいいかたど、ある種の区別を持っていることは重要な事実である。又、行ッタッツ、

見タッツ、飛ンダッツという語法もある。私は、この三種類のいいかたについて、それを「過去形」(〜ツ)、「完了形」(〜タ)、「過去完了形」(〜タッツ)であると見て、論文「静岡県方言の過去表現について」(国語学75所収)に発表したことがある。また、ツ・タには他称(ツ)と自称(タ)の区別もからんでいるとみられるふしがある。この見解は、日本語におけるテンスの考察に問題を投げると考えられるが、タとツの区別、更に、タッツの意味については、エ言の話手の意識調査がむづかしいので、自然談話の観察から、たくさん事例を採集して帰納的に解決することがもっとも望ましいので、今回の資料のように、〜ツ、〜タ、〜タッツの事例が沢山採集されたことは、たいへん喜ばしい。

なお、形容詞過去形、指定助動詞過去形、動詞否定過去形については、すべて〜カッツ、〜ダッツ、〜ナズであるのが本来の姿である。もしそれを、〜カッタ、〜ダッタ、〜ナダという例があれば、それは、脱方言的な実現の例であり、決して、〜ツ(ズ)と文法的に区別されているわけではないと思う。この点を誤解する向きがあるといけないのでこの場でお断わりしておく。

その他、前記拙稿「水窪」に述べなかった特徴としては、「知らないで」「歩かないで」に当たるいかたを、シラデ、アルカデという発音をあげることができる。

語法というより、慣用法というべきかもしれないが、ムカシムカシ(昔々)とか、ワラッテワラッテ(笑って〜)とか、オーキーオーキー(大ま〜)のような「たたみ語法」が非常に盛んである。

次に、語順は決して常に順序正しくない、ということも今後の課題として研究する価値がある。

次に、動詞連用形を用いる名詞的用法がかなり活発である点を指摘したい。タベがワルイ(食事が少ない)、オキがワルイ(早く起きられない)、カミサマオがミ(神様を拜むこと)、オミギアゲ(お神酒をあげること)等の例がみられる。

次に「語法」の特色として、相手の話を聞く人は、しほりに「そう

だそうだ」というあいづちを打つことが多いことをあげることができる。

## B 録音内容の概説

近頃の村の老人達は、「見知らぬ顔」の他郷人と話をするときは、すぐ言葉を改めて、ていねいなことばを使い（標準語使用を含む）をしやすい。土地の人には、地のことばで打ちくだけて話をさせることはむづかしい。しかし、なかにはどんな「世間者」が来ようと方言でしか話せないという人や、相手がだまっていとも一人でしゃべるというような人もいる。私は、方言のあるがままの飾らない会話の場に遭遇するために、そのような人を探ることがひとつの方法であると考えていたし、一方、できるだけ硬くならず、又、エセず、話し手の気持ちに負担をかけない形をとろうということで、機関を頼らない民間ベースで、ひまで達者な老人を探した。そして老人と話すには、たとえ方言が通じないことがあっても、私は私の方言で話をするのが相手に警戒をさせない、ひとつの方法と考えた。

今回は、なにぶんにも話者の選定が幸いしたと思う。第一部は、話好きなおばあさんと、おじいさんという組合せである。このとき私は別のおばあさんを呼びに行っていて席を外していた。

第二部、三部は、この別のおばあさんを加えての三人の話し合いである。私は同席していたが、できるだけ黙っていた。なお、新子のおばあさんは唄唄の名手であるとのことなので第三部では特別にお願いして唄も入れてもらっている。

第一部～第三部を通じて、特に話題に注文をつけなかったせいか、これとあってまとまった「面白い話」は出なかったけれど、家族、近所隣りの、いわゆる日常の身近雑事の話し合いに終始している。しかし、これはこれなりに「自然」な村の日常生活、村人達の物の考え方をうかがい知るための一面をよく写していると自負するものである。

録音年月日 昭和50年9月6日  
録音場所 愛知県北設楽郡富山村中ノ甲 武田初夫さん宅(全部)  
話し手 (第一部)

武田ふさ(女) 明治32年 同所生れ農業従事、他所での経験なし。方言保有度かなり強いと思うが、間投助詞ネーの使用は近年の習得か?。言語明晰。

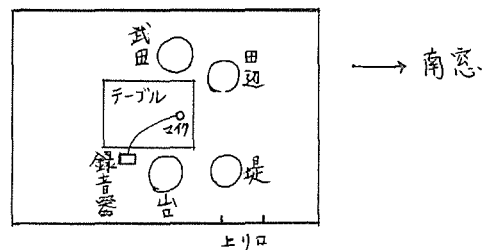
田辺正一(男) 明治34年 富山村川上生れ農林業、他所での経験なし。方言保有度申しぶんないと思うが、ことば使いはおとなしく、乱暴ではない。村会議員と、短期間村長の経験あり。今、老人クラブ世話役。

(第二部)(第三部)

武田ふさ、田辺正一 と

堤ふじよ(女) 明治39年 富山村市原生れ農業従事、他所での経験なし。現在、中ノ甲在住。方言保有度申しぶんなく話し好き。性格もほがらかで気さく、歌好きで、盆唄等の他古く民謡の名手という。

録音環境 武田ふささんの自宅居間で、きわめて自然な雰囲気のもとで行なわれた。第二部、三部における話者の配置は次のようである。



# 1. 身辺雑事

話し手

(略号) (氏名) (性) (年)

A 武田 ふさ 女 明治32年 富山生まれ

B 田辺 正一 男 明治34年 "

D 武田 初夫 男 大正4年 富山生まれ <但し 部分的にのみ登場>

E 武田 やす子 女 大正13年 " < " >

B コノ「マゴモ オレ」「サクマノ ガッコー デルトキニ「マー イ  
この 孫も 俺、 佐々木の 学校を 出るときに まあ 今

〜マントコワ シ「ゴトカ ネーデ「ヨソイ デ「チャー ナラン シメ  
の所は 仕事か ないから よそへ 出なくちよ ならない、(い) (ま

〜「チャー オマエ「キテ クリョー「ヨッ チュッテ イタガ ソース  
いには お前は 来て くれ よ、 て言、て いなか、(まは) (ま

〜「ルデー ッテ

行くから、て (言った)

A マー ナガイキョー セ「チャー ソンダッ チュッテモ「マー「アン  
まあ 長生きを せねば 損なて言、ても まあ あん

〜マリ ソー「アリケンヨーニ ナルマデ「イキチャー カナン「イエー  
まり (ま) 歩けないうちに なるまで 生きては かなわないう

B「マー ソイデ「モ ハチジュー「グレーマジャー「イキ「チャー ソイデ「  
まあ それでも ハチ ぐらい までは 生きねば それで

〜モ モッテ「ネー ハチジュー「グレーマジャー「マー ソイデ「モ ヒ  
も もってね ハチ ぐらい までは まあ それでも

〜「チジュー「イエー サン「グレーカラ ノ アミノ「メオ イエー「トッ  
七十 ね 三 ぐらいから の あめの目を ね と、



～ツイタ ヒター タイゲー ハチジューノ コエガ カカラニャ  
 ついた 人は ないかい ハチの 声が カカラねは  
 「  
 シナンソ  
 死なないぜ」

A 「ホーカイエー マーオレ イヤ  
 どうかね まあ俺

B オバーワ モー ハチジューノ ヨ＝ ナッダッツラ  
 あはあは もう ハチの 余は なったたり

A 「ダレー  
 誰？

B スキノ オバーイエー  
 杉乃 あはあ ね

A 「ソーダッツライエー アノオバーワ オバーモ オジーモ イクラ  
 そうならたり ね あのあはあは (いや) あはあも あじいも いくど

サッソク シンダドエ シダデオジーワ アノ オカシー センソ  
 早くも、早く 死んだよ 下の あじいさんは あの あかしい センソ

～クッチューダカイエー  
 くっというのかね

B 「アー ゼンソクダッツイエー  
 あい センソくならたよ

A 「コーユー トコノ コダツニ スワッテテ セーテ セーテ ソレ  
 こい... 所の こたつに 坐って (せきを) し せきをし それ

～ッキリイエー 「ヨルー ソレカラ シダノオバーモ アイ ヒトリ  
 つきりね 夜、 それから 下の あはあせんも ×× 一人

～バカ シダニ オイテモ ショーネーデ 「ハツガ ユウエデ ツレ  
 ばかり 下に おいても しかたがないから 初夫が 上へ 連ね

～テ コニャー 「ヒ」オ アブンネーッテ ツレテキテ オイテ 「チャ  
て 来なくては 火が 危ない って 連れてきて あいて 茶

～ンマノ アノ ムコーノ 「ズ」ニ ネケーテ オイテ 「ションベ」ー  
の間の あの 向いの 隅に 寝かして あいて 小便

ヒーテオキ アノ 「ハ」ッ 「オ」キテクリョー ヨッ チューモンダデ 「オ  
いて 起き...、 ああ 初夫よ 起きてくたしていいの... 表

～キテ ションベン 「タ」レー モッテキテ ヒーラシテ ネケーテ  
きて 小便を(するの)に たらいを 持ってきて (小便を)させて 寝かして

ヤッタラ 「ド」ーカ セツナクテ ショーネーニ ロクシンガン ク  
やたら どうか(何故か)せなくて(苦くて) しかたがないから 六神丸 を

～リョー ヨッ チューモンダデ ソレオ ノ マシタライエー 「ソーヤ」ッ  
くたして いいの... それを 飲ませたら ね そうや

～タラ ベー アサ ベー シンダッタエ アンケニ サッソク シ  
たら もう 朝 もう 死んだって言ったよ あんなに 早速に 死

～ンデモ「イエー」 サッソク シンダッタ  
人でもね、 早々と 死んだ

B ハチジューグレーダナ  
ハチ ぐらいだな

A 「ド」ーモ ハチジューグレー ナッタモ シレン 「エー」 ソレカ キ  
どうも ハチ ぐらいに なったかも しれないよ、ねえ、 それか (気性の)

～ツイオーバーデ 「マス」 アスビー ヤナイカ ムラナカ アルキヌイツ  
強い おはあさんで まさ 遊びに たべ... おは内を 歩きぬいた

～ガイエ  
がね

B 「ア」ー 「ソー」ダッ ツ「イエー」 「ソー」ダッ ツ  
あ、 そうならんね そうならん

A 「エー キツイ オバー ダツツドイ 「イエー ソレガ ママ ムカシ  
ねえ 気の強い お婆 たらなよ ね それか まず 昔

〜ッカラ アンマリ ナニカ ヤリツケン オバーダカ ナンダカ  
かじ あんまり 何か やりつけない お婆 なのか 何か

コドモガ アノ オレノ コドモワ ヘー デカク ナッツカ  
子供が あの 私の 子供は しう 大きく だんか

リツヨントーモ ミズクニントーモ ショーネー サカリテ 「イッ  
りつて達も みずくに達も 困る さかりて いく

〜ラカ アトー オッテ アリッテモ ミリャー エートモヤ ソレ  
らか 後を 建て 歩いてモ 見れば 良いと 思えば それ

〜オ ソ ワリヤイ コニ ナラッ コネーエ アソビー イク コホ  
を × わりあい 吾に たらすに 遊びに 行く、 子守

〜リー イッテ 「ホンホン ホンホン イッテシマウ 「マー メシテ  
りに 行く、 ホンホン (ささや) 行って (まじ) まあ 御飯

ナケチャー コンダイ

たけちや (第2) 来ないよ

B 「アー ソーソーソーソー  
あゝ やい

A アノ コドモー ミツケンテダイ  
あの 子供を みつけたいから (子供の面倒を見ることに悩んでいるから)

B アー コドマー スクナカッタデイエー  
あゝ 子供は すがたがた かじね

A 「エー ソイテ ミツケンテ オリャー マタ 「リッチャントーカ  
えゝ それで 見つけてないから 後には また リッちゃん達か

コケチャー コマル ソレーマタ ミズクリントーモ カタッテ  
やうい(倒れ) 困る それに又 みずくり達も 一緒に

コ「テ」チャー コ「マル」トモ「ッ」テ ウ「チ」デ「ン」 ナ「ン」ノ デ「ー」＝モ「」 ソ「ニ」ナ  
倒れては 困る と思っ 家 何に つけても そんな

ニ「コ」ト「ー」 オ「シ」エ「タ」リ「イ」エ「ー」 イ「ク」ラ「カ」 ニ「ヤ」ケ「オ」 ヤ「ッ」タ「リ」セ「リ」ヤ「ー」  
ことを 教えたりね いくら 炊事 や、たり つかは

ア「レ」ダ「ン」 ワ「リ」ヤ「ー」 フ「＝」 ナ「ラ」ッ「ト」 ケ「ッ」コ「ー」 ア「サ」 オ「キ」テ  
あ、で、か 割合 苦に 知らずに け、こ、 朝 起きて

メ「シ」ョ「ー」 フ「ッ」テ ヨ「ガ」 ア「ケ」ル「ト」 メ「シ」ョ「ー」 フ「ッ」テ ケ「ッ」コ「ー」  
飯を 食、て 夜か あ、り、と 飯を 食、て け、こ、

ス「ズ」シ「ー」 マ「ニ」 ア「ス」ビ「ー」 「ポ」「ン」「ポ」「ン」 「ポ」「ン」「ポ」「ン」 カ「サー」 モ「ッ」テ  
涼しい 内に 遊びに さっさと 傘を 持って

イ「ッ」チャ「ッ」テ ド「ー」モ「」 コ「ド」モ「ワ」 「ク」「ニ」ナ「ラン」モ「ン」ダ「ッ」ツ「エ」  
行っては どうも 子供は 苦にならないもんだっ、たよ

B コ「ド」モ「ワ」 ヒ「ト」リ「ダ」「ッ」タ「デ」「エ」「ー」  
3人は 一人 ち、ち、からね

A 「オ「ー」 オ「レ」ガ ヒ「ト」リ「ッ」キ「リ」 ヒ「ト」ナ「ッ」タ「モ」ン「ダ」「デ」「サ」 ワ「リ」エ「ー」  
うん 和が 一人、サリ 成人した ので かりあ

「ク」「ン」ナ「ラ」「ン」モ「ン」ダ「デ」「ア」ノ 「ハ」「ツ」オ「ジ「ー」ノ」 オ「バ「ー」ワ」 ナ「ン」ダ「ッ」ツ  
若に 知らない から あ、初 お爺の あ、は、 何ならん

～ガ「エ」 コ「ド」モ オ「ト」コ「」 オ「ン」ナ「ノ」コ「ワ」 ヒ「ト」ツ「モ」 ナ「カ」「ッ」チ「ョ「ー」モ」  
よ る、哉(といは) 男(いわ) 女 の子は 一人も つか、た、う、な、から

～ン「ダ」「デ」 オ「ト」コ「ノ」 コ「バ」「ッ」カ「タ」「ッ」ツ「モ」ン「ダ」「デ」  
男の るは、かり、た、た、ので

B 「ア「ー」 ソ「ー」タ「ッ」ツ「ガ」エ「ー」  
あ、 う、なら、ね

A 「エ「ー」 ヨ「ッ」タ「リ」ト「カ」 オ「ト」コ「ノ」 コ「ガ」 ア「ッ」テ ヒ「ト」ネ「メ」チ「ョ「ー」ガ」  
え、 四人とか 男の 3人、か、あ、て 肩、た、て、い、た、

「マズ」 「ハツガトー」 「ハツガ」 オレオ ガ 「ハツオ」 ウンダトキニ  
まず ××××× 初夫が (俺を)× 俺が 初夫を 産んだときニ

「マズ」 ヨーサ オケーコサマカ ムコーニ 「サンシツツテ」 アツテ  
まず 夜じゆ) おかいにさま か むこうに 参室(いじに) あつて

「カッテ」 キテ ミリャー コー ヤッチャー カンゴイ ネブツチャ  
飼つて(世話とい)いて(おれを)にへ) けいふみかか こう けいふ(子守)籠へ 眠つては

〜 コー ヤッテテモ オバー コノコワ 「ネーッ」 タデー オイテ  
こう やつていても お婆さん この子は 寝みちから そへ置いて

ネテ クリョーエ オレガ 「クリャー」 「カッテ」 「フリャー」 ミルデ  
寝て くれ よ 初夫が 初夫は 私か(かいに)飼育して(こへまは) 見みち

「イーデッ」 タラ 「ウン」 ナクテモ<sup>(3)</sup> オモイデナッテ ソノ 「ハツデ」  
良いかうて言ふら じん 泣いては 声いかにな、て その 初お爺

〜ノ オバーワ 「メ」 オ ハナサナンスワ アカンホーウオ ソイデ  
の お婆は 目を 離せながらよ 赤く坊を そわて

ハツオジノ オバーワ マタ ヒトモ ケッコナ オコリバーデー  
初お爺の お婆は 秋 人とも 良、 怒りお婆で

ドージカラ キタ オバーダ「チュ」エ デマズ「ネブ」 コーヘー  
に(家)が 来ん お婆を(い)いよ やび ます オ× こうも

ヨーサ ネブツチャー カンゴノ ヘチー アノ 「クルミカンゴノ」  
夜じゆ) 眠つては 籠の ふちに あつて くらみ籠(子守籠)の

「ヘチー」 コンナコト シチャ「エー」 ネブツツガ「ソレデモ」 「マン」  
ふちに こんなこと してはね 眠、たか そわて ま

「オキデテ」 オバー 「イーデ」 ネテクリョー オレ ナ「キャー」  
た 起きていて お婆さん 良いかう 寝てくた 俺 泣いては

ミルデ イーデエッテモ「イエ」 モモイデ「ミル」テ ドーシテモ  
見みち 良いかうわ、て言ふら 可哀想だから 見みち どうしても

「<sup>コ</sup>ネ「<sup>イ</sup>チー<sup>(4)</sup> ミッ「<sup>カ</sup> ス「<sup>テ</sup>ノ「<sup>オ</sup>バ「<sup>ー</sup> ドー「<sup>カ</sup> 「<sup>モ</sup>リ「<sup>オ</sup> ツ シー  
寝ず<sup>ニ</sup>いて ミッ(人々)「<sup>カ</sup> ス「<sup>テ</sup>ノ「<sup>お</sup>婆さん どう「<sup>か</sup> 子「<sup>字</sup>「<sup>を</sup> × ヤリ

〜ツ「<sup>シ</sup>「<sup>デ</sup> イ「<sup>ヤ</sup>「<sup>タ</sup>「<sup>カ</sup>「<sup>エ</sup>ー イ「<sup>ヤ</sup>「<sup>タ</sup>「<sup>カ</sup> サ「<sup>ッ</sup>「<sup>ハ</sup>「<sup>シ</sup> ミ「<sup>ッ</sup>「<sup>コ</sup>「<sup>ナ</sup>「<sup>イ</sup> 「<sup>ス</sup>「<sup>ト</sup>  
つけ<sup>ない</sup>から い「<sup>や</sup>「<sup>た</sup>「<sup>の</sup>「<sup>か</sup>、<sup>ね</sup> い「<sup>や</sup>「<sup>た</sup>「<sup>の</sup>「<sup>か</sup>、<sup>ね</sup> さ「<sup>っ</sup>「<sup>は</sup>「<sup>り</sup> み「<sup>よ</sup>うとし<sup>ない</sup> 「<sup>ス</sup>「<sup>ト</sup>

〜「<sup>ク</sup>「<sup>=</sup> 「<sup>ス</sup>「<sup>ク</sup>「<sup>=</sup>「<sup>ヤ</sup> リ「<sup>ッ</sup>「<sup>ヨ</sup>「<sup>カ</sup> ショー「<sup>ネ</sup>ー「<sup>セ</sup>ー「<sup>ッ</sup>「<sup>チ</sup>「<sup>ュ</sup>ー「<sup>エ</sup>ー 「<sup>ケ</sup>「<sup>ッ</sup>  
「<sup>ク</sup>「<sup>=</sup> 「<sup>ス</sup>「<sup>ク</sup>「<sup>=</sup>「<sup>ヤ</sup> リ「<sup>ッ</sup>「<sup>代</sup>「<sup>か</sup> し「<sup>か</sup>「<sup>が</sup>「<sup>た</sup>「<sup>い</sup>「<sup>さ</sup>「<sup>っ</sup>「<sup>て</sup>「<sup>き</sup>「<sup>う</sup>、<sup>ね</sup> け「<sup>ッ</sup>

〜「<sup>コ</sup>ー 「<sup>カ</sup>「<sup>サ</sup>ー モ「<sup>ッ</sup>「<sup>テ</sup> 「<sup>ホ</sup>「<sup>ッ</sup>「<sup>ホ</sup> 「<sup>ホ</sup>「<sup>ッ</sup>「<sup>ホ</sup> 「<sup>ア</sup>「<sup>ス</sup>「<sup>ビ</sup>ー イ「<sup>ッ</sup>「<sup>チャ</sup>「<sup>ッ</sup>「<sup>ヲ</sup>  
こ「<sup>う</sup> 傘「<sup>を</sup> 持「<sup>っ</sup>「<sup>て</sup>、<sup>さ</sup>、<sup>さ</sup>「<sup>と</sup> お「<sup>び</sup>に<sup>に</sup>、<sup>し</sup>「<sup>ら</sup>「<sup>ち</sup>「<sup>ら</sup>「<sup>た</sup>

〜「<sup>ガ</sup> アン「<sup>キ</sup>「<sup>ナ</sup>「<sup>ッ</sup>「<sup>ヲ</sup>「<sup>タ</sup>「<sup>イ</sup> 「<sup>エ</sup>ー 「<sup>ハ</sup>「<sup>イ</sup>  
か 気「<sup>楽</sup> 「<sup>た</sup>「<sup>ら</sup>「<sup>た</sup>「<sup>よ</sup>、<sup>ね</sup> も「<sup>う</sup>

B 「<sup>ア</sup>ー「<sup>ソ</sup>ー「<sup>ソ</sup>ー「<sup>ダ</sup>  
あ「<sup>ゝ</sup>、<sup>そ</sup>「<sup>う</sup>「<sup>だ</sup>

A ソー「<sup>ヤ</sup>「<sup>ッ</sup>「<sup>テ</sup> 「<sup>ア</sup>「<sup>ソ</sup>「<sup>ビ</sup>ー イ「<sup>ッ</sup>「<sup>チャ</sup>「<sup>ッ</sup>「<sup>ヲ</sup> 「<sup>ア</sup>ー ショー「<sup>ナ</sup>「<sup>カ</sup>「<sup>ッ</sup>「<sup>ツ</sup>  
そ「<sup>う</sup>「<sup>ち</sup>「<sup>て</sup> お「<sup>び</sup>に<sup>に</sup>、<sup>し</sup>「<sup>ら</sup>「<sup>ち</sup>「<sup>ら</sup>「<sup>た</sup> どう「<sup>し</sup>「<sup>よ</sup>うも「<sup>も</sup>「<sup>た</sup>「<sup>ら</sup>「<sup>た</sup>

ハツ「<sup>オ</sup>「<sup>ジ</sup>「<sup>ノ</sup> オバ「<sup>ー</sup>「<sup>ワ</sup> 「<sup>ア</sup>「<sup>ス</sup>「<sup>ビ</sup>ー ア「<sup>リ</sup>「<sup>カ</sup>「<sup>ナ</sup>「<sup>ン</sup>「<sup>ズ</sup>「<sup>ワ</sup>「<sup>イ</sup>「<sup>エ</sup> 「<sup>ア</sup>ー  
ハツ「<sup>お</sup>「<sup>爺</sup>「<sup>の</sup> お「<sup>婆</sup>「<sup>は</sup> お「<sup>び</sup>に<sup>に</sup>、<sup>い</sup>「<sup>ち</sup>「<sup>が</sup>「<sup>た</sup>「<sup>ま</sup>「<sup>ら</sup>「<sup>た</sup>「<sup>よ</sup>

チョ「<sup>ッ</sup>「<sup>ト</sup>「<sup>モ</sup> 「<sup>ア</sup>「<sup>ス</sup>「<sup>ビ</sup>ー イ「<sup>ク</sup> オバ「<sup>ー</sup>「<sup>デ</sup> ナ「<sup>カ</sup>「<sup>ッ</sup>「<sup>ツ</sup>「<sup>エ</sup>ー 「<sup>ホ</sup>「<sup>ン</sup>「<sup>=</sup>「<sup>モ</sup>  
ち「<sup>し</sup>「<sup>も</sup> お「<sup>び</sup>に<sup>に</sup>、<sup>い</sup>「<sup>く</sup> お「<sup>婆</sup>「<sup>で</sup>、<sup>た</sup>「<sup>ま</sup>「<sup>ら</sup>「<sup>た</sup>「<sup>よ</sup>、<sup>金</sup>「<sup>に</sup>「<sup>も</sup>

ドー「<sup>ジ</sup>ー イ「<sup>カ</sup>「<sup>ナ</sup>「<sup>ン</sup>「<sup>ズ</sup>「<sup>ワ</sup>「<sup>イ</sup>「<sup>エ</sup> 「<sup>ア</sup>ー ト「<sup>シ</sup>「<sup>カ</sup> イ「<sup>ッ</sup>「<sup>タ</sup>「<sup>ラ</sup>「<sup>エ</sup> ム「<sup>カ</sup>  
ドー「<sup>じ</sup>「<sup>(家子)</sup>「<sup>へ</sup>、<sup>い</sup>「<sup>ち</sup>「<sup>が</sup>「<sup>た</sup>「<sup>ま</sup>「<sup>ら</sup>「<sup>た</sup>「<sup>よ</sup>、<sup>手</sup>「<sup>か</sup>、<sup>し</sup>「<sup>ら</sup>「<sup>た</sup>「<sup>ら</sup>「<sup>ね</sup>、<sup>昔</sup>「<sup>は</sup>

〜「<sup>シャ</sup> ドー「<sup>ジ</sup>ー イ「<sup>ッ</sup>「<sup>タ</sup>「<sup>ッ</sup>「<sup>ツ</sup>「<sup>カ</sup>「<sup>ナ</sup> 「<sup>ア</sup>ー 「<sup>イ</sup>「<sup>マ</sup> ウ「<sup>チ</sup>「<sup>デ</sup> オ「<sup>ガ</sup>「<sup>バ</sup>「<sup>ー</sup>  
ドー「<sup>じ</sup>「<sup>へ</sup>、<sup>い</sup>「<sup>ち</sup>「<sup>た</sup>「<sup>た</sup>「<sup>も</sup>「<sup>の</sup>「<sup>た</sup>「<sup>か</sup>「<sup>ね</sup>、<sup>ま</sup>「<sup>あ</sup>、<sup>今</sup>、<sup>家</sup>「<sup>で</sup>、<sup>拜</sup>「<sup>め</sup>「<sup>は</sup>「<sup>い</sup>

「<sup>イ</sup>ー「<sup>テ</sup>「<sup>イ</sup>「<sup>カ</sup>「<sup>ン</sup>「<sup>ヨ</sup>「<sup>ッ</sup>「<sup>チ</sup>「<sup>ュ</sup>「<sup>ッ</sup>「<sup>テ</sup> サ「<sup>ッ</sup>「<sup>ハ</sup>「<sup>シ</sup> イ「<sup>カ</sup>「<sup>ナ</sup>「<sup>ン</sup>「<sup>ズ</sup> イ「<sup>カ</sup>「<sup>ン</sup> オ  
良「<sup>い</sup>「<sup>か</sup>「<sup>う</sup>、<sup>い</sup>「<sup>ち</sup>「<sup>が</sup>「<sup>た</sup>「<sup>ら</sup>「<sup>い</sup>「<sup>よ</sup>「<sup>っ</sup>「<sup>て</sup>「<sup>き</sup>「<sup>う</sup>、<sup>さ</sup>「<sup>っ</sup>「<sup>は</sup>「<sup>り</sup>、<sup>い</sup>「<sup>ち</sup>「<sup>が</sup>「<sup>た</sup>「<sup>ま</sup>「<sup>ら</sup>「<sup>た</sup>「<sup>よ</sup>、<sup>い</sup>「<sup>ち</sup>「<sup>が</sup>「<sup>た</sup>「<sup>い</sup>、<sup>あ</sup>

〜「<sup>バ</sup>ー 「<sup>メ</sup>「<sup>ッ</sup>「<sup>ショ</sup>ー ウ「<sup>チ</sup>「<sup>ワ</sup> 「<sup>デ</sup>「<sup>ナ</sup>「<sup>ン</sup>「<sup>ズ</sup>「<sup>エ</sup> ハツ「<sup>オ</sup>「<sup>ジ</sup>ー「<sup>ノ</sup> オバ「<sup>ー</sup>「<sup>ワ</sup>  
婆「<sup>さん</sup>「<sup>が</sup>、<sup>~~~~~</sup> 家「<sup>と</sup>、<sup>い</sup>「<sup>ち</sup>「<sup>が</sup>「<sup>た</sup>「<sup>ま</sup>「<sup>ら</sup>「<sup>た</sup>「<sup>よ</sup>、<sup>お</sup>「<sup>爺</sup>「<sup>の</sup>、<sup>お</sup>「<sup>婆</sup>「<sup>は</sup>

B ダカ オシナシュー ウチ= イルト ホント シゴトバツカシダ  
おが 女の人 は 家に いると 本当に 仕事ばかりだ

~テエー シゴトバツカシダ オシナシューワ  
からね 仕事ばかりで 女の人

A イエー アノ ケンイッ ツァ シントコエー ダレノ カカーンダツツ  
ねえ あの 健一さんのところへ 誰の あかみさん になられた

~ラエ ソノ ココノ オバート ドージノ オバート キョーデー  
ううか その この お婆さんと ドージの お婆さんと 兄弟

~シューテ ケンイッ ツァ シントコエー ヒトリイッタ オバーカ ア  
て 健一さんのところへ 一人 行った あはあさんか あ

~ツチョーワイイエ ケンイッ ツァ シントケ<sup>(5)</sup>ー ソノ オバーカ ケン  
った そうだよ 健一さんの所へ そのあはあさんが 健

~イッ ツァ シノ カカーカ キタキナラ チョーガエー マンダ  
ーさんの あかみさんが 来るときに ねえ そうだね また

イキテタ チョーガエ オリャー サッパシ シランカ  
生きてた そうだね 俺は さほり 気がないか

B ソースルト ナミツタサノ ナンダナ  
ううと ナミツタサ(人々)の 何だね

A カカダカエ  
あかみさんだね

B アー ツネサブローサンジャネー アノー ケンイッ ツァ ノ オシ  
あ、 常三郎 さん ではない あ、 健一さんの あい

~ー= アタル  
に ああ

A ソノヒトガ マンダ ナンダ チョーガエ ドッカ ケンドー オ  
その人が また 何だ そうだね どこか 奥道を

トール ミチミツ＝ ウチカ アッテイエー アッテー ソレカ  
通 道下は 家が ある ねえ ある それか

～ラ ケンイッ ツアノ オバーカ マンダ オカーカ ケンイッ ツア  
ら 健一さんの お婆か また あかみさか 健一さんの

～ノ カカーガ ワカーテ キタチューモンダテ ドッカ コー  
あかみさんが 若くは 来たというの？ どこか こゝ

ナナメ＝ オリチャー イッテエー ソーヤッテ ナンダチョーワ  
ななめに 下りては 行ってね そうして 何で？ どうぞ

～イエ ケンイッ ツアノ ウチオ ヘルトコノ ミチ ウチカ ア  
ね 健一さんの 家を 入る ところの 道 家が ある

～ッメラ ソコニ トシヨリノ オバーカ ココノ オバーワ ドン  
んなら ここに 年寄りの お婆か この お婆は どん

～ナ オバーダシランカ ソノ ケンイッ ツァントコノ オバーワ  
な お婆か 矢張りかい その 健一さんの所の お婆は

マンダ イキテツッソツチューカイ  
また 生きていた、というよ

B ホホー  
ほほ

A 「アー ソーイッテ ケンイッ ツアノ オバーカ イマハナスガイエ  
あゝ そう言て 健一さんの お婆か 今 話すかね

B 「アー ホーカ  
あゝ どうか

A 「アー ソイデ 「キョーデーダッ チョー  
あゝ じゃあ 兄弟 なんぞ

B 「アー ソーダソーダ  
あゝ じゃあ じゃあ



A 「コ」ノ 「コ」ノ オバート アノ 「ケンイッ」ツァノ オバート ア  
 ここの ここの お婆と あの 建一さんの お婆と あ

〜「シ」ーノ オバ「ガ」 「ジュ」ーヨニン キョーデー シュ「ー」カ° アッ  
 の 衆の お婆か 十四人 兄弟衆か あ

〜チャーウエ  
 っては ね

B 「ソ」カイ  
 そうかい

A 「ア」 ソレタ「モン」タ「デ」 フ「ロ」ガジャ「ネ」ー フ「ロ」セ「ット」カ ナント  
 あ、 それでから フロガ ではない フロセ(地名、秋老虎)とか 何とか

〜カ ユーホーエ「モ」 イッ「タ」ッ チョーセ 「イ」フ「タリ」モ 「ア」 オトコ  
 い、 おへも 行った そうなせ 何人も あ、 男

〜シュ「ー」ノ キョ「タ」ッ チュ「ー」 シト「モ」 アッ「チョ」ー「ワ」  
 衆の キョタ(人形)、って、 人も あ、な、そうな

B 「ウ」ン 「ソ」ー「ソ」ー「ソ」ー「ソ」ー「タ」  
 うん そうな

A 「エ」 ソーユーシト「モ」 アッ「チョ」ー 「ジュ」ーヨニントカ アッ「チョ」ー  
 え、 そうい人も あ、な、そう、 十四人とか あ、な、そうな

「キョ」ーデー シュ「ー」カ°  
 兄弟 か

B 「ソ」ースルト ナ「モ」 ソー「タ」ッ ツラ「カ」ナ「ー」 「ド」コ オー「カ」ワイ イ  
 そうすると 何と そうな、な、ろ、か、ね どこ 大川へ 行

〜フ「ノ」モ ソイジャ「ー」 オラントコノトモ イッ「タ」ッ ツラ「カ」イ ト「ー」  
 くのも じゃ、って、は 俺の所の と、も 行ったろ、か どう

〜モ ソー「タ」ッ ツラ「イ」ヤ  
 も そうな、な、ろ、な

A 「ソーカソーカ  
そいそい

B ソノ カネオオバーオ オイテッタダ「イエー」 「オラントコノモンニ  
その カネオ お婆を 置いて行ったんね 俺ん所の者に  
「ツイテ  
ついで

A 「ソーカソーカ  
そいそい

B カ「ゾオジー」ノ コダカ ナンカダ「カデ」  
カゾお爺の 子に 何かで

A 「ソノ カーカ<sup>(6)</sup>カラ コケーダ「カ」 コッカラ カーカミダ「カイ」イ  
その 川上(家子)から ここへ だか ここから 川上 だかへ して  
〜ッヲ オバー「モ」 アル「チョー」エ  
つた お婆も ある そうだ

B 「アー ウチカラ コケー「キ」タタ  
あゝ 家(川上)から ここへ 来たのね

A コケー キタダ「カイ」 ソノ オバー「モ」 ハツガソーユガボ「ヒョー」ニ  
ここ 来たのかい その お婆も 初夫がそう言いか 墓標に  
「アル「チュー」ガイ  
ある そうだ

B 「アー アノ オトノ トーン オトノ トン オトノト カイテ  
あゝ あの おトノ(人々) おトノ おトノと 書いて  
イッヲ モン「ダ」エ  
行った もんだよ

A 「エー「ソーユー」シトガ アノ ア「チ」ニ ボ「ヒョー」ニ アル「チュ  
えゝ そいゝ 人か あの あ、ちに 墓標に ある、と

へーガ<sup>イ</sup> エー  
いよ ね

B アー ソーソーダ オト<sup>ー</sup>カ ヨワカ<sup>ン</sup> タナー ヤエ<sup>ク</sup>ホ<sup>ノ</sup> ソー  
あゝ いざね お父か 弱からんね ハ事久保の いざ

~ヤッテ ナンダ<sup>ッ</sup>ツゾ<sup>ッ</sup> アノ イッショ<sup>ー</sup> -----  
やゝ 何な<sup>ッ</sup>たせ<sup>ッ</sup> あの 一生

A ソーカソーカ ソーユヤー ハツガ ソノ カーカミカラ キツヒ  
いざいざか いざいざは<sup>ッ</sup> 初夫か その 川上 から まな

へト<sup>ガ</sup> アルフーデ アノ アッ<sup>チ</sup>= ホ<sup>ヒョ</sup>ー= アルッテ  
人か あま様で あの あゝ、<sup>チ</sup>に 墓標に あゝ、<sup>し</sup>

B アー ソーソーダ ソシダ<sup>モ</sup>ンダ<sup>テ</sup> ナウ イコ<sup>イ</sup>タ<sup>テ</sup> ソノ  
あゝ いざねいざね いざね<sup>から</sup> 名は(名を<sup>つけ</sup>るとき) 動いたから その

シタ<sup>デ</sup>ノ オトノサオ ナンダ<sup>ッ</sup>ツゾ<sup>ッ</sup> アノー オトノ<sup>ッ</sup>チュッテ<sup>(8)</sup>  
シタデ(家号)の おとノ さんを 何な<sup>ッ</sup>たろう あの おとノ、<sup>て</sup>いじ

ナオ ツケ<sup>タ</sup>ッ ツワイ ココ= イキ<sup>タ</sup> オバーガ イコ<sup>イ</sup>タ<sup>ッ</sup>テ  
名と つけた<sup>ッ</sup>い ここに 生きた お婆か よく 動いた、<sup>て</sup>

へエー ソノ オジ<sup>ー</sup>ガ アノー カラダン ヨワカ<sup>ン</sup> シモ<sup>ン</sup>ダ<sup>テ</sup>  
ね その お爺か あの 体か 弱からん<sup>て</sup>い

ナンショ イコ<sup>カン</sup>デ ショーナカ<sup>ッ</sup> タダイ 4カ<sup>シ</sup>ダ<sup>モ</sup>ンダ<sup>テ</sup>  
とにかく 働か<sup>な</sup>て<sup>く</sup> 困<sup>ん</sup>た よ 若<sup>だ</sup>から

A アー ソーカソーカ  
あゝ いざか いざか

B ゴ<sup>ダイ</sup>カ ロ<sup>フ</sup>ダイ サキズ<sup>ラ</sup>イェ  
五<sup>代</sup>か 六<sup>代</sup> 前<sup>な</sup>ろ<sup>う</sup>よ

A ソーカソーカ ウ<sup>ー</sup>ー サ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ニ</sup> ソノ ボ<sup>ヒョ</sup>ーヤナ<sup>イ</sup>カ シラ  
いざか いざか 俺は さ、<sup>ハ</sup>ハ<sup>ニ</sup> その 墓標や何か、 矢<sup>さ</sup>

ハッガ<sup>ハ</sup> ハッガ<sup>ハ</sup> マズ<sup>マ</sup> ボンメー<sup>ボ</sup> ッチュ<sup>ツ</sup> ヤ<sup>ヤ</sup> ボヒョー<sup>ボ</sup> ウォ<sup>ウ</sup> ギレーナ<sup>ギ</sup>  
 ないか 初夫か ます 金前、ていば 夢標を きれいな  
 ゴー<sup>ゴ</sup> キンデ<sup>キ</sup> ケッ<sup>ケ</sup> コー<sup>コ</sup> フイチャ<sup>フ</sup> ーエ<sup>エ</sup> マジ<sup>マ</sup> マズ<sup>マ</sup> カミ<sup>カ</sup> サマオ<sup>サ</sup>  
 どうきんてい け、こい 拭いてはね ちん ちん 神様を  
 ソー<sup>ソ</sup> タ<sup>タ</sup> エー<sup>エ</sup> カミ<sup>カ</sup> サマノ<sup>サ</sup> オカゲ<sup>オ</sup> タ<sup>タ</sup> ワエ<sup>ワ</sup> ケッ<sup>ケ</sup> コー<sup>コ</sup> ソノ<sup>ソ</sup> ナナオ<sup>ナ</sup>  
 どういね 神様の おかげな、よ け、こい その ×××  
 タ<sup>タ</sup> ナノ<sup>ナ</sup> ナニョー<sup>ナ</sup> ケッ<sup>ケ</sup> コー<sup>コ</sup> フイテ<sup>フ</sup> シマッ<sup>シ</sup> チャー<sup>チャ</sup> ボンメー<sup>ボ</sup> ー<sup>ー</sup>  
 棚の 何を どうと 拭いて しまっは 金前にほ  
 ナン<sup>ナ</sup> ショ<sup>シ</sup> カミ<sup>カ</sup> サマ<sup>サ</sup> オガム<sup>オ</sup> アサモ<sup>ア</sup> ドコ<sup>ド</sup> イッ<sup>イ</sup> タト<sup>タ</sup> モヤー<sup>モ</sup>  
 とにかく 神様を 拝む 朝も どこへ 行ったと思ふは  
 カミ<sup>カ</sup> サマ<sup>サ</sup> オガ<sup>オ</sup> ミー<sup>ミ</sup> イフ<sup>イ</sup>  
 神様を 拝みに いく

B アー<sup>ア</sup> イー<sup>イ</sup> コンダ<sup>コ</sup> アノ<sup>ア</sup> ナンノ<sup>ナ</sup> ケンチャ<sup>ケ</sup> ワ<sup>ワ</sup> ドーモ<sup>ド</sup> マー<sup>マ</sup>  
 あゝ 良きことなり あのう 何の とうも まあ  
 ウラント<sup>ウ</sup> コジャ<sup>コ</sup> ー<sup>ー</sup> ヘー<sup>ヘ</sup> ヨメガ<sup>ヨ</sup> マツルコト<sup>マ</sup> シテル<sup>シ</sup> ダイ<sup>ダイ</sup> マ<sup>マ</sup>  
 俺の所では もい 嫁か(御前)祭ること してるんだ (女の  
 ツランガ<sup>ツ</sup> アノ<sup>ア</sup> ショ<sup>シ</sup> テウ<sup>テ</sup> チャー<sup>チャ</sup> ヨメガ<sup>ヨ</sup> ネー<sup>ネ</sup> ウチャー<sup>ウ</sup> オレ<sup>オ</sup>  
 のうちは) 祭らないか、あの 始めのうちほ 嫁か (素)ないうちほ 俺が  
 ー<sup>ー</sup> ガ<sup>ガ</sup> マツリ<sup>マ</sup> サー<sup>サ</sup> オレガ<sup>オ</sup> オラント<sup>オ</sup> キニャ<sup>キ</sup> ー<sup>ー</sup> ゴドモガ<sup>ゴ</sup> ヘー<sup>ヘ</sup>  
 祭り ... 俺が 居ないときには 子供か もい

チャント<sup>チャ</sup> ソーユ<sup>ソ</sup> フセオ<sup>フ</sup> ツケ<sup>ツ</sup> テ<sup>テ</sup> アルモン<sup>アル</sup> タデ<sup>タ</sup> コドモガ<sup>コ</sup>  
 ちゃんと どういう 癖を つけて あふのてい 子供か

A アー<sup>ア</sup> コドモヤ<sup>コ</sup> ソレカラ<sup>ソ</sup> ウラン<sup>ウ</sup> キンジョ<sup>キ</sup> デモ<sup>デ</sup> オレガ<sup>オ</sup> マツ<sup>マ</sup>  
 あゝ 子供や それが 俺の 近所でも 俺が 祭  
 ツツガ<sup>ツ</sup> イマ<sup>イ</sup> ジャー<sup>ジャ</sup> ハッガ<sup>ハ</sup> オレデ<sup>オ</sup> ナケ<sup>ナ</sup> ニャー<sup>ニ</sup> ッ<sup>ッ</sup> テユ<sup>テ</sup> ワー<sup>ワ</sup> エレ<sup>エ</sup>  
 ったか 今では 初夫か 俺が 加へれば、と 言ふよ

「アー マツルモンダテエー サー アタマカ イデーシ ヘータイ  
あゝ 祭る から ぬ さあ 頭が 痛いし 兵隊  
～ウエ コドモカ イッテ イッペンニ 「サシニン イッタダ」エ  
へ 子供が して 一度に 三人 行ったんだよ  
ヘータイウエ 「イエー ソノルスチャー オジーガ オレガ オカ  
兵隊へ ねえ そのうすには お爺が 俺が 拝む  
～ムッテ オガミヌイテ フレタ オジーガ  
って 拝みぬいて くれた、 お爺が

B 「アー ソーダツ ツ アー ソーソー  
あゝ そうなんだ あゝ そうさ

A オジーガ オガミヌイテ フレタガ ソレカウ ナルタケ 「イマー  
お爺が 拝みぬいて くれたか それから 今ほ  
オレガ カミサマグレーワ オガミエルモンダテエー オチャー  
俺が 神様ぐさには 拝むことができたものだからね お茶を  
カエテ 「オガムドーチュヤ イーッテ オレガ オガムデ イーッテ  
替えて 拝む かって言えは 良いて 俺が 拝むから 良いて  
ソーイッテ ドーシテモ オガマセエナンス」 ( B 「イーワ  
そうって どうしても 拝ませ得なからた 良いわ

～イ) ウジガミサマヤ センゾサマヤ ウブスナサマワ オレ  
氏神様や 先祖様や 産土神さまは あれ

～ガ アッチデ オガムガイ センゾサマラ ハツダツタ  
か あちで 拝むさ 先祖様(のこへは) 初文なんだ

B 「アー ソノホーガ イーダ  
あゝ その方が 良いのな

A テメーテ  
自分て

B 「アー ソノトーリ 「オラントコデモ ヨメガ ハエー ヤルコト＝  
あゝ その通り 俺の 所まで 嫁が とう やること

A 「アー 「ソーダ」ソーダ」 「ドコデモ ソーダ」デ「エー  
あゝ しょうしょう どのへも しょうからぬ

B サッパリ オヤノセワワ ヨメガ ヤラチャー 「ヘー 「ドコデモ  
さっぱり 親の世話は 嫁が やらねば とう どのへも

ソーダ「ガ」 「ドコデモ ソーダ「ガ」 オヤノ セワワ ナンダワイエ  
しょうが どのへも しょうが 親の 世話は 何なよ

ヨメガ ヤルモ「ンダ」デ「エー  
嫁が やるもんからぬ

A 「アーアー アタリマエタ「デー  
あゝ 当り前なから

B アー ソーヤリャー マタ トシガ ヨッテ＝ マタ ヨメ＝  
あゝ しょうねば 又 年が 寄ってか 然 嫁に

ヤッテ モラウダ「キタ」  
やて しょうなけな

A 「ソーダ」ソーダ」 イソコ「オーバーモ ナイカ フジンカイノ」 ナ「エー  
しょう しょう 磯子お婆も 何か 婦人会の 何に

～セ「 ヤルトキ「チャー ナ「カヤ 「コーヤッ「テテ オレト イソコサ  
× やるときには 何か こうやって 俺と 磯子さん

～ト コッチ「ジャー ヤッテ ウラント「ケー ヨー 「デ「テキテクレテ  
と こっちでは やて 俺のとこへ よく 出てきてくた

「デ「テキテクレテ ガッ「コイ イッ「ショ＝ イッ「テエー ワスレ「エン  
(Refraction) 学校へ 一銘に 行ってぬ 忘れられない

～ガ「エ コ「ケー 「デ「テキテクレテ ドーユーモ「ン「ジカ  
よ こへ 出て来てくれ どういうもか

B 「ナ」ガ 「ツ」アツカ 「ツ」アツカ タウカッ ツエー  
何か 血圧が 血圧が 高くなぬ

A 「ハ」ヤク コ「ロ」ント シン「ダ」ダ「デ」エー バ「カ」ナコトシ アツ「ク」モン「ダ」イ  
早く ころんと 死ぬなんだからね ほかのことか あ、た、も、ん、よ

B 「シ」ョン「ナ」イ アノ 「キ」ョー「デ」ー シュー ミ「ナ」 ジュ「ニ」ョー「カ」 「シ」  
しかなない。あの 兄弟 は 女は 寿命か 短

〜カ「カ」ッ「ツ」 ソイ「デ」 「イ」ソワ ナ「ガ」イ「キ」ョー シ「タ」ホー「ダ」デ「エ」ー  
がからた、それで 磁石は 長生きを しな方だからね

ハ「タ」ラク「シュ」ー ウ「チ」ジュー 「ケ」ッ「コー」 シン「ジ」ャッタ  
働く 衆 けっこう 死んじゃった

「アー「ド」ーモ ----- 「ド」ーモ (9)  
あ、どうも どうも

D オ「ア」ツォーゴザイマスー  
お暑う ごさいます

B ゴッ「ツ」ォーシ ナッ「テ」 -----  
ごさいますに ねえ

D 「ヨ」クマス キテフレ「デ」イェー  
よくます 来てくれました

A キ「ノ」ーノ ヒト「ガ」イヤ キ「ノ」ーノ ヒト「カ」 「タ」ダ ヒトリ「デ」 ヨッ  
昨日の 人 がね 昨日の 人 が 不在 一人で 寝

〜テ フレ「タ」ラ オッ「カ」ナイ「デ」 コトワッ「ト」モッ「タ」ラ 「シ」ョー イッ「ツ」ア  
て ぐねね 恐いから 断わりうと思えね 正一さん

〜カ キ「タ」 \*  
か 来た

E オ「ア」ツーゴザイマス 「ド」ーモ  
お暑うございます (田中さんに)

B オ「アツーゴサイマ」マ - - -  
あさう さいまつ

D 「マス」 イ「キル」エ キョー「ワ」  
ます 湿気るね 今日ほ

B 「ア」 イ「キル」エ ウ「レシカ」ッ「タ」 ミンナ ヨ「ンベ」 シンジンセテ  
あゝ 湿気るね うれしかた みんな 昨夜 信じて

クレタラ 「ア」メ「カ」ー キ「ノ」 カ「エル」ジ「ブン」ニ「ヤ」ー 「ク」ルニ「ヤ」ー  
くだら 雨か 昨夜 帰る頃 には 来るには

ナンダッ「ツカ」  
何なにか

E 「キ」タッ「ツカ」  
来た、け

B 「マ」ース オ「ツキサマ」デ コリヤ 「フ」リヤセンゾ ナンチュッテ  
ます お月夜で これは 降らないぞ カビと言ふ

ナニニ 「ジュ」ニジ「ブンカ」ラ「サー」 ハジメテ 「フ」トイテ「イエ」  
なに 十二時頃から 始めて 降っておいでね

D 「ア」 オ「ツキサマ」ダッ「ツカ」エ 「ソ」イエ オレモ 「カ」イエ<sup>(11)</sup> ヘー  
あゝ お月夜 なにかね そうさ 俺も 給湯に 入る

〜ルトキニ「ヤ」ー 「マ」ース ホシバ「カ」ダ「ン」 マス コリヤ オシメリヤ  
時には ます 星ばかりなか ます これは お湿りは

ヘー ナイダ「チャート」モッテ カナシュ「デー」 イタラ「イ」ヤ 「ナ」ニ  
ないんだな と思ふ 悲しくて いえね 可

「ハ」ルカ サンシツ イテ デ「レ」ルン ナ「ッ」タ「ラ」イエ 「ナ」ンカ オチ  
長く 蚕室に いて 出たコよに カ、たらね 何か 落ち

〜ダス「ワ」イエ  
なすんわね



B 「アー ソーダッ ツラ<sup>レ</sup>イエー  
あゝ そうなるな、ね

D 「ジューイチジ<sup>レ</sup> 「チョ<sup>レ</sup>ットスキ<sup>レ</sup> キタ<sup>レ</sup>ッ  
十一時 ちよと すきに(雨が)来た、た

B アー 「ジューイチジ<sup>レ</sup> チョ<sup>レ</sup>ットスキ<sup>レ</sup>ダッ<sup>レ</sup>ツ オレ 「ジューニ<sup>レ</sup>ジント  
あゝ 十一時 ちよと すきに来た 俺 十二時の時

〜キ<sup>レ</sup> 「オキタ<sup>レ</sup>ラ ドーモ 「フ<sup>レ</sup>ッテ<sup>レ</sup>  
に 起きな、 どうも 降、女から

D 「アー ソーカソーカ ----- \*  
あゝ じゃ、じゃ、

A 「ナ<sup>レ</sup>カ ガ<sup>レ</sup>「コーノ<sup>レ</sup> キューリョーシツ 「ナンチューダカ アノー  
何か 学校の キーロー室 何と云うのか あゝ

「ウシロ<sup>レ</sup> = ベンジョ<sup>レ</sup>ダカ ナンダ<sup>レ</sup>カ 「タ<sup>レ</sup>ッタ 「タ<sup>レ</sup>ッタエー マタ<sup>レ</sup>「  
後、に 便所とか 何と云うか 建てた 建てたね ね

ガ<sup>レ</sup>「コーノ<sup>レ</sup>  
学校の

B 「ホーカエ  
じゃ、かね

A 「ア<sup>レ</sup> アノー 「ナ<sup>レ</sup> 「シュエカイジョ<sup>レ</sup> チューダカ ツブ<sup>レ</sup>ッタトコ  
あゝ あゝ 何 集会所、というのか 所、女所の

〜ノ 「ウシロエ ヨソノ ダイワサダ<sup>レ</sup>タイ 「ソー ジャネーカエ  
後へ 他所の 大工 さんだよ じゃ、ね、はいか?

B 「ホーカエ  
じゃ、かね

A 「オー 「マズ 「ナイカ ベンジョ<sup>レ</sup>ダカ オチャー ワカストコ<sup>レ</sup>ダカ  
い、 ね、 何か 便所とか 大工を わかす所とか、

ツ「ッ」タ「ワイ」エ

作った よ

B ア「ホー」カ オレ 「ナニ」シロ キョ「ネン」 「ナンニ」ー 「ウ」ントー「カイ」  
あ、 どうか 俺 なにしろ 去年 何に 運動会

イッ「タ」キ「シ」 イ「キ」ソ「メ」ン「ダ」

行ったきりで 行きつけないのだ

A 「ウ」ントー「カイ」 イエー

運動会 ね

B 「ア」ー 「ジュ」ーガ「ツノ」 イッ「カ」ダ「カ」 (A 「ア」ー 「ソ」ー「カ」)  
あ、 十月の 何日 にか ( ああ、 どうか )

A 「マ」ー コト「シャ」ー イ「キ」ャー シ「エ」ント「エ」 ア「ノ」ー ヨ「コ」バ「ヤ」シ「ノ」  
まあ、 今年は 行くこともできやしないよ あの時 緑林の

「ヒ」コー「キ」 オロ「スト」コ「ダ」チョー「ッ」 チュー「デ」

飛行機 を おろす所(へリ着所)がどうなってるから

B 「ア」ー ソ「コ」ジャー ショ「アラ」メー 「ト」ショー「リ」シュー「ワ」 「イ」キャー  
あ、 そこでは 仕方あるまい 年寄り衆は 行きは

〜シントー

しないぜ

A ト「シ」ョ「リ」ャー コ「ショ」ーモ カケテー「カ」 ア「ツ」イト「コ」ニャ イー「エ」  
年寄り は 腰 でも かけないが 暑い 所には 居ることか

〜ンデ「エ」ー

できないからね

B 「ソ」ー「ソ」ー「ダ」 アー

どうだ、どうだ

A 「ネ」ー ドー「モ」

ねえ どうも

B アー ト<sup>「</sup>テモ<sup>」</sup> ア<sup>「</sup>ソコジヤ<sup>」</sup>ー ショー トーワイ  
あゝ とても あそこじゃ しかなが ないよ

A イ<sup>「</sup>キャー シーエン<sup>「</sup>イエー コッ<sup>「</sup>チナラ スズ<sup>「</sup>シー<sup>」</sup>トコン アル<sup>「</sup>カ<sup>」</sup>  
行くことが できやしないよ こっちなら 涼しい とこが あふけど

～エー ドー<sup>「</sup>モ  
ね (あそこでは) どうも

B 「<sup>「</sup>ソー<sup>」</sup>ダ<sup>「</sup>ソー<sup>」</sup>ダ<sup>」</sup> ト<sup>「</sup>シヨ<sup>」</sup>リヤ<sup>」</sup>ー ス<sup>「</sup>ワルト<sup>」</sup>コ ナケ<sup>「</sup>チャ<sup>」</sup>ー ト<sup>「</sup>テモ<sup>」</sup>  
そうぞうが 年寄りほ 坐るとこが なけれは どうも

カナ<sup>「</sup>ワン  
かなぬない

A イ<sup>「</sup>エー イ<sup>「</sup>キャー<sup>」</sup>シエン<sup>「</sup>ドイ  
ね 行くことができやしないよ

B ト<sup>「</sup>テモ<sup>」</sup>ト<sup>「</sup>テモ<sup>」</sup>ー  
どうも どうも

A 「<sup>「</sup>イクラ ハコンテ<sup>」</sup> クレ<sup>「</sup>テモ<sup>」</sup> ソー コ<sup>「</sup>ショ<sup>」</sup>ー カ<sup>「</sup>カル<sup>」</sup>モノ<sup>「</sup>カラ  
いくら(私も)運んで(連れてて)くたせよ そい 腰を かける ものから

スズ<sup>「</sup>シー<sup>」</sup>モノ<sup>「</sup>マテッ<sup>」</sup>チャー 「<sup>「</sup>ネー<sup>」</sup>デ<sup>「</sup>エー  
涼しい 施設 おい(用意せよ)とは (断れ) ないからね

B 「<sup>「</sup>ソー<sup>」</sup>ソー<sup>」</sup>ダ<sup>」</sup> ト<sup>「</sup>テモ<sup>」</sup> シヨ<sup>「</sup>ン<sup>」</sup>ナイ  
そうぞう どうも しょうがぬない

A ソノ ヒ<sup>「</sup>コー<sup>」</sup>キ オロ<sup>「</sup>スト<sup>」</sup>コニヤ アノ ヘリ<sup>「</sup>コブ<sup>」</sup>ター オロ<sup>「</sup>スト  
その 飛行機を あらす所には あの ヘリコプターを あらす時

～キ<sup>「</sup>チャ ソノ 「<sup>「</sup>カ<sup>」</sup>ゲン ナル<sup>「</sup>モノ<sup>」</sup>ン アッ<sup>「</sup>チャ<sup>」</sup>ー ジャ<sup>「</sup>マン<sup>」</sup> ナッ  
には その 影に なはようなものか あつては(ヘリの)じやまに なっ

～チャ ウ<sup>「</sup>ワケ<sup>」</sup>デ<sup>「</sup>エー  
アしやうがぬないからね

B 「ソーソー ユーガツモ 4ート ナニョーセル ウチョー タッ  
 じいじ タオにも かし 何を する 家へ 建て

へテサー アノー ヤス4トコ オチャー ワカスダカ ナンダカ  
 てさ あの 休む所 お茶を かがよのか 何なか

セルトコン アルワイエ アー ソレデ ソレダモンダデ トテモ  
 する 所か あるよ あゝ いかで いかでから とも

ソリャー ナンダデ  
 ねほ 何なか

A コノ ケンドーカラ シタイ アルカイ  
 この 県道から 下には あるか?

B アー ケンドーカラ シタイ ヒロイ ミチョー ツブッテ ソノ  
 あゝ 県道から 下には ない 道を 歩いて その

シタイ イッテ ----- モトノ アノ ダンボノ アトイヤエー  
 下には 歩いて もとの あの たんぼの 後にね

A 「サー コノゴロデ」 イカンモンダデ サッパシ ドコカ ドーダッ  
 さあ このあたり 行かないので さっぱり どこか どうなの

へチューコトー  
 というこで

B 4カシノ アリャー ナンダイ タノ ヨッサマノ タンボダエー  
 昔の あれは 何だよ タノ ヨッサマ(人)の たんぼだよ

オー4カシワエー  
 大抵はね

A 「タノ ヨシサマ  
 タノ ヨシサマ

B ブラジルイ イッダッ ツワイエー  
 ブラジルへ 行った よ

A イッ「チャッ」タ「カ」イ  
行ったか？

B ブラジルイ イッ「タ」ッ ツワイ アノー マ「キ」ノシマカラ キ「テ」イル  
ブラジルへ 行った よ あの マキノシマ(204)から 来ている

「ム」コガ 「オ」ラヨリヤー ウエ「ダ」ッ ツライ アノー 「タ」ノ 「ヨ」シサノ  
婿が 俺よりは 上 なるだろうよ あの タノ ヨシサの

コ＝ オシ「ナ」ノコガ アッテ 「ム」コ 「ム」コガ キ「タ」ッ ツワイ 「オ」ラ  
子に 女の子が あ、え 婿 婿が きなっけ 俺

「ヨ」リ ドーモ ガッ「コー」ワ ユウエ「ダ」ッ ツラ トモーヨ  
より どうも 学校は 上 なるだろう と思うよ

A 「ホー」  
ほい

B ナオ ナオ 「ナ」ンツッ ツカ オベー「ワ」ネーガ マー マ「キ」ノシマカ  
名を 名を 何と言ったか 覚えは ないか まあ マキノシマか

「ハ」ラ キ「テ」 アノー 「ソー」ダ マ「キ」ノシマカラ 「ム」コガ キ「テ」 ソレ  
ら 来い あの そうだ マキノシマから 婿が 来い それ

「ハ」カラ ブラジルイ イッ「チャ」ッ「タ」エー  
から ブラジルへ 行ったからね

A ブラジル「レ」ッ「チュ」ヤ アノー ナ「ニ」モ ブラジル「レ」ッ「チュ」ー トコイ  
ブラジル、7言とは ああ 何も ブラジル、来い 所へ

イッ「タ」ッ「テ」カ「エ」 アノー ヨシ「ミ」サノ コ「ダ」ダ「カ」 「タ」ケルサ 「エー」  
行ったって からね あの ヨシミさんの 子でけねえ タケルさん ね

ア「ノ」ヒト「モ」 イッ「タ」ッ「チョー」「チュ」ー「エー」  
あの人も 行ったそうだったからね

B 「アー」ゾー「ゾー」ダ  
あ、い、い、い

A アノヒトモ イッタクォーチュ -「エー」  
あな人も 行った と言うね

B 「アー イッペン」 キッタクォーチュッテ「エー」  
あゝ 一度 来たって言うね

A 「キタツチョー「エー」 イケーナ<sup>(12)</sup> コン ナニョーシテ クラス シラ  
来たそうだね どんな こと 何をして 暮すか 知ら  
へんガ」 タケ  
ないが タケル

B イッタクォーチャー エラカッダダイ ゲンシリンッチュッテ マー  
行った時は ないんだったのさ 原始林 っていう ちあ

フソー キッダコトン 「ネートコエー イッテサ ソリョー キリ  
通常 ねえことの ない とこへ 行ったさ いれや ねえ

〜ハラッテ ナンダナ 「ドッカエ ソノ ブラジルデモ」 「イー マ  
ねえし 何でね どこかへ その ブラジルでも 良い

〜「チーオ ヒトトコエー ベッソーオ カットイテイヤ ソレー ナ  
町を 一ヶ所 ね 別荘を 買っというね ねえと

〜ンショ アノー ヤスミー イッ「チャー クルゲナドイ 「ハイッダ  
にかく あの 休みに 行ったよ 来る と言うね。 入った

ト「チャー エラカッダダイ カイコンセニャー ナランモンダデ「エー  
時は ないんだったよ 開墾 し始めたの ねえからね

A 「アー ソーカソーカ コッペン「コイタダ「エー  
あゝ そうか ねえ 苦労した んだね

B アー 「ソーヤッテ ナシロ アッチノホーフ キューリョー ヤ  
あゝ そうですね ねえしよ あ、その方は 給料が

〜「スイモンダデ 「アー ソノー トチノ ヒトー ツカッ「チャーイヤイ  
電気のことで その 土地の 人を 使ったね

ヤル「ダ」ー「エ」ー アー ヤ「ス」イ キュー「リョ」ー「デ」エー「ソー」ダ アレ  
やるんだね あゝ 安い 給料 だね じゃあ あれ

ダ「ケ」 ハナ「レ」テモ トビ「ヤ」マ ワスレタ「コト」ー ネー「チュ」ッ「ツ」ゾー  
たけ 謝っても 盗み 忘れたことは ない、って、ふん

「キ」テ「エ」ー  
(家へ)来てね

A 「デ」リャー コト「モノ」 シュ「ー」ワ ワスレ「ン」ダ「イ」  
出れば ぶっ はず 忘れないよ

B 「ア」ー「ソー」 「ソー」ダ  
あゝ じゃあ

A 「ソー」イッテ ヤッタ ハナシ「タ」ッ「ツ」ワイ  
いって やった 話 だったよ

## 2. うわさ話など

話し手

(略号) (氏名) (性) (年齢)

A 武田 ふた 女 明治32年 富山県生れ

B 田辺 正一 男 明治34年 "

C 堤 ふじよ 女 明治39年 "

< Y 山口 寿洋 男 昭和11年 静岡県新居町生れ >

C ..... ゴザイマス  
ごさいます

B オアツー ゴザイマス  
お署; ごさいます

C ネ「ト」ッテ ネ「タ」ボケテ ハイ「ッ」テ キ「ッ」  
寝ていて 寝ぼけて 入ってきた

A 「ヨ」ッ キ「ッ」フレテ 「イ」ーアン「バ」イデ ゴ「ザ」イマス  
よく 来てくれた 良い案配で ごさいます

B 「イ」ーアン「バ」イデ ゴ「ザ」イマス 「ソ」ラ「ソ」ラ 「ゴ」ッロ「ー」ダ「ッ」ッ  
良い案配で ごさいます それはいれは ごくろいさおした

C アノ 「チ」ョ「ッ」ト カゼ「ク」ダ「モ」ンデ「ネ」ー ネ「ビ」エ「オ」 シ「テ」ヨ「ー」  
あの ちょっと 風邪気 ながらね 寝冷えと してね

B ア 「ホ」=「ホ」=  
あ 本当に!(そうすか!)

C 「ケ」サ ハ「ラ」ガ イ「ッ」カ「ッ」ッ  
けさ 腹か 痛らん



B コッ「チョー 4「ョット ショー「エ  
こ、そを 少し しがさいよ

C アノ「ハラガ イタカッ「シモニダイ モー「4「ョット「ネテオッ「テネ  
あの 腹が 痛が、なの？ い、少し 寝て、いてね

「エー ネットー「ッテ「ネー「ット「ッ「ヲラ オバー「チャ ドーモ「ソイ「シャ  
ゆゑ 寝て、いて 寝入、って、いた、 お婆ちゃん どうも、 ありがとう

〜 マー ド「ッ「コモ ヤメル「ジャ ナイシ ソ「リヤ 4「ョット「アイ  
まあ どこも 痛む、の、では、 ない、し、 ありがとう、 かし

(13)  
カ「ジ「ッ「テ コストモ「ッ「テ  
かじ、て(つ、あ、い)来、よう、と思、って

B 「オー ソリヤ ソリヤ ナニ「ヨリ「ダ「ッ「ッ  
あ、 ありがとう、 何、より、な、ら、な

C 「ナン「ショ コノ「アシノ「グアイガ ワル「ク「テネー カ「シマレ「ン「デ  
とは、かく、 この、 足の、 具合、が、 悪、く、て、ね、 正座、で、は、ない、か、

B 「アー「ア  
うん

C 「4「ョット カシマー「ッ「デモ コレ「4「ョット「コー カシマー「レ  
かし 正座、に、ても、 これ、 かし、 こゝ、 正座、で、き、よ

〜ドモ「ヤー「ット カシマ「ッ「テ オレン  
ありがとう、 長く、 正座、し、て、 い、ら、ね、な、

B 「アー「ア ショー「ネー「ワイ アノ「アシガ イデー ト「デモ「ショ「ン「ナイ  
うん、 し、が、な、か、つ、ない、よ、 あの、 足、が、 痛、い、(う、は)、 と、て、も、困、る、

C ト「ミ「ガ イリヤー ロ「ク「ナ「コト ナイワイ ケ「サモ ロー「ジン「ノ  
年、を、 と、わ、は、な、 ろ、く、な、事、 ない、よ、 今、朝、も、 老人、の、

コトー「ネー ヤッ「テレビ「デ ヤ「ット「ッ「ツ「ワイ「ネ  
事、を、ね、 ×× テレビ、の、 や、と、ら、な、よ

B 「アーア」 「ソー ソー ソー ソー ソー」 ダ アソコノ 「トーカイ」 「トーカイ」  
 あゝ そうだ あそこ 東海 東海

〜シノ 「ロージンホーム」  
 市の 老人ホーム

A 「フシヨサ」 「イソカシ」 カッ ツウ  
 ふじ代さん 忙しからう

C 「イソカシ」 フネー ネットッ<sup>(14)</sup> フジャー ネットッ ネットッ  
 忙し ない (私) 寝た 私は 。 寝た 寝た

A ネット オッ  
 寝て いた

C 「チョット」 ネットモッテネー 「チョット」 ネットエダカ 「ナンダ」ネー  
 ちょっと 寝ようと思っただけ ちょっと 寝たのか 何かね

「サ」 「ハ」が イタカッ マ モンデ シラン イシャイ イッテキタモ  
 今朝 違ふ 席がたのい 気づかい 匿名に 行ったときのこと

〜ンダイ「ネー」  
 ね

A ワリー  
 すみせん

C 「ソシナコタナイ」  
 さんねこたない

B 「マー」 ラフ= ラフ= オイテ ---  
 ああ 掌に 掌に あいで(下さい)

A ワリーネ ソリャー  
 すみせんね そりゃ

C ナ= トシガ イッテラ ズッガ ワルヲテ 「タタ」 ネット  
 何 年か 寄った 電灯が 悪くて 木が 眠くて

ショーガネー

どうしようもない

B マー ラフニ ----- アシガ イマクテ ショーネーニ  
あの 繁に 足が 席に ショーがたいから

C 「サオサガ ナニ ナニカ ケンサカネー キョー ヤッテクル  
房夫 せんか 何 何か 検査がね 今更 ちてくれる

〜テー

て？

B ウンウン  
ぶん

C ユッター ゴハンモ タベテ クワー キリイグッテーネ  
言って ごはんも 食べて 桑を かりに 引いてね

B ホー ジュー ジー ジュー ジカウダトモ、タエ  
ほう 十時 十時からと思、たま

C 「エー アノ クジ ゴジュー ナンパンデー  
え、 あの 九時 五十分で

A ドコイ イッパツテネー  
どこへ 引いて、て？

C イッパツ オイシサマエネ  
引いてよ お医者さまへね

B シンルイヌ  
親類なる

C 「タシネー  
なにか？

B シンルイヌ  
親類なる

A 「ダレネ」  
誰ですか？

C アノ フリ 「ゴハン タベ」ルト 「クワ」 ヒト ショ「イ ショ」ッ テ  
あの フリ ごはん 食べると 桑を 一着払い 着払い  
キ「テ」ー「デ」ー アス「カラ」 「ケンサオ ヤ」ッ テ フレルッ「テ」ヨ  
来て だよ 明日から 検査を や、い くれる、てよ

B ソノー サキー ハ「チ」カツ ヤ「ツ」タト「キノ ケンサノ ケツ」カ「デ」  
その さきに 八月に や、た時の 検査の 結果で  
「ア」ー「ユ」ー「フ」ー＝ ナ「ッ」タ  
あの（通り）に なった

C 「ソ」ー「ダ」ソ「ー」ダ「コ」ノ「サキモ オ「フ」ササト フ「タ」ーリ「デ」ネ「ー」エ  
そうで そうで このさき（以前）も おフサさんと 二人でね

A エー  
え？

C アノー オ「フ」ササト フ「タ」ーリ「デ」 ヤ「ク」バ「デ」 モラッ「タ」ー「ネ」ー  
あの おフサさんと 二人で 役場で 着たよね

A ヤ「ク」バ「デ」 ナン「テ」ネー  
役場で 何と？

C フ「タ」ーリ「デ」 イ「ッ」タ「ッ」ツ「ネ」ー  
二人で 行った、け

A 「イ」ツ「ネ」ー  
何時（いつ）ですか？

C フ「ス」レ「タ」ー「ア」  
忘れたの！？

B ハ「チ」カツー  
八月

C ハチガツ ハチガツノ オワリダ、タカネー  
八月 八月の 終り ならなかね

B アー ハチガツタ マイトシ シンタイケンサ  
あ、 八月だ、 毎年 身体検査

C シンタイケンサジャ ネー アノ ケンカラダカ アノ キテクレテヨ  
身体検査はない、 ああ 県から 来た、 あの 来てくれて

ナニカ オハナシ キーテ フレタ、タネ  
何か お話 聞いて くれた、け

A ア ホーカネ  
あ、 そうかね

C イロイロノ コト キーテ クレターネ シャシンオ オフッテ  
いろいろの こと 聞いて くれてね 写真を 送って

フレタ、ターネ アルヨ ソノ シャシンガ  
くれた、け あるよ その 写真が

A ソーダ、タ  
そうだった

C ワスレター  
忘れたの！

A イツイネー  
いつですか？

C オフササガ ワスレタ  
オフサさんが 忘れた

A エー  
え？

C イマ ナンネンモ マエダ、 ヤクバイ コイ、チュ、タネー  
今(今は)何年も 前ですよ 後援に 来いって言う、ね

ソー イッテ クレテヨ ムカシノコトー キーテクレテネー ソー  
 そうって くれてね 昔のこと 聞いて くれてね そう

シテ ナンダワイネ ゴフローダッ タッ チュッテ アノー チャーント  
 い 何ですよ ご苦労 ならって 言った あの ちやんと

A アノ ヒロシサンガ ソンチョー ヤルジブシダエー  
 あの 34 さんが 研長 を やる じゃね

C ソー ジャ ナカッ ツラ ハヤシサン ナッ タッ チュー ワケデ ヒロ  
 そうじゃ じゃ、たら 林 (宇市) じゃ、たら、って 言った (Yoshi) 34

〜シサンダッ ツラ カネー  
 さん たら、たら、かね

B アー ヒロシサダッ ツラ  
 あ、 34 さん たら、たら、

C シャッ ツ シンオ ツット ウツイテ オクッテ オクレタウエ  
 x x x 写真 写真 x x x 写して 送って くれたよ

アルニ シンガ  
 あるよ 写真が

A ソー ダッ ツカネー  
 そう たら、たら、か

C ナツダンネ エー コンナフー シテ ウツ、トルテ  
 夏だから とう こんな月 して 写、ていめさ

A ホー ヘー ワスレタ  
 ほ、 え、 忘れた

C オフササ ワスレター ソレダケ トシガ ワカカナイ  
 おフサさん 忘れた！ じゃ、だけ 年が 若くはね

A ムカシノ コトー タント ワスレタッテ ソリヤ ワスレタ  
 昔の ことは 多く 忘れ、て じゃ、 忘れた

C 「ガチャンテノ  
 音が ちゃんて言の ...

A 「ボシ<sup>(15)</sup> オドリ = コイッ チュッテ インテノ 「セーネンノシューノ  
 盆 踊りに まい、て言ッて みんなの 青年の 衆の

アソコエ 「ボシウタ ウタウヨー = コイッ チュッテ アソコエワ  
 あそこへ 盆唄 唄うよに まい、て言ッて あそこへは

イッタ 「ワ オホエタカネー フクシマヤエ レコードイ フキコ  
 行った(こ)は 覚えているがね 福島屋(家)へ レコードに 吹きこ

〜ンテ フリヨー テーネ ソノトキニャー イッタ オホエタカ  
 んで くれてね その時(こ)は 行った(こ)を 覚えて...か<sup>(16)</sup>

「ハー ソコノ ヤクバイワ ワスレタ  
 もい その 現場へ(行った)は 忘れた

C 「ナ = ヤクバイエ イッテネー フターリデョー イッテー ソレー  
 何 現場へ 行ったね 二人でね 行って それに

ヒロニョーントコエ キタツツネ ヒロニョーントモ ナニカネー  
 弘兄 の所へ 来た、け 弘兄 達も 何かね

イカダノトキノ ハナシガネー 「キテ ソイデアノー イカダノリ  
 筏の 時の 話がね。(果の人が)来て それで 筏乗り

〜ウター ウタツタリ ナニョー シテネー ホイデ  
 唄を 唄ったり 何かを (い)ね それで

A 「ドーモ ヤクバイ イッタワ ワスレタ アスコノ フクシマヤノ  
 どうも 現場へ 行ったことは 忘れた あそこ 福島屋の

ニケー ウエ イッテ  
 ニ階へ 行った

C - - - - - オバサンダツツカネー  
 おばさんならなかね

B 「アー ソーダ、ソーダ  
あ、 そうだ、そうだ

C ソレダケ トシダワイネ  
それだけ 年だよ

A 「ヘー トシヨリダデ」 ワスレタダカネー ムカシノコトウオ ワス  
え、 年寄りだから 忘れぬのかね (私は) 昔の事を (ふっ) 忘

〜レンガ 「ヘー ソレオ  
水たいてい もう それを

C シャ「シンガ アルワケダデ」 オフササ「コンナ アルデ」 チャント  
写真か ありわけだから おつせん こんなに ありますか ちゃんと

A ホー「ソーカソーカ ドーモ」 ソノ ヤクバウオ ヘー  
ほう、 えいか、 えいか どうも その 役場を え

ナニョー トッテ フレネー ヒトツ  
何と(お菓子)取って くねせよ ひと

C ハイ イタダキマス  
はい いただきます

A ヤクバウオ ワスレタワイネー  
役場(の事)を 忘れちゃ

C ワスレター ワスレタワイネ  
忘れちゃ!! 忘れちゃなね

A ヤクバ オレ フントワ キズカイダデ イ イ エッ「コロヨーカ」  
役場は 俺 本当は 困るから x x よほど 用事か

ナケニャー イカンデネー ヤクバノシューウオ キズカイセテ  
おければ? 行かないからね 役場の事を (私は) 気遣いして

カナワン ヤクバノシューワ  
たまらない 役場の事は



C ヤ<sup>「</sup>クバノシュ<sup>」</sup>ーカネ  
役端の家かね

A キズ<sup>「</sup>ケーナ  
氣遣いの

C キズ<sup>「</sup>カイニモ ナイ<sup>「</sup>ワイ  
氣遣いでも ないよ

A キョ<sup>「</sup> キョ<sup>」</sup>フ  
x 局

C シタ<sup>「</sup>ノシ シタ<sup>」</sup>ノニネー アノ シュ<sup>「</sup>フ<sup>」</sup>キョ<sup>「</sup>フシツテ ヤッ<sup>「</sup>タ<sup>」</sup>ッ<sup>「</sup>タ<sup>」</sup>  
下のに 下のにね あの 宿通室で ちん

〜デ<sup>「</sup> ナニカ キーテ フレタ<sup>」</sup>ッ<sup>「</sup>タ<sup>」</sup>デ<sup>「</sup>  
から 所か 聞いて くらゐから

A キョ<sup>「</sup>フノホー<sup>「</sup>ガ<sup>」</sup> キズ<sup>「</sup>ケーネー<sup>「</sup>ガネー<sup>」</sup> アリヤ カネ<sup>「</sup>コサンカ<sup>」</sup>  
局 の 方か 氣遣いの あれ 金子さくか

シタ<sup>「</sup>ニ イタカゲンタ<sup>「</sup>カ<sup>」</sup> キョ<sup>「</sup>フノホー<sup>「</sup>ワ<sup>」</sup> キズ<sup>「</sup>フネー<sup>「</sup>デ<sup>」</sup> エー  
下に くらゐ ためか 局の 方は 氣遣いしないで 良い

〜ガネー<sup>「</sup> ナニカ コナ<sup>「</sup>イタ<sup>」</sup> コノコ<sup>「</sup>ロ ナン<sup>「</sup> ビラ<sup>「</sup>ー フレタ<sup>「</sup>デ<sup>」</sup>  
けいね 所か このありね この娘 x x じやね くらゐから

〜ネー イラン<sup>「</sup> ヘ<sup>「</sup>ヨミエンタ<sup>「</sup>デ<sup>」</sup>ヨミエンタ<sup>「</sup> イラン<sup>「</sup>チュッ<sup>「</sup>タ<sup>」</sup>  
ね いらん へ 読みあつかう 読みあつかう 要らぬって言った

〜ラネー オバー ソビナバカナコト<sup>「</sup>ー ユー<sup>「</sup>ジャ<sup>「</sup>ーネー<sup>」</sup> モ<sup>「</sup>ッ<sup>「</sup>テケ<sup>」</sup>  
ではいね お婆か そんな態度のことを いくぶんかい 持つて行く

〜ッ<sup>「</sup>テ イラン<sup>「</sup> ドー<sup>「</sup>シテモ シー<sup>「</sup>テショ<sup>「</sup>ーガネー<sup>」</sup> ヘ モ<sup>「</sup>ラッ<sup>「</sup>タ<sup>」</sup>ケ<sup>」</sup>  
ッ<sup>「</sup>テ<sup>「</sup>要らぬい せうしても 強いて (ようがね) へ 貰ったけい

〜ド アリヤ<sup>「</sup>ー ア<sup>「</sup>ンナモ<sup>「</sup>ノ モ<sup>「</sup>ラッ<sup>「</sup>タ<sup>」</sup>ッ<sup>「</sup>テ アリヤ<sup>「</sup>ー キョ<sup>「</sup>キンウ<sup>「</sup>カ<sup>」</sup>  
と あれは 取らぬもの 貰ったって あれは 貯金を

ツバヤー リソクウオ ヨコセル ナンチューコトー キクガ  
 積みは 利息を よこす なんて言う ことを 聞くか

C 「ロージンノ シューカネー ロージנגーノ シューカ アノネー  
 老人の 象かね 老人側の 象か あのね

アノ オカネウオ モラヤー イマ イチジネー アノ ツムト  
 あの お金を 貰えば 今 一時ね あの 積みと

アノ リシオ リシカ オーキーチュエッテ  
 あの <sup>xxxxxxxx</sup> 利子を 94子が 大きいと言って

A リソク エー ソイデ オリャー コミエンテ イラシッテユッテ  
 利息 ね けれど 俺は 読めないから 要らないって言った

〜カネー  
 けれども

C フツーノ シューニ  
 ふつうの 象に

A ナンデモ フレタガッテ フレタガッテ ホイデ モラッテキタン  
 何でも くらねがって (Rat)ねん けれど 貰って来たか

ヨバヤー センダイ  
 読みは しないよ

Y 「エーコトン カイテ アッタダニネー キット  
 良い事が 書いて あったのにね ちと

A アレ コエニ カネコサンカ ハルカ シタニ イタダカ カゲン  
 あれ 上に 兼子さんが 長く 下に いたのか その加減

〜ダカネー キョフノホー コバヤシサン ヤフバノホー イクト  
 けりかね るの方 小林さん 後陽の方 行くと

ヨーガ アルッキリウオ シャベッテ アーシテテ アリカトゴザ  
 用か あら たけを しやべると あらして ありがとごさ

～イマ<sup>マ</sup>シタ<sup>ッ</sup> チュ<sup>ッ</sup>タ<sup>ッ</sup>「キリ<sup>リ</sup>デ<sup>デ</sup> マー シャ<sup>シャ</sup>ベ<sup>ベ</sup>ッ<sup>ッ</sup>タ コター ナ<sup>ナ</sup>イ  
いしました ッッ言ったキリで まあ シャべった ことは ない

ヤ<sup>ヤ</sup>クバ<sup>バ</sup>ノホー キズ<sup>ズ</sup>ケーナ メ<sup>メ</sup>ッ<sup>ッ</sup>タ ヤク<sup>ヤク</sup>バイワ イカン キズ<sup>ズ</sup>ケ<sup>ケ</sup>  
役場の方が 気遣いな(の?) め、たに 役場には 行かない 気遣

～ーナ ョ<sup>ョ</sup>ッ<sup>ッ</sup>「コロ<sup>ロ</sup> ヨー<sup>ー</sup>ガ ナ<sup>ナ</sup>ケ<sup>ケ</sup>＝<sup>＝</sup>ヤ  
いた。 よっぽと 用か なければ

C ソイ<sup>ソ</sup>デ<sup>デ</sup>アノ ク<sup>ク</sup>＝<sup>＝</sup>フササノ オバ<sup>バ</sup>ーサ オバ<sup>バ</sup>ーチャ<sup>ン</sup> オシ<sup>シ</sup>カ<sup>カ</sup> イ<sup>イ</sup>  
それで あの 邦房さんの お婆さん お婆ちゃん 押しか 良

～ーチュ<sup>ー</sup>ーデ オバ<sup>バ</sup>ー オシ<sup>シ</sup>カ<sup>カ</sup> イー<sup>ー</sup>ヨ<sup>ョ</sup>ッ<sup>ッ</sup> チュ<sup>ッ</sup>ッ<sup>ッ</sup>チャ<sup>ー</sup>  
いっしうか お婆 押しか 良いよ、言ってます

A ヤ<sup>ヤ</sup>クバ<sup>バ</sup>ノホー キズ<sup>ズ</sup>ケーナ 「キョ<sup>ョ</sup>ク<sup>ク</sup>ノホー<sup>ー</sup>ガ キズ<sup>ズ</sup>ケー<sup>ー</sup>ガ ナ<sup>ナ</sup>エ<sup>ー</sup>  
役場の方が 気遣いな 弱の方が 気遣いか ない

～カ<sup>カ</sup>ネー 「キョ<sup>ョ</sup>ク<sup>ク</sup>ノホー<sup>ー</sup>ワ アノ 「ナン<sup>ン</sup>チュ<sup>ー</sup>ーダ<sup>ダ</sup>カ ナ<sup>ナ</sup>カヤ<sup>ヤ</sup>ノム<sup>ム</sup>ス  
けどね 弱の方は あの 何というか ナカヤ(屋号)の息

～コヤ<sup>コ</sup>ナイ<sup>イ</sup>カワ アノ ア<sup>ア</sup>ソ<sup>ソ</sup>コ<sup>コ</sup>ノ オ<sup>オ</sup>カ<sup>カ</sup>ーサ<sup>ン</sup>ト イッ<sup>ッ</sup>ショ<sup>ョ</sup>＝ オ<sup>オ</sup>カ<sup>カ</sup>  
子などは あの あい:の お母さんと 一緒に お母

～ーサン<sup>ン</sup>ワ ト<sup>ト</sup>ヨ<sup>ヨ</sup>カ<sup>カ</sup>ワ<sup>イ</sup> イッ<sup>ッ</sup>チャ<sup>ッ</sup>ッ<sup>ッ</sup>タ<sup>タ</sup>ガ<sup>ガ</sup>ネー イッ<sup>ッ</sup>チャ<sup>ッ</sup>ッ<sup>ッ</sup>タ<sup>タ</sup>カ<sup>カ</sup>  
さんは 豊川へ 行ったか 行ったか

B ガ<sup>ガ</sup>ッ<sup>ッ</sup>コ<sup>コ</sup>ー イッ<sup>ッ</sup>ショ<sup>ョ</sup>ダ<sup>ダ</sup>ッ<sup>ッ</sup>ツ<sup>ツ</sup> 「ツ<sup>ツ</sup>エ<sup>ー</sup>  
学校 一緒に来たね

C イッ<sup>ッ</sup>ショ<sup>ョ</sup>ダ<sup>ダ</sup>ッ<sup>ッ</sup>ツ<sup>ツ</sup> カ<sup>カ</sup>ネ  
一緒に来たか

B 「ア<sup>ア</sup>ー イッ<sup>ッ</sup>ショ<sup>ョ</sup>ダ<sup>ダ</sup>ッ<sup>ッ</sup>ツ<sup>ツ</sup> ト<sup>ト</sup>シ<sup>シ</sup>ガ<sup>ガ</sup> ヒ<sup>ヒ</sup>ト<sup>ト</sup>ツ ア<sup>ア</sup>シ<sup>シ</sup>ダ<sup>ダ</sup>ガ<sup>ガ</sup> - - - - -  
あの 一緒に来た 年か 24、 25、 26、 27、

ガ<sup>ガ</sup>ッ<sup>ッ</sup>コ<sup>コ</sup>ー イッ<sup>ッ</sup>ショ<sup>ョ</sup>ダ<sup>ダ</sup>ッ<sup>ッ</sup>ツ<sup>ツ</sup>  
学校は 一緒に来た

C 「アー ソー ダカモ シレン  
あゝ そうかも しれない

A ダカ ナニョー オバーサンカ ナカヤノ オバーサンカ アノー  
なにや 何を おばさんか ナカヤの おばさんか あのう  
カミゲート<sup>(17)</sup> ノ オバーサンウオ マメナカッテ キツカ マメナカ  
カミガイトの おばあさんを そろいかいっし 厚くか そろいか

～ ムチュート マメチャー ネーッテ ムッテ フリョーッテ ムヤ  
っていから そろ(健康)では ないて 言、て くれ、て 言え

～ コナイダ アノ ウイッ ツア ニモ ダイテ ソンチョーサンニ  
は このあたり あの 宇市さん(村長)にも 出して 相長さんに

～ エ マメナカイ ムチュート コンダ ボタモチョー モッテ イッ  
ね そろ かい、て言、から 今度ほ ホタ餅を 持、て -

～ ペン コイエッ ヲラ ヤスイコトー イエッテ アノシトモ タン  
度 まいよって言、なら お安い こい、だ って(言、た) あの人も(年か)次山

～ ト チガワット ガッコイ イッマデネー  
違わすに 学校へ しろ、たからぬ

C 「ゲンキ エー ジャ ナイカ アノ オバサンワネー ハツミワ ゲン  
そろ 良いじゃないか あの おばさんほね ハツミワ そろ

～ キナ ワシノ ニーサンナン マメナセ  
だ、 妹の 兄さん 駄目だよ

B 「イクラダカ コンダ サキョー ヤメツラ ネコンダカ  
今度ほ 酒を やめなほろう 寝こんだか

C サキヤー ヤメチャッ タッテ ヤメチャッ タカ ナンショ シャベ  
酒な やめちゃ、た、て やめちゃ、たか とにかく いっ、て

～ ルコトーネー アノー ハナス コトー キライナ ニーサンダモン  
る ことをね あの 話す ことを きらいな 兄さん な、から

～ダ「テ」ヨー ナ「ン」ショー ハ「ナ」ショー セ「ン」チュー「ニ」 ダント 「ゴ」ハン  
ね とにかく 話と しにいっていいのに 沢山 ごはん

ダベ「ル」ッテ 「ゴ」ハンモ ダベ「ル」シネ  
食べて、 ごはんも 食べてしぬ

A 「ダ」レネ  
誰が？

C アノ 「ニ」ー  
あの 兄さん…

A 「ヨ」クナッ、ダッテ「カイ」  
よく ねた、かい

C 「ヨ」クナッテ キ「タ」モン「デ」ネー  
よくねた、 来たのでね

A ハー ウ「レ」シーネー  
ほあ うれしいね

C オ「カ」ゲテ 「ヨ」クナッ、ダッテ キ「トル」ヨ …… コ「ナイ」ダモ  
あかゲて 良くねた、(言、て) 来ているよ こないかも

イッ「ダ」ウ ダ「イ」カ「イ」 イチンチ アソンタ アノ 「オ」キトル「ダ」チ  
いっただう ないかい 一目 遊んない あの 走ってきている言

～ッ「ダ」 マ「サ」ヤ オ「ジ」カ アソビー イッテ クレ「ダ」ッテ  
った 政務 あじせんか 遊びに 行って くれながら

A 「ヨ」カッ「ダ」ネー  
よかったですね

B アノ タイカク「ジャ」ー モー アノ サ「ケ」テ ナニセリャー ソイ  
あの 体格は もう あの 酒で 何すれば、 それ

デ 「ス」ムヨーナ コ「ッ」ジャ ネーワ …… タイカク「ワイ」デ「エー」  
で 清く ような 事では ないよ 体格は いいからね

C タイカカー イーカネー  
体格は 良いがね

B ナ=シロ サケガ スキデ  
なにしろ 酒か 好きで

A アンナヒトガ ヤムナンチャー モー コリャ ムリダッテ ヤリ  
あんな人が 病むなんて言はば もう コリャ 無理なッテ ヤリ

～ソー ナ= ガッコーヤナイッカワ オカネヤナニャー カマワッコ  
そうなのに 学校 なんかは お金や 何かは 不器用さ

へネー アシー デッデッテ デスエテ ネー  
あれは 出て 出て 出尽して ね

C オサケガ スキルデ  
お酒か 過ぎるから

B サケガ スキルデ イカン アノー ソノ ナニャー アンナ タ  
酒か 過ぎるから いけない あの どの 何は あんな 体

～イカクナラエー ソリャー フントー オニニ カナボーッチュ  
格 なら ねえ それが 本当は 兎に 金持、てい

～ヨーナ タイカクダゾ アリャー マー フント エー タイカ  
ようは 体格がね あれは まあ 本当に 良い 体格

～クダ  
だよ

C イー タイカクダナ  
良い 体格 だねあ

A ヨーウテ キタカイネー  
(病後から) 良く(なて) 来たのかしら

B アー ヨウテ キタ ドーモ サキヤー ヤマルト チョーシカ  
あ、 良い 来た。 どうも 酒は 止まると 調子か

イーダ アレテ サキヤ ヤマルト チョー シガ イーダノ  
 良いのね あれで 酒は やると 調子か 良いんだね

C アノ ノマント チョー シガ イーダネ  
 あの 飲みたいと 調子か 良いんだね

B アー ノマント チョー シガ イーダ  
 あ、 飲みたいと 調子か 良いんだね

C アノー イヤダッテ チットモ ホシクナイッテ ユーシナ  
 あの(酒は)いやなッテ 少し 欲しくもないッテ 言うがね

B ホイデ ヤメタカ  
 はい やめたか

C チットモ ノムノ ホシカナイヨッテユー  
 少しも 飲むの 欲しくはないヨッテ言

B ホンター ソレタトヤエー マタ ハチジュー グライマデ イキルナ  
 本当は それでいいね 又 ハチ (ジュース) 生きた

〜 オジマデワ サキマデ  
 お爺さんまで 将来

C ハチジュー マデワ イチャ シンワネー  
 ハチ まで 生きやしないよ

B イキルゾ アレデ ヤメリヤ  
 生きたぞ あれで(酒を)やめたは

C ソレー ハイル ラカネー ハナス コトカ  
 それに(テーブルに) 入るだろうからね 話すことか

Y うン オバサンニネー うター うタッテ うター うタッテ  
 うん おばさんだね 飲む 飲む 飲む 飲む

モウワートモッテ  
 もうあと 思う

C うターカネ マス コマル  
歌をかね やは 困る

Y うタカ ウマイチューテ  
歌か 美味しいから

C うタウ マス トシカ タメタネー コトシ ボンニ うタッテ  
歌じこは ます 手か(寄、たから) なめなぬ 今 盆に 歌って  
バタッ ツカネー コンキーヨ  
みた けれど 座るよ

A コンキーカイ ショーチューノ イッパエーモ ノビャー うタイ  
座るかい (しょう) の 一杯も 飲みは 歌じこは

〜エルカ  
でるか

C ショーチューナン ノビャー ヨケー タメタヨ うター スキタ  
(しょう) た 飲みは よい なめなよ 歌は 好きだ

〜カネー ワシャー スキデヨー アノー ヨルネー ネットコエ ア  
かね 和は 。 好きでね 其の 夜ね 寝室へ あ

〜ノー イマノネー ナンチュー テー テーフジャ ナイ アノー  
の 今のね 何といか × テーふじらない あの

プレーヤー オヨー モッテ トイト イマノ シンシキノ ウタウォ  
プレーヤー をね 持って 今 新式の 歌を

〜ネー カケチャーヨー ネブタクナル マー ネムスキテ マー  
ね かけはね 眠くなる(まで) まあ (やが) 眠るまで まあ

ソレモ サンマイグライ ヤルト タダ ネー... チャウヨ  
それモ 三枚ぐらい せよと だ(自然に) 寝入るよ

Y エーワ うター キキナガラ ネリャー ネー うター キキナガラ  
良いね 歌を 聞きたから 寝るは ね 歌を 好きだから



ネリャー ソンナ ゴシヨー ラクッ チューカ キモチカエーワネー  
寝るは そんな 後で 楽っていいか 気持ちが悪いね

C キモチカ イーモノ ナンモ ホカノコト カンガエンラ  
気持ちが 良いもの 何にも ほかのこと 考えないでよ

B ソーソーソー ソレデイーダイネ  
そうそう そうで いいんぞ

C ソレシカ カンガエンタ  
それしか 考えないのさ

B ソーソーソー ソレデ イーワイネ  
そうそう そうで いいよ

C ジブンワ イーワイネ ソースルト バット アサネ メカアク  
自分よ いいよ そうだね バット 朝ね 目があく

ハイ ナンショ ゴジハンニャー メカアクネ イマノトコ チョ  
えい とにかく 五時半には 目があくね 今の所 ちよ

ネット ネムクナツネ  
と 眠くなつたね

Y ソレデ ダレノ ウタガ スキダン イマワ イマノシトワ  
それで 誰の 歌か 好きなの？ 今は 今の人は

C エッヘッヘ ジュンニ カッテキテ クレルモンダイネー アノ  
えっへへ 君に 買ってきて くれるモンだね あの

ニシカワミネコノ ウター イマー イートモッテ キクダン  
西川 峰子 の 歌を 今は 良いと思って きのの石けと

ソンナニ アノ ウマカー ウタヤヘンニ  
そんなに あの うまくは 歌いほしたいよ

B ソリャー ソーダイ  
それほ そうだよ

Y ソ「リャー アノシトラ「ミタイナ ワケニ イカンゲト「ネ  
ソリャあ あの友達 みないな わけに いかないけどね

C トッ「テモ ウタ「ヤシンニ ソリャ ショー「バイニ「ネー ソレー ツ  
とっても 歌いはしないよ それ 商売にね (お人と呼ばね) それに つ

〜イ「チャー ウタ「ット「リャー アノ ウタウ「ワネ オモシロ「イ「ナー  
いて 歌って おれは あの 歌うよ 面白いなあ

トモッ「テ キ「クダケノ「コト「テ  
と思っ、て きくおのの こゝで

A 「ソー「ダ「ソー「ダ オモシロ「ナー「トモッ「テ 「ホント キ「クダケ  
そうなん、そうなん あもしろいな と思っ、て 本当は きくおの

C キ「クダケ「ヨ  
きくおのよ

Y 「テ「レ「ビ「ノ アノ エ「ヌ「エイ「チ「ケー「ノ「ネ ノ「ド「ジ「マン「オ ミ「ト「ル  
テレビの あの NHK のね のど自慢(大会)を 見ていますか?

オ「ヒ「ルニ ヤ「ル「ノー  
お昼に やるのを

C ア「リ「ヨー ミ「ヌ「キ「ヨ  
あれを 見送っているんですよ

B ニ「チ「ヨー  
日時

C ア「リ「ヨー タ「ノ「シ「ミ「ヨ イ「ッ「シュ「ー「カン「ネー マズ ホント ニ「チ  
あれを 楽しみますよ 一回ね まず 本当 日

〜ヨーニ タ「ノ「シ「ミ「 ワ「シャー 「ハイ 「シ「ロ「ート「ノ「ド「ジ「マン「ト「ネー  
肝に 楽しみ 私は もい ころのと のど自慢 とね

ア「ノー 「カ「ゾ「ク「ウ「タ「ガ「ッ「セン「ヨ ア「リ「ヨー ミ「ナ「ン「ジ「コ「タ「ー「ナイ「ヨー  
あの 家族歌合戦 ね あれを 見たからこゝでいいよ

マイシュー

毎週

Y アーユー シロウトノネー ウタッテ ナカニャー オーバーサント  
あ、い、い しろとのおね 歌、て なかにゃ おはあさんと

〜カ オジサンガネー  
か おじいさんがね

C ソーヨ  
そいすよ

Y イッショークンメー プッテ ウタウナー ホントニミトルト  
一生懸命 に ね、て 歌、て 本当 みてると……

C オモシロイネ オモシロイヨー ホント<sup>B</sup>「イマノ = チヨ = モ」  
おもろいね おもしろいよ 本当 (今の = 町にも)

B ハチジュー = ダカニ ナルヒトガ ウタッテ  
ハチ = かに なる人か 歌、て

ワカイ フーオシテ ウタッテゾー  
若い 恰好をして 歌、て

ハチジュー = ダ オドロイタ、タナー カオツキガ ワカスキテ  
ハチ = だ 驚いたなあ 歌、て 若すぎ

マー ウタウ  
まあ 歌、て …

C イッカイ ウタウェソーナトモッテモ ドーモ ウタウェンネー  
一発 歌えそうだと思う、ても どうも 歌えな、ね

ウタッテミター ウチソシナ オーキー オト ダイテ ウタヤ  
歌、てみて (私の)家 (his) いるな 大きい 音 出、て 歌、て

〜センシネー ナニモカモ マジ ウタッテ オリャー ソリャー  
しな、い、い、ね なんでもかも また 歌、て い、い、は、い、い、は、い、

イ「ラカ ウタ エルカ「ネー  
 いくらか 歌えるわけだね

Y マー ウタモ エーモニダ ホントニ「ネー ウタモ エーモニダ  
 まあ 歌も 良いものな 本当だね、 歌も 良いものな

B ソー ソー ソー ソー  
 そうさ

C ウタガ イーニ<sup>(18)</sup> ワシャ 「ダイスキ」 ワシ 「ソイデ」 「アノ「ナー  
 歌か、 良いですよ 私は 大好き 私は そとで あかね

オレガ シンデモ ナイテ クレシナヨ コドモガ フルト ソー  
 俺が 死んでも泣いて くれるだよ 子供が まるで そい

ユー ナイテ クレシナヨ ナクノー ダイキライッダシ オレガ  
 言。泣いて くれるのよ泣くのは 大好きだし 俺が

シンダラ ウター ウタッテ フリョーッチュート ソイジャ「  
 死んだら 歌を 歌って くれよ っ ていい それでいい

ウター ウタッテ「ネー チューガネ ミチコノ ウタッテ「リョ  
 歌を 歌って(やるよ) ね というよ ミチ子の(……が)。 歌ってくれ

〜ッチュー ワシャ「 ソノホーン ウレシ「  
 っ ていい 私は。 その方が いいし

B マーネー ハチジューカラン ナリャー イーゾイ  
 まあね ハチからに ねねは いいぞ

C ワシャ「 ナクノー<sup>(19)</sup> ダイキライッデナーッテ シンダラ マー  
 私は泣くのか 大好き なからって 死んだら まあ

ウター ウタッテ フリョー オレ ダイ「スキダデッテ ユーガネ  
 歌を 歌ってくれ 俺 大好きだから、え いやよ

ソノホーガ イーヨー ナイタリナンカ イヤダヨ ワシ ソイデ「  
 その方が いいよ泣いてんか なんかな いやだよ 私は それでいい

「ネー　　ウチモ　　ソーダヨ　　ソノトーリ　　アノ　　ユイア...　　ラナー  
ね　　家(のこ)と　　そうよ　　その通りだ　　あの　　言...あつね

「イヤナコト　　ユーノシ　　キライダデネー　　「エー　　イチバン　　ワシャ  
いやなこと　　言うのが　　きらいだからね　　え、　　一番　　私は

「ー　　ソリョー　　キライダイ　　「エー　　イエーコ　　ヤルノシ　　イチバ  
それと　　きらいだよ　　え、　　(?)　　やるのが　　一番

「ン　　スキダデ　　ソー　　イチャーネー　　イチバン　　ソレガ　　イーデネ  
好きだから　　そう、ではね　　一番　　それが　　いいからね

A　　ウタ＝モ　　アルデネー　　ワシャー　　ワタシャ　　ウタズキ　　ウタワニヤ  
歌にも　　あるからね　　私は　　「私は　　歌好き　　歌わね

「ー　　オラン　　ワシガ　　シンダラ　　ウタデ　　ヤレ...　　チューコト　　ユー  
あらね　　私が　　死んだら　　歌で　　やれ...　　こと　　言う

「デネー　　「ネー　　ソイデ　　ウタ＝　　スキナシター　　ウタガ「イーダーネ  
か?　　ね　　それ　　歌に(対して)　　好きな人は　　歌が　　いい人だよ

C　　ウタガ　　イーダイネー  
歌が　　いい人だよ

B　　「ナ＝シロ　　ハチジューカラ　　スキリャー　　ウター　　ウタ...　　テモ　　ナ  
なれど　　ハチから　　オチは...　　歌と　　歌...　　な

「ンデモソー　　ウチノシュ　　「ナントモ　　オモウシダイ　　ホントノ  
人でも　　それが　　家の象は　　何と　　思わないで　　本当の

「コト　　ユッテ  
ことと　　言、て(家の名は老人の言を何も気にしていないの意)

C　　ホント＝　　ソリャー　　オモウシダ...　　テ  
本当は　　それは　　思わないで

B　　.....　　「ー　　アノ　　ハチジューカラ　　「ナリャ　　「マ　　ソレカラ　　ヨ  
あの　　ハチから　　に　　たねは...　　まあ　　それが　　余

ゝブンニ イキタダキヤー ソリヤー モーケモンダガネー マー  
 分には 生きただけには 何れは 儲けもの だがね まあ

ハチジューー ノ サカオ キョー ノ イガクジャー コサニャー モ  
 ハナッ 坂を 今日の 医学ヲは 越せぬは も

へッテネー トモナー ワシノ オモニャー  
 っないはい と思ふな 私の 思ふには

C オラノ オッキー オバーワ ハチジューー ハチジューニダカ シ  
 俺の 太きい お婆は ハナ ハナニ かも ぞ

〜レン ナクナッタガネー セシダコー ヤルデモ ナンデモ ウツ  
 トはい もい なくなつたがね 洗濯を やるのでも 何でも 歌

〜バツカリ チョーシデネ ムカシヤーネー イシノ イウエデ  
 ばかり(歌う) 調子(ソレの為)でね 昔はね 石の 上で

フンダダニ  
 踏んなんですよ

B ソーソーソーソー ソーソーソー  
 さいさい

C イシノウウエデネー イトニ コンナ フミイシシ アッテヨ ソ  
 石の上でね 井戸に こんな 踏石が あつた そ

〜イデアノー ソレー アコー カケテヨ ソイデ フンダダニニゴ  
 トで あの ぐれ 灰汁を かけてさ ぐれで 踏んなんですよ こ

〜サゴサゴサ フンダ コーヤッテ コーヤッテ アシデネ フムト  
 サコサ 踏んなん こうちて こうちて 足でね 踏むと

タダ オチレタ テデ アノ モアングラテネー ムカシヤー ソ  
 自然に 落ちるがね 手で あの 踏まなくてもね 昔は そ

〜ンサ アノー モメンモノ ナエダモン アノ ナンダモンダイ  
 人だ あの 木綿袴 ないのねもの あの 何でかき

「エー」 「ゴサゴサゴリ」 「ンデ」 「ソイデ」 「ハイ」 「チート」 「モミチラカ」  
ね ゴサゴサ 踏んで しゃべり ちし 揉みつけて

「ソーヤ」 「ッテ」 「ホイタダガ」 「ソール＝モ」 「ウタ」 「アノ」 「オーバー」  
そうやって 干したのだから しゃやるにも 歌！ あの おぼあ

「サンワ」 「ムギソデ」 「ムギフミキカイ」 「ハジメル」 「トネ」 「オーキ」  
さんは ま (?) 麦踏み機 破に(よって仕事を) はじめるとね 大きい

「オト」 「ダイテ」 「ソノ」 「チョーシガ」 「コトダ」 「マズ」 「ウタ」 「グズ」  
音 きて (仕事に) その 調子づけが 必要だって マズ 歌を 出す

「ワイネ」 「ホント」 「オモシロカ」 「ツガ」 「ソイデ」 「ナガイキョー」 「シタ」  
よ 本当に おもしろがなか しゃべり 長生きをしたよ

「ソノ」 「オーバー」 「ワ」 「ソノ」 「オーバー」 「サンワ」  
そのお婆は そのお婆さんは

A 「アレノ」 「オミトサ」 「チュ」 「ハチジュー」 「ハチノ」 「オーバー」 「ガ」 「ナンダ」  
あれの おいさんっていい ハチハの お婆か 何かな

「ハチョー」 「ワネ」 「オメー」 「ボンウタ」 「イマデモ」 「ウタ」 「ウチョー」 「ワネ」  
ういなかよ お前 盆唄 今でも 歌う ういなかよ

「メ」 「ワ」 「リョー」 「ホー」 「メー」 「ンデ」  
母は 両方 見てた...でいて

C 「ウタ」 「ウ」  
歌う なる

A 「アノ」 「ユツチャ」 「ワルイガ」 「ヨーサ」 「ヤカマシスキッ」 「チョー」 「ネ」  
あの 言はば 悪いが 夜 やがましきさう ういなか

「テー」 「ネ」 「シンナン」 「イゴイテ」 「フル＝」 「ミンナガ」 「イゴイテ」 「キテ」  
て しゃべり 仕事を (帰って) くるのに みんなが 仕事をい きて

「ネー」 「ラットモ」 「＝ネー」 「ボンウタ」 「ウオ」 「ヨーサ」 「ウタ」 「ウッテ」 「ソー」  
寝入ろうと思ふのにね 盆唄を 夜 唄うて そう

ユー ト「シヨ」リワ 「ヨセ」ター ユウエ「ン」テ「ネー」 「ボン」ウ「ジ」ー  
 いじ 年寄りは よせ とは 言えない、てね 盆唄を

ウ「タ」ウ  
 唄

B ヤ「ハ」リ ナ「ガイ」キョー セル「フ」レーナラ 「ソー」ダ「ナ」  
 しゃべり 長きで する くさいなあ そだね(おめでたいのな)ね

A ヨーサ 「ハ」ルカ ウ「タ」ツ「ツ」ナ ヒ「ト」ツヤ フ「タ」ツナラ イーガ「ネー」  
 夜 長く 唄ったな . 一つや 二つ ねえ 長いかな

マ「ハ」ルカ ウ「タ」ツ「テ」 ショーガ「ネー」ッ「テ」 カ「ツ」オサン ヤルヨ  
 ま 長く 唄って 困る、て 勝雄さん(言、い、い)(唄を)

〜「ナ」ッ「テ」 コ「コ」エ キ「テ」 アーユーノ オモシ「ロ」エーラ「カ」ッ「テ」 ユ  
 ねえようね、て(勝雄か)にへ まて あ、言いの 面白くないから、て 言

〜「ダ」 「フ」=ナラ「ン」コ「ト」カ アル「ラ」ト ナン「モ」 「フ」=ナラ シ「ダ」ワ「イ」ヤ  
 うのな。 若に ならぬことか あるならいよ 何れも 若に ならんのだ

C アノ ス「キ」ジャー ナカ「ッ」ツ「ツ」テナー アノ オバ「ー」サン ワ「カ」イ  
 あの 好きでは なかった、てね あの おばあさん 若い

〜トキ「ニ」ャー ウ「タ」ワ ス「キ」ジャー ナカ「ッ」ツ「ツ」チュー「ワ」イネ  
 時には 歌は 好きでは なかった というよ

カ「ツ」オサン オカシ「ナ」モニ「ダ」イ  
 勝雄さん(かそいじ) おかしなもんねよ

A オカシ「ナ」 「ボン」ウ「タ」 「ハ」ルカ ウ「タ」ツ「テ」 ショ「ン」ナ「イ」チューガ「エ」  
 おかしなことな。 盆唄を 長く 唄って (かながたいい)というかな

ソ「リ」ャー マー ショーネー「ナー」ッ「テ」 オレ ユ「ッ」ダ「カ」 「ホ」ントニ  
 (しゃ) ため (よ)くないなあ、て 俺 言えど 非常に

ショーネー「ナー」グ「ライ」タ「ウ」 ユー「ダ」ガ「イ」 カ「ツ」オサ「ガ」 マス  
 “(よ)くない”というほどのことさ。 俺 言うんねよ 勝雄さんか まず



トッテモ ハルカ ウター ウタッテ ショーネーッテ  
とってモ 高く 唄を 唄って (よいかたいて)

Y ヨナカニ ウタッ トルダネ ヨナカモ ヒルマモ ナイダネー オ  
夜中に 唄、ているんね。 夜中も 昼間も ないんね。 お

〜バーサンジャー  
ばあさんでは

A フニモ ナルコトが ネーデ ヨケー ウタウダイ アノ メカ  
苦にも なることか ないから よけい 唄うんだ。 あの 目が  
メーンジャー カナシーカ ハラセー ヨケリャー イーデッ チュッテ  
唄えないのは 悲しいが、 腹さへ 良ければ 良いからって

C ソイデモ ソンナカ イーダカネー マス メカ ワルイッテ  
それでも そんなのが 良いんね けども マス 目が 悪いって (それ)  
フニシテネー ナンショ コマルホーダッダネ  
苦にしてね とにかく 困る方 なんだね (それよりは ずとましな)

B ソーダソーダ  
そだ そだ

A コマルトモッテ フニセリャー ヨケー ショーガナイデイエー  
困ると思っ 苦にすれば よけい 困る からね

B アーソーソーソーソー  
あー そーそー

A ナツデモ フユデモ コンナ チーサイ ウル カシワモチョー  
夏でも 冬でも こんな 小さい ×× 柏餅を

スキデ フユデモ ナンデモ じサクホイ イキャー カシワムチョ  
好きで 冬でも 何でも 水筒へ 5リットル 柏餅

〜 カッテキッテ フリョーヨッテ マ ナンシロ ソンナコトカ  
を 買ってきた くれよう 手紙 ないから そんなことか

「フニナルフーナラ　-----　フエヤナイカ　カシワモチノ　ウリ  
芳にぬる　ようばら　(良いな)　(でも)　冬　パン　和餅の　売

「ヤエー　「ネーダ＝　イッタラ　カシワモチョー　カッテ　「ソーイッ  
店　ね　ないのに　(水産へ)　さげたら　和餅を　買って　(と)　そう言

「チャー　「チューモンセルッテ　「ソシナコトカ　「フニナルダケダダイ  
つは　注意　する、て　(まあ)　そんなことが　芳にぬる　をりてたよ

「イエー　「ネタケリャー　「ネル　「オキタケリャー　「オキル　「ハチジュ  
ねえ　寝てたわけ　寝る　起きなければ　起きる　ハナ

「ハチダッテ　「トシヤマジューデ　「イチバンノ　「トシウエダ「チョエ  
ハ　な　て　深山　じやいて　一番の　年長　な　そうなの

「ソイデ　「ホンウダ　「ウタウ　「ソイデ　「ヨーサ　「ハルカ　「ウタッテ  
それ　盆唄を　唄う　それ　夜中に　長く　唄う、て

「カラ　「キター　「カツオサン　「ヨショートモ　「ユエズ「エー　「トシヨリ  
(勝雄さんが)　来て　よせ　とも　言えりゃね　年寄り

「ダデ　「ソー　-----  
だから　そう

C　「ワリヤイ　「イマノ　「トシヨリワ　「ナンダ「ネー　「トシ　「アノー　「シロ  
わりあい　今の　年寄りば　何だね　××　あの　しろ

「ウトノ「ドジ「マンデモ　「イマノ　「ハヨリノ　「ウター　「ウタウ「ジャー「ナイ  
うたとのど自慢　でも　今の　浅行の　歌を　死んではいないかね?

Y　「ウン　「ソーダ「ネー  
うん　そうだね

A　「ホンジャ　「カミノ「ナオツ「ツァン　「ハヨリズラカ　「チンカウ「カフ「ヨー  
それでは　かみの　通さん　浅行なろうか　片足跳　する　よう

「ナ　「オドリ「ヨー　「アソコ「デ　「オドッテ　「メ「ラン「ガ　「リョー「ホー  
な　踊りを　あそこへ　踊る、て　たまらないけれど

アミョー ソロサン  
足を 揃えたい

B 「ヒョイト ミチャー テテッテ ヨカッ ツガー マタ テテ キタ  
ひょいと 見ては 出っっ 良が、良が だ、あ、あ  
〜ッ ツダノ  
ムネね

C 「イマー マタネー キツク ナッ タ ヨーダ  
今は また 強くね、よくね

B 「セントウチャーエー ネテバカ カシタッ ツゾー ホラ アレ イマ  
先ではね 寝ては、かりを、け ほら あれ 今

C キツク ナッ タズラ  
強く だ、なんでも

A バカ= 「アルキタッタイ<sup>(21)</sup> コーユート ハダー ノイジャ  
はかに 歩くようになつたね こい、え 肌を 出しては

B 「ウノガモリダ  
ウノ(人)が守りだ

C エー 「モリッテ ソイテ」ゴハンニ アサハヤク ナンショ ウチ  
え、 そとで ごはんは 朝早く とにかく 家

〜ノシュー オコスッテネ ソコラー アケテネート アケタリ  
の家を 起すといふね そろが あけて ないよ 開けたり

タリタリシテ オコスッテ イッソマー ネシテネ ツカッテ  
開けたり (て 起すと言ふ) せ、せ、あ 寝られぬとね。(イキに)使

〜モ ワカリヤ シンワネー ヤセマーッテ ソイテ アノ ソノトキ  
って、 わかり(ないよ) やせてしまふ そとで ああ その時

ハイ 「ゴハン タベルダーネ タベルダガ マダハー ウノサカ  
し、 ごはんを 食べるんだね 食べるんだって、 まい、 ウノサ(人)が

アノ ビョーニンガ アトオキテ タベルト マタ オゼンオ ダイ  
 あの 病人が あと起きて 食べると また お腹を 出し  
 ハチャーネー マタ ナンダッテヨ フリョーチュッテネ フリョー  
 とはね また 何んかし くれ、と言、てね くれ  
 ハター ユワンガ アノー  
 とは 言わぬいかに どの

B タス  
 出す

C ソノネー オワンオ タスッテヨ アノマー コンダ ニーワ ナ  
 どのね お椀を 出す、てよ あのちや 今度は 元は 何  
 ハンダソー オロスダソー ソンナナー タベルトマタ オナカー  
 たい (戸棚から) 取り出すんぞい さんばかり 食べると また おたかを  
 コワスト コマルッテ ユートネー ソシカラ ショーガナエーッ  
 こわすと 困る、と いうとね それから しょうがでいっ  
 ハテ キゼワシナイコトー シテ イマサウ マイオ カッテモ  
 て 気配しない中を い 今更 藪を 飼、ても  
ソングイタナー

A タシカニ コノゴロ キゼワシナク ナッチャッタイ ソーヤッテ  
 たしかに この頃 気配しなく な、ちや、てよ そ、い、て  
 オカシー チンカラ カクヨーナ オドリ アリャー オリャー  
 おかしー 片足跳を する方ね 踊り あれは 俺は  
 イマ ハヨリスラカッチャー ソリョー ミルワイ  
 今 流行 なるが、て じゃを みよよ  
 B マー ヤッパリ  
 手取 ちや、ぱり

A ムカシター チカウ オドリョー オドルテ  
昔とは 遠い 踊りを 踊るから

B エーデモ ネテ バツカシ イツガイ エーデモ ネテバツカシ  
家でも 寝て ばかり いたよ 家でも 寝てばかり  
イツガ イマー キツクナッテ キター  
いちが 今は 強くなった またよ

Y イマノ チンカウカクツワ ドーユーコト  
今の チンカウ オクとは どういうこと?

A イッホー アシデ タッテ イッホー アシデ アゲテル イマノ ハ  
一本足で 立ち 一本足で 上げて 今の 流  
へヤリノホーガ オカシー オドリガネー チカウネー ムカシノ  
行 の方が 可哀しい 踊りがね 遠いね 昔の  
オドリター  
踊りとは

C ソーソー チカウネー  
そうそう 遠いね

A イエオ シテモネー  
絵を みてね

Y アーソーカ チンカウカイター ソイデ オドルカン  
あ、うか チンカウ カイテ(片足跳で)をいっ 踊るからね

A オドリガ チカウ ムカシャー リョー アシデ タッ トイチャー  
踊りが 遠い 昔は 両足で 立ってあんな  
テデ ヤッ ツガエー コー ヤッ チャー ナンダカ オトコシューン  
ちで やるかね こうしては 何にか 男の人が  
アノミター イーガ キガチカッテルデ イーガ ナンダカ オカ  
あの人は 悪いけど 気が遠くなるから 良いか 何でか 万々

〜 ジー ヨー ナ モ ン ダ ー ネー 「ヘー ツ イ イッ テ キ ヲ ジ ブ シ ン ー

いい よう な もん だ ね 兵 隊 に 行 っ て ま た (帰 る) 時 刻 は

「ジュー オ コー キリ ツ ヨ ク カ タ カ ツ グ マ ネ オ シ ツ カ イ

金 錢 を こ う 規 律 よ く × × か っ ぐ 買 取 と (金 銭) 今

ハ マ ヤ ラ ン ソ ン ナ フ ー ニ 「ジュー オ カ ツ ガ ン キリ ツ ヨ ク 「ヒ

や ら ぬ さん な だ に 金 錢 を か っ ぐ ない 規 律 よ く ヒ

〜 シ ト コー カ ツ イ ジャ ー 「イ マ ヤ ラ ン ソ リ ヨ ー ヤ ラ ン

シ ト こ う 担 い て は 今 や ら ぬ 金 銭 を や ら ぬ

ソ レ ヨ リ ナ ン シ ヨ コー オ ト ル マ ネ オ セ ル ネー ア レ オ

そ れ ぶ り と じ か く こ う 踊 る ま ね を 踊 る ね ぬ れ ね

「イェ オ ミ ル ラ カ ネー 「ネー ア レ 「イ ク ラ カ ミ ン ミ ン ヨ ー ナ

金 銭 を み る だ ろ う か ね ぬ ぬ れ い く だ か × × 見 たい よう な

フ ー シ テ 「ミ ル ダ イ ネー 「ネー

振 り 返 し て み る 人 な ね ね

### 3. 金唄のこと、七き夫のこと

話し手

| (略号) | (氏名) | (性) | (生年)    |          |
|------|------|-----|---------|----------|
| A    | 武田ふじ | 女   | 明治 32 年 | 富山府生まれ   |
| B    | 田辺正一 | 男   | " 34 年  | "        |
| C    | 堤ふじよ | 女   | " 39 年  | "        |
| く Y  | 山口幸子 | 男   | 昭和 11 年 | 新居町生まれ > |

C 「エー シンゾーガ ナンダ「ネー 「ヨウルダカ「ネー ナンダカ  
えい 心臓が 何だね 弱るのかね 何だね

「コエガ ツズカン「エー  
声か 続かないね

A 「イマデモ オドルラネー オーキ「ウオ モッテ オドルヤツモ  
今でも 踊るだろうね 扇を 持ち、 踊るのも

ソーレ ソレ

“ソーレソレ” (唄う)

C ソーレ ソレ「ネー  
ソーレソレね

Y ソノ オーキ「ウオ モッテ ヤルノモ ソレモ ボンニ オドル  
その 扇を 持ち、 やるのも それも 金に 踊る?

C (唄う) “ソーレソーレ ヨーイトセー オンド トルコガ トリク  
“それそれ よいとせ 音頭 とる子が とりく

〜ツビレヲ ヒロイ オニワデ ソージョー マクラ コラ ソーレソ  
たびわた 広い 家庭で 袖を 枕 くら それそれ

～レ ヨーイトセ<sup>〃</sup> ツ チャー ソレ ヤ<sup>「</sup>ル<sup>「</sup>ダ<sup>」</sup>ネ<sup>」</sup>  
よいとせ<sup>〃</sup> と いっは それ やるんだね

(唄う) カイナサレヨ ウタイナサレ ウジデ ゴキリョーガ  
“かいなされよ 歌いなれ 疾い ござ量か”

サガリヤセヌ コレソーレソーレ ヨーイトセ<sup>〃</sup> ッ<sup>「</sup>テ ヤ<sup>」</sup>ッ<sup>」</sup>タ<sup>」</sup>ネ  
さがりやせぬ これ それ それ よいとせ<sup>〃</sup> っ て や、たね

(唄う) ホンニャ オイデヨ ヒチガツァ オイデ コリヤ  
“盆<sup>」</sup>ニャ おいでよ 七月は おいで ころ”

シンダ<sup>〃</sup> ホトケモ ホンニャ フル ホリヤ ソーレソーレ ヨーイ  
死んだ 仏も 盆<sup>」</sup>ニャ くる ほか それ それ よい

トセ<sup>〃</sup>  
とせ<sup>〃</sup>

Y ムカシノヨーナ ウタダ<sup>「</sup>ネ<sup>」</sup>ー ソリヤー  
昔のようね 疾いね それ

C (唄う) ソロタ ソロタヨ オドリコガ ソロタ イネノ デホヨ  
“揃<sup>」</sup>た 揃<sup>」</sup>たよ 踊り子か 揃<sup>」</sup>た 稲の 出穂よ

～リヤ マダソロタ コレ ソーレソーレヨイトセ<sup>〃</sup>  
りや まだ揃<sup>」</sup>た これ それ それ よいとせ<sup>〃</sup>

“ア イネノ デホニワ デモウガ アルガ コラ ソロタ オドリコ  
“稲の 出穂には 出むらか あるか ころ 揃<sup>」</sup>た 踊り子

ハニャ モウワ ナイ コリヤ ソーレソーレ ヨーイトセ<sup>〃</sup> <sup>\*</sup>  
には むらは ない ころや それ それ よいとせ<sup>〃</sup>

ウタワ<sup>「</sup>ニャ<sup>」</sup> オモシロイガ コンキスギテ ウタヤシン<sup>(23)</sup> コドモ  
歌わなれ 面白いか 痛くすぎて 歌えない 子供

～モ ミンナト サソッテ ウタウト<sup>「</sup>キャ<sup>」</sup> オモシロク<sup>「</sup>コトシモ<sup>」</sup>  
も みんなと 誘って 歌う時は 面白く 今年も



ボシニ イッテ オドッタ  
盆に 行って 踊ったよ

A 「コンキードコジャ ネーヤレ  
疲れた どころじゃ ないよ

B アノ 「ヒトラジャー コエガ ツズカンデ エライワイ  
あの 一人では 声が 続かないから 大変だよ

C 「ウチャー ヨメヤナイ トテモ イキャ シンガイ カタマチダッテ  
家は 嫁 なんか としと 行きほしなにかね な ん

オウ 「ボンドコジャ ネーッ チュヤ オレ イッテ イッテ オドッタ  
俺 盆とどころじゃ ない って言いは 俺 行って (Ref) 踊った

〜リシテ オドッタガイ クタビレルコタ〜 クタビレタッタ  
りして 踊ったよ 疲れることね 疲れた、け

「キョ ネンワ 「ヨバンガヨバン イキヌイタダン  
去年は 四晩か 四晩 行き過ぎて こんどは

A 「ヨクネー  
よくね

C 「マー タイブ タメダニ ヨワッテネー ヒチジューニ ヒチジュ  
まあ ないよ 駄目だよ (律か) 弱さね セナに セナ

〜ニモナリャー  
にも ねれば

B 「マングズラ ハチダ  
まだだろう (ネナ) ハナ

C 「ハチジャ ナインネー マー ニガツノ ムイカガ クリャー 「マン  
ハじや ないですよ まあ 二月の 六日か くれは 満

ヒチジューダ  
セナ

B 「ソシネ＝ナルカ  
そしねに たるか

A ヒチジュー「  
セナ?

C 「ヘー 「イマダネー ＝カッソノ ムイカッ チュ ヤー  
もう 今ねぬ 二月の 六日、アキハ

B 「ソーカネ  
そいかな

A ワカイワネー  
若いかな

B 「ウシ ワカイ  
いふ 若い

C 「ワカカ 「ナイ＝ マーハイ オトーサン＝ 「ハヤク ナクナラレテ  
若くは ないアハ まあ もう お父さんに 早く 死ぬわ

A コッペー コイタデ  
苦労 しなか

C 「ヨンジューノ トシ＝ ナクナラレタ  
四十の 年に 死ぬわ

B 「ヨンジューダッ ツカイ アー ナンギョ シタナ  
四十だんか あゝ 難儀を したな

C ホント ナンギョ シタデ ワシャー ホント ドシナコトデモ  
本当に 難儀を しなか 私は 本当に どのくらいでも

がマンガ デキル ッチュ コトイネ 「エー  
我慢が できる、アハ ことアハ ね

B ソリヤ ソーダ  
いふ そいかな

B ソリヤ 「オンナ」デ 「ヤリ」又イタガ オトコ シュー ジャ 「ヤリ」又ケ  
 女 女から ヤリ抜いたか 男 では ヤリ抜いた

～ンゾ  
 はいそ

A コッ「ペー」 コイタデ「ネー」  
 苦勞 しなからね

C ソイデ 「ゴ」モ ワカンガネー 「ゴ」カ ワカンダー 「ガ」マンカ  
 それで 腹も なにないけれども 腹が なにないんか 我慢か

デキルモンダイ「ネー」  
 できるものでね

Y オトーサンワ マタ 「ド」シテ ソーユー ハヤク ナンカ ケカ  
 お父さんは 又 どうして いろいろ 早く 何か 怪我

～カ ナンカダッ? 「ビョ」キダッ?  
 か 何か なんだ? 病気になる

C オトーサンワ 「ショ」ズラカッタガ「ネ」 アノ コトモカネー アノ  
 お父さんは 運悪かったんですよ あの 子供がね あの

～ 「センソー」= イッテヨー アノー ムスコガネー イッテ ア  
 戦争に 行ってね あの 息子がね 行って 呀

～ノー ゲリノ ビョーキ= トッツカレタ「ネー」 トッツカレタヨ  
 の 下痢の 病気に とりつかれたのね とりつかれたよ

ソイデ ワシ= 「ド」カ アー ジブンデ アーナル カゲンダカ  
 それで 私に どうか ×× 自分では あゝなる 加減 なのか

ワシ= アノー トヨハシノ アノ ガッコーエ 「ニュー」インシト  
 私に あの 豊橋の あの 学校へ 入院して

～ルデ アノー ツツミクンガ 「ニュー」インシトルデ 「メン」カイニ  
 どうか あの 提督が 入院 していいか 面会に

キ<sup>レ</sup>テ クリ<sup>ョ</sup>ーッテ ユーモンデ<sup>ニ</sup> 「マ<sup>ー</sup> ワシ<sup>ニ</sup>」 イッテコイッテ  
き<sup>ろ</sup> くれ、<sup>て</sup> いじ<sup>う</sup>い<sup>い</sup> まあ 私<sup>に</sup> 行<sup>き</sup>てこい<sup>て</sup>

ユ<sup>ニ</sup>テ イッテキ<sup>テ</sup>テ クリ<sup>ョ</sup>ー 「コンドナ<sup>ー</sup> タ<sup>イ</sup>インスル<sup>ト</sup>キャ  
言<sup>う</sup>て 行<sup>い</sup>て来<sup>て</sup> くれ 今度<sup>ね</sup> 退院<sup>する</sup>時は

～ オレ イッテフル<sup>デ</sup> イッテクリ<sup>ョ</sup>ーッテ 「ヨシ ホイジャ  
俺 行<sup>い</sup>てくるか<sup>い</sup> 行<sup>い</sup>てくれ、<sup>て</sup> よし それ<sup>では</sup>

ワシ イッテフル<sup>ッ</sup>テ ワシ イッテ キタ<sup>ッ</sup>ツカ<sup>ネ</sup>ー 「コント<sup>ー</sup>  
私 行<sup>い</sup>てくる<sup>て</sup> 私 行<sup>い</sup>て また かね 今度

タイインダ<sup>ッ</sup>チュ<sup>ー</sup>モンダ<sup>デ</sup> ソイジャ<sup>ー</sup> オレ コンダ<sup>ー</sup> イッテ  
退院<sup>する</sup>は、<sup>て</sup>い<sup>い</sup> の<sup>う</sup>い<sup>い</sup> それ<sup>では</sup> 俺 今度 行<sup>い</sup>て

フル<sup>デ</sup>ナ<sup>ー</sup>ッチュ<sup>ー</sup>ッテ イッテ 「ニモツウオ ショ<sup>ッ</sup>テキタ<sup>ッ</sup>ツワ  
くるからな<sup>って</sup>言<sup>う</sup>て 行<sup>い</sup>て 荷物<sup>を</sup> 着<sup>ろ</sup>、<sup>て</sup> また、<sup>け</sup>

～ イネ ソレニ イクラカ バイキンガ<sup>ネ</sup>ー 「キタ<sup>ッ</sup>ツカ<sup>ナ</sup>ンタ<sup>カ</sup>  
それ<sup>に</sup> いくら<sup>か</sup> バイ<sup>菌</sup>が<sup>ね</sup> また か 何<sup>で</sup>か

オト<sup>ー</sup>サン ヨワ<sup>ッ</sup>ツモ<sup>ン</sup>デ<sup>ニ</sup> 「チ<sup>ョ</sup>ーノ ヨワイ タチダ<sup>モ</sup>ンデ<sup>ニ</sup>  
お父<sup>さん</sup> (体<sup>が</sup>) 弱<sup>が</sup>、<sup>て</sup>い<sup>い</sup> 腸<sup>の</sup> 弱<sup>い</sup> 性<sup>格</sup> <sup>な</sup>が<sup>ら</sup>

～ ネー 「サ<sup>ー</sup> ソレニ ト<sup>ッ</sup>ツカ<sup>レ</sup>テ<sup>ネ</sup>ー ゲ<sup>リ</sup>ニ ナ<sup>ッ</sup>テヨ<sup>ー</sup> ソ  
ね さあ それ<sup>に</sup> と<sup>り</sup>つ<sup>か</sup>れて<sup>ね</sup> 下痢<sup>に</sup> な<sup>っ</sup>て<sup>ね</sup> ぐ

「レガ 「モト ロクマクオ ヤンダ<sup>ッ</sup>タ モンダ<sup>デ</sup> アレ 「シンガ<sup>ー</sup>  
わ<sup>か</sup> もと 肺<sup>膜</sup> <sup>を</sup> 病<sup>ん</sup> <sup>な</sup>こ<sup>と</sup>が<sup>あ</sup>る<sup>の</sup> <sup>う</sup>い<sup>い</sup> あれ 芯<sup>か</sup>

「ジョ<sup>ー</sup>ブニ ナカ<sup>ッ</sup>タ モンデ<sup>ネ</sup>ー 「タダ ホント 「ナンダ<sup>ニ</sup> 「メ<sup>オ</sup>  
丈夫<sup>で</sup> な<sup>か</sup> <sup>ら</sup> <sup>な</sup> <sup>う</sup> <sup>い</sup> <sup>い</sup> <sup>な</sup> <sup>ん</sup> <sup>と</sup> <sup>に</sup> 何<sup>で</sup> <sup>す</sup> <sup>よ</sup> 目<sup>を</sup>

アケ<sup>タ</sup>ナ<sup>リ</sup> ケ<sup>ッ</sup>コ<sup>ー</sup> 「マ<sup>ン</sup>ジャ<sup>ッ</sup>タ<sup>ッ</sup>ツカ<sup>ネ</sup>ー  
あ<sup>け</sup> <sup>な</sup> <sup>き</sup> <sup>り</sup> <sup>と</sup> <sup>う</sup> <sup>い</sup> <sup>い</sup> <sup>な</sup> <sup>ん</sup> <sup>と</sup> <sup>に</sup> <sup>な</sup> <sup>ら</sup> <sup>ね</sup>

Υ ソノコロ コレガ ア<sup>ッ</sup>タダ<sup>ニ</sup> 「デ<sup>ン</sup>シマ<sup>ワ</sup>  
それ<sup>が</sup> <sup>わ</sup> <sup>か</sup> <sup>あ</sup> <sup>な</sup> <sup>ん</sup> <sup>と</sup> <sup>に</sup> <sup>な</sup> <sup>ら</sup> <sup>ね</sup> 電<sup>車</sup> <sup>は</sup>

C 「デ」 シャ ナ「カ」 タ モニ「ダ」デ 「ワ」 シャ ネー アノ 「サ」カベッ チュー  
 電撃 ながらって 私にね あの 坂部って  
 トコイ マズ ダン「レ」モ ソンナ ビョー キダモ「ン」ダ「デ」ネー キ「チ」ャ  
 所へ ます 誰も そんな 病気をからぬ 来ては  
 クレン「ラ」 ダン「レ」モ キ「チ」ャ クレン ソノト「キ」ャー オー アレガ  
 くれぬいでは 誰も 来や くれぬい その時は 大荒れか  
 シ「テ」ヨー 「デ」ンキモ ケー「チャ」ッテ ナイモ「ン」デ「ネ」ー ナクテ ホ  
 してね 電気も 消えちって ないのてね ねくて  
 ~ント カナシー メオ シ「メ」= ソーヤ「ッ」テ アノー チュー シャ  
 本当に 悲しい 目を しましなよ せやて あのう 注射  
 ヘ「デ」モ ヤッテ ヤラニ「ャ」ー ショー「ガ」 ナイモ「ン」ダ「イ」ネー ワシャ  
 でも やて やらぬは しょうか ないのてね 私に  
 「サ」カベー イッ「テ」ヨー アノー ム「カ」シャー アノー 「ウ」ォー スキ<sup>(28)</sup>  
 坂部へ してね あのう 昔は あの 大杉

~ー イッテ  
 へ して

A 「エー」 「オー」 スキー  
 え、 大杉に

C オトーサン コーヤ「ッ」テ オレ「ニ」ャー ワシ イッテ チュー シャ  
 お父さん こやて 居れぬければ 私 して 注射  
 アノ リンゲル アレ ナン「チ」ュー「ダ」カイ カンフル「ダ」カイ アレ  
 あの リンゲル あれ 何と「い」のかね カンフル あね あれ  
 ~オ ヤッテ ヤル「デ」ー アノ モ「ラ」ッテ「キ」テ ヤッテ ヤル「ダ」イッ  
 て やて やるかや あの 覚えてきて やて やるよって  
 ~タ「ウ」 「ハ」ヤ「フ」 イッ「テ」キ「テ」 クリョー「ッ」 チューモ「ン」ダ「イ」 ワ「シ」ャー  
 言たら 早く してきて くれ っていいのて 私に

アノ「サ」カンベマデ イッダ「=」リ アル「カイ」 コッ「カウ」 ソ「コ」  
あの 坂部 ママ 行ったよ =里 あるかな ここから 子:

〜イ イッ「テ」 もう「ッ」テキ「テ」ヨー 「ウ」チーヌイ「テ」 ヤッ「タ」ッ ツガ「ネー」  
へ 行って 覚えて きてね (お母様)うち送ってね や、ね けどね

「マ」ー 「ジュ」ーゴン「チ」 ネ「ナシ」= 「ヨ」ルヒル ネ「ナシ」= ワ「シャ」ーア  
まあ 十歳に 寝ずに 夜昼 寝ずに 私ほ あ

〜ノ オ「カイ」コモ ア「ッ」ツモン「デ」ネー エー ネ「ナシ」= オ「ッ」テ  
の お昼も あ、ね みてね え、 寝ずに 居て

カンビョー「シ」テ ヤッ「タ」ラ アノ「マ」ンダ「ン」 オン「ナ」ノ「コ」ガ ヒト「リ」  
看病して や、ね あの ママ 女の子が 一人

「イ」マ 「オン」ナノ「コ」ワ タス「カ」ッ「タ」ガネー タス「カ」ッ「タ」ッ「タ」ン アノ  
今 女の子は 助かったからね 助かったか 西の

〜「=」オウ「ナ」ヨ アノ「=」オウ「ナ」 オカ「ー」サンノ ワ「シャ」ー アノ  
体をこわす なよ あの 体をこわすは お母さんっ 私ほ あの

〜コロ ハ「ウ」ウオ ニ「カ」イメ「=」 シジツシ「タ」トキ「ダイ」 ト「テ」モアノ  
頃 腹を =四めに 手術 (なとき)なよ としてもあの

オ「ッ」カ「チャ」ンノ カ「ウ」ダ「ガ」 ツズ「カ」ン「デ」ナー「=」オウ「ナ」ヨ「ッ」テ ア  
お母さんの 体が 続かないからね 体をこわすなよ、て 西

〜ノー ム「ッ」ツ「ワイ」ネ ム「ッ」ツ「ガ」 アノー「ソ」イ「デ」モ 「ミ」チ「コ」ワ  
の 言ったよ 言ったか 西の それでも ミチ子は

タス「カ」ッ「タ」ガ ソノ オト「ー」サン「ワ」 ナク「ナ」ッ「タ」 ソイ「デ」 カン「フ」  
助かったか その お父さんは なくね、ね それで、 カンフル

〜ル ヤッ「タ」ケ「ト」 ワ「シャ」ー マー ソノ ソノジブ「ン」ニ「ヤ」 チョ「ッ」ト  
や、ねけど 私ほ まあ その その頃には ちょ、と

〜モアノ タ「ベル」モナ「ナイ」モン「デ」ネー オト「ー」サン「ワ」 タ「ベ」エ「ン」モン  
まあ 食べ物は ないからね お父さんは 食べられないのて

ダイ 「ショーナイデ」 コムキ<sup>ウ</sup>オ<sup>ネ</sup>ー コムキ<sup>ノ</sup> トッ<sup>タ</sup> ヤツ<sup>オ</sup>ー  
しかな<sup>が</sup>ない<sup>か</sup>ら 小麦<sup>を</sup>ね 小麦<sup>の</sup> 取<sup>っ</sup>た<sup>や</sup>っ<sup>て</sup>

アノ 「オイノ」 コノシ<sup>タ</sup>ノ オジ<sup>ー</sup>サン<sup>ガ</sup>ー シンセ<sup>キン</sup> アッ  
あの 奥<sup>の</sup> この下<sup>の</sup> おじい<sup>さん</sup>か 親戚<sup>が</sup> あっ

〜タモ<sup>ン</sup>ダ<sup>テ</sup> アノー 「ガイ<sup>ショ</sup>イ」 イッ<sup>チ</sup>ャー 「ク<sup>ン</sup>デ<sup>キ</sup>テ クレ  
な イッ<sup>チ</sup> あ<sup>の</sup> 在所<sup>(里方)</sup>へ イッ<sup>チ</sup>は 交換<sup>して</sup>ま<sup>て</sup> くれ

〜ルモ<sup>ン</sup>ダ<sup>テ</sup>ヨ 「コー<sup>カン</sup>シ<sup>テ</sup> クレル<sup>モ</sup>ン<sup>ダ</sup>イ ソノ 「リン<sup>ゴ</sup> ウ<sup>オ</sup>  
る ので<sup>ね</sup> 交換<sup>して</sup> くれ<sup>の</sup> ので<sup>ね</sup> その リン<sup>ゴ</sup>を

〜ネ ユカ<sup>キ</sup>ー コン<sup>ナ</sup> ユカ<sup>キ</sup>ー イッ<sup>パ</sup>イ モッ<sup>テ</sup>キ<sup>テ</sup> オト<sup>ー</sup>  
ね ざる<sup>へ</sup> こ<sup>んな</sup> ざる<sup>へ</sup> い<sup>っぱ</sup>い 持<sup>っ</sup>て<sup>ま</sup>て お父

〜サン タク<sup>サン</sup> タビ<sup>ョ</sup>ー<sup>ネ</sup> アノー ワシ<sup>ア</sup>ノ コレ<sup>オ</sup> コレ<sup>ナ</sup>  
さん もく<sup>さん</sup> 食<sup>べ</sup>な<sup>ね</sup> あ<sup>の</sup> 私<sup>あ</sup>の これ<sup>を</sup> こ<sup>んな</sup>

〜ラ タベ<sup>レ</sup>ル<sup>ッ</sup>タ<sup>ラ</sup> 「マズ」 オマ<sup>エ</sup> ソン<sup>ナ</sup> ナニ<sup>ョ</sup>ー マズ<sup>ド</sup>ー  
う 食<sup>べ</sup>られ<sup>な</sup>い<sup>た</sup>ら ず<sup>う</sup> お前<sup>さん</sup> 食<sup>べ</sup>な<sup>ね</sup> 何<sup>と</sup> ま<sup>ず</sup> どう

〜セルツ<sup>モ</sup>リ<sup>タ</sup>ッ<sup>テ</sup> オカ<sup>ネ</sup>オ ドー<sup>セル</sup> ツ<sup>モ</sup>リ<sup>タ</sup>ッ<sup>テ</sup> ソリ<sup>ョ</sup>ー  
する つも<sup>り</sup>た<sup>ら</sup> お金<sup>を</sup> どう<sup>す</sup> つも<sup>り</sup>た<sup>ら</sup> それ<sup>を</sup>

シン<sup>パイ</sup>ガ<sup>ッ</sup> ワ<sup>ウ</sup>イ<sup>ネ</sup> アン<sup>ジャ</sup>ー<sup>ナイ</sup> アノー オト<sup>ー</sup>サン<sup>ワ</sup>  
心配<sup>した</sup> よ 心配<sup>ない</sup> あ<sup>の</sup> お父<sup>さん</sup>は

チッ<sup>ト</sup>モ 「ゴ<sup>ハン</sup>ワ タベ<sup>リ</sup>ャ シエン<sup>ダ</sup>モン ナン<sup>ニ</sup>モ タベ<sup>リ</sup>ャ  
かし<sup>も</sup> こ<sup>はん</sup>は 食<sup>べ</sup>る<sup>こ</sup>は<sup>で</sup>き<sup>ない</sup>ん<sup>な</sup>もの 何<sup>に</sup>も 食<sup>べ</sup>は

シエン<sup>ダ</sup>モン<sup>デ</sup> コ<sup>デ</sup>モカ<sup>エ</sup>シ テオ<sup>カ</sup>ヤ<sup>シ</sup> 「ソー<sup>ヤ</sup>ッ<sup>ツ</sup>ガ<sup>ネ</sup>ー<sup>(25)</sup>  
し<sup>得</sup>ない<sup>の</sup>な<sup>か</sup>ら 粉<sup>で</sup>も<sup>返</sup>し 矢<sup>を</sup>返<sup>し</sup> そう<sup>や</sup>った け<sup>れ</sup>ど<sup>ね</sup>

アノ 「タベ<sup>テ</sup> もう<sup>ッ</sup>タ<sup>ッ</sup>ツ<sup>ガ</sup> ソー<sup>ヤ</sup>ッ<sup>テ</sup> ナン<sup>シ</sup>ロ 「ジュ<sup>ー</sup>ゴ  
あの 食<sup>べ</sup>て 焚<sup>った</sup> か そう<sup>や</sup>て な<sup>に</sup>しろ ナ<sup>五</sup>

〜ンチ 「エー」 ヨル<sup>ヒ</sup>ル<sup>ナ</sup>シ ト 「ミッ<sup>ト</sup>モ<sup>ナ</sup>イ ソノ<sup>ヒ</sup>ガ<sup>ネ</sup>ー  
日 え、 夜<sup>昼</sup> なし x み<sup>と</sup>も<sup>ない</sup> (ナ<sup>り</sup>ふ<sup>り</sup> <sup>が</sup>ま<sup>あ</sup>ぬ) その<sup>日</sup>か<sup>ね</sup>

「エー ジューゴンチ カンビョーシテ ヤッタウ マズヨウ オカ  
え、 十日後 看病 して やたら まずよく お母

〜サンノ アノ オッカチャンノ ミガラウ ツズクッ ツツツワネ  
さんの あの お母さんの 身 は 続くって言ったよ

〜 カラドガ ツズクッテ ユツツワイネ ユツツカネー ジュー  
体が 続く、と 言ったよ 言ったかね +

〜ゴンチノ バンカダネ ナンツー タダ メオ アケタッキシネ  
五日の 晩方ね 何と云うか ね、 目を 開けたままね

タダ ミヤクガ トマッチャッテヨ ソノ バンカダ オカシカッ  
自然に 腕が 止まっちゃってね その 晩方 おかしから

〜ツワイネ アノ ハイ「オーアレガ」 シタトキモ ミズガ デ「チャ  
たよ あい も(時候)大荒れか (た)時(川)の水が 出ちゃ

〜「テネー  
ってね

B 「アアー ソーダッタネー  
あ、 そうね、ね

C ミタイツチューモンダイ ソレオ ハ「ハッテデ」 ミタンネ  
見たいていので それを × だって 見たんです

ソリョー コーヤッテ「ハッテ デテミルトサイ＝ マズ「オーキ  
それ じゃ、と だって 出てみると まず 大きい

〜 ミズダナーッテ ユッテ …… コリヤ「タダ コー「デ「チャ  
水 ね、なあ、と 言って (不明) これ 自然に こ(小便)が出

〜ツツチューモンデネー アノー ソーユヤー ワシン「フイテ  
ちゅ、ちゅ、ていのでね あの そう言はば 私が 拭いて

ヤルデッタウ「マー オリャーノー ソンナアノ「キレーニシテ  
やるからって言う、まあ 俺はね なんとあの きれいにして



クレンデモ 「イーッ チューラー」 コイデ オリヤ 「キレーニシテ  
くわねても 良い、てい」 りんじ こわい おれは きれいだし

クレンデモ 「イーッ チュード」 ソノトキカラ チョットモ シラ  
くわねても 良い、てい」 りんじ その時から 少し (気が) つか

〜ンターネ マー「キレーナコター イランデナー 「チョット フイトイテ  
ないんたよ まあ きれいな 必要は ないからな 少し 拭いていて

フリョー ソノトキ ユツタワイネ アノナー 「イマ ナシニモ  
くれ その時 言、たよ あつな 今 何にも

ナイトキダシ イチバン オレノ 「イーキモノワ 「イーキモノワ  
ないのよ 一番 俺の 良い着物は 良い着物

アノー オトサンニ ヤッテフリョーッテ ウチノ アトノ カカ  
あつな あと さんに や、てくれ、て 家の あとの カカリ

〜リオナーエ アリヤー ウーサンニ ヤレヨー 「ミチコガ ヨクナ  
を は あれは ウー さんに やれよ ミチ子か よく な

〜ツラ アノー 「オンナノコガ 「ネコンドッツガ 「ヨクナツラ  
なら あの (ミチ子) 女の子か 寝こんでいたか (女の子) よく な、な

アノー 「イツモ ジョーカイニ キテッ ..... ツアイニヤ  
あの いつも 常会に 着て行く、 と

アリヤー アレニ ウエト シタノ モンペート フワニ コシヤ  
あれは あれに 上と 下の モンペと 簡学服に こし

〜ッテ ヤレヨッテ ユツテ 「チョット 「ユイオキダッ ケガネー  
え、て やれよ、て 言、て (女の子) ちょっとした 遺言 なんだかね

ソリョー 「チョットモ オリヤー 「ユイオキダッー オモワシタ  
おれ 少し 俺は 遺言などでは 思わないんた

「ヨクダモニテナー  
慾 だものだからね

A アー ソーダワイエー  
あー そいあー

C ソーヤッテネー コレ イノマ＝ オ<sup>(26)</sup> 「サタデ」 ココエチーット  
そいあてね これ 房間に ? 佐太で ここへ かし

「ノコトツタイネ マー トデモ」 オマエモ カラトが ツズカン  
残っていたよ まあ とっても お前も ほか 続かない

〜デ ココ＝ ネヨッテ チョットモ ネソメンデ ココ＝ ネオッ  
が ここに 寝よ、え せしも 寝つけられないで ここに 寝よ

〜テ ユツツが ト オトツツァ チョットモ オレ ネブカー ナ  
ア 言、たか × お父さん せしも 俺 眠くは な

〜イデ イッショー ケンメーダデ オリャー 「ヨクナッテ モラワニャ  
いから 一生懸命 ながら 俺は よくなら 昔のバカ

〜ー コマルデッテ ワシ ユッテネー ユッテヨ 「ソーシテ」 イノ<sup>(27)</sup>  
困るから、て 私 言、てね 言、てさ そいあ 居

〜マイ イッテ ナニカ シトツタラ 「ホイカラ」 「フサガ」 オッカチャ  
間に 行って 何か していいなら それから おさか お、母さん

オッカチャ 「ハヤキテ ミョー」 オトッチャ アノ 「メオ」 「メオ  
お、母さん 早く来い みよ お父さん あの 目と 目と

アケテ オルガ 「ジャクガ」 ナイッチューラ 「キテミツラ」 「ソーダ」  
あけて いろいろ 脈か ない、て言、ては、 まえみえ そいあ

〜ツ 「タダ」 スーット 「ミヤクダケ」 トマッチャツ 「ヨワッチャ  
った なんだ ずうと 脈 ない 止っちゃった、 ぶちや

〜ツ コーヤッテ 「マス」 オッカチャガ ナンダゾー 「シンセツ＝  
った こいして ます お、母さんか 何だよ 親セツに

アノー 「ダレガ」 コンネ＝ シンセツ＝ シテフレルモノガ  
あの 誰か こんなに 親セツに してくれろ 君か

「ア」ラッチャ オ「カ」ケニ ヨ「ク」ナル「ド」ーッ、チュッチャー う「レ」シガッ  
あうか おかげで 良くなるよ って言、ては 嬉しか

「テ」ネー ソー イッテ オッテ シンジャッヲ ナンニモ オンニ  
てね そ言、て いて 死んじゃ、た 何にも 俺に

ユイヨキモ ナンニモ ユヤーヘンデネー 「ヨ」ナルトモッヲモン  
言い置きも 何にも 言わぬでね 良くなると思、たので

デ

A 「ワ」カクテ シンダ「デ」ネー 「ワ」カクテ シンダ  
若く 死んだからね 若く 死んだ

B ジューガッ ツ ジューガッ ハッカダッ ツナー  
十月 十月 二十日だった

C 「ヨ」ンジューシデ シンダ  
四十四で 死んだ

B 「ア」ー ソーダッ ツラ 「キ」ーヲタケニ ヨンダッ チュッチャー シン  
あ、 そうならろう 聞いちゃって 呼んだって言、ては みんな

「ナ」ニ ホ「メ」ラレタデ 「ソ」イデモ オリヤー コドモニ 「ソ」ーイッテ  
なに ほめられたから それで 俺は 子供に そ言、て

「マ」ー アンナー チカラガ カナシーコヲー カナシーガ アノー  
まあ あんなのは 力か 悲しいことは 悲しいか あの

オトッチャンワ ナンダ「ド」ー アノー シニバナシ サイトト ユ  
お父さんは 何だよ あの 死に花か 咲いたと 言

「モ」ンダ アンナヒ「ダ」ー ヒトノ ワ「ル」イヒト「ダ」デ ナンダー ア  
じもんか。 あんな人は 人の 悪い人だから 何だよ 西

「ノ」ー アレン 「ナル」ワ アタリマエダッテ ユワレルト アンナ  
の あれに なるのは 当たり前で 言わねと あんな

「イッショー サワバス」 ヒトノ イーヒトダ「ウー フント タ  
ーキ ーの ばいん 俺は ちやに 食  
へ「ベモノカ」 タベレナンス「ッテ ミナ ユッテクレルカ」 「ナー ヒト  
べいのか 食べられなからな、ミナ 言ッて くれるか ね 人  
へ「ユウレタター アノナー ターメンナ チガイダ アレ アレ  
に 言われな とは(言わねば) あいね ないんか 違いな あり あり  
へ「ガ シニ シニバナカ サイタ ユーモンダデ」 コトモニ チカ  
か 死に 死に花か 咲いて 言ッて 3度 かに  
へ「ラー オトスナヨ ショーガナイデナーッテ オレ ユッタッツカ  
を 落すなよ しなかなんかからな、俺 言ッた か  
へ「ネー ホント ソーダデネー」 ギンナ ソーイッテクレテ 「マー  
ね 本当に そうかな みた そう言ッて くれて あ  
タベモノカ タベレナンダッテ アノシトガ シン「ナクナッタッ  
食べれのか 食べられなからな、あの人か 死ん... なくなな  
へ「テ ユッタラ タベモノカ タベレナンダッテ ソーイッチャー  
て 言ッたら 食べれのか 食べられなからな、そう言ッては  
クレツモンダイネー ワシワ ソレダキチャー ソレダキチャー ソノ  
くれなでね 私は それを1は それを1は その  
ウレシカッタド「ー」チュッテ ワシン ソイデ コノフミデ「モネー  
うれしかた 言ッて 私が それで この組でもね  
「ショージキデ」 アノー シトノイー シトダッタン 「タダ」 ヒッコ  
正通で あの人 人の良い 人 なるか なか (?)  
へ「ミチョー ウォ アレ「チョード アレネー ナニカノ「ハイキュー  
を あれ 丁度 あれね 何かか 配給  
へ「ジブンデ「ネー「ショージキナ ヒトデ「チュッテ 「ニネンダ「ツカ  
の腹でね 正通な 人言ッて言ッて 二年 なるか

サンネンカ ヤラシテ フレ<sup>レ</sup>テネ<sup>ネ</sup> オラマー ソー イッ<sup>ッ</sup>タ オト<sup>ッ</sup>  
三<sup>三</sup>才<sup>才</sup>か やらして くわてね 俺 まあ そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>いた お父<sup>父</sup>さ

〜<sup>〜</sup>チャ ト<sup>ト</sup>デモ ウ<sup>ウ</sup>チ<sup>チ</sup>ガ マ<sup>マ</sup>ランデ<sup>デ</sup> ヤ<sup>ヤ</sup>ッ<sup>ッ</sup>テ<sup>テ</sup>ケ<sup>ケ</sup>レ<sup>レ</sup>ン<sup>ン</sup>デ<sup>デ</sup>ッ<sup>ッ</sup>タ<sup>タ</sup> アノ  
ん と<sup>と</sup>ても 家<sup>家</sup>か た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ない<sup>い</sup>から、 や<sup>や</sup>て<sup>て</sup>ッ<sup>ッ</sup>テ<sup>テ</sup>ない<sup>い</sup>から、 て<sup>て</sup>き<sup>き</sup>な<sup>な</sup>さ<sup>さ</sup> 母<sup>母</sup>の

「ナン<sup>ン</sup>ダ<sup>ダ</sup>」イ コノ 「ク<sup>ク</sup>ビ<sup>ビ</sup>」ノ シュー<sup>ー</sup>ワ ウ<sup>ウ</sup>チ<sup>チ</sup>ガ ヤ<sup>ヤ</sup>レ<sup>レ</sup>ニ<sup>ニ</sup>ャー アノ  
何<sup>何</sup>です<sup>す</sup>よ この 紐<sup>紐</sup>の 象<sup>象</sup>は 家<sup>家</sup>か む<sup>む</sup>ね<sup>ね</sup>の<sup>の</sup>む<sup>む</sup>ね<sup>ね</sup>は あ<sup>あ</sup>の

イッ<sup>ッ</sup>テ 「ア<sup>ア</sup>ノ<sup>ノ</sup>ミ<sup>ミ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>イ<sup>イ</sup> イッ<sup>ッ</sup>テ ヤ<sup>ヤ</sup>ッ<sup>ッ</sup>テ ヤ<sup>ヤ</sup>ル<sup>ル</sup>デ<sup>デ</sup>ー シ<sup>シ</sup>ゴ<sup>ゴ</sup>ト<sup>ト</sup>ワ<sup>ワ</sup>ー  
行<sup>行</sup>った 天<sup>天</sup>の<sup>の</sup>宮<sup>宮</sup>(<sup>屋</sup>号)へ 行<sup>行</sup>った や<sup>や</sup>て ち<sup>ち</sup>よ<sup>よ</sup>ろ<sup>ろ</sup> 仕事<sup>仕事</sup>は

「ナ<sup>ナ</sup>ン<sup>ン</sup>シ<sup>シ</sup>ロ ヤ<sup>ヤ</sup>ッ<sup>ッ</sup>テ フ<sup>フ</sup>レ<sup>レ</sup>ニ<sup>ニ</sup>ャー ショ<sup>ー</sup>ガ<sup>ガ</sup>ナ<sup>ナ</sup>イ<sup>イ</sup>ッ<sup>ッ</sup>チュ<sup>ー</sup>ー<sup>ー</sup>デ<sup>デ</sup>」タ<sup>タ</sup>タ<sup>タ</sup>  
な<sup>な</sup>に<sup>に</sup>しろ や<sup>や</sup>て く<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup>な<sup>な</sup>て<sup>て</sup>は し<sup>し</sup>ょう<sup>う</sup>か<sup>か</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>って<sup>て</sup>き<sup>き</sup>う<sup>う</sup>から な<sup>な</sup>な

ミ<sup>ミ</sup>ン<sup>ン</sup>ナ<sup>ナ</sup>ガ ソー イッ<sup>ッ</sup>テ オ<sup>オ</sup>シ<sup>シ</sup>ツ<sup>ツ</sup>ケ<sup>ケ</sup>ラ<sup>ラ</sup>レ<sup>レ</sup>テ マ<sup>マ</sup>タ ヤ<sup>ヤ</sup>ル<sup>ル</sup>ヨ<sup>ヨ</sup>ー<sup>ー</sup>ニ<sup>ニ</sup> ナ<sup>ナ</sup>  
み<sup>み</sup>んな<sup>な</sup>か そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>言<sup>言</sup>って 押<sup>押</sup>し<sup>し</sup>つ<sup>つ</sup>け<sup>け</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>て ま<sup>ま</sup>た や<sup>や</sup>る<sup>る</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>に な<sup>な</sup>な

〜<sup>〜</sup>タ<sup>タ</sup>ッ<sup>ッ</sup>チュ<sup>ー</sup>ッ<sup>ッ</sup>「チャ<sup>ー</sup>」 ソー イッ<sup>ッ</sup>ツ<sup>ツ</sup>ワ<sup>ワ</sup>イ<sup>イ</sup>ヤ 「マ<sup>ー</sup>」 ソ<sup>ソ</sup>イ<sup>イ</sup>デ<sup>デ</sup>モ ソ<sup>ソ</sup>レ<sup>レ</sup>ナ  
な<sup>な</sup>て<sup>て</sup>言<sup>言</sup>って<sup>は</sup> そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup> 言<sup>言</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>さ まあ そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>で<sup>で</sup>も そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>な

〜<sup>〜</sup>ラ 「ケ<sup>ッ</sup>」コ<sup>ー</sup>ダ<sup>ッ</sup>チュ<sup>ッ</sup>ッ<sup>ッ</sup>テ ワ<sup>シ</sup>モ ソー イッ<sup>ッ</sup>テ<sup>ネ</sup>ー 「ム<sup>リ</sup>ニ<sup>ニ</sup>」ワ  
ら け<sup>け</sup>こ<sup>こ</sup>う<sup>う</sup>な<sup>な</sup>て<sup>て</sup>言<sup>言</sup>って 私<sup>私</sup>も そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>言<sup>言</sup>って<sup>ね</sup> 無<sup>無</sup>理<sup>理</sup>に 私<sup>私</sup>

〜<sup>〜</sup>シ<sup>シ</sup>モ ソー<sup>ワ</sup> イ<sup>ワ</sup>ナ<sup>ン</sup>ダ<sup>ン</sup>シ<sup>シ</sup> マ<sup>ズ</sup> マ<sup>タ</sup> オ<sup>ト</sup>ッ<sup>ッ</sup>チャ コ<sup>ト</sup>シ  
も そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>は 言<sup>言</sup>わ<sup>わ</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>か ま<sup>ま</sup>ず 又<sup>又</sup> お<sup>お</sup>父<sup>父</sup>さん 今<sup>今</sup>さ

モ<sup>ウ</sup>イ イッ<sup>ッ</sup>タ<sup>ラ</sup> 「ミ<sup>ン</sup>ナ<sup>ナ</sup>ガ」 ソー イッ<sup>ッ</sup>テ フ<sup>レ</sup>ル<sup>ル</sup>デ<sup>デ</sup>ッ<sup>ッ</sup>テ マ<sup>ー</sup>  
費<sup>費</sup>に<sup>に</sup> 行<sup>行</sup>った<sup>ら</sup> み<sup>み</sup>ん<sup>ん</sup>な<sup>な</sup>か そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>言<sup>言</sup>って く<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup>な<sup>な</sup>から<sup>って</sup> まあ

ソ<sup>イ</sup>デ<sup>モ</sup> ソ<sup>イ</sup>タ<sup>モ</sup>ン<sup>デ</sup> ウ<sup>レ</sup>シ<sup>シ</sup>カ<sup>ッ</sup>ツ<sup>ツ</sup>ガ<sup>ネ</sup>ー 「エ<sup>ー</sup>」ワ<sup>シャ</sup>ー  
そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>で<sup>で</sup>も そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>な<sup>な</sup>か<sup>ら</sup> う<sup>う</sup>れ<sup>れ</sup>し<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>け<sup>け</sup>と<sup>と</sup>ね え<sup>え</sup>、 私<sup>私</sup>は

ハ<sup>イ</sup> コ<sup>ド</sup>モ<sup>モ</sup>ニ<sup>ニ</sup> ソー イッ<sup>ッ</sup>テ ユ<sup>イ</sup>キ<sup>キ</sup>カ<sup>シ</sup>タ<sup>ニ</sup> ショ<sup>ー</sup>ガ<sup>ガ</sup>ナ<sup>ナ</sup>イ<sup>イ</sup>デ<sup>デ</sup>  
も<sup>も</sup> 子<sup>子</sup>供<sup>供</sup>に<sup>に</sup> そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>言<sup>言</sup>って 言<sup>言</sup>い<sup>い</sup>聞<sup>聞</sup>か<sup>か</sup>せ<sup>せ</sup>た<sup>た</sup>ん<sup>ん</sup>です<sup>す</sup>よ ど<sup>ど</sup>う<sup>う</sup>し<sup>し</sup>ょう<sup>う</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>から

B 「ア<sup>ー</sup>」イ<sup>ク</sup>ネ<sup>ー</sup>モ<sup>タ</sup>ッ<sup>ッ</sup> オ<sup>シ</sup>ヨ<sup>リ</sup> ヒ<sup>ト</sup>ッ<sup>ッ</sup> シ<sup>ッ</sup>ッ<sup>ッ</sup>テ  
あ<sup>あ</sup>、 い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>姉<sup>姉</sup>(<sup>人</sup>名)も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>った 俺<sup>俺</sup>ヨ<sup>リ</sup> い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>、 不<sup>不</sup>二<sup>二</sup>

C 「ヒトガイーデ」 ヒトガイーデッテ アノ 「ショ - ジキタ」 ツ  
 人が良いから 人が良いから、? あの 正直なところ

B 「ア - タダ」 シャー ヒト 「ノンキナ」 ヒトタ「ッデ」エー  
 あ、 タダ 人、 のんきな 人 ならぬからぬ

A コ「ッ」コイタネー ス「シ」オキ「ッ」チャー ス「シ」オ ヤイタデ「ネー」  
 苦労を しなぬ 炭を叩いては 炭を やいぬからぬ

C ヤ「ハ」リ ナンショ 「コンナ」キ「フ」ヨ「キデ」 ス「シ」オヤイ「ッ」チャーネ  
 や、はり とにかく こんな本は 斧で 炭を 叩いてはぬ

「エー」ヨ「キデ」ウケ「フ」チャー キ「ウ」ニャー キ「レ」ン「ラ」ソイデ  
 え、 斧で ウケクチを 叩らぬは 叩れないでは、 それで

「ヨル」ガ「ヨナ」カデ「モ」ワ「シャ」ー ハイ 「ジュー」ニジ「ハン」デ「モ」イ「チ」  
 夜か 夜中 ても 私は もう ナニ咄言 ても

ジデ「モ」グ「ッ」ト オー「キナ」 ヤマイ「ヨー」 ム「カ」シャー ア「カ」ツ  
 時 ども ぐと 太きな 山 にぬ 若は XXX

「アカ」ショー ツケ「チャー」アリ「ク」デ「エー」  
 私明を つけては 歩くからぬ

A 「エー」アカ「ショー」ツケ「テ」  
 ぬえ 私明を つけて

C ソコ ア「ブン」ナカ ナイ「ッ」テ「ネー」 ア「カ」ショー ワ「ッ」トイ「チャー」  
 そこ 危ねくは ないってぬ 私明を 割、というは

「ツケ」テ  
 つけて

B ヤ「ハ」リ ソノ 「ランブ」ワ ハイ セ「ン」ジ「チュ」ー  
 や、はり その ランブは もう 戦時中

A 「ランブ」ナン「テ」モ「ッ」テナ「ガ」ッ「テ」 ツケ「サセ」ナン「タ」デ「ネー」 ム「カ」シノ  
 ランブナニて もっといぬから、? つけさせぬからぬ 春の

シューワ

象は

B ソリヤ センジチューダッタモンダテ ナンシロ エーカン ナカ  
ソリヤ 幾時中なるかのて なにしる たい加減(かなり) なか

へッ ツセ

ったよ

C ソイダモニダテ ヨルガ ヨナカデモ ソノ ケブトメイカニャー  
そいふから 夜か 夜中でも その 煙止め に行かなくては

ナランダ カマエネ トッテモ トーイ イチリモ アル ヤマー  
なるのいふ 釜へね とても 遠い 一字も ある 山を

A ヒトノ イカンヨーナ ホーダネー エー  
人の 行かぬいよな 方なね え

B ソーダソーダ  
いふ いふ

C ソレ ヤリヌイタデネー  
それ やり抜いたからね

A オカシーホーダデネー コノ  
あかしい 方なからね この

B ニシュー  
=+

A ハシンダノ オフノホーダネー  
ハシンダ(地名)の 奥の方なね

B ニシューネンノ ソレデ ナンシロ ジューガツノ イツチダカニ  
=十年の それで なにしる 十月の 五日なかに

オーマースキガ キタツツガ ソレオ ミタトキナー  
? が また が それ 今なときにね

C ソレオ ミタワケ エー  
それを またわけだ ねえ

B アノジブン 「オーキナ コイオ トレ トレルダケデ」 ワシラシ  
あの頃 大きな 鯉を ×× とれるな「ア」 私らか

オーキナ コイオトッヲ チョード 「ビョーキガ」 ワルイッチュー  
大きな 鯉を とった 丁度 病気が わるい っ「い」

ワケデ 「アニタントコ カクリオ シテキタツツデ」  
わけて あなたの所の 隔断を してきた から

C エー 「ソイタ」モンデ 「サーテ」 ソレオ 「アトデモ」 ヒトッテ 「マズ」  
え、 それでかい さて それを 取っても 一人で まず

ショードヲ ヒトッテデ ヤッテヨー アノ  
消毒 一人で やってさ あの

B 「ウン」 ソーダッタダー  
うん そうだったのな

C フント＝ ホント ワリアイ ホカノ シューガ 「ナンチューダカ」  
本当に 本当に わりあい ほかの 象が 何というのか

ドージョーシテ クレルモシダイネー ソイデ ワシャー フント  
同病して くれよ のでね それで 私ほ 本当に

「ヒトッテ」 ショー ショードヲヤナンカオ ヤッテ カナシミオ  
一人で ××× 消毒 などを ねて 悲しみで

シタデネー ソイデ 「ナ」ガ アッテモ ホレタデ フント＝  
したからね それで 何か あつても それでから 本当に

ワルイ ビョーキガ アリャー ソノシトントコイ オリャー  
悪い 病気が あつた その人の所へ 俺は

イッテミテ ヤリタイ 「ソーユー」ダネ ソイデ 「ドンナ」 コトデモ  
行ってきて やりた い「う」いふなよ それで どんな ことでも



オリャー 「ガマンガ デキルゾー ソー イッチャー ユーガネー  
俺は 我慢が できるよ そい言、ては 言うけれどね

A コッソニー コイツデネー  
苦労 した からね

C ソイデモ イマー オカゲデネー ウンガ イーゲネ  
それでも 今ほ あかげでね 運が いいわ

A ソーソー  
さうさう

C トテモ イマワ ウンガ イー  
とても 今ほ 運が 良い

B アー ウンガ イー イマー イー  
あゝ 運が 良い 今ほ 良い

C ヨメモ イーシ エー アノ フサモネー マーエー イマモ ウ  
嫁も 良いし ね あの フサもね まあね 今も 家

〜チ= チート アノ チョイ ヘヤガ ナケニャ ショーガナイッ  
に 少し あの ちょっとした 部屋が ぬけねば 困る っ

〜テ ヌッテフレテ マー コドモガ ソレオ オバーチャン ウン  
て 建てて くれて まあ 子供が それを おばあちゃん 運が

〜ガ イーデ ナガイキョー セニャー ダメダッ チューワイ アノ  
良いから 長生きを しなけねば 死ぬらうていうよ あの

ナ=ョー ヤリ モジ= ヤルジャー ナイシネ ワシン マダ  
何を ×× ? やるのでは ないしね 私が まだ

ホント ワカイ シューノ キ= イランヨー ナコト ユーコト イ  
本当に 若い家の 気には要らないような ことを いうことか っ

〜ヤナモニダデネー マズ ユーナリニ ナットルデネー ホントニ  
やだもんねからね ます いじかりに なってるからね おちに

B ウン ソリャー「マー トミガヨリャー ソレガ イチバンヨイダ」=  
 うん それが ちみ 年が 寄れば ソレが 一番 良いんですよ

C ソレガ イチバンダモノ「ネー エー アー ドケー ナニョー イ  
 それが 一番 だものね ええ あゝ どこへ 何を 秘

〜ウエルダカ「チョットモ シラン「チュヤ イモートガ ソレオネ  
 ええ のか 少し 知らないといはば 妹が それだね

マス ホント= イーナー「アネントー アンキナモシヅク「チュー  
 マサ 本当に 良いなあ 姉さん達は 気楽なものだろていう

〜カ「ソレデ ナケニャー「ウマカー イカンヨッテ ユーダー「ホシ  
 が それい たいしたは うまきは 行かないよ、と いうんだよ ね

「ウラワ ホント シンセツ=「ダイジニシテ モラヤ「マー「ダイ  
 俺は 本当に 親戚に 大事にして いえは ちみ 大事

〜ジニ= ベツニ= シテモラワンデモ イーガ フツニ= シテモライ  
 に 別に(大事に)してもいいからとね 良いか ふつに して貰え

〜サイセリャー ウレシートモットル「チューガネー  
 さえすれば うれしいと思ってるという けれどね

B「マー ヒャ「ショーオサー アノ ウチウチジャ マンダ ヨメガ  
 ちみ 百姓 母さ あの 家々では ちみ 嫁が

ナシダニ= ……ガ「フト ヤルヨニ=「ナリャー「マー「ヘダナ  
 何だよ ちし やるぶりに だれは ちみ 下手な

「クチオ「ダサット「ソーダンガ「アリャー「ソーダンシテヤル  
 口を 出さないで 相談が だけれど 相談してやる

「ホカノ「コリ  
 ほかのことば

C「ソーダ「ソーダ「ソーダ「ソーダ「エー  
 そうだ そうだ

B マー ソノヘンガ イチバン エーニ  
 まあ そのへんが 一番 いい ですよ

C イチバン エーニ ソイデ 「チョットモ」 イマントコジャー オリヤ  
 一番 いいですよ そいって 少しも 今んとこ では 不便

〜 フントニエー アノー 「フナコトモ」 カナシーコトモ ナイ  
 は 本当にね あの 苦しいことも 悲しい ことも ない

「チョットモ」 「エー」 ソイデ 「ウチガ」 イチバン ヨクテ 「ウチガ」  
 少しも ね そいって 家が 一番 よくて 家がい

マス 「ザイショ」ガ アソコダカ トマツタコター ナイデ「ネー」 イッ  
 まあ 在所(里方)が あそこだか 止まるところ ないからね(野)行

〜テ 「ウチガ」 イー ウチガイー 「ハイ」 「ウチー」 イッ トチャーハイ  
 て 家が 良い 家が ない も、 家へ 行くときは もう

トコー ノベテ クレチャー アルシ 「マゴガ」 ハイ ソコイ  
 床を のべて くらでは あつし 孫が もう そこへ

ヤ「クバノシタイ」 マゴガ デトルカ「ネー」 オンナノコワ アノコガ  
 後場 の 下に 孫が 出てゐるかね 女の子は あの子が

ハイ トコー マス 「ノベテクレテ」 オバーチャン ハイ ネルカイ  
 もう 床を ます のべて くら おばあちゃん もう ねるかい

「ノベテクレル」 マタ アゲテクレル トコー マス ヤリヌイタデ「ネー」  
 のべて くら また 上げて くら 床を ます やり抜いたからね

〜 アノコワ ハイ 「ソーユーヨーナ」 モンダイ ワシャーマー  
 あの子は もう そういふ ような もの なよ 孫は まあ

「ドコイ」 イッテモ トマツタコター ナイ 「ウチー」 トマツタコタ  
 どこへ 行っても 泊まるところ ない 家に 泊まることは

〜 ナイダ「デネー」 「マー」 ホンナ 「マゴガ」 トコー ノベテアル  
 ないんぞからね まあ いんな 孫が 床を のべて ある

～タッテ 「イー ジャ ナイカ ッ チュ ッ チャー」 「ニーガ ユ ッ タ ッ テモネ」  
で言ったよ 良いじゃんか っていってよ 兄が 言ったってね

～ オリャー マー ウチカ イチバン イーデ イフヨ ッ チュ ッ チャー  
俺は ちう 家が 一番 良いから 行くよ、って言うてよ

～ 「スゴ キ」 チャ ッ タ 「マ ッ タ コ ター ナイ ソネーナウ ホイ  
すごい 来たかった 泊ったことは ない そんな風なら それ

～デモ ウチノ ネーサンウ ウレシーライ ッ チュ ッ チャー ミンナ  
でも 家の 姉さんら 嬉しいだろう、って言うては みんな

～シ ユッ「チャー フレルガネー」  
か 言うては くれよがね

B 「ウン ソータイ」  
ん くらだよ

C ソリャ ウチホド イートカナイゾイ ッ チュ ッ チャー  
それ 家ほい ないとは ないよ、って言うては

A 「アニコワ オトナシー コタ」 イエー  
長男 は おとなしい 子だね

B 「マコガエ ウン イーコタ」  
強かね ん 良いみて

C 「マコガネ マコモ オトナシー コタ」 アノカー マー ツイマー  
強かね 強も おとなしい 子だね あの子は まあ つい まあ

ズーット 「ナニ ユッ タ コ ター ナエー」  
ずうっと 何(なに) 言ったことは ない

A オトナシー コタエ  
おとなしい 子だね

C オトナシー コタ アレカ  
おとなしい 子だね (?)

B 「サー コリャ マー コシデ ナンダカネ アノー ヤッパリサ  
さあ コリャ まあ コシデ 何なかね あの やッパリサ

ココーデモ

ここでも (山には、この座談会を終るよ)にうけがすことよ)

A ウレシカッタネー ヤメラノ ヒトガ オリャー ウタイエン  
うれしかたね やメラノ 人ガ 居れば 歌うことは出来たのに

B オカイコーサ カッテルシサ  
お蔭をさ 飼ってるしよ

C 「マー ロクニ ウタヤーシンダ」ネ  
まあ 六に 歌いはしないう

A 「ソイデモ イクラカ ウタッテ フレリャーネー 「イーダデ」ネー  
それでも いくらか 歌って くれれば ね 良い人だからね

B ホントニ ウレシカッタ  
本当に うれしかた

Y オヒルン ナッチャッテ マー ホントニ ユックリネー シテ  
お昼に なっちゃって まあ 本当に ゆっくりね して

イタダイテ アリガトゴザイマシタ  
頂いて ありがとう ございました

B ココーサ カイコン ナッタデ マタ グワトリーイカニャーナラン  
ここはさ かいに ならんから や、桑取りに シカねば なるん

Y モーシワケアリマセンデシタネー イツマデモ 「チョットアノー  
申し訳アリませんでしね いつまでも ちょっと あの

ナマエオネー ユッテクダサイ ジブンデ ユッテクレシ オハサ  
名前をね 言って下さい 自分デ 言っして下さい おはさ

エンカウ

んかう

A ワシノ ナオカネ  
私ッ 名をかね

Y ウマレタ トシオ ウマレタ トシ  
生れた 年を 生れた 年

A ワシャー ワシノナワ ユワンデモイーガ コノオバサンノナウオ  
私は 私の名は 言わね、でも いいが このおばさんッ 名よ

C ユヤー イーシャシ オツササ  
言は 良いいね、おツサさん

A ワシカネ ワシャー Xージサンジュー ニネンノ ワガッソノ ツイ  
私 かね 私は 明治32年の 9月の 1日

～タチ ウマレタ コノ オバサンガ タイショー ダモンダデ オバ  
(12) 生れた この おばさんが (歌の方の) 大将 なカジ おば

～サンノ ナダワイネー  
さんの 名(名ま(のか先)だよ

Y ソイダゲト オバサンノネー  
なけて おばさんッね

C ユッテ クリコーッテ  
言ッて くらッて

Y ナマエオ ジブンデ ユッダ コエオネー ココエ トリタイワケ  
名前を 自分ッて 言ッた 声をね ここへ 取りたいわけ

C ソー イッダ ナマエオ ユヤー エーワ オツササ  
ソッ言ッた 名前を 言ッた 良いよ おツサさん

A ワシャーマー ドーデモ イーガ  
私は ね どうでも いいが

B マー ナマエオサエ ユヤー イーダ タケダツサ  
マッ 名前を さえ 言ッた 良いいね 我回ツサ(と)

Y オバサンノ ナマエワ ナンチューダネ  
おばさんの なまえは なんという人だね

A タケダツサ  
武田さん

Y ソイジャー コニタ オジサン  
それでは 今夜は おじさん

B ワシワ メーヂサンジューヨネンウマレノ サンガツヨーカーウマレ  
ねえは 明治 34年 せいの 3月 5日 せいの  
タナベ ショーイチダンネ  
田辺 正一 たがけ

Y 「サンガツ ヨーカーデスカ ソイジャー オバサンワ  
3月 8日ですか それでは おばさんは

C 「メーヂネー」 「メーヂサンジュー」 キューネンノ 「メーヂサンジュー」  
明治ね 明治 39年の 明治 39年  
キューネン ニガツ 「ムイカウマレダカネー ツツミ フジヨ  
2月 6日 せいの たがけ 提 さんよ

Y アリガトゴザイマシタ ミンナ ココワアノー セーレキニワ  
ありがとう ごさて、まして みんなは ここは あの 正式には  
カシタカノコーンテューワケ シモナカノコートカ  
上中の甲、て いわや？ 下中の甲、とか。

B エー 「タダ ナカノコーデス アザワネ」 ナカノコーデス  
え、ええ 甲の甲、です 字はね 中甲、です

## 注記

1. ニヤケの語源は「煮焼き」つまり「煮たり焼いたり」なという。
2. ヒトナルは「成人する」、ヒトネンは「育てる」に相当する。
3. 「泣いては」の意味でナクテモといっていることは確かであるが、このいいがたは武田ふささん独特のものなると、田辺さんはいう。
4. 「買わずにいて」とカウッコネイウ、「行かずにいて」とイカッコネイテという。カウッコナイイテ、イカッコナイイテの変形だろう。
5. このあなりの ケーは [KE:] のように母音エは広く感じられる。
6. 「川上」は大字の名称であるとともに、田辺正一さんのお宅の名字でもある。
7. 「仕事をする」、「働く」事をイゴク(働く)という。
8. どこかにトノという名のよく働いた女の人がいるところから、生まれた子供にトノという名をつけた話である。生れる子に、どこかの長生き婆さんの名を付けるとか、これに類する習慣は富山村には、ちょいちょいある。
9. この時、武田ふささんの息子夫婦、初夫さんと、やすとさんが外から帰ってきた。
10. 「通した」とトーイタと通常いう。トエタ或いは、トエータは、その融合形。
11. 蚕に飼(桑の葉)をやることをモ、カウという。
12. ケーの母音エは、かなり高い。
13. コズと言っているのかもしれないが、コスときこえた。
14. このネトッソは、提さん自身の(自分の)勤作であるゆえに疑問がある。田辺さんに伺てみると、確かに、ツと言っているが、「言いまちがい」に近い言い方であって、それゆえにそのあとで、ネトッソネトッソとくりかえして「言いまちがいて」いるのだという。そしてこのように「言いまちがえる」ことは稀にはありうるという。
15. この他所には、は、きりと発音上の区切りがつけられた。
16. このオボエタは、オボエツと言いかえることはできない。



17. カミガイトは「上垣津」と書き、武田ふささん宅の家号である。
18. このイは、中左様にきこえた。
19. この促音も、ヌデのヌ[ɲ]の母音が落すたしと思うが、ラング的なものと考えてよいかわからぬ。
20. このセは[ɕi]に近くきこえる。
21. 「はじめて歩くようになる」ことをアルキタツ、赤ん坊が「はじめてしゃべるようになる」ことをシャベリタツという。
22. 「やせる」と強調気味に、また、やゝ侮蔑気味にいうヤセマールの中止形。「しゃべる」に対するシャベリマール、「食べる」に対するタベマール等がありうる。
23. ウタヤシンは、本来「歌いはしない」の意。ここでは「歌えない」の意味になっている。
24. ウォースギのように語頭で[wɔ]があらわれたことは不可解。
25. ソーの発音は[sɔ:]のような母音がわかちれる。
26. 富山村地内の水没した部落の名。親戚のことか。
27. [sɔ:]のような発音。

(付) ㇿと示した符号は、特に著しいイントネーションの感じられる下降を意味する。

下降調の文末助詞ナー、ネーがつく場合、その直前の拍がいかなる場合（たとえば長音拍であっても）でも卓立する。このような文末アクセントは、遠州、三河山村地帯の特徴的事項である。

昭和55年 1 月

国 立 国 語 研 究 所

東京都北区西が丘 3 丁目 9 番14号  
電 話 東 京 (900) 3111(代表)

## 国立国語研究所刊行書一覧

### 国立国語研究所報告

|    |                                             |       |        |
|----|---------------------------------------------|-------|--------|
| 1  | 八 丈 島 の 言 語 調 査                             | 秀英出版刊 | 品切れ    |
| 2  | 言 語 生 活 の 実 態<br>——白河市および付近の農村における——        | "     | "      |
| 3  | 現 代 語 の 助 詞 ・ 助 動 詞<br>——用 法 と 実 例——        | "     | 2,000円 |
| 4  | 婦 人 雑 誌 の 用 語<br>——現代語の語彙調査——               | "     | 品切れ    |
| 5  | 地 域 社 会 の 言 語 生 活<br>——鶴岡における実態調査——         | "     | "      |
| 6  | 少 年 と 新 聞<br>——小学生・中学生の新聞への接近と理解——          | "     | "      |
| 7  | 入 門 期 の 言 語 能 力                             | "     | "      |
| 8  | 談 話 語 の 実 態                                 | "     | "      |
| 9  | 読 み の 実 験 的 研 究<br>——音読にあらわれた読みあやまりの分析——    | "     | "      |
| 10 | 低 学 年 の 読 み 書 き 能 力                         | "     | "      |
| 11 | 敬 語 と 敬 語 意 識                               | "     | "      |
| 12 | 総 合 雑 誌 の 用 語 (前編)<br>——現代語の語彙調査——          | "     | "      |
| 13 | 総 合 雑 誌 の 用 語 (後編)<br>——現代語の語彙調査——          | "     | "      |
| 14 | 中 学 年 の 読 み 書 き 能 力                         | "     | 400円   |
| 15 | 明 治 初 期 の 新 聞 の 用 語                         | "     | 品切れ    |
| 16 | 日 本 方 言 の 記 述 的 研 究                         | 明治書院刊 | "      |
| 17 | 高 学 年 の 読 み 書 き 能 力                         | 秀英出版刊 | "      |
| 18 | 話 し こ と ば の 文 型 (1)<br>——対話資料による研究——        | "     | "      |
| 19 | 総 合 雑 誌 の 用 字                               | "     | "      |
| 20 | 同 音 語 の 研 究                                 | "     | "      |
| 21 | 現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (1)<br>——総記および語彙表—— | "     | "      |
| 22 | 現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (2)<br>——漢 字 表——    | "     | "      |
| 23 | 話 し こ と ば の 文 型 (2)<br>——独話資料による研究——        | "     | "      |
| 24 | 横 組 み の 字 形 に 関 す る 研 究                     | "     | "      |
| 25 | 現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (3)<br>——分 析——      | "     | "      |
| 26 | 小 学 生 の 言 語 能 力 の 発 達                       | 明治図書刊 | 2,100円 |
| 27 | 共 通 語 化 の 過 程<br>——北海道における親子三代のことば——        | 秀英出版刊 | 品切れ    |
| 28 | 類 義 語 の 研 究                                 | "     | "      |

|      |                                           |         |        |
|------|-------------------------------------------|---------|--------|
| 29   | 戦後の国民各層の文字生活                              | 秀英出版刊   | 400円   |
| 30-1 | 日本語地図 (1)                                 | 大蔵省印刷局刊 | 品切れ    |
| 30-2 | 日本語地図 (2)                                 | "       | "      |
| 30-3 | 日本語地図 (3)                                 | "       | "      |
| 30-4 | 日本語地図 (4)                                 | "       | "      |
| 30-5 | 日本語地図 (5)                                 | "       | "      |
| 30-6 | 日本語地図 (6)                                 | "       | "      |
| 31   | 電子計算機による国語研究                              | 秀英出版刊   | 450円   |
| 32   | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1)<br>——親族語彙と社会構造——  | "       | 品切れ    |
| 33   | 家庭における子どものコミュニケーション意識                     | "       | 350円   |
| 34   | 電子計算機による国語研究(Ⅱ)<br>——新聞の用語用字調査の処理組織——     | "       | 品切れ    |
| 35   | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2)<br>——マキ・マケと親族呼称—— | "       | 450円   |
| 36   | 中学生の漢字習得に関する研究                            | "       | 5,000円 |
| 37   | 電子計算機による新聞の語彙調査                           | "       | 品切れ    |
| 38   | 電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅱ)                        | "       | 2,800円 |
| 39   | 電子計算機による国語研究(Ⅲ)                           | "       | 700円   |
| 40   | 送りがな意識の調査                                 | "       | 1,500円 |
| 41   | 待遇表現の実態<br>——松江24時間調査資料から——               | "       | 900円   |
| 42   | 電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅲ)                        | "       | 1,200円 |
| 43   | 動詞の意味・用法の記述的研究                            | "       | 5,000円 |
| 44   | 形容詞の意味・用法の記述的研究                           | "       | 3,000円 |
| 45   | 幼児の読み書き能力                                 | 東京書籍刊   | 4,500円 |
| 46   | 電子計算機による国語研究(Ⅳ)                           | 秀英出版刊   | 700円   |
| 47   | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3)<br>——性向語彙と価値観——   | "       | 700円   |
| 48   | 電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅳ)                        | "       | 3,000円 |
| 49   | 電子計算機による国語研究(Ⅴ)                           | "       | 900円   |
| 50   | 幼児の文構造の発達<br>——3歳～6歳児の場合——                | "       | 品切れ    |
| 51   | 電子計算機による国語研究(Ⅵ)                           | "       | 1,000円 |
| 52   | 地域社会の言語生活<br>——鶴岡における20年前との比較——           | "       | 1,800円 |
| 53   | 言語使用の変遷 (1)<br>——福島県北部地域の面接調査——           | "       | 2,500円 |
| 54   | 電子計算機による国語研究(Ⅶ)                           | "       | 1,000円 |
| 55   | 幼児語の形態論的な分析<br>——動詞・形容詞・述語名詞——            | "       | 品切れ    |
| 56   | 現代新聞の漢字                                   | "       | 3,000円 |

|    |                                                    |       |        |
|----|----------------------------------------------------|-------|--------|
| 57 | 比 喩 表 現 の 理 論 と 分 類                                | 秀英出版刊 | 6,000円 |
| 58 | 幼 児 の 文 法 能 力                                      | 東京書籍刊 | 5,500円 |
| 59 | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅷ)                        | 秀英出版刊 | 1,300円 |
| 60 | X 線 映 画 資 料 に よ る 母 音 の 発 音 の 研 究<br>——フォネーム研究序説—— | "     | 2,500円 |
| 61 | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅸ)                        | "     | 1,300円 |
| 62 | 研 究 報 告 集 (1)                                      | "     | 1,700円 |
| 63 | 児 童 の 表 現 力 と 作 文                                  | 東京書籍刊 | 6,000円 |
| 64 | 各 地 方 言 親 族 語 彙 の 言 語 社 会 学 的 研 究 (1)              | 秀英出版刊 | 2,000円 |

#### 国立国語研究所資料集

|      |                              |         |        |
|------|------------------------------|---------|--------|
| 1    | 国 語 関 係 刊 行 書 目 (昭和17~24年)   | 秀英出版刊   | 45円    |
| 2    | 語 彙 調 査 ——現代新聞用語の一例——        | "       | 品切れ    |
| 3    | 送 り 仮 名 法 資 料 集              | "       | "      |
| 4    | 明 治 以 降 国 語 学 関 係 刊 行 書 目    | "       | "      |
| 5    | 沖 縄 語 辞 典                    | 大蔵省印刷局刊 | 3,500円 |
| 6    | 分 類 語 彙 表                    | 秀英出版刊   | 1,800円 |
| 7    | 動 詞 ・ 形 容 詞 問 題 語 用 例 集      | 秀英出版刊   | 1,700円 |
| 8    | 現 代 新 聞 の 漢 字 調 査 (中間報告)     | "       | 500円   |
| 9    | 牛 店 安 愚 楽 鍋 用 語 索 引          | "       | 1,500円 |
| 10   | 方 言 談 話 資 料 (1) ——山形・群馬・長野—— | "       | 6,000円 |
| 10-2 | 方 言 談 話 資 料 (2) ——奈良・高知・長崎—— | "       | 6,000円 |

#### 国立国語研究所論集

|   |                   |       |        |
|---|-------------------|-------|--------|
| 1 | こ と ば の 研 究       | 秀英出版刊 | 品切れ    |
| 2 | こ と ば の 研 究 第 2 集 | "     | "      |
| 3 | こ と ば の 研 究 第 3 集 | "     | "      |
| 4 | こ と ば の 研 究 第 4 集 | "     | 1,300円 |
| 5 | こ と ば の 研 究 第 5 集 | "     | 1,300円 |

#### 国立国語研究所年報 秀英出版刊

|    |            |      |    |            |      |
|----|------------|------|----|------------|------|
| 1  | 昭 和 24 年 度 | 品切れ  | 12 | 昭 和 35 年 度 | 350円 |
| 2  | 昭 和 25 年 度 | "    | 13 | 昭 和 36 年 度 | 160円 |
| 3  | 昭 和 26 年 度 | 160円 | 14 | 昭 和 37 年 度 | 220円 |
| 4  | 昭 和 27 年 度 | 160円 | 15 | 昭 和 38 年 度 | 250円 |
| 5  | 昭 和 28 年 度 | 品切れ  | 16 | 昭 和 39 年 度 | 品切れ  |
| 6  | 昭 和 29 年 度 | 200円 | 17 | 昭 和 40 年 度 | 250円 |
| 7  | 昭 和 30 年 度 | 品切れ  | 18 | 昭 和 41 年 度 | 300円 |
| 8  | 昭 和 31 年 度 | "    | 19 | 昭 和 42 年 度 | 300円 |
| 9  | 昭 和 32 年 度 | "    | 20 | 昭 和 43 年 度 | 品切れ  |
| 10 | 昭 和 33 年 度 | "    | 21 | 昭 和 44 年 度 | "    |
| 11 | 昭 和 34 年 度 | "    | 22 | 昭 和 45 年 度 | "    |

|    |        |      |    |        |      |
|----|--------|------|----|--------|------|
| 23 | 昭和46年度 | 450円 | 27 | 昭和50年度 | 700円 |
| 24 | 昭和47年度 | 450円 | 28 | 昭和51年度 | 非売品  |
| 25 | 昭和48年度 | 品切れ  | 29 | 昭和52年度 | 〃    |
| 26 | 昭和49年度 | 600円 | 30 | 昭和53年度 | 800円 |

国 語 年 鑑 秀英出版刊

|        |     |        |        |
|--------|-----|--------|--------|
| 昭和29年版 | 品切れ | 昭和42年版 | 品切れ    |
| 昭和30年版 | 〃   | 昭和43年版 | 〃      |
| 昭和31年版 | 〃   | 昭和44年版 | 1,500円 |
| 昭和32年版 | 〃   | 昭和45年版 | 1,500円 |
| 昭和33年版 | 〃   | 昭和46年版 | 2,000円 |
| 昭和34年版 | 〃   | 昭和47年版 | 2,200円 |
| 昭和35年版 | 〃   | 昭和48年版 | 2,700円 |
| 昭和36年版 | 〃   | 昭和49年版 | 3,800円 |
| 昭和37年版 | 〃   | 昭和50年版 | 3,800円 |
| 昭和38年版 | 〃   | 昭和51年版 | 4,000円 |
| 昭和39年版 | 〃   | 昭和52年版 | 4,500円 |
| 昭和40年版 | 〃   | 昭和53年版 | 4,600円 |
| 昭和41年版 | 〃   | 昭和54年版 | 4,800円 |

日本語教育教材

|                 |                      |                   |         |      |
|-----------------|----------------------|-------------------|---------|------|
| 1               | 日本語と日本語教育            | 国立国語研究所<br>文化庁 共編 | 大蔵省印刷局刊 | 650円 |
| 2               | 日本語と日本語教育            | ——文字・表現編——        | 〃       | 850円 |
| 3               | 日本語の文法(上)            | ——日本語教育指導参考書4——   | 〃       | 450円 |
| 4               | 日本語教育の評価法            | ——日本語教育指導参考書6——   | 〃       | 450円 |
| 高 校 生 と 新 聞     | 国立国語研究所<br>日本新聞協会 共編 | 秀英出版刊             | 280円    |      |
| 青年とマス・コミュニケーション | 日本新聞協会<br>国立国語研究所 共著 | 金沢書店刊             | 品切れ     |      |
| 国立国語研究所三十年のあゆみ  | ——研究業績の紹介——          | 秀英出版刊             | 1,500円  |      |

## 日本語教育教材映画一覧

(各巻16ミリカラー, 5分, 日本シネセル社販売)

| 巻    | 題 名                                | プリント価格  |
|------|------------------------------------|---------|
| 第1巻  | これはかえるです——「こそあど」+「は～です」——          | 30,000円 |
| 第2巻  | さいふはどこにありますか——「こそあど」+「が～ある」——      | 〃       |
| 第3巻  | やすすくないです, たかいです ——形容詞とその活用導入——     | 〃       |
| 第4巻  | なにをしましたか ——動詞——                    | 〃       |
| 第5巻  | しずかなこうえんで ——形容動詞——                 | 〃       |
| 第6巻  | さあ, かぞえましょう ——助数詞——                | 〃       |
| 第7巻  | うつくしいさらになりました ——「なる」「する」——         | 〃       |
| 第8巻  | きりんはどこにいますか ——「いる」「ある」——           | 〃       |
| 第9巻  | かまくらをあるきます ——移動の表現——               | 〃       |
| 第10巻 | おかねをとられました ——受身の表現1——              | 〃       |
| 第11巻 | どちらがすきですか ——比較・程度の表現——             | 〃       |
| 第12巻 | もみじがとてもきれいでした ——「です」「でした」「でしょう」——  | 〃       |
| 第13巻 | きょうはあめがふっています ——「して」「している」「していた」—— | 〃       |
| 第14巻 | そうじはしてありますか——「してある」「しておく」「してしまう」—— | 〃       |
| 第15巻 | おみまいにいきませんか ——依頼・勧誘の表現——           | 〃       |
| 第16巻 | なみのおとがきこえてきます ——「いく」「くる」——         | 〃       |

(第1巻～第3巻は, 文化庁との共同企画・VTR価格1/2インチオープンリー  
ル21,000円, 3/4インチカセット20,000円)

NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE PUBLICATIONS

SOURCE X-III

# TEXTS OF TAPE-RECORDED CONVERSATIONS IN JAPANESE DIALECTS

(Volume 3)

## CONTENTS

### Foreword

### Purpose and Outline

### Text

Part 1 : AOMORI PREFECTURE (Hamlet Usitate, City Aomori)

Part 2 : NĠGATA PREFECTURE (Hamlet Motirō-Ōri, City Kasiwazaki)

Part 3 : AITI PREFECTURE (Hamlet Nakanokō, Village  
Tomiya, District Kitasitara)

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE  
TOKYO JAPAN

1980